

義妹がVTuberで、俺はそのマネージャーらしい

御宅 拓

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

実家がラーメン店の神代裕也は、突如ながらも義妹の神代涼音からVTuberをしているとカミングアウトを受ける。最初こそは何一つ理解できずに居たが、義妹がVTuberを続けた結果個人勢でありながら有名に成り上がっていることを知る。それから企業から誘いが来たことや、マネージャーをして欲しいという頼み……。裕也は内気でなかなか前に歩むことが出来ない義妹の成長に繋がると思い、頼みを受け入れることにするが――。

※本作はVTuberの配信回よりも、マネージャー視点でのやり取りが多いものになっております。お気に召さない所が多々あるかもしれませんが、それでも読んで頂いて楽しんでるように考えて書いております。何卒、ご了承の上よろしく願います。尚、私自身の向上の為、評価して頂ける場合はアドバイスなども含んでくださると大変嬉しいです。ご不便おかけ致しますが、何卒ご教授お願いします。

Twitter始めました、友達になってください。

<https://twitter.com/HamelnTak>

u

session1

【プロログ】

【Dream Life 所属編】

【Dream Life 活動編】

【Dream Life 配信編】

s e s s i o n 2

【ミライバ改革編―前編―】

【ミライバ改革編―後編―】

現在進行中

目次

キャラクターエピソード

如月旋梨：運命に奏でる凜とした音色①	1
如月旋梨：運命に奏でる凜とした音色②	7
如月旋梨：運命に奏でる凜とした音色③	13

プロローグ — 事の始まり —

#1 カミングアウトは唐突に【兄貴side】	18
#2 カミングアウトは唐突に【義妹side】	23
#3 自分で決めた事だから	29
#4 過去の形と現在の形	36
これまでのキャラクター紹介【1】※挿絵あり	41

DreamLife 所属編

#5 いぎ、企業へ — 前編 —	45
#6 いぎ、企業へ — 後編 —	52
#7 Dream Life ①	57
#8 Dream Life ②	64
#9 Dream Life ③	69
#10 VTube で届けたいロックンロール【赤城翔太】	76

76

#11 最高の曲を作る為の原動力【赤城恵果】	81
#12 自分が良いと思ったモノを勧めてはいけない事案	84
これまでのキャラクター紹介【2】※挿絵あり	90

DreamLife 活動編

#13 個人勢と企業勢のスタートライン	93
#14 こんな感情を知るつもりはなかった	101

#15	神代涼音の分身Ⅱヒスイ【義妹side】	108
#16	この気持ちからはもう逃げない	114
#17	私が貴方を大好きになったのは【義妹side】	122
#18	ただそれでも、俺の我儘を聞いてくれ	129
#19	トレンド入りした理由がまさかの切り抜き？	135
#20	バグじゃないかと思うエンカウント	142
#21	癖の裏にある興味の発端	148
#22	準備は万全にしないと後に響くもの	153
#23	日常というのは案外、賑やかなのが丁度いい	162
	これまでのキャラクター紹介【3】※挿絵あり	169

DreamLife 配信編

#24	Dream Life 所属のヒスイ	172
#25	後輩VTubeに送る先輩からのメッセージ	182
#26	如月旋梨にとっては大きな運命だった―前編―	188
#27	如月旋梨にとっては大きな運命だった―中編―	195
#28	如月旋梨にとっては大きな運命だった―後編―	204
#29	女の子ってこんなにも勘が良いものなのだろうか	210
#30	序曲として大切なものは	216
#31	Go To Pants	223
#32	違う意味での告白を朝に受けるとは思いもしない	229
#33	救いようのない存在	235
#34	放置できない問題	241
#35	ちよつとした出会い	246
#36	問題よりも貢献	251
#37	感情全てが正しいとは限らない後悔	258

これまでのキャラクター紹介【4】 | 264

ミライバ改革編―前編―

#38 ヒントを求めるのなら身近な存在から | 266

#39 一筋のアドバース、根本的な間違い | 273

#40 俺とVTuber達の作戦会議 | 282

#41 酒は飲んでも飲まれるな | 292

#42 今成すべきことは普段通りに過ごすこと | 298

#43 如月旋梨×音神旋律 | 303

#44 決して分かり合えることのない談話 | 310

#45 墮天四姉妹×ゲームーズ | 322

#46 晴天の空下に実る恋【赤城恵果】 | 331

#47 役に立ちたい気持ちの裏側【池上海斗】 | 340

#48 誰かの為に出来る限りの魂を【赤城翔太】 | 348

#49 夏コラボ企画の打ち合わせ | 355

#50 未来と明日を繋ぐ者の出会い | 363

#51 心の支えは誰の中にも | 370

#52 国枝辰巳 | 378

#53 強い部分、弱い部分 | 385

#54 実績、成績、貢献【宮田翔side】 | 395

#55 鷹と妖精の邂逅 | 401

ミライバ改革編―後編―

#56 V配信：熱い魂、燃やせポジティブ！【カゲロウ】 | 410

#57 V配信：尊いが重なる」と語彙力失う事案【ヒスイ×音神旋律】 | 417

キャラクターエピソード

如月旋梨：運命に奏でる凜とした音色①

この世界は色んな音で溢れている。

楽しい音、悲しい音、苦しい音、怖い音。

それはその人の感情を表しているみたいで、よく耳を傾けると聞こえて来る。

変な話だけど、それが面白い。音楽でもそう、色んなジャンルがあつて、それぞれの曲にはその作者の気持ちと魂がある。

激しくて、切なくて、楽しくて。

私は小さい頃から音楽を聴くのが好きで、いつもヘッドフォンと音楽を聴く為のウォークマンなどは手放さなかった。

でも、そうやって音楽を聴く日常にハマっていたら抜け出せなくなり、高校生活は友達もまともにできずいつも一人ぼっちだった。

『如月さんっていつも物静かだよな』

『誰かと話してるところ見たことないや』

『確かに。なんか、浮いてるって感じもする』

授業を受けてる時以外はいつも音楽を聴く為にヘッドフォンは付けている。

でも、そのような周りからの視線と言葉は嫌でも耳に入ってきた。

――別に、好きでそうしてるわけじゃない。

そう言い訳をしながら私は音量を大きくした。

特に自分から動くこともなく、ただこうやって音楽を聴くだけで日々が楽しいと思える。

でも友達も欲しい。

ただ私の趣味と性格を理解してる人じゃないときつと長続きしない。それこそ、形だけの存在になってしまう。

そうなれば自分にとつても相手にとつても、損しかない。

だから私は、無理に友達はいらなかった。

放課後ー。

私は夕暮れ時の帰り道を歩きながら帰った。

夜も好きだけど、夕暮れの空気と、その日が終わるといふ雰囲気が好きだった。

きつとこれを誰かに話してもわかつてはくれないだろうな。

変わらない日常、そんな帰り道。

ヘッドフォンで塞いでいる耳を貫通して、不快な音が聞こえてきた。

『……ッ』

それはバイクの音。

治安が悪いのか、ここら辺は特にこの時間から夜にかけてバイクが走る。

それも暴走族の類かと思われる。

複数の「不快な音」は気持ちを乱され、心地悪いもの。

少し早足で私は歩き、すぐに家に帰った。

お父さんもお母さんもまだ帰ってはいない。二階にある部屋に入り、私はカバンを置いて前のめりにベッドへダイブした。

ふかふかで、落ち着く。

とはいえ汗の掻いた服装のままだと気持ち悪いから、着替えを持って先にお風呂を済ました。

それから少し課題をした後、いつものようにベッドで寝転がりながらスマホを弄っていた。

その時にふと、授業の休憩時間に周りが話してた内容を思い出す。

『ーVTubeerってめちゃくちゃ面白いよね』

聞いたことはあるけど、見たことはない。

実際どういうものなのか気になってしまい、私はツイッターを閉じて動画サイトで検索してみた。

すると色んなV T u b e r が検索に引っかかり、私は枕に顎を乗せて興味本位、それもちょうど今L I V E配信しているV T u b e r を押してみた。

『どーも皆さん、ホラーは正義！ ミライバのS m i l e R o d e 所属、幽闇サンズだぜー！ 今日俺のお気に入りとしているホラーゲームの作成者さんが新作を来月に公開することと、その先行プレイとしてやっていくぞー！』

全体的なカラーは紫で、骸骨を模した仮面を頭横に付けた男性のアバターが意気揚々と自己紹介しては元気よく進行し始める。

でも凄いのは、そのアバターがリアルな人物と連動していて、それはまるで本当に生きているかのように動作していたこと。

身体を傾けたり、瞬きしたり、細かいところを言えば口元が動いたりするところとか。

『それにしても、相変わらずスゲエ数の視聴者だな！ 学校とか仕事とかちゃんと行ってんのか？ 俺の配信を閲覧してくれるのは嬉しいが、リアルを疎かにするなよな！ おっ、開始早々スパチャありがとう！ 初見です、か。おいおい、初見なのにそんな高額なスパチャしなくていいから大切にしろよ!?!』

プレイするであろうホラーゲームのタイトル画面で、サンズさんというV T u b e r はすぐに始めるわけでもなく雑談を始める。

怖いのは苦手。

だから見るのをやめようかと思って思った。

でも不思議と魅了されてしまう。

アバターがリアルに動くこともそうだけど、なによりサンズさんの喋り、コミュニケーションが高くて退屈しないから。

：サンズの兄貴、早く始めてくれよ！

『まあそう焦んなって！ ゲームするのが本命だが、お前ら視聴者とのやり取りを疎かにするわけにもいかないだろ！ もしゲームに集中してコメント拾わなかったりしたら、嫌だろ?』

：嫌すぎて死んじやう

：嫌われたかと思うくらいに落ち込む

：流石にそれはなあ

：やっぱ構って、サンズの兄貴

『ははははッ!! だろだろ? てことで、恒例の質問コーナーつてのをやってみるか! だがスパチャで質問は禁止だ、平等じゃ無くなっちゃまうからな!』

前座の質問コーナーが始まり、私はその間に身体を起こしてノートパソコンを起動する。

大きい声だけど不快じゃない。私はスマホで閲覧しながら、起動させたノートパソコンでサンズさんの言ってたミライブという会社を調べてみた。

するとどうやらVTuberの支援に特化した会社のように、VTuber業界の中では大手みたい。

色々調べてみると、サンズさんが所属しているSmileRodeのメンバー紹介欄があった。

左上からSmileRoadの先駆者、つまり古参に当たる順番みたいだが、なんと私が見ているサンズさんはその中で最も最古参、SmileRodeの大先輩だった。

他にも数十人以上のVTuberと、そのプロフィールが貼られており、多種多様な個性溢れるアバターが居た。

『すごいやんね……』

そんな独り言が自然と漏れた。

それくらいに凄くて、なんだか自分が生きてるつまらない世界とは違い別次元の存在なんだと思えてしまう。

『よしっ、次の質問拾うか! そうだなあ、サンズさんの名前の由来を教えてください、か。なるほど、この質問をしてくれるってことは興味を抱いて俺の配信を見に来てくれた人だな! 俺はそもそも市販のゲームよりもフリーゲームが大好きでな、小さい頃からやり込んだ際に知り合いから他のもやれよって勧められたのがUnder taleっていうゲームなんだよ。そこに出てくるキャラでサンズつ

てのが居るんだが、クールでナイスな骸骨だよ、胸にグツと来て憧れを抱いちゃったんだよ！ だから由来はホラーゲームにちなんで幽霊と闇で幽闇、そして一番推してるサンズの名前を取っ付けて幽闇サンズってわけだ！』

なるほど。

安直だけど、ちゃんと意味が込められている。

長く語るわけでもなく必要な部分だけをピックアップして説明するサンズさんは、やっぱりトーク力のお化けだった。

でも、質問……か。

読まれないかもしれないけど、何か聞いてみようかな……。

キサラギ：初見です。私は日々が変わらない毎日を過ごしています。大きな変化が欲しいというか、日々が楽しくなるようにしたいです。でもその楽しくする方法がわかりません。よくわからない質問ですみません……

自分でも何を伝えたいのかわからない質問を送信してから、やってしまったと後悔する。

私の長つたらしいコメントがでかどと表示され、すぐに流れていく。

ただそれでも五万近く居る視聴者の多くがきつと目に入れ、不快に思ってしまったかもしれない。

アカウントを消そう。

そう思い無かったことにしようとした時、私の名前がサンズさんに呼ばれた。

『おつ、キサラギさんありがとな！ 最後に謝ってるが、その必要はないぜ！ 別に俺に関する質問じゃなくてもいいわけだからな。変わらない毎日に大きな変化を望んでる、その為には楽しくする何かを得たいけどそれが難しい……か。いやあよくわかる、その気持ち！』

えっ？ わかるの……？

『同情して言ってるわけじゃないからな。にしても退屈な日々っての

は言葉良く考えれば安全で平和、何事もなく過ごせてるが、悪く言えばやることがないよな。ただキサラギさんにもやりたいこと、主に好きな趣味はあると思う。それをもっと極めたり、その趣味を広げられるような楽しみ方があれば更に世界は広く見えるようになると思う』
やりたいことに対して億劫になり、行動に移せない。そんな人なんじゃないかと、私の心情をサンズさんは察した。

だから視野を広く見て、小さなことから行動に移して自分の世界を拡張する。

言うだけじゃなく、そうしてみることも大切なのではないかと親身に教えてくれた。

それから色んな助言、アドバイスを貰い私は少し考え直すことにした。

行動する、まずその単純なことをしてみようかと。

『よしっ、質問はここまでだ！ 本命のホラゲーやる前の最後として告知させてもらうぜ！ この度、ミライバに新たなグループが結成されることとなった！ その名もDreamLife!! 公式からしっかり許可を貰った上での告知となるが、興味ある人は応募してみてください！ 詳しい詳細はミライバの公式で発表されてるから、それを確認してから考えてな！』

新しいVTuberグループが結成され、その先駆者として応募企画がされると言い、サンズさんは本命のホラゲーを始めた。

雑談が終わっても私は退室するつもりもなく、サンズさんの配信を聴きながらミライバの公式に目を向けて内容の確認をすることにした。

視野を広く、世界を見渡す……。

私はDreamLifeのメンバーを募るフォーム先に飛んで、事項内容に目を通す。

きっとこの『行動』があったからこそ、私の運命は大きく動き始めたのかもしれないー。

如月旋梨：運命に奏でる凜とした音色②

サンズさんを知った一週間後。

私はその他にも沢山のV T u b e rを見ることが趣味となり、沼にハマってしまった。

登校前の時間や学校の休憩時間、更に帰って勉強を終わらせた後の時間など、とにかく暇があればミライバに所属しているV T u b e rを主軸に閲覧しまくった。

決して飽きることはなかった。

一人一人がそれぞれの個性を持っていて、同じゲームでもリアクションや感想も違い、楽しみ方は無限だった。

でも、楽しみ方を見つけられることはできたのだが一つだけ出来ていないことがあった。

それはサンズさんも言っていた“行動”。世界を広くするための行動が出来ていなかった。

「あれから一週間……。うああ……。なにも成長できてないばい……！」

今は昼休憩。

学校の屋上で弁当箱を膝に乗せて、私は頭を抱えて嘆いていた。

とりあえず、友達が欲しい。

欲しいというより、作ってみたいというのが本心だろうか。

ひとまずお腹の虫が鳴ったから、私は弁当箱を開けて食べることに。

「んっ、おいひい……」

やっぱりお母さんの料理はピカイチ。

おかずもご飯もバランスが良くて、その中でも好物のだし巻き卵が美味しい。

お昼も誰かと食べたなら更に美味しく感じるのだろうか。

ちなみに屋上は私だけじゃなく、あちらこちらには生徒が輪になっ

ていた。

羨ましい。

私もああやって誰かと一緒に食べてみたい。

私に通っているのは女子校だから作ろうと思えばできると思うんだけど、難易度が高い。

暇を持て余している私は耳を澄ませて話の内容を聞く。決して盗み聞きじゃない、これは一種のBGMだ。

「そういえば彼氏できたんだよね〜！」

「えっ、ほんと!? どんな人なの?」

「背が高くてイケメン! なによりお金持ってる!」

「それ、ほんとに大丈夫? 主にあんたに対して」

まともなツツコミ、私も同意見だ。

「また隣の男子校で揉め事だつて。なんでも喧嘩で警察が出動する始末らしいよ」

「今時アニメや漫画みたいなことあるんだね」

「それがネット記事だと不可解な点があつてさ、喧嘩があつたのは事実なんだけどその場に居たのは怪我を負った人たちだけだったらしい」

「てことは引き分けてこと?」

「ううん、怪我した人の証言でたつた三人にやられたつてあるよ。相手は30人以上なのに」

いや、怖すぎる……。

確かに前々からこの辺りをパトカーがよく走ったりするけど、それが原因なのかな……?

とはいえ、喧嘩はよくない。

お互いの為に、なにも得られないはずなのに。

「やあボッチ! 隣いいかい?」

いや、好きでボッチになつてるわけじゃない。

……ん?

「なんだいボッチ、あたしの顔に何か付いてるかな?」

「い、いや、あの、その、ええ……?」

「それあたしがする本能だと思っただけ。まあいいや、勝手に座らせてもらうね！」

「ちよっー」

私が許可を出す前にはもう隣に正座して座り、弁当を広げていた。紫色のロングに片目が隠れており、その口元からは八重歯がチラツと見える。

ただこれまで誰かに話しかけられたこと、積極的に絡まれたことがない為、私はそのグイグイと来る彼女に呆気を取られる。

「あつ、そういえば自己紹介まだだったね。あたしは二年生の田代紫乃たしろしの！ ボッチの名前は？」

「ぼ、ボッチじゃない……です。私は如月旋梨です、学年は一年……です」

「んっ、よろしく旋梨！」

「えっ？ あつ、はい……」

勝手に話を進められ、勝手によろしくしてしまった。

それも二年ということは先輩。誰かと話すときは方言が出ないように気遣ってる為、違和感がすごかった。

いや、そんなことよりもなんで私は絡まれているのだろうか。

初対面、それも耳にしたこともない。誰かと食べないとは言ったが、別に初対面で先輩と食べたいとまでは思っていない……。

だから私は思い切って聞いてみた。

「あ、あの……」

「ん？」

「な、なんで私に声を掛けたんですか？ しかも一緒にお弁当まで……」

「なんでって噂で耳にしてたから。一年に不思議ちゃんがいるって。誰とも話さないし、いつもヘッドフォンしてるとか色々。その特徴を知ってて屋上に来たらたまたま居たから声掛けたって感じだよ。なにかおかしい？」

色々とおかしい。

そう言ってしまうたいが、先輩ということもあり抑えた。

それにしても私ってそんな噂されてるの？

しかも不思議ちゃんって、そんなミステリアスな雰囲気は出してないと思う……。

田代先輩こそ不思議ちゃんというイメージが湧いてしまう。

「というのも前々から気になってたんだよね。もしかして虐めとか受けてる？」

「いや、虐めは受けてないです……。なんというか、ただ馴染めないというか……」

「虐められてはいないんだ、よかった。馴染めないのが理由でボツチしてるわけだ。じゃあ今日からあたしたちは友達ね！」

「田代先輩、積極的過ぎるばい」

「あつ、方言！」

「ツ！」

「可愛い！ もっかい言っつて!?!」

グイッと顔を寄せてくる田代先輩。

本音を漏らす際に思わず方言で喋ってしまい、慌てて口を閉ざす。

変に思われたくないと思って我慢してきたけど田代先輩は何故か可愛いと言ってくる。

「嫌です」

だからこそ、断りを入れた。

私の否定に田代先輩はなんとも言えない表情になり、下がってご飯を口に入れる。

「旋梨はケチだなあ」

「ケチとかそういうのじゃないです。それと方言に可愛いとかあるんですか？ そこが特によくわかりません」

「えー、博多弁って可愛いじゃん。ほら、よくある言い方で『好いとーよ』って言ってみてよ」

「言いません」

「本当にケチだなあ。減るものもないんだしいじやないか。てことで罰としておかず一つもらいー！」

「あつ!?!」

方言で話すことを渋っていると、田代先輩は私の弁当箱から大好物のだし巻き卵を箸で掴み、口の中に放り込んだ。

最後に取つといたのに……!!

「田代先輩、ばり嫌いやけん!!」

「あはっ！ でたでた方言！ 旋梨はあれだなあ？ 感情的になると出ちやうタイプだ！」

凶星を突かれ、私は口を紡ぐ。

拗ねた私に田代先輩は謝りながら自分のお弁当から代わりのだし巻き卵を私にくれた。

食べてみると同じように美味しい。

それから私と田代先輩は適当に話を弾ませ、初めての友達にしては奇妙な関係を築いた。

最初は何を話したらいいのかわからなかった。

ーでも……。

「サンズさんってめっちゃいいよね！ あたしトップクラスで推してるもん！ なんていうのかなあ、母性とは反対で全部受け入れてくれるお兄ちゃんみたいな存在でさ、言葉にするのも難しいくらい頼りになるし面白い！」

「すつつつごいわかるばい！ 最初は何食わぬ感じで興味だけで見てみたっちゃけど、私の質問にもしつかり向き合って答えてくれたりもして、それからサンズさんをメインで見るとね！」

「あつ、なら二日前のホラゲーも見た？ 幽霊調査のゲーム！」

「もちろん見たばい！ 色んな証拠を見つけて幽霊の種類を特定するホラゲーやんね？」

「そうそう！ 見てる側からしてもめっちゃ怖いのに、サンズさんグイグイと進行して特定までしちゃうから凄かったんだよねえ！」

必然的に話は弾んだ。

なぜなら田代先輩もV T u b e r が好きで、その領域はオタクだった。

お弁当を食べた後の残り時間は主にV T u b e r 関連の話題で盛り上がり、サンズさんを中心に私と田代先輩の繋がりは広がった。

「ちなみにあたしの髪色はサンズさんのカラーに合わせてるんだよね。ほら、ここの女子高は髪色に関しては何にしたいかからさ」
「そういえばそんな校則無かったけんね」

「そうそう。ガチ恋とまではいかないけど、憧れと同じって側から見たら気持ち悪いけど案外嬉しいもんだよ。旋梨も染めてみたろう？」

「んー、サンズさんは好きだけど色に関してはあまり好きじゃないけん。それに染めてみたいけどお母さんやお父さん許してくれるかなあ……」

私の両親は髪色について偏見を持っている。

なんでも、染めるのは不良がすることだと。

別に心が荒んでいるからそうしている人がいるわけじゃないのに、そこに関しては厳しかったりもする。

でも憧れに近づくと……か。

自分を変えろということは、一体どんな世界が待っているのだろうか。

そんなことを思いながらも田代先輩と友達になった日、連絡先も交換して大きな一歩を踏み出せたのではないかと感じたー。

如月旋梨：運命に奏でる凜とした音色③

田代先輩と知り合ってから一ヶ月。

ほぼ毎日の様に通話をしながら勉強したり、すっかり沼にハマってしまったV T u b e r 関連の話題で盛り上がり上がりたりと絶えることのない楽しい毎日を送っていた。

変わったのは友達ができたことだけじゃなく私の部屋にも変化は出ていた。

「……思えば、この一ヶ月で随分と変わったやんね」

部屋の壁、透明の柵の数々。

そこには私が推しているサンズさんの壁紙ポスターやフィギュア等のグッズが満遍なくと綺麗に並べられていた。

お小遣いやお年玉の使い道が今まで無かった故に、これはもう取り返しがつかないぐらいまで来てしまった気がする……。

「うう……、少し我慢しないと……」

私はベッドの上で預金通帳と睨み合い、頭を抱える。

お母さんもお父さんも大手の企業に勤めていて、私が一人っ子というのもあって多めにお小遣いとくれたりするけど、この様な形で散財してしまっていることが少しの罪悪感。

でも田代先輩の部屋を写真で見せて貰ったことあるけど、これとは比べ物にならないくらいに凄かった。

ちなみにグッズを買い集めることはオタ活と言うらしい。わからないけど……。

そして更に悩んでいることがある。それは一ヶ月も前にサンズさんが配信で言っていた新しいグループ、D r e a m L i f e の一期生を募る件に関して。

まだ締め切りまでは期間があるとはいえ、色んなV T u b e r を知りつつある私の中でV T u b e r になりたいという欲が強かった。

今日は休日、だからゆっくり考えた上でフォーム送信しようと思っ
ているのだけど、行動になかなか移せない。

「んっ、とりあえず起きよう……」

ベッドから降りて寝巻きから着替える。

今日も両親は休日出勤ということもあって、いつものように家には
居ない。

二階から一階に降りてリビングに顔を出すとそこには朝食が用意
されていた。

だし巻き卵にウインナー、そして食パン。ご飯派とパン派でよく意
見が分かれるけど、私は断然パン派。

「いただきます」

パンは焼かない。

もちもちの食感とふわふわが好きだから。

朝食を口に入れもぐもぐしていると、机に置いてあったスマホが振
動した。

なんだろうと思ってみると、田代先輩からの通話だった。

「ふあい、もひもひ……」

『おはよー！ って、何か食べてる？』

「んぐっ。朝ご飯食べてるとね」

『朝ご飯!?! もう9時だよ!?!』

「まだ9時ばい」

『まあ朝からもぐもぐしてる旋梨を拝めて幸せだからいつか』

あれから田代先輩とは敬語を使わないで接することになった。

というのも田代先輩の方から友達だから敬語は禁止だと強く押しさ
れたからだ。

先輩というより、お姉ちゃんって感じが強いんだけどね。

『旋梨さ、もう応募はしたの?』

「ううん、まだ悩んでる。期間もまだあるからもう少し考えようか
なって」

『そっかー。でも今回、かなり応募が多いみたいだよ。公式が出して
る情報で既に万超えらしいから』

「高望みはしないけど、受かったらいいなあとは思ってるばい」

『いいや、旋梨なら絶対受かると思うね。というかこんな可愛いのに受からなかったらあたしが乗り込んでやる!』

「可愛いだけじゃ受かるわけないとね」

『あつ、可愛いのは否定しないんだ』

「ツ！ 可愛くないばい！」

『この小悪魔め〜!』

ずっとこんな調子で絡んでいる。

というより、田代先輩は少し積極的すぎる部分が目立つ。

例えば平日の学校がある日の昼休憩とか、急に後ろから抱きついてきたり、急に耳に息を吹きかけてきたり。

からかわれていると言われればそれまでなんだけど、度が過ぎると胸を触ってきたりやりたい放題だった。

本人曰く愛情表現とのことだが、相手が同じ女子でも恥ずかしさが勝るものだった。

「可愛いといえば田代先輩もやんね。ほら、つい最近告白されたって」

『あー、お断りしたんだよねえ。近くの男子校に通ってる一つ上の先輩だったんだけど、あたしからすれば興味ないし』

「登校中にいつも見かけて一目惚れだったんよね？」

『うん。でもダメ、だって告白してきた時あたしの目じゃなくて胸に視線向いてたし、結局はそっちかあつて。それに気持ちもなんか薄かったし』

「でもモテるやんね。ほら、田代先輩色々大きいから魅力なんよ」

『まあね、少なくとも胸の方は旋梨よりはあるよね〜!』

「むう……人様のコンプレックスを……」

『あはは！ でもほら、旋梨もしっかりすればモテるはずなんだけどなあ。彼氏欲しいとか思わないの?』

「そういうのわからんばい……」

思えば恋バナというのをしたことがなかった私は曖昧に返してしまふ。

欲しいというより、わからない。居たら世界は変わるという人が多

いけど、自分の今やりたいこととかに制限が掛からないかという方向に考えてしまい微妙になっちゃおう。

『まあでも、旋梨もいずれ運命の人に出会えるはずだよ!』

「運命の人?」

『そうそう、自分の全部をしつかり見て受け入れてくれる人。そうだなあ、旋梨は少し引き下がる性格だから手を引いてエスコートしてくれる男の人がいいかもね』

「うーん……、そんなに下がってるかなあ。ちなみに田代先輩のタイプはなんとね?」

『あたしは趣味とか性格とか見てくれる人。結局のところグッズ集めとかVTube鑑賞とかも趣味の一つだし、それを知らなくて否定する人とは付き合いたくないかなあ。あつ、あと束縛する人かな』

確かに束縛されるのは嫌だ。

あれはダメ、これはしないで。ネットとかでよくそういう類の話が流れてきたりするけれど見てて少し不快を感じる。

中には束縛されることで満たされる人もいるみたいだけどね。

とは言ってるけど、どうなんだろう。本当に好きな人が居たなら、その人に束縛とかされるのは嬉しいものなのだろうか。

「ぐちそうさまでした」

『お粗末さま!』

「田代先輩が作ったわけじゃないとね?」

『いやいや、言ってみたくなるんだよね。ちなみに今日は予定とかある?』

「ううん、特には」

『ならあたしとデートしない? 新しく服とか買いたくてさ!』

何もなかった予定に田代先輩とデートすることが追加された。

特にやることもないし、少し運動も兼ねて全然ありだった。

私は時間と集合場所を聞いて、それに向けて時間を潰し準備をすることにした。

「あつ、やつほー！ こつちこつち！」

「田代先輩元氣過ぎだし、声大きい！ 目立つからやめてほしいばい！」

「いいじゃん、別に。……って、相変わらずパーカー好きだね、旋梨は」
「フード被れば周りの視線とか少しは遮断できるから……。それよりも田代先輩は目立ち過ぎやんね」

白のパーカーにロングスカートを着ている私と違って、田代先輩は耳ピアスやネックレス、派手な柄の帽子など目立つには十分すぎる要素を兼ね備えていた。

いわゆるギャルっぽい見た目。私とは正反対だった。

その中でも一番目に入るのはリュックに付けられている缶バッチやアクリルキーホルダーなどのグッズ。

全面的に推しがジャラジャラと音を立てていた。

「推しとは尊く、身近に感じていたいのなんだよね。傍から見ればオタクってバカにする人居るけど、好きに変わりないからさー！」

「見習いたいけど程遠く感じるやんね。でも田代先輩らしいばい」

「旋梨も好きなものは全面的に自信を持って胸を張らないとただけどね。でも今日はとことん付き合ってもらおうからねー！」

「ッ！ ちょ、田代先輩!!」

「レッツゴー!!」

私の腕を引いて田代先輩は楽しそうにしていた。私も楽しいからいいんだけど、やつぱりどこかこの積極さに戸惑ってしまう。

好きなものを全面的に出していく……。か。まずは自分に自信持つことから始めてみようかな……。

プロローグ ―事の始まり―
#1カミングアウトは唐突に【兄貴side】

「あの、兄さん……。実は私ね、VTuberしてるんだ……」
「……お、おう」

――俺の名前は神代裕也、齡21歳でありながら実家のラーメン店で働いている。

今日は日差しが程良い晴天の日曜日。親父の許可を得て新作ラーメンのレシピに励んでいた午前十時ぐらいに、義妹である神代涼音に唐突なカミングアウトをされた。

俺自身、自分の趣味に関しては周りにとやかく言われる筋合いは無いと思う故、涼音がVTuberをしていることに関しては別にどうでもいいとさえ感じた。

しかし疑問に思うのは、なぜ今なのかということ。いや、様子からするに今まで隠していたような仕草と言葉なんだが、何故本当にこのタイミングなのか、そこがよくわからない。

「あー、なんだ……。親父とかにでも、バレたか？」
「そ、そうじゃなくて……。その……」

しどろもどろに、話すかそうでないかを此処で躊躇し始める涼音に、俺はレシピ作りをやめ、テーブル席に座るよう言う。

コップに水を入れて差し出し、話を聞く態勢を取る。するとなにを嗅ぎつけたのか、親父が二階から降りてくる。

「……裕也、お父さんは別に義妹の涼音ちゃんと密接な関係になるのは許可するけど理性を保つのはしつかりな？」

「殺すぞ?」
「あ、はい。おじさんは素直に二階で大人しくソシヤゲします、すいませんでした」

がん睨みを効かせ殺意を剥き出しにすると、親父は本当に素直に二階へと帰っていった。

幸いにも話す話さないで迷っている涼音の耳には入ってなかったようで、とりあえずは安心だ。

——改めて神代涼音、齢17歳の高校生。涼音の母親と俺の親父が再婚したことで、共に住むことになった。

色々な過去があったみたいだが今は省くとして、涼音の性格上物静かで、言葉にするならただただ凄くいい子というぐらい。

ただその反面、自分の伝えたい気持ちが入らず、自分の中で自己完結してしまい抱え込むこともしばしば。

そんな涼音が、ほんと唐突にカミングアウトをしてきた。それも親父の反応からするに俺だけのようだが……。

「涼音の母親と俺の親父が再婚して二年だ。最初は互いに警戒し合い上手く話すこともままならなかったが、今はそうじゃない。そうだろうか？」

「う、うん……。でも、今思うと今から話すことは兄さんを困らせた、邪魔をしちゃうかなって……」

「なに言ってるんだよ、お前は。別に涼音以外にも既に親父で困ったりしてんだから、慣れっこだわ。それに親父と涼音とじゃ価値が違う、だから話してみ」

「前から思ってたけど、お父さんには凄く辛口だよ……」
「いいんだよ、辛口で。調子乗るといつもうざいからな」

親父の扱いは雑が丁度いい、それに限る。手でひらひらと説明する俺に、涼音は苦笑する。

甘える時はとことん甘える、そうしてくれと伝えると、涼音はスカートをギュッと両手で握り締め、俺の目を見て言った。

「あ、あのね……。私の、マネージャーになってほしい……!」
「……ん?」

いや、話の流れがぶっ飛び過ぎて反応鈍ったわ。もはや端折りしすぎて、脳味噌がこっぴり状態だわ。

涼音に結果だけを伝えるのではなく、それに至るまでの事の経由を

話してくれと伝えた。

そして数十分と話を聞く中で、俺なりにまとめたのがこうだ。

①VTubeerをしており、チャンネル登録者が15万人。

②企業勢としてではなく、趣味の一環で個人勢。

③しかし15万人となれば、そこそこ有名であり企業からの誘いが最近出てきた。

大きく分けてこの三つ。そして結果的に俺にマネージャーをしてほしいと言ったのは、見知らぬ人がマネージャーになるのは辛いからというものだった。

「いや、そもそも話は置いて個人勢で15万人も登録者数が居るのに驚きだわ……。半年前からって言ったけど、どんなうなぎ登りしたらそうなるんだよ」

「わ、私も最初は本当に趣味でやってたの……。けど、雑談を通してゲームとか色々やるようになったら、その……。声がいいとか、可愛いとか色々言われて、その……」

「あく、まあ特にVTubeerだと声が売りみたいなどころあるからな。それに涼音の場合、声質が透き通ってるから尚更だろうな」

「えっ？ そ、その……。ありが、とう……」

「しかし本題に戻すとして、マネージャーをするにしても俺は知識ゼロだし、資格もなんもねえよ？」

「あ、えつと……。そこに関してはお誘いを貰った企業の担当者さんが教育しながら進められるからいいよって言ってた……」

「いや、いいんかい」

「なんでや、その企業。どんだけあつさりしてるんだ。あつさり過ぎてスープがただのお湯じゃねえか。」

しかし話を聞いてる限りでは、涼音は企業に入りたそうな雰囲気がある。

だが現実味で考えれば、涼音の性格上確かに上手くはいかなさそうだしなあ。

一応、涼音がどうしたいか聞いてみるか。

「涼音はどうしたいんだ？」

「わ、私は高校生で上手くお金も稼げないから……。企業に入ってもお父さんやお母さん、兄さんを楽にできるならと思ってるかな……。それにV Tuberは、凄く楽しいの……」

二年前の初対面の時でもいい子だとは思っていたが、自分の趣味を通して俺たちの負担を少しでも緩和させようとする気持ちは人一倍に強いのだろう。

そして最後の言葉を言った後の純粋な笑顔。これは全国の兄貴どもが落ちるわ、うん。

「涼音がそうしたいなら俺は協力する」

「ほ、ほんと……!?!」

「ああ、ただ条件がある」

「えつと、その条件とは……?」

「これまでは個人勢、趣味の一環でやってたものが仕事の部類に入るわけだ。企業のスケジュールによっては指定された時間での配信に加え、恐らく案件もあるだろう。それだけじゃない、涼音と同じV Tuberの方々との接点も多くなったりするだろう。マネージャーをする話の以前に、涼音の根気と頑張りが必須条件だ。俺はあくまでお前を支える裏方、メインはお前次第だからな。それでもいいならその企業と俺が話をしてやる。どうだ?」

俺は現実から目を逸らすのは好きじゃない。だからいち社会人として、教える。

仕事として動く辛さ、人間関係の苦勞さ。自分の好きなことをやるとしても、必ずどこかで躓く。

それでもやる気があるならと、俺は甘やかさない。涼音は少し考え込むようにして、下を俯く。

それが数分と続いたが、やがて顔を上げた涼音は決心を付けたように、言った。

「私……頑張る。兄さんを頼っちゃうかもだけど、出来るだけ自分でちゃんとできるように変わりたいから……!」

ンンンンンンンンツ!!! めちゃくちゃいい答え、それでありながら可愛い。

大人しめ物静かな涼音がここまでやる気を見せるなら、俺は喜んで手助けをしよう。

ということだ。

「んじや企業に話す前に、親父たちに報告すんぞ」

「ふああ!?! そ、そんなの条件になかった……!」

「言わずともわかる必須条件だろ。言わないなら俺から言つといてやるよ」

「兄さんのいじわる……!!」

俺の服を掴み止めようとするも、軽いせいでズンズンと前に進める。こりや俺と涼音の二人だけの秘密ってわけにもいかんだろ。

俺は嫌がる涼音を他所に、二階へと上がっていった。

#2カミングアウトは唐突に【義妹side】

二年前、私のお母さんは再婚した。前のお父さんは酒癖が悪く、いつもお母さんを殴っていた。

とても裕福とは思えない生活の中、お父さんの機嫌を取る為に私は言う事だけを聞いていた。

でも二年前のある日、離婚したお母さんが新しいお父さんと今の兄さんを連れて挨拶をしに来た。

前のお父さんのこともあって、当時は男の人に対して怖いという印象があった。

お母さんは前のお父さんとは違う、凄い優しい人と説明をしてくれたけど、それでも拭いきれなかった。

けどお母さんが新しい道で幸せになれるならと、私は領いてこの人たちと一緒になる決意をした。

最初は怖かった、けどそれもすぐに無くなった。何故なら、兄さんは私の気持ちを救ってくれたからだ。

『前の親父さん？ ンなもん過去だ過去。安心しろ、離婚した腹いせに住所特定して乗り込んできた暁には煮え滾った極熱のスープをぶっかけて、湯がいてやるよ』

『いいか、欲しいもんは言え。それと遠慮はするな、絶対。義理であろうと俺とお前は兄妹、助け合うのは当然の理だろ』

『涼音！ 新作のラーメンが出来たから試食してくれ！ 今回の結構自信作なんだよ、不味かったら言うってくれ！ 親父に処理させるからよ』

兄さんは積極的に、絡んでくれた。私になにも言い返さずとも、それが普通であるかのように振る舞ってくれた。

無理に私から喋らせようとしてくるのではなく、私が反応するまで待ってくれたりもした。

ほんとに怖い印象があったのは、最初だけ。改めて兄さんは、尊敬できる人なんだと実感する。

それに兄さんは知らないだろうな。私がVTuberを始めたきっかけが、兄さん自身にあるなんて。

それはVTuber活動を始める一年前。初めて私は、兄さんに甘える行動をした。

それも無理な、お願いをした。

『あ、あの……兄さん……ッ』

『んあ？ どうした、涼音』

『あの、ね……。兄さんの使ってるパソコン、借りたりできるかな……？』

最初はただ調べ物をした程度だった。スマホでも出来るけど、パソコンのメモを使って課題のレポートを作成したかった。

兄さんの部屋に入り、そうお願いをした時。私の視線にはちょうど兄さんが動画を見ている内容が目に入った。

『ん？ ああ、これか。涼音、ちよつと来てみる』

『えっ？ う、うん……』

そう手で招いては、兄さんは私を呼んだ。私は言われるがまま近付いて、その動画の画面に注目した。

『最近ハマってたんだけどさ、VTuber？ っるのが面白いんだよ。色んな奴が居てさ、十人十色で飽きねえ』

『す、凄い……。これ、どうやって動いてるんだろう……』

『いや、俺も難しいことはよくわかんねえけど、モーションキャプチャー？ みたいなのを使ってるとは聞いたことがある。ほんとどうなってるのか、わかんねえけど』

『この人カッコいい……。あ、この子は可愛い……』

『はははッ！ そうそう、こいつは——』

兄さんは笑いながら、色々話をしてくれた。VTuberの活動が主にどういう部類に分けられているのか、有名からそうでないものまで兄さんは教えてくれた。

気付けば本題を忘れて、兄さんと一緒に色んなVTuberの切り

抜きというのを見ていた。

そこで兄さんが、ぽつりと呟いた。

『あく、マジで面白いな。涼音は声質もいいし、性格も可愛いところあるからV T u b e rになったら化けるだろうな』

『わ、私が……？』

『ああ、冗談では言わんぞ。まあ始めるまでが大変って聞いてるから難しいだろうけどな』

きつと兄さんは、無自覚なんだと思う。そのさりげない一言が、私にとつて大きく変わることを。

なぜか私は兄さんの為に、V T u b e rになればいいなと思っってしまったからだ。

そう考えていると、兄さんが思い出したかのように私がパソコンを借りたいという本題を話し始めてくれた。

けどそこで更に、兄さんは驚くことを言い出した。

『俺の使用済みを使うより、涼音専用のパソコン買いに行くか』

『え……？』

『買うならやっぱデスクトップだろうな、容量的にも。とりあえず中古は信用ならんから新品を買う前提として——』

『ちよ、ちよつと待つて兄さん……！』

『んあ？』

『そ、そこまでしなくていいよ……？』

何故か一人で話が弾みだす兄さんに声を掛け、止める。私の言葉に兄さんはしばらく黙っていたが、なにを思ったのかスマホを取り出して電話をし始める。

『よお、元気にしてっか。こんな時間に悪いな、ちよつとパソコンに関して相談があるんだけどよ。……おう、おう。いや、俺のじゃなくて妹のなんだけどよ、新品で最高のデスクトップに加え、完璧なオプション付きでいいのあるかなってという相談だわ』

『に、兄さん……!？』

『んあ、そう……今の妹の声。可愛いだあ？ テメエ狙ってみろ、炎上させに行くぞコラツ。とりあえずそういうわけだから、明日の午前中

に出向くわ。ああ、おう……じゃあな』

相手の人とどういふ会話をしているのかはわからないけど、話が着いたみたいで電話を切る。

そして兄さんは私に向かつて、笑顔で――。

『はい、これで確定事項。拒否権は無い、明日の午前に行くから忘れんじゃねえぞ』

なんというか、兄さんには勝てない気がした。そういうところで私の意見を尊重しないって、ずるい。

結局言われるがままされるがまま、その日は兄さんがパソコンを貸してくれた。

けどそれがきっかけで、私はV T u b e rになる為に独学でネットを行き来して調べ、勉強をした。

僅か半年間、人の興味は凄いのだと改めて思う。私は独学であるけれど自分で絵を描いて、自分で動かすことができた。

兄さんの為だけに始めたV T u b e r、ちゃんとしてから兄さんに教えようと思ったのだけれど、それから一年。

『嘘……でしょ。15万人、行っちゃった……ッ』

趣味の範囲でやっていた分、登録者数をあまり気にしていなかった。けどある日、改めて確認をしてみると数万人どころか十数万人と増えていた。

教えるにしてもこれは大事になりかねないと、どこか足枷となって黙り続けてきたけど、これが結果だった。

そして更には、V T u b e r活動の専用アカウントとして利用していたS w i t t e rのD Mに、企業からの勧誘メッセージも来ていた。

個人勢としてやってきたから収益は無かったけど、企業に勤めてやれば多少は稼ぎもあるのだろうか。

もし稼げるなら、兄さんたちの負担を少しでも減らせれるのだろうか。

しばらくは悩み続けた末に、私はまずメッセージの返答として見知らぬ人がマネージャーになるのは怖い事と、もし企業勢になったとし

でも続けられるかという不安を送った。

もしやるとしたら、兄さんがマネージャーならと無理な話をしてみた。すると数分後には丁重な文章で、兄さんのやる気があれば未経験でも大丈夫です！と帰ってきた。

いや、ほんとにいいの……？

少し、ゆるゆるじゃないかな……。

そんな気持ちに駆られる中、企業の方からそれでもいいと言うなら、兄さんに打ち明けてみようかなって思った。

そして時は戻り、日曜日の今日。私は一階の方で作業をしようとしている兄さんに声を掛けた。

「あの、兄さん……。実は私ね、VTuberしてるんだ……」

その言葉から始まって、兄さんはコップに水を入れて話を聞く姿勢をしてくれた。

本当に優しく、自分を見てくれる。私は兄さんに、迷いもしたけど全てを話した。

もちろん、条件付き。でもそれは全て、私の為でもあり、兄さんが決めた約束事。

寧ろ兄さんとの約束事だから、嫌じゃない。逆に嬉しいし、頑張れる気がする。

話が終わると同時に兄さんは立ち上がり、言った。

「んじや企業に話す前に、親父たちに報告すんぞ」

「ふああ!? そ、そんなの条件になかった……!」

「言わずともわかる必須条件だろ。言わないなら俺から言っというてやるよ」

「兄さんのいじわる……!!」

引き留めようと兄さんの服を掴むけど、ズルズルと引きずられてしまふ。

こう見えて兄さん、身体の作りいいから……。きっと私なんて、軽くて気にもしないんだろうなあ。

けど、そんな兄さんが自慢。ちゃんと物事を見てくれて、真剣に向き合ってくれる。

——ここだけの話、私は兄さんのこと凄く大好きなんだよ？

#3自分で決めた事だから

涼音がV T u b e rをしている事と、企業所属にあたり俺にマネージャーをして欲しいという願いに関して、親父たちを含め家族会議が始まった。

親父には直接俺から話をして、涼音はメールを通じて母親の奏さんに今日の夜に話したいことがあると伝えた。

こういう時の時間というのは早く過ぎるもので、気持ちの整理をしきれない状態で陽が沈んだ。

今現在、日曜日ということもあつて閉店している店内のテーブル席に、俺と涼音が、親父と奏さんが並ぶ形で対面している。

俺から話してもいいが、それは筋ではない。涼音が自分で決めたことであり、やりたいと前向きに決めた以上は自ら話を切り出すのがセオリーというもの。

親父も奏さんも、涼音が話し出すのを待っている。誰も急かしたりは一切しない。

静寂が数分と続く中、涼音は親父たちに見えないところで俺のズボンの裾を握り締め、深く一息を吐いて覚悟を決める。

「あ、あのね……お父さん、お母さん……ッ」

大丈夫だ、涼音。俺の親父は馬鹿でも話はちゃんと聞く。奏さんは特に、誰よりもお前の傍に居たんだ。

間違いない、責めることはしない。安心して、言っちゃまえ。

「私、その……あの……！」

緊張するのはわかる。だが努力してV T u b e rについて勉強し、成り上がったという実績がお前にはある。

胸を張って、言うがいい。……貧乳だが。

「——私、兄さんと一緒になる……!!」

話の大半、いや……八割方は俺が説明した感じになったが、涼音は何故俺と一緒にと発言したのか説明をする。

VTuberを始めた時期、登録者数について。そして人気が出てきた頃に、企業からの誘いがきたこと。

そこで所属するにしても見知らぬ人がマネージャーは怖いから、そこで俺に涼音のマネージャーとして活動してほしいということを丁寧に。

しかし実際これは難しい問題ではある。現実であるならその日に相手する人間は数えられるが、涼音が挑もうとしている場所は一度に数千人、数万人が見ている世界。

ネットを通しての犯罪や炎上事、更にVTuberは身バレと言われるものが存在する。

ネット用語では前世と称されるものだが、VTuberになる前のアカウントなどによるものから特定されかねない。

そうなった場合、注意すべきは炎上などではなく、特定された挙句にいわゆる“ガチ恋勢”と呼ばれる者たちによるストーカー事件に繋がること。

全員が全員ではない、ほんとに一部の存在だ。ネットを通して一方的に好意を抱いているという理由だけでリアルを特定し、犯罪を起こす愚者どもが棲息する。

そうなるリスクも含めて考えないといけない。つまりこの議題、涼音だけの問題ではないということだ。

「んー、そうねえ。私たちは若くはないからインターネットについてあまり詳しくはないけれど、少し不安というのが正直なところかしら。裕也くんの意見としては、どうなのかしら」

「俺は現実主義者なので言わせてもらいますが、仮に俺が涼音のマネージャーを務めたとしても絶対に保証できるとは言い切れませんね。ただそれは俺に限らず、所属しているVTuber達にも言えることです。なのでそこは、企業側と俺たちでセキュリティを固めるのが最善ともいえますが、一概には言えませんね」

「朝のニュースとかでも、ネットによる被害は多いからな。涼音ちゃ

んが自分でやりたいと決めたことだから尊重はしてあげたいが、親の気持ちとしては“もし自分たちが居ない間に”事件に巻き込まれたとあっちゃ、怖いからなあ……」

「で、ですよね……ッ」

まあ、話し合う前から目に見えていた光景だな。俺が親父たちの立場でも、同じことを言うだろう。

必ず安全が保障されるならまだしも、現実それが絶対とは限らないしな。

親父と奏さんの意見に、涼音はしよんぼりとする。残念だが、そう簡単には通らない話だ。

——だが。

「絶対の安全は保証できないが、事件に巻き込まれるリスクを下げることはできる。涼音は未成年、なら尚更これは俺たち家族と企業側で綿密な対策を練った上で所属するのはどうだろうか。言葉はあれだが、元々涼音は個人勢……つまり趣味の範囲でやっていたがそこに向こうから誘って来たんだ。多少の我儘というか条件を聞いてもらわないと、割に合わないと思わねえか？」

「そうは言うが、それでもな……」

「俺と親父はともかく、奏さん。涼音がこれまで自分の感情をこころで素直に出して、こうしたいと言ったことありますか？ たった二年、されど二年の関係とはいえわかります。こいつは自分の言いたいことを言いたくても、言葉にするのが苦手だ……。だが俺を挟んでいるとはいえ、自分が決めた目標に向かって前向きに進もうとしている涼音を、俺は手助けしてやりたいと思ってます」

「あら、凄い男前なこと言うわねえ。でも、どうしてそんなに涼音のことを思ってくれるの？」

なんだ……、奏さんのこの視線。まるでなにかを試されている気がしてならない、その視線は。

しかしここまで睨み合っただけで、逃げるわけにはいかない。俺はいつだって物事に全力、自分以外の奴がそれをしたいと頑張るならその背中を押すまで。

だから俺は、一息吸って奏さんの目を見てハッキリと言った。

「前の親父さんから受けていた不幸の分、こいつをそれ以上に幸せへと導きたいからです」

「ッー」

「奏さん、俺は直接その現場に居たわけじゃないから貴方と涼音が他にどのような待遇を受けていたかなんてわかりません。ですが貴方と涼音から聞かされた内容だけでも、ろくでもなかったと思えるぐらいには理解しているつもりです。そんな中、俺は親父と二人でこのラーメン店を経営しながら、好きに生きてきました」

「裕也、お前……」

「俺や親父が好きにしてきたように、どうか貴方や涼音にも何一つ不自由なく好きにしてほしい。そして今回、俺はそんな涼音に好きな事をやらせる為に、背中を押してやりたいということです。これが理由じゃ、足りませんか？」

「兄さん……ッ」

奏さんや涼音が前の親父さんから受けた傷痕、想いを知ろうとするのは寧ろ愚行だ。

そしてそれを詳しく聞こうとするのは、愚者だ。だから深く関与しない程度で留まり、俺が涼音の背中を押す理由を鮮明に伝えてみた。人生も十人十色、全員が同じ境遇の元で生まれ、同じように育つわけじゃない。

裕福に暮らす奴もいれば、貧困に暮らす奴もいる。だが俺と親父はどちらかといえば、裕福の部類だ。

そんな裕福な環境に来た……いや、来てくれた涼音や奏さんには過去に受けた不幸以上に、幸せになっただけだった。

もはや他人ではない、兄妹であり親だ。余計に俺はそこで、優劣を感じてほしくはなかった。

俺の言葉に、親父と奏さんはしばらく考え込んだ。そして互いに視線を合わせ、微笑んだ。

「裕也、お前は昔からいつもそうだ。一度決めたことは失敗してもいいから突き進む。今回、それが涼音ちゃんなんだな？」

「ああ」

「涼音は未成年と言うけれど、私たちからすれば裕也くんもまだ子供……。本当なら、まだ甘えてもいいお年頃。でもそこまで涼音の為に本気になってくれたら、断るわけにもいかないわよねえ」

「えつと、それじゃお母さん……ッ」

「ええ、貴方のVTuber活動を親として認めるわ。その企業の方々とも後日、お話をすることにしましょう。正直それでも不安は拭いきれないけれど、裕也くんの言うようにやってみなくちゃわからないものね。特に貴方たちは若いから、その内に好きなことをやって経験するのは良いと思うわあ」

「奏さんの言う通り、そうだな。だが裕也、ネットの世界は現実よりも厳しいと聞く。お前はその中で、涼音ちゃんを出来るだけ支えてやれよ？」

「ああ、もちろんだ」

親父と奏さんが正式に涼音のVTuber活動を認めたということで、話し合いは終わった。

俺と涼音は先に二階の部屋に戻り、それぞれ部屋に入る前にハイタッチをした。

これは涼音だけじゃない。俺も含めて、二人で始める新しい道だから気を引き締めないといけない。

……とりあえず、マネージャーに関しての本を買い漁るか。

「に、兄さん……！」

「んあ？」

「あ、ありがとう……！　だ、大好きだよ……！」

「……ッ！　お、おう」

部屋に入ろうとした瞬間、涼音に呼び止められて足を止めた。すると涼音からは感謝と、大好き発言をされた。

俺が反応を返す頃には既に部屋に勢いよく入っていった。しばらく俺はその場で立ち尽くしていた。

なんだ、この胸の高鳴りは。心臓の鼓動が、はええ。

よくわからない感情を気にしながらも、俺は静かに部屋へと戻って

いった。

——裕也と涼音が一足先に戻った後の一階では。

「そういえば裕也の奴マネージャーになるとは言ってたが、経験も知識も無いはずだが……」

「あら、確かにそうねえ。もしかしたら企業の担当者さんが未経験でもいって言ったのかしら？」

「だとしたらその企業だけあつさりしてるんだ。あつさり過ぎてスープがただのお湯じゃないか」

「あら、上手いわね。ふふっ」

「いやあ、それほどでもお!!」

#4 過去の形と現在の形

家族会議を終えた翌日、月曜日ということもあって店は平常通りに開店していた。

俺と親父は二人で客を歓迎し、対応に追われていた。涼音は高校生なので、学校に登校。

いつもなら客の応対、注文を取るのは奏さんがやってくれるのだが、今日は休んでもらい涼音が所属するであろう企業へ一足先に話し合いに行った。

まあ昨日、就寝前に涼音が企業側に連絡を入れているから話し合いはすんなりと進んでいるだろう。

「裕也！ 盛り付けが下手過ぎるぞ！ やり直せ！」
「すまねえ親父、すぐに直す！」

普段は親父を下に見ているが、仕事とあれば違う。親父の店を継ぐ為に修行中の身であり、こうやって作業している間だけは親父のことを尊敬することができ、かつけえと思う。

言われた通り出来上がったラーメンが冷めない内に盛り付けを再び丁寧にし、親父の許可を得る。

そしてそのまま待つてくれている客たちの元に、次々と配っていきまた厨房に戻る。

男性と女性では器用の差があると言われるが、あながち間違っていないのかもしれない。

俺のしているこれは、普段奏さんがやってくれている事。ろくに盛り付けをしたことがないとはいえ、これを一発で合格できるのもすげえよな。

親父に叱られながらも、時間はあつという間に過ぎ去り昼の閉店時間。

客が居なくなつて開店の文字を閉店に切り替えたのを確認し、俺はテーブル席にある椅子で横になる。

「んああ…………… 疲れたア……………」

「ご苦労さん、裕也。けど奏が居なくなつただけで、午前の作業でくたばつてんじゃないやねえよ！」

「体力は意外とあるもんだと思つてんだけどなあ……………。客に接する技術、注文の聞き取り。それに、盛り付け……………。親父は最初、これを一人で作つてたのかよ」

「今では地元の方々に愛してもらえるようなラーメン店だが、当初は溜実が俺以上に活躍してくれてたからなあ」

「ああ、納得。あの人なら親父に言われるまでもなさそうだしな」

神代溜実、俺の実際の母親だった人だ。いつも元気に明るい笑顔を振りまいて、周りの印象は良かった。

だが俺がまだ小学生のガキだった頃、事故に遭い亡くなった。相手の信号無視によるものだとは後々に警察から知らされたが、俺も親父も母親を亡くしたことによるショックが大きすぎて、もはや相手を責める余裕すらなかったな。

保険やら賠償金やらで多額の金が入つたとはいえ、亡くなった人間が蘇るなんてのはファンタジーの世界だ。

幾ら金があつたところで、俺と親父の記憶では母親の思い出はその当方で止まっている。

けど、親父は強いな。誰よりも寄り添ってきたのは親父だったのに、事件のショックを乗り越えて母親と開いたこのラーメン店を守り抜いてきたんだから。

「なあ、裕也」

「なんだよ」

「…………俺が再婚したこと、本当は不満に思つてないか？」

「なんでそう思うんだよ」

「いや、ほら…………。お前にとって母親は溜実だけだったし、今回の再婚は俺と奏の二人で強引に決めたようなもんだしよ。その、なんていえないのだろうか。俺が溜実以外の女にすぐ目を向けたっていうの

が、お前にとって不満じゃないかとか色々だ」

「……なんだそれ、アホくさ」

平日の昼間から、少しだけ重い空気が流れる。そりゃ俺にとって母親は間違いなく奏さんじゃない。

それはどれだけ綺麗ごとを吐こうが変わらない事実。だがそれでも俺は、親父が選んだ道にとやかくケチをつけたくはない。

——故に。

「お袋を事故で失ってから今日までの十数年、男手一人で育ててくれたのはあんただろ。俺は彼女が出来たことも、ましてや結婚したこともないからわからないが、その期間は親父にとって大変だっただろうし、辛かったと思う。親父は俺に不満を抱いていないかと聞くが逆にその質問が不満になるわ」

「裕也……」

「十何年も頑張ったからいいじゃねえか。それに親父が再婚してくれなきゃ、俺は変われなかっただろうしな。あの時こうすればよかったそうすればよかった、なんてのは結果論でしかない。今は奏さんが居る、涼音が居る。過去をいつまでも掘り返したってそこにあるのは虚しさだけだろうが。だから俺は別に、親父の選択を馬鹿にはしないし、俺自身も後悔はしてない」

それに親父は、再婚したからと言ってお袋のことを忘れるようなことをしない。

思い出は事故に遭う前しか残ってないが、それでいい。俺たちの中でお袋を忘れなければ、十分だ。

しばらく静寂が続いた後、厨房の方からすすり泣くような声が聞こえてくる。

「泣いてんじやねえよ、情けねえ」

「泣いてねえよ、バカやろう……。ただ、ありがとうな。今はお前だけじゃない、奏も涼音ちゃんも居る。一日一日を大事に頑張らねえといけねえなって思ってるだけだ」

涙を拭い、親父は笑いながら言った。それから午後のお袋の営業が始まり、午前とは変わって互いに連携良く進めることができた。

夕方、店の裏側からドアが開き涼音が帰ってきた。普段ならまだ仕事があるが、涼音の件もあつて今日は夕方に閉店となる。

親父に休憩を挟ませ、俺一人で厨房の片付けや掃除をしていると着替え終えた涼音が顔を出した。

「ただいま、兄さん。お母さんは……?」

「ああ、おかえり。奏さんはまだ帰ってきてないぞ」

「そか……。えっと、なにか手伝いたい……」

「じゃあ皿洗いを手伝ってくれ。洗ったの置いていくから、拭いていく作業を頼む」

「うん、わかった」

袖を捲り、涼音が隣に立つ。小柄な身長、俺の胸下辺りに顔が来るが、いつ見ても本当に小さいな。

ちよつと突いただけで崩れそうな程に、か細く見える。俺が皿を洗い、涼音が拭いていくという作業が数分と続く。

「ねえ、兄さん」

「んあ?」

「私の我儘でVTuberの件が出て、マネージャをしてくれるって話なんだけど……。兄さん、このお店はどうするの……?」

「ああ、そのことについては心配すんな。親父の知り合いで何人か手伝ってくれるって話はしてあるみたいだし、店が回らない状況にはならないだろう」

「う、うん……」

「まさか、俺が店に集中できなくなるんじゃないかと罪悪感を感じているのか?」

「……ッ」

俺の言葉に、涼音は言葉を詰まらせる。

凶星か……。

「涼音」

「なに、兄さん——。ひゃんっ!」

涼音に呼び掛け、俺は濡れた左手で涼音の後ろ首を掴んだ。すると可愛らしくも驚いた声を出す。

「お前は優しいからな。色々心配してくれるのは嬉しいが、自分で決めた道なんだから前だけ見てろ。後ろは俺が見てやるから、気にせずやりたいことを全力で貫け」

「う、うん……。あ、ありがとう……。ツ」

「それでよし」

涼音の首から手を離し、俺は皿洗いを続行する。なぜか顔を赤くしている涼音を横で見ながら、今この時に感じられる幸せの形を壊さないようにと改めて決意する。

これまでのキャラクター紹介【1】※挿絵あり

1. 神代裕也 | Kamisiro Yuuya |

年齢：21歳

身長：172cm

趣味：ラーメン作り、VTuber鑑賞

特技：機械の修理（主にPC）

好きなもの：ラーメン全般、VTuber

嫌いなもの：物事をはっきりしない奴

【備考】

本作の主人公。実家がラーメン屋であり、新作のレシピを考えて自信作と称して作るのが趣味。しかしこれまで作った新作はどれも父親からダメ出しを食らい、一品も許可を得られていない。

ただそれは仕事上での趣味であり、プライベートでの趣味は車いじりや、VTuberの鑑賞がある。

義妹の涼音がVTuberを始めるきっかけを作った本人であるが、それを理解していない。

鈍感ではないと言い切るが、鈍感な部分が見受けられる。ただ鋭い所は鋭いという片方に寄った思考をしている。

性格は至って前向きで、ポジティブ。それらは本当の母親を失って以来、男一人手に育ててくれた父親の足を引っ張らないようにという考え方から後ろは見えないようにした結果。

2. 神代涼音 | Kamisiro Suzune |

年齢：17歳

身長：149cm

趣味：VTuber活動

特技：暗記

好きなもの：裕也の作ったラーメン
嫌いなもの：騒がしい場所や人

【備考】

本作のヒロイン。二年前に母親が再婚し、今の新しい家庭と幸せを手にかけている。

その前の父親からは暴力沙汰に巻き込まれたり、苦痛の人生を送り一時的な男性に対する恐怖心があったが、裕也の積極的な絡みが功を奏して多少緩和された。

とはいえ家族内では普通に接したり会話ができるが、人見知りとまだ男性に対する恐怖心が残っている為、基本的に裕也が居ないと不安が溜まり心労する。

第二の新しい家庭、特に裕也の存在が大きく自分を前に押しつけてきたことで尊敬と共に好意を実は抱いている。

……が、普通はあつてはならない事実である為に自分の中で自己完結してしまう。

時折、本音が零れたりするが……。

3. 神代雅也 | Kamisiro Masaya |

年齢：45歳

身長：182cm

趣味：ソシヤゲ全般（特にカードゲーム）

特技：料理

好きなもの：家族

嫌いなもの：筋が通ってない奴

【備考】

裕也の実父であり、涼音の義父。前の妻である瑠実と客を笑顔に満足させられる店としてラーメン屋を設立。

裕也がまだ少年期の頃は瑠実と他の従業員たちと順調に回していたが、相手の信号無視による事故で瑠実を喪って以来、しばらく立ち

直れない期間があった。

しかしその期間も僅かで、瑠実との唯一の生きている思い出である裕也を育ててはいけないという前向きな思考で自分自身を奮い立たせ、裕也が高校を卒業するまでの間、たった一人で店を切り盛りした。

現在の妻である奏を溺愛しているが、同様に瑠実への愛情は消えておらず、墓参りは欠かさず行き、裏で思い出しては泣いている様子。

瑠実を喪つて以来決めた決意の通り、自分を含め裕也たちにはやりたいことを全力でやるように言ったり、失敗を恐れずに挑戦することを強く言い続けた。

裕也の性格は正に、雅也讓りである。

4. 神代奏 | Kamisiro Kanade |

年齢：40歳

身長：162cm

趣味：読書、雅也とゲームをする

特技：家事全般

好きなもの：家族、料理

嫌いなもの：大切なモノを馬鹿にされること

【備考】

裕也の義母であり、涼音の実母。二十代前半という若さで涼音を出産したはいいものの、育児放棄に走った前の旦那と口論し暴力を振るわれるも耐え続けた。

全ては涼音の為であり、生活が貧困に近いということもあり継ることしかできなかった。

しかし雅也との出会いを期に離婚を決意。最初は拒まれるものの雅也の介入により決着。

この状態を続けても奏の為に涼音の為にならないと雅也の言葉に押され再婚した後、今の幸せな家庭を手にした。

再婚した後は涼音のことが気掛かりで心配していたが、裕也が率先して手を引いてくれているのを目にした時、雅也の息子ということも

あつて多大な信頼を寄せている。
ちなみに雅也同様に裕也を弄るのが、大好きな模様。

涼音を宥めたその日の夜、奏さんが夜遅くに帰ってきた。まさか一日掛かるとは思ってた為か、奏さんが帰ってきた瞬間に親父が涙を流しながら抱き着いた。

まあお袋の件もあるから特に親父は敏感だったのだろう。夜21時過ぎに帰ってきた奏さんを後から俺と涼音も迎える。

朝早くに出て遅い帰りの理由を全員で聞いた。そしたらまあ面白い話で、企業側が提出してきた規約内容を読んだ後に、こちら側の条件を幾つか提案したそうだ。

涼音が未成年ということもあり、隙を見せないように奏さんは遠慮を知らない条件を幾つか出してきたとのこと。

「涼音はまだ未成年で学校の件もあるから企業さんのペースで振り回さないで欲しいっていう事と、保護者代表として裕也くんを推薦することとか色々言ってきたわあ」

「お母さん、失礼なことはしてないよね……?」

「あらあら、まるで私がそこらのモンスターペアレントみたいなこと言うわねえ。大丈夫、ちよつと釘を刺して置いただけだからあ」

「その釘一本で担当者さんが病んでなければいいんですが……」

「なにか言ったかしら? 裕也くん」

「いえ、奏さんは相変わらず綺麗って話です」

「なに口説いてんだ裕也ア!!」

「痛てエツ!!!」

八方美人、親父曰く神代家に舞い降りた大和撫子の奏さんだが裏は何を考えているか想像もつかない。

何気ない俺の一言を察した奏さんは圧のある声で問いただしてくるが、すぐに話を逸らした。

だがその時に俺が奏さんを口説いていると謎に勘違いをした親父

がテーブルを乗り越えて頬をはたいてきた。

「に、兄さんはお母さんみたいな綺麗な人が好き……?」

「いや、涼音はなんの話をしてんだよ……。別に奏さんが綺麗とかそういう理由じゃなくて——」

「あらあ、綺麗じゃなくてなにかしらあ?」

「奏が綺麗じゃないだとオ!? 貴様ア!!」

「めんどくせえなオイ!! 流れがループするだろうがア!!」

一度ならず二度までも殴ろうとしてくる親父を回避して、埒が明かない状況を静める。

奏さんは口元を抑えて笑いを堪えているが、原因はあんたなんだよなあ。

こういうところ、涼音は受け継いでるな。

「ともかく話を戻すとして、確かに涼音は高校生。基本的な活動は夜に絞られるだろうな。そもそも今回の件は向こうからの勧誘だけに、こちらが私生活を大きく変える必要はない。そこに関して担当者さんはなんか言っていました?」

「裕也くんが思っていることも話してきたわ。所属すると言っても学生の本分は勉強、だから活動できる時間帯に限りがあると。そしたら担当者さんね、それでも構いませんって言ってきたのよお」

「へえ、意外にも素直ですね」

「釘、刺してきたからねえ」

「なるほど、その釘は正しいですね」

「ただ、休日である土曜日や日曜日は企業に出向いて設備してあるライブルームで配信をお願いしたいと言ってたわ。なんでも、実際に涼音の配信の様子だとかを見てみたいとのことらしくて」

まあそこに関しては承諾するべきだろうな。企業がどういった伝手を辿って涼音に目を付けたのかはわからないが、担当者の方からしても実際に現場を目にしてみたいのは理解できる気持ちだ。

趣味ではなく仕事としてやっていく以上、涼音の素性や現場の把握はしてもらわなければならない。

「けど大丈夫なのか? 涼音ちゃん、見られながらの配信をするって

状況になると思うのだが……」

「ライブルームといっても、個室制度がある。V T u b e rをしていく人たちの多くは自分の世界が必要だから、そこはしっかり気遣ってくれるとは思うぞ」

「裕也、お前やけに詳しいな」

「……V T u b e rハマってたからなあ。すまん、現在進行形だわ」

「わ、私は兄さんが近くに居るなら大丈夫……だよ……」

「ああ、ほんとに可愛くて自慢の娘だわあ。健気過ぎてほつぺた落ちちやいそうだわ。裕也くん、娘とはいっ結婚するのかしら」

「け、結婚……ッ」

「いや、しませんよ！ 俺と涼音は兄妹なんですから」

「……そう、だよね」

奏さんの突拍子もない言葉に、俺は返す。するとなぜか涼音は落胆したように元気が無くなるが、どういうことだ。

そして親父と奏さん、二人して俺を憐れむように見るな。むず痒いだろうが。

「まあ、裕也くんは女心を理解できないということでは置いときましようか」

「んあつ、なんか勝手に置かれたんですけど」

「裕也もまだまだだ……。さすが童貞、息子として唯一の恥というもんだ」

「おいコラてめえ、もっぺん言ってみろや」

童貞バカにすんじゃねえぞ。性欲にまみれたモンスターと一緒にすんじゃねえ。

俺は彼女ができないんじゃない、作らないだけだ。……いや、欲しいと思うが出会いがないというか。

俺は誰に言ってるんだ、畜生。

「童貞でも、兄さんは素敵だよ……？」

「ンンンンンッ！ なんだこの気持ち、病みそうッ」

「ふふつ、本当に貴方たちのやり取りはいつ見ても飽きないわ。それはそうと、裕也くん。話は逸れたけど、土曜日の午前10時にその企

業元まで涼音と一緒に行ってくれるかしら」

「土曜日のその時間に、俺と涼音で挨拶と打ち合わせですか？」

「ええ、そうなのよお。土曜日ならこの人の知り合いさんが裕也くんの代わりに準備をしてくれるだろうし、あまり長い期間を置くのもさすがにお相手さんに申し訳ないから」

「別に構いませんよ、わかりました」

奏さんの言葉に、俺は頷いた。涼音も同じく大丈夫とだけ残し、その後は普段の雑談に戻って活気に溢れた。

なんだかんだ、この雰囲気が好きだ。しようもない会話で笑い合ったり、飽きがこない。

客が居ない家族水入らずの時間はあつという間で、その日の就寝時間になった。

お開きという事で涼音と一緒に部屋に戻る際、ドアを開ける時に声を掛けられる。

デジャヴ、だな。

「に、兄さん……！」

「……なんだ」

「わ、私は兄さんが童貞でも……大丈夫、だから……！ き、気にしないいでね……！」

「ああハアアアアンツ!! 童貞童貞って、貴方たちにはわからないでしょうねエ!! 言われる、側の、気持ちがあ!!」

妹に真正面から童貞であることのフォロワーをされた俺は、どこぞの議員みたく発狂しながらドアを開け閉じ籠った。

電気を付けることもなく、俺は布団にダイブした。そして身体を丸くして、悔し涙を流した。

クソ……別の世界線の俺は卒業してるのだろうか。だとしたらその世界の俺、百万回死んどけ。



日々は流れ、早くも土曜日。俺は既に準備を整えリビングにある椅子に座っていた。

「なあ、裕也……」

「なんだ、親父」

「お前、スーツ姿は良いと思うが髪型とそのサングラスはどうしたんだ……?」

多少、いや……かなり引き気味に親父が片手にマグカップを持ちながら問いてきた。

風呂上りにドライヤーで髪の毛を逆立たせ、ワックスで固定。少し生えていたヒゲを剃り、サングラスを装着していた。

「親父、あんたはわかってねえ。前は奏さんという大人の女性が行ったから企業も担当者も舐めなかったが、俺は向こうからすれば若者……つまり、ガキだ。だからこそ舐められないように、隙を見せないように見た目を取り繕ってんだよ」

「気にしすぎだろ!? てか傍から見れば他所の家に取り立てしに行くヤクザに見えるからやめとけ!」

「俺が舐められて涼音が安く見られたらどうすんじゃボケエ!!」
「つくづく阿保だなお前は!」

親父に考え直すように言われるが、俺は最も嫌いな言葉ランキングの第二位に『これだから若者は』が入る。

まあ本当に一部の人間に限る話だが、若いからってという理由だけで全てを決めつける奴らが嫌いだ。

故に、会社……もとい企業が相手だろうと舐められるような態度や姿をしてたらダメだ。

全ては自分の為に、なにより涼音の為に。

そうこう親父と対立していると、二階から準備を整えた涼音が降りてきた。

相変わらず綺麗に整っている茶髪のショートにサイドテール。いつ見ても眠そうなジト目に、幼さを残す顔立ち。

んん、素晴らしい。百点満点中、千点以上は見積もれる。

すると涼音はなにを思ったのか、スマホを取り出してその照準を俺に合わせて写真を撮った。

なぜ、撮った？

「兄さん、かつこいいい……」

「んあつ、ありがとうな。涼音も見違えるぐらい、可愛いじゃねえか。気合い入ってんな」

「ふえ……？ あ、ありがとう……ッ」

「おいイチャつくな、ヤーさん」

「誰がヤクザじゃゴラア!!」

「その言葉と行動じゃい!!」

「あらあら、朝から賑やかねえ。ふふっ」

同じくして二階から降りてきた奏さんは、俺と親父のやり取りを見て微笑んだ。

なるほど、涼音の可愛さは奏さん監修の元か。だとしても、素晴らしい。

そう考えていると親父は俺から離れて、奏さんの腹部に顔を埋めて抱きしめた。

「奏〜！ 裕也が朝から涼音ちゃんとイチャついてんだよお！ 俺たちもイチャつこう、なっ!!」

「うわあ、きつしよ……。お袋を生き返らせてコンクリート詰めして欲しいレベル」

「はいはい、よしよし」

「ふええええええん」

いい歳こいたおっさんが目の前で妻に甘える姿はエグイ。どれくらいエグイのかというと、ドロッドロのドブ色をしたスープぐらいに気持ちが悪い。

気付いたら俺は涼音の目と耳を両腕で塞いでいた。この光景、見てほしくない。汚れてしまう。

結局のところサングラスをするのは奏さんにも言われたので、仕方なく外すことに。

それから時間が少し経ち、頃合いを見て鍵を持ち車に乗車する。

ちなみに、親父の押し切りでマニュアルだ。

「兄さんの運転、久し振りかも……」

「そういえばそうだな。基本俺一人での行動だったし、誰かを助手席に座らせるっていうのは俺も久しぶりだな」

「なんだか、嬉しい……。ふふっ」

手で口元を隠して笑う姿は、本当に奏さんと似ている。涼音が嬉しいと感じるのなら、それも涼音なりの幸せ。

俺はシートベルトの確認をし、エンジンを掛けた。窓の外で見送る親父と奏さんに挨拶をし、出発した。

さあ、ここからが気合い。緊張はするが、しっかりしないとだな。

自宅から車を出してから、一時間が経過した。10時までには間に合わせればいいと奏さんから言われていたが、少し早出し過ぎたか。

奏さんと同じルートをカーナビで検索したはいいものの、二時間ちよつとで着く時間だった。

まあ、高速道路に乗ればそりや早く着くわな。

「涼音、今って何時ぐらいだ？」

「んっ、えつとね……。8時15分ぐらいかな……」

「おうふ、この調子じゃ早く着きそうだな。途中でパーキングに寄って朝飯と飲み物でも買うか」

車を走らせていると、無性に缶コーヒーを飲みたくなる。運転に限らず仕事をする前の缶コーヒーは美味しいよな。

ちなみに俺は、ブラック派だ。

「朝ご飯、なに食べようかな……。兄さんはお出掛けとかした先でなにを食べたりするの……？」

「その日によるけど、基本的にはおにぎりだな。シンプルに鮭もいいが、一番好きなのは昆布だな。涼音は？」

「私はパンが好きだから、メロンパンかな……。でも兄さんの好みが昆布は少し意外……」

「そんなに意外か？」

「うん……。てつきり、シーチキンマヨかなって」

「あ、それは邪道」

俺と涼音は何気ない会話で笑い合う。涼音のパソコンを買うときに連絡した知り合いが、シーチキンマヨしか勝たんとほざいていた記憶が鮮明に蘇る。

おにぎりの具材といえば鮭や昆布の他に、梅とかならわかる。しかしご飯にマヨネーズ、しかもそこにシーチキンをぶち込むのは理解しがたいものがある。

すまないな、シーチキンマヨ派。そこだけは譲らねえ。

「あつ、もうすぐパーキングみたい……」

「了解、じゃあそこで休憩を挟もう」

運転する以上、前方注意しなくてはならない為に標識を見逃したり通り過ぎてしまうことがある。

しかし涼音はこうやって見逃したかもしれないと保険をかけて伝えてくれるので、地味に助かる。

身内だろうと乗せている以上、命大切に安全運転ってな。

涼音の言う通りパーキングが近付いてきて、俺は左にウインカーを出して中に入っていく。

休日というのもあってパーキングは混んでいるようで、空いている駐車スペースを探すのに苦労した。

しかしそれもすぐに見つかり、俺は周囲に注意を払いながらバックして駐車した。

「すまねえ、ちよつと歩かないとダメだわ」

「ううん、大丈夫……。運転ありがとう、兄さん」

さりげないその一言で運転のしがいがあるわ、マジで。エンジンを止めて、俺と涼音はシートベルトを解除した。

鍵を外して財布などの貴重品類を手に取り、外に出た。

「空気がうめえ。それも休日と相まって余計にそう思えるわ」

「んっ、本当に美味しい……。それに、兄さんとだから余計に……」

「んあつ？」

「ツ！ な、なんでもない……！」

最後の方が聞き取れなかった為に聞き返すが、涼音は慌てた様子で口を両手で塞ぐ。

なんなんだ、一体。俺は空気を味わい、涼音の反応に疑問を抱きながらも鍵を掛けてコンビニ二へと向かう。

「に、兄さん……」

「ああ、悪い。ほらよ」

鍵を閉めて先に行こうとした俺に、涼音が小走りで近付く。そして俺の腕の袖を掴んだ。

身内ではなんともないが、やはり人が多い場所は慣れないか。前も一緒に出掛けた時、こういう状況になった。

しかし慣れないものを無理に突き放したところで改善されるわけもないので、ここはさすがにリードする。

だが本当に素朴な疑問なのだが、この状態になった涼音はやけにピッタリとくつつくんだよな。

歩きづらいというのが本音だが、密着する必要性があるのか？

視線が怖いっていうのなら、理解はできるが。

「さてと、買うもんはカゴに入れていけよ」

「うん……」

コンビニに入って、俺はカゴを手に持つ。最初に向かうのはドリンク売り場にある缶コーヒー。

そして定番で安定の、BOSSENのブラックだ。俺に続いて涼音は隣のドアを開けて、ミルクティーを手に取りカゴへ入れた。

苦いのが好きな俺と甘いのが好きな涼音、正反対だな。

次に俺はおにぎりを買いに向かい、涼音は車で言ってた通りメロンパンを持ってきた。

好物なのか、少しうれしそうな表情をする。くそ、一個と言わず十個でも構わないんだぞ、俺は。

他にも色々菓子などを放り込み、そのままレジへ。パーキングエリアというのもあり普通のコンビニよりも混んでいる。

その間も俺の裾を掴んで密着している涼音だが、数分待つてようやく俺たちの番が来た。

ベテラン店員なのか、会計が手際よく進められていく。合計金額が出たところで財布を取り出すが、その時に涼音がクイクイっと裾を引っ張って合図をしてきた。

「んあ？」

「わ、私も少し……出すよ……？？」

「はうあああああッ!!」

「え？」

涼音に気を取られていた時、店員から甘い声が出た。あまりにも突

拍子も無い事だったから視線を店員に向けるが、真顔だった。

一度に情報が多すぎるせいで多少混乱するだろうが……。

「別に大丈夫だ、気持ちだけ受け取っておく。代わりに帰りそのお金でコーヒーを奢ってくれ。なっ?」

「う、うん……。わかった……!」

「ンガワイイイイイイツ!!」

「いや、やっぱ貴方から出てますよね。その声」

「いえ、違います。お客様を前にそんな失礼なことしません」

「……涼音、この店員さんに手を振ってあげな」

財布から千円札を取り出して受け皿に置く中、小声で涼音に指示を出した。その通りに涼音は俺の後ろで小さく手を店員に振った瞬間、店員の表情が気持ち悪い程に歪んだのを確認した。

「すみません私の負けですどうかこれからもお幸せに過ごしてください
いごちそうさまでした」

早口で負けを認めた店員はスムーズに処理を行い、早口で言いながらお釣りを渡してきた。

レジ袋を手に持ち、俺は涼音にグッズの合図を出した。まあ涼音はなんのことか、わからないみたいだったが。

それからは少し休憩を挟んだ後、俺は運転を再開して目的地へ。隣で小さい口でメロンパンを頬張る涼音という癒しを堪能していたら、無事に到着した。

「意外にもデカいな、会社……。奏さんは此処に一人で挑んだのかよ」
「うう……」

V T u b e r の活動を支援することを目的とした「ミライバ株式会社」は想像よりも大きかった。

何十階建てというビルに広い駐車場。V T u b e r の活動支援をメインにした会社にしては立派過ぎる。

まあそれ以外にも活動はしていると思うが……。

俺はとりあえず奏さんの情報と涼音がDMでやり取りをした内容通りにビルの中に入っていく。

するとフロントがすぐに見えて、受付をすることに。

「あ、すいません」

「はい、ミライバへようこそ！ ご用件をお伺い……。ひい!?」
「えっ」

「あ、あの……！ も、もしかしてミライバなにかしてしまいましたでしょうか……!!」

「ちよつと待ってくれ！」

挨拶をしただけなのに、この動揺。女性のフロント担当者が涙目で許しを求めてくる。

さっきのコンビニ店員もそうだが、なぜこうも癖の強い人を相手にしないといけないのか。

俺は今にも叫びそうな女性にストップを掛けて、後ろに隠れている涼音を引っ張り出して説明をした。

「10時にこのミライバで打ち合わせを予定している神代涼音と、その保護者代表である神代裕也です！ 今回の打ち合わせをしてくれる担当者、瀬川玲奈さんに知らせてくれるとわかると思います！」

なぜか女性のペースに合わせて俺も早口で説明をする。無理やり引っ張り出した涼音からは可愛らしく唸る声が聞こえる。

すまない、こうでもしないと兄が通報されかねないからな。この場だけでも許してくれ。

こんなに怖がられるって、どんだけ人相ヤバいんだ俺は。しばらくすると涙声ながらも担当者に連絡を入れてくれたそうで、やがて奥から今回の話し合いをする瀬川玲奈さんが見えた。

ひとまず、通報は免れた……。これがもしサングラスをしていたとあれば間違いなく詰んでいた。

この瞬間だけ、親父の反対は正しかったんだなと思った。

#7 Dream Life ①

無事にミライバ株式会社に着き、働く全マネージャーの統括役の瀬川玲奈さんと合流した。

フロントで互いに軽い挨拶を交わすと、瀬川さんは俺たちを引いてビル三階までエレベーターを通して案内してくれた。

その道中で周囲を見渡していたが、壁から床にかけて全てが綺麗で、最近建築されたんじゃないかと疑ってしまう。

俺でさえ少し緊張する中、涼音は特に緊張していた。もはや俺の袖を掴んでは、下を俯いてしまっている程に。

しばらく歩いた後、一室のドアの前で瀬川さんが止まり、この中で話すと説明してくれた。

俺は了承の返事を返して、瀬川さんに続いて涼音と共にいった。

「フロントの子が動揺しちゃって本当にごめんなさい！　ともかく此処まで来るのに疲れただろうから、ソファアに座っちゃってください」

「わかりました。涼音、緊張するのはわかるが本命はお前の用事だ。いつまでも隠れてないで、ちゃんとしな」

「う、うん……」

「あははは！　まあそう気遣わなくて大丈夫ですよ。あまり深く考えなくても疲れちゃうだけ、リラックスリラックス！」

瀬川さんの指示通り、俺は涼音と並んでソファアに座った。もじもじと落ち着かない様子で辺りを見渡す涼音は警戒してる猫のようだった。

しかしそんな涼音を責めることもせず、瀬川さんは室内に備えられていたポッドで俺にはブラックコーヒーを、涼音には紅茶を出してくれた。

「……ピンポイントで好みが合ってますね」

「そう？ 見た目で決めたようなもんですよ、あはは。涼音ちゃんはどうにも甘いのが好きそうだし、“お父様”方はブラックが好きそうみたいですから。好みが合つててよかったです、ほんとに」

「ぶふツ!!」

「うわあ!?! も、もしかして熱過ぎましたか!?!」

「に、兄さん……!」

「ゲホツ、ゴホツ! い、いえ……! その、なにか勘違いしてるみたいですが、俺……兄ですツ」

本当にどう見れば俺が親父に見えるのか。俺の言葉に、瀬川さんは嘘でしょ?と言わんばかりの表情をする。

それに対して涼音も俺が嘔き出した意味を理解したのか、なんともいえない表情になる。

「そ、そうでしたか……。いえ、本当にすみません。あまりにも大人びた顔立ちに落ち着いた雰囲気でしたから……。あの、ちなみにご年齢の方は……?」

「21歳です」

「ふあ!?!」

「せ、瀬川さんが驚くのも無理は無いと思う、よ……。私から見ても、兄さんは大人だから……」

いや、成人してるから大人では間違いないんだけどな。ただ21歳で驚かれるって、どんだけ歳食つてると思われたんだよマジで。

なんだ、ほうれい線か? 老けて見えるってか?

「ちなみに瀬川さんは俺が何歳だと思つてたんですか」

「えつと、三十代前半……?」

「その年齢から涼音の歳を引いてみてくださいよ。明らかにおかしいってことがわかるんで。涼音に目を付けたのが瀬川さんなら、高校生ということもあつて涼音の年齢はわかりますよね?」

「ほええ……た、確かに……」

見た感じではしっかりしてるように見えたが、此処で俺は確信を失ってしまう。ああ、アホの子だなあ……と。

ただし年上であることは間違いないので、心の中で留めておく。

「と、とりあえず改めて！ 私は瀬川玲奈、マネージャーの統括役をしています！ 年齢は32歳の未だに独身です！」

おく、最後の独身発言が無ければ完璧だったんだよなあ。

「神代裕也、先ほども言いましたが21歳です。この度は話し合いの場を設けてくださりありがとうございます」

「神代涼音……です」

手を差し出して、瀬川さんと握手する。涼音も続いて握手を交わし、座り込む。

こういう何気ない行動も、涼音にとっては大きな一歩。誰かと対面し、親睦を深める……。

これは間違いなくお前の為にもなる、頑張れ。

「さて、早速ですが本題に移りたいと思います。今回、涼音さんに声を掛けさせて頂いたのは私の独断によるものです。たまたまVTuberの配信を確認して周っていたら、目に止まったという流れです。裕也さんは涼音さんのVTuber活動をご覧になったことはありますか？」

「いえ、つい最近VTuberをしていると本人から聞かされただけで実際には見たことが無いです。涼音の活動に何か問題でも？」

「いえいえ、とんでもない！ 寧ろその逆で、涼音さんの配信スタイルが絶妙に素晴らしいです。雑談に偏るわけでもなく、ゲームに偏るわけでもなくといった感じです。過去のアーカイブも全部ではありませんが、時間が許す限り見ました。評価の最高が10としたら、余裕で9は行くぐらいにバランスがいいんです」

「そんなにいいのか……。よかつたじゃねえか、涼音」

「う、うん……。でも、照れるよ……」

「それと評価すべきは配信スタイルに限らず、個人勢でありながらも15万人に到達する才能です。VTuberは言うなればネットの宝くじとも言える立場で、非常に上がり下がりが激しいんですよね。その中で涼音さんは自分でアバターを制作し、多少動かす程度の技術までも独学で成されたと聞いています」

瀬川さんの口から教えられる、VTuberとしての涼音。それは

俺が知らないもう一人の涼音だった。

V T u b e r は始めるまでが大変であると周りが当然のように知っている程度の知識で理解していたつもりだが、涼音が成している一つ一つの技術は賛美するに値すると丁寧に教えられた。

独学で全てを構成し、個人勢での成り上がり。俺は瀬川さんの話で知る涼音の姿に引き込まれた。

「涼音、お前すげえな……」

「そ、そんなことない……」

「そんなことないって、お前なあ……」

自分は大きく頑張っていないと言わんばかりに自信を持ってない涼音に、俺は頭をわしやわしやと撫でた。

「高校生という若さで、持っている技術が凄いです。裕也さんが思っているように、自信を持って大丈夫です。私が保障します。そこで涼音さんの技術を活かし、我が社でV T u b e rとしてより活躍して頂きたいと思い、スカウトさせて頂きました」

「あ、ありがとうございます……」

「趣味の範囲でV T u b e r活動していた本人にとって、企業に所属するという決心は意味のあるものだ和家人で話し合っただけで決断しました。ただ以前に母親の方が先行して顔を出した際、説明されたと思いますが涼音はまだ高校生……。学生としての本分を優先にしたいと思ってるので、そちらの都合で動けることが少ないと思いますが、そちらの方はどうでしょうか」

「はい、その件に関しては全く問題はありません。これまで通りに活動して頂ければ大丈夫です。ただお母様から言っていては、配信専用のライブラムで活動して頂きたいというのがこちらの出す条件になります」

「わ、私は大丈夫です……。V T u b e r活動は、好きなので……。ただ此処に来るにしても兄さんの送迎が必要な……。その……」

「んあつ？俺は別に構わないぞ。涼音がやりたいことに俺は全力で協力する」

此処に来るまで、確かに二時間は掛かる。更に言えば、高速代も乗っかる為、きつとそこを考慮して涼音は申し訳ないと思うのだろう。

まったく、逆に此処まで来て『送迎は厳しいので無理です』なんて言うわけないだろうが。

一度やると決めた事に対しては結果がどうであれ突っ切る。挫折した時に考えて無理と判断したなら引けばいい。

俺の言葉に涼音は少し口元を綻ばせ、俺のズボンをギュッと握りしめた。

「俺の意思も、本人の意思も固まっています。色々と不備や不便を掛けるかもしれませんが、どうか涼音をよろしくお願いします」

「よ、よろしくお願いします……！」

軽く頭を下げる俺に続いて、涼音も一緒に頭を下げる。そんな俺たちを見て、瀬川さんは小さく笑いを溢す。

「良いお兄さんを持って幸せですね、涼音さん」

「ツ！ わ、私の大切な……自慢の、兄さんです……」

嬉しそうに言うんじゃねえよ、照れるだろうが……。

「では次に、涼音さんが所属する先についてです。我が社では二つのライバーのグループがあるのですが、涼音さんには「DreamLife」に所属してもらいます」

「そのDreamLifeはどういったグループなんですか？」

「涼音さんと同じように、成人に満たない学生で構成されたグループです。もう一つは主に成人で構成された「SmileRoad」があります。後者のグループとの交流は最初なかなか無いかもしれませんが、DreamLifeの方々とは交流が多いかもしれません。男女の比率は3：7と言った感じですね」

「噂には聞いていましたが、やはり女性のライバーの方が需要が高いんですかね」

「んー、一概には言えませんが受けだけを見ればそうなのかもしれませんね。ただ男性ライバーの方々にはゲームの分野でかなり活躍しており、そのプレイを見たいという視聴者が多い感じですよ。もちろん

ん、雑談も見ていて面白いですよ」

闇とは言わないが、男性ライバーよりも女性ライバーが多いのは紛れもない事実。

現にアイドル系VTubeも数多く存在してたりと、男性ライバーが優先してオススメに出てくることは珍しい。

こういった風潮も変わっていったらいいのだがなあ……。

「今日の話し合いでしなければならぬのは正式な契約を結ぶことなので、先輩となるライバーの方々と会うのは次回にしたいと思います。涼音さんの気持ちの整理時間も必要だと思えますし」

「気遣ってくださり、ありがとうございます……」

「いえいえ、私の方からスカウトさせて頂いた以上は当然です。さて、次に裕也さんにマネージャーをして頂くという話に移りますが——」

ついに俺の番……と、より集中しようとした時。瀬川さんの話を遮るかのように部屋のドアが勢いよく開いた。

ガチャ、という音よりもドオオオオオオッ！と音の方が似合うのではないかと思う程に勢いよく開いたドアの方を注目する。

その先に居たのは赤髪の少年と、少女だった。

「新人ライバーが居るのは此処かああああああ!!」

「ちよつとお兄ちゃん!? いきなりはまずいつて!!」

派手な登場と共に叫び散らかす少年と、それを必死に止める少女の構図がそこにはあった。

だが彼らの奇抜な登場よりも、物音と叫びによるビックリで俺に抱き着いて泣いている涼音の姿が目をついた。

……このガキ、よくも涼音をツ。

「——ちよつと静かにしてくれねえか?」

「ひい……!?!」

「す、すみませんでした……」

歯を食いしばり、入ってきた二人に注意する。お兄ちゃんという発

言から俺らと同じ兄妹だろう。妹の方は萎縮してしまい、兄の方は静かになる。

分かればいい、二度とするな。

俺は未だに身体を震わせて落ち着きを取り戻せない涼音の背中を擦り続けた。

#8 Dream Life ②

「……涼音、大丈夫か？」

「う、うん……。ごめんね、兄さん……」

いきなり知らない人が押しかけて来たことによるビックリで、軽い動悸を起こしてしまった私はしばらく落ち着くことができなかった。

でも私が落ち着くまで兄さんは背中を擦って、見守ってくれた。数分と落ち着くのに掛かってしまった後、私は兄さんから離れる。

一方で、瀬川さんは押しかけて来た二人を引き連れて部屋を出ていき、廊下で説教をしている。

だからこの場で、私は兄さんと二人きりだった。

「しかし、俺も少し大人げないことをしてしまった。いきなり押しかけて来たとはいえ、圧のある返しをってしまった……。俺の悪い癖だなあ」

「その時……兄さん怒ってた……？」

「少しだけな。そりゃ涼音を泣かせることをしたんだ、兄として少しキレることは当たり前だろ」

さりげないというよりもそれが兄さんにとって普通の事かもしれないけど、私はその言葉を聞いて自惚れてしまった。

私の為に、怒ってくれてたと勘違いをしてしまったから。けどそれがもし私の勘違いで、自惚れだとしても嬉しいと感じてしまった。

少し待機するようにと瀬川さんに言われた以上、今は戻ってくるのを待つことしかできない。

兄さんは隣でポケットを探り、ミルクのキャンディーを取り出し、袋を開封して口に放り込む。

「んあ、なんだよ」

「ううん、なんでもないよ……」

「そうか。まだあるけど、いるか？」

「うん、欲しい……」

私が欲しがっているように見えたのか、兄さんは聞いてくる。本当は兄さんが可愛いから、気になったただけなんだけどね。

もう一つを取り出して、それを受け取る。私は貰ったミルクのキャンディーを、兄さんと同じように口へ入れる。

じんわりと口の中に広がる甘味。凄く、幸せな気分になれる。それも兄さんと二人きりだから、余計に。

そもそも兄さんは、色々ずるい所がある。性格や言葉遣いは周りの男性と比べると荒いし、怖いところもある。

けど、食べるモノとかもそうだけど女子みたいなどころがある。今食べているミルクのキャンディーは特に。

「でも、なんでいきなり押しかけてきたんだろうね……」

「まあ冷静になって考えてみると、涼音が目的だったと思う。新人V Tuberは何処だという発言するからに、後輩ができるという嬉しさから押しかけに来たって所だろ」

「なんでそう思うの……？」

「知らん、ただの勘。そんな気がするってやつだな。深く言うと、嬉しさを感ぜさせる声のトーンとテンションが特にそんな気がするって部分だ」

キャンディーをころころと口の中で転がしながら、兄さんはちゃんと説明してくれる。

……私かもしれない人たちの立場で、後輩ができるってなったら確かに嬉しくは思う。

いきなり押しかけたりは、しないけど……。

「それにしても暇だな。……涼音のV Tuberの名前ってなんだ？」

「えっ……!？」

「ちよつと今この時間で見てみるから、教えてくれ」

「えつと、その……あの……」

退屈を凌ぐ為に、私がV Tuberをしている動画を見たいと言い

出す兄さんに困惑する。

なんで本人の前で見ようとするのか……。そもそも、直接的に聞いてくる素直な所は心臓に悪いよ……。

けど、兄さんに助けられてばかりだから教えない道理は無い。恥ずかしいけど、私はスマホを取り出して実際に見せようとした。

——その時。

「失礼します。お二人の説教が終わりましたので、話を続けようと思います」

瀬川さんが戻ってきてくれた。凄くいいタイミング、兄さんには悪いけど、なんかすごくいいいタイミング……！

瀬川さんが戻ってきたことにリラックスしていた兄さんも背筋を伸ばして返事を返した。

けど知らない二人も瀬川さんの後ろで並んでいた。

「改めて、オレはDream Life所属VTuberの赤城翔太です。この度は本当にすみませんでした……。ただ、Dream Lifeの中ではオレたちが一番下で後輩が居なかつたんで、後輩ができるといふ嬉しきで感極まり調子に乗ってしまいました。本当に、すみませんでした……」

意外にも、兄さんの推測は正しかった。それ故に、翔太さんが自己紹介と共に何故この行為に及んだのかを説明した。

……瀬川さんに凄く怒られたのかな。顔は入ってきたときよりもゲツソリしていて、生気を感じられない。

「お兄ちゃんに続いて私からも本当にすみません……。Dream Life所属VTuberの赤城恵果と言います。以後、瀬川さんとは別にお兄ちゃんにもっと厳しく言っておくので、この場だけでも許してあげてくれると幸いです」

姉妹揃って深々と頭を下げてる翔太さんと恵果さん。瀬川さんも最後に軽く頭を下げ、少し空気が重かった。

すると兄さんは立ち上がり、なんと同じように頭を下げた。

「いえ、こちらもすみませんでした。突如として入ってきたこと俺は別によかったのですが、如何せん妹の涼音が騒々しい場面が得意では

なく動悸を起こしてしまっていたので、圧を掛けるように返してしまいました。大人げない自分の軽率な言動、すみませんでした」

こういうところが、兄さんが大人だなと思える所かもしれない。他人の非だけでなく、自分の非も含めて厳しく取り繕う。

兄さんの持つ素直がそうさせている一部もあるのだと思う。私も立ち上がり、過剰に驚いてしまったことを謝罪した。

本当に私は、弱いな……。

「瀬川さん、よければその二人もこの場に居て貰って、俺たちで話し合いをしませんか？」

「えっ？ 私は別に構いませんが、後ろの二人と涼音さんがどう思うか……」

「翔太くんに、恵果ちゃんだっけか。俺と瀬川さんは二人で話をするから、その間だけでも涼音と親睦を深めてあげてくれないか？ こいつは内気な性格でさつきも言ったように騒々しい場所が苦手なぐら이다。けどDream Lifeに所属する以上後輩の立場になるし、今のうちに色んなことを教えてあげて欲しいんだ」

「……オレたちのこと、もう怒ってないんすか」

「さつきも言ったように俺も大人げないことをした。つまり、片方の非ではなく両方の非だ。それつまり互いに悪かったということだ。それにこれから世話になる先輩たちと仲良くなるのは、涼音本人の為にもなるからな。……頑張れるよな？ 涼音」

優しく微笑んで、そう聞いてくる兄さん。きつと私の為と思って、提案してくれたものだ。

翔太さんに、恵果さん。その二人の先輩と今兄さんが居る場で仲良くなれば、もし一人で動くとなった時に頼れる人になるかもしれない。

それと、出来たら普通に友達に……。

「わ、私も翔太さんや、恵果さんのこと……し、知りたい……！ 色んなことを、教えて欲しいです……！」

いつまでも兄さんに頼りっぱなしじゃ、ダメだ。私も一人で誰かと一緒になることを頑張らないといけない。

私の言葉に、瀬川さんはそれならばと了承してくれた。翔太さんも
恵果さんも、喜んでと言ってくれた。

ありがとうと返した時、何故か翔太さんが顔を少し赤くしていたけ
どすぐに恵果さんに叩かれていた。

なんでだろう……？

私と先輩の二人はもう一つ空いている奥のソファで座り、VTU
berの話題で話を始めた。

#9 Dream Life ③

部屋の窓際にあるソファで、涼音たちが雑談を始めた頃。俺は瀬川さんと改めて話し合いの続きを再開した。

涼音とはミライブでの立ち位置が全然違う為、マネージャーとしての心得や規約内容を説明してもらった。

まずマネージャーとしての立ち位置として。どうやら涼音以外にもVTuberのマネージャーを担当する場合があるそうだ。

基本的には一人のマネージャーに三人のVTuberが配置されるので、主にスケジュール管理や体調管理、定期的なカウンセリングを行わなければいけない。

今現在、涼音と雑談してくれている翔太くんや恵果ちゃんも違うマネージャーの方が担当しているとのこと。

ちなみに今回の一件はお咎め無しということで、俺からは報告しなくていいとだけ言つといた。

ましてやマネージャーの立ち位置を聞いた後だと、余計にこの一件を伝えてしまえばその方が心労になりかねない。

同情してしまいかねない、担当のマネージャーさんに。

「ここだけの話ですが、VTuberをして下さる方々は非常に今のご時世多いので不足という状況にはならないのですが、逆に担当するマネージャーが不足しているので未経験でも裕也さんみたいな人の手を借りたい気持ちではあつたんです」

「まあ俺としても、涼音に言われなければ断っていました。しかしマネージャーってそんなに募集掛けても来ないものなんですか?」

「んー、実は前まで募集は掛けていたんですよ。けどVTuberも然りですが、特にマネージャーは審査が厳しいんです。というのも先ほども言いましたが、VTuber業界は男性よりも比較的に女性の

方々多いので、言葉はあれですがお近づきになりたいという理由だけで応募してくる方々が多いので……」

苦い表情で言う瀬川さんに、俺は愛想笑いで返す。しかし瀬川さんが言うのは決して男性に対する偏見ではない。

ミライバ以外のVTuberを支援する会社では、過去にそういった事件が起きている。

それ以外にもVTuberの素性を決して漏らさない、明かさなないようにマネージャーをするのであれば嚴重注意が必須であるし、なによりプライバシー保護を怠ってはならない。

過去の事件として、ある会社に所属したVTuberの一人が前世と言われるVTuberをする前の素性が特定され、炎上。

三日も経たずに契約解除となった例も史実としてある。まあ前世の頃に色んな女性に手を出していたというのもあつて、炎上に繋がり終了というのは致し方ないと言えるがな。

兎にも角にも、VTuberもマネージャーも互いに気を付けるべきであるのは間違いない。

「なので今は私含め上層部の方々が目に止まったVTuberや、マネージャーとしての質を秘めていると感じた人々に直接連絡を差し上げる形で決定したりと対策をしているところですよ。今回は涼音さんに目を掛けた際、涼音さん本人からお兄さんである裕也さんがマネージャーじゃないとつてという話を頂けたので、普段よりは少し楽だったんですよ。あはは」

「逆に、妹の条件とはいえ俺を信じられる話には繋がらないと思えますけど。そこはどうなんですか？」

「話し合いを此処までしてみても、裕也さんの言葉や態度を見ていましたが信用に値すると見受けられました。それに、裕也さんって女性を襲う勇気がないと思います」

おいおいおい、最後に喧嘩売られてる感じするんだが。いやまあ勇気あるないの以前にそんなことはしないが、瀬川さんって唐突にドイツってくるよな。

おつ、なんだ？ 舐められてるのか？

「この業界も色々大変なんですね。特に取締役となれば、普通よりも倍以上に苦勞してますよね」

「あはは、最初は上層部の圧とストレスとかで倒れたりはしましたが慣れましたね。それに、今ではやりがいを感じてます。確かに大変ですけど、凄く楽しいんです。色んなV T u b e rの方々が居て、色々な配信を見たり。近くで大好きなものを目で見て感じられるって本当に嬉しいんです」

不覚にも、ドキツとしてしまった。大変で、苦勞する一方。それでも大好きなモノが近くにあるだけで、こんなにも純粋な笑顔で居られるなんて。

やはり働くにしても自分が好きなモノに限るとはこういうことを言うんだらう。

「俺も種類は違いますが実家がラーメン屋で、最初は興味も無くてただただ大変そうだなって思っていました。けどある日、厨房で親父が必死に身体を動かして客の為にラーメンを作る姿を見て以来、大変というイメージに付け加え、カッコいいと思いました」

「そういえば前に奥様方が来られた時にもラーメン屋を経営していると言っていましたね。裕也くんのこと、自慢げに話していききましたよ。なんでもしつかりしている子で、自分を偽らないとも言っていました」

「それは奏……いえ、『お袋』が過大評価しているだけです。周りが思う程、俺はしつかりできている柄じゃないんで。それで親父が働く現場を目の当たりにした後、自分で調べて勝手に厨房の材料を使つて作りました。自分で一から作ったラーメン、親父の足元には到底及ばない駄作だったけど、自分で完成させた後の一品はやりがいを感じられました」

「成功や失敗関係なしに、自分で考えて出来たものに対しては嬉しさを感じますからね。その気持ち、種類は違えどわかります」

「ありがとうございます。けどその後、二階から下りてきた親父に見つかって、ああ……これは怒られるって思いました。でも親父は怒らなかつたんです。それどころか、急に頭を撫でてきて褒めてくれまし

た」

鮮明に蘇る、当時の記憶。まだ俺がガキで、親父と実母だったお袋の三人で暮らしていた頃の記憶。

今するべき話とは違うが、なぜか聞いて欲しくなった。それは自分の好きなことに本気で向かい合える瀬川さんに感化されたからなのかはわからないが……。

親父は俺を叱らず、逆に褒めてくれた。しかも俺の作ったラーメンを、食べてくれた。

美味しいと言ってくれた挙句、スープまでも飲み干した。けど俺は知っていた。

——味見した時、クソ不味かったことを。

「不味いはずなのに、親父は美味しいと言って完食。嬉しさを感じると共に、俺は親父にあらうことか罵声を浴びせました。不味いはずなのに、お世辞を言わないくれと。嬉しかった反面、親父にマズイものを食べて美味しいと言わせてしまった自分に対する非で出てきた言葉でした」

「素直になれなかった、ということですかね」

「ええ、そうです。でも俺の罵声に対して親父はしばらく黙り込みましたが、やがて同じように頭を撫で言いました。——息子が頑張って作ったラーメンが不味いわけがないと」

親父が客に提供しているラーメンに似せた。けどそれは似せているだけで、味が一緒なわけがなかった。

それでも親父は、褒めてくれた。その一言が、親父の背中を追いかけるきっかけになったんだと思う。

それから同じように二階から下りてきたお袋に、親父は自慢げに俺がラーメンをこっそり作っていたことを言った。

お袋は自分も食べたいと言ってくれたが、待っていて欲しいと俺は言った。

それから仕事終わりで客が居ない厨房で、親父に教わりながらラーメンを作った。

麺の柔らかさの調整、スープの作り方。色んなことを教わり、覚え

てきたところで親父は客が居る中で俺に作れと言ってきた。

「二カ月ぐらいだったと思います。親父が客のいる中で俺を呼び、厨房に立たせてくれたのは。親父の息子ということもあって常連の客たちからは期待の眼差しがありました。けど親父は俺の背中を擦ったあと、少し力を込めて叩きました」

『——お前ならできる、失敗を恐れるな』

「親父のその言葉に、俺は教わった通りに作業を始めました。期待の眼差しに晒される中で、一つ一つに神経を集中させ、緊張を乗り越えて完成させました。それは俺が隠れて作ったラーメンのリメイク版……。完成したラーメンを、食べたいと言ってくれた客の一人に出しました」

「結果はどうだったんですか?」

「美味しい、でも親父には劣るとハッキリ言われました。けど、不思議にも落ち込んだりはしませんでした。なぜなら客が、笑顔でそう言ってくれたから。親父に教わって、自分で作って。完成したラーメンを食べてもらい、笑顔を受け取った。そのとき、本当の意味でやりがいを感じ、本気で喜びました」

ガキだった頃に感じた本気の喜び、達成感。そこからは当たり前のように親父の手伝いでラーメンを作ったり、客との交流が増えたりして満足な充実を送った。

それから更に日々が流れ、自信が付いた頃。前に食べたいと言ってくれたお袋の為に閉店時間後に作っていた頃。

親父が慌ただしく降りてきて、悲痛な表情で言った。

『——溜実が、死んだ』

その部分は瀬川さんには話さなかった。しかし鮮明に蘇る記憶の中で、俺はどうやら浸り過ぎたようだ。

まさにそれは自爆。記憶に残る残影に、涙腺が緩み涙が頬に伝い一

り、話し合いはそこで終わりとなった。

それから席を立ちあがり、涼音の様子を伺いに行った。

「あつ、兄さん……。もう、終わったの……。？」

「……。ああ。涼音の方は、結構馴染めてるようだな」

「神代の兄貴、お疲れ様です！」

「おい、なんだその呼び方は」

「涼音ちゃんから色々裕也さんの話を聞いていたら、お兄ちゃんは
どうやら尊敬する人物と捉えちゃったみたいでこう呼ぶようにした
みたいです」

「俺の話をする前に自分の話をしないとダメだろ、涼音」

「えへへ……。でも、ちゃんと他にも話したよ……。？」

まあとりあえず、親睦を深めることに上手くいったなら良い傾向に
変わりはない。

俺はそんな涼音の頭に手を置いて、優しく撫でた。

「えっと、急にどうしたの……。？」

「……。いや、特に深い意味はない。ただ、これからは大変になりそうだ
なって思ってるだけだ」

「う、うん……」

「——頑張ろうな、一緒に」

もう、後悔はしない。現在の今を大切に、一つ一つを満足できるよ
うに生きる。

俺の言葉に涼音は小さく頷き、照れていた。さすがに誰かが居る場
所で撫でるのはダメだったか。

けどまあ、これも一つの一部だから許せ。

#10VTuberで届けたいロックンロール【赤城翔太】

オレは赤城翔太、齢十九歳で職業VTuberをしている。主に活動主旨は音楽をメインにしているが、VTuberをする前は両親に否定される毎日だった。

高校卒業後、コンビニでバイトをしながらプロの歌手を目指していたが、自分でも甘くない世界であると自覚はしていた。

それでも一度は叶えたいと本気で思えた夢だった。しかし将来性の無い夢を、両親はバカにしてきた。

故に、コンビニで働いていたとはいえ音楽以外には使わなかった金が溜まっていた為に、俺は両親と対立したまま家を出た。

窮屈で息子の夢を嘲笑う場所なんか居てたまるかと、そう思いながら。

だが家出はしたものの、未成年で家を借りるには親の名義が必要だったこともあり、しばらく路上生活をした。

金はあるのに、路上生活。おかしな話だろ？

でも別に辛くはなかった。一人の時間が増え、更に言えば許可の出ている場所で路上ライブもできた。

培ってきたギターの技術、そして歌。それがオレに残された唯一の武器であり、自信だった。

家出をしてから一週間経ったある日。ポケットに入れていたスマホが鳴り、オレは取り出して画面を確認する。

画面の表示には、『クソ親父』と書かれた文字が浮かび上がっていた。

オレの夢を嘲笑い、否定的な言葉を浴びせてきた片割れ。ここ数日とこのように掛かってきたが、無視をしていた。

だがオレは、少し出過ぎた行動をしてしまったかもしれないという気持ちから、一度だけでも出てやるかと思ひ応答のボタンを押した。

『……なんだよ』

『翔太か!? ああ、よかった……。今、話を聞いてくれるか?』

『悪いけど長くは話したくない』

『少しでもいい、ありがとう』

オレはてつきり、何処に居るのかとかで怒られるかと思つた。しかし通話越しに聞こえる父親の声は、安堵したものだった。

その隣ではオレと繋がったことを知つたのか、母親が泣いている声が聞こえてきた。

それでもオレは、この人らが言つた言葉の数々を忘れることができず、許せずにいた。

しかし親父の言いたいことはこうだった。オレが家出をした後、自分たちの考えを改めた。

まさか家出をするとは思わなかつたようで、自分たちに非があると家出した後の話し合いで気付いたそうだ。

母親はオレが居なくなつた後に体調を崩し、父親の方も同じように気が気でなかつたようだ。

妹の恵果も、相当に怒っていたらしい。オレが家出をした理由に両親が絡んでいることを。

……8割方、恵果に言われなかつたら気付けなかつたんじゃないのか、オレの両親は。

——ただ、それでも。

『親父、悪いけどオレは帰る気ないぜ。もし本当に反省してるなら一人暮らしをする為に家を借りて欲しい。オレは自分だけの力で夢に近づくと、それ以外は頼らないようにすると約束はする』

『もう一度、考え直してくれないか……?』

『……親父がオレの立場で、自分の好きなものを否定された時、そいつをその場で許せるか?』

オレの言葉に、親父は黙り込む。子供だろうと大人だろうと、自分の好きなことに口出しされていい気持ちにはならない。

渋々といった形で、後に親父は裏で母親と話し合い、オレの一人暮らしを許可してくれた。

それから半年後。一人暮らしも音楽活動も順調で、俺は何気なく自分で録画した弾き語りやSNSに投稿した。

最初は自分のレベルを見てもらいたい程度で載せた。しかし翌日に目を通してみると……。

『えっ、7万いいねに6万リツイート……?』

結果的に、バズっていた。夢じゃないかと思いい目をこするも、そこにある数字は変わらない。

しばらく現実味を感じられない俺の元に、電話が鳴る。そこには妹の恵果が表示され、恐る恐る出てみる。

『お兄ちゃん!? ツイート見たけど、なにこれ!?!』

『い、いや……オレもよくわかってない。なにこれ』

オレ以上に興奮を隠しきれない恵果に、オレ自身はというと呆気に取られていた。

リップを開いてみると過大評価の如く、『これならプロを目指してもいい』とか、『伸びしろありすぎ』だの書かれていた。

嬉しさというよりも、少し照れくさかった。自分自身、ここまで評価されるとは思わなかったからだ。

それからは幾つも投稿したが、やはり万超えのいいねやリツイートをされた。

もつと聞いて欲しい、自分の歌で楽しめて貰えるならオレは毎日練習を欠かさずに腕を磨き続けた。

——そんな、ある日。

『初めまして、突然のメッセージ失礼します。私はミライブ株式会社、マネージャー取締役の瀬川玲奈と言います。この度、貴方様の引き語り、及び歌ってみたを拝見させて頂きました。力強い歌声、それとは反面に丁寧なギター技術。とても感動致しました。つきましては、ミライブ株式会社でVTubeer活動をしませんか? ジャンルは音楽活動、貴方の素晴らしい歌声を更に広めたいと思う故、是非とも協力したい所存でいます。ご返答の方、お待ちしております』

まさかの企業から、誘いが来た。最初は怪しいなと思い、事前に調べてみたが実際にある企業で、メッセージに乗せられていた名前の人物も存在していた。

自分の歌声を多くの人に届ける、そのフレーズがオレの目に止まり、ワクワクが押し寄せてきた。

隠しきれない興奮、そして高揚感。俺は一日考えた末に、瀬川さんに返事を返した。

もちろん、やってみたいという返事を。

それがきっかけでオレは、V T u b e rとして音楽活動を始めた。ただオレは、一人じゃダメな気がした。

家出する前、唯一オレの夢を笑わずに居てくれた妹……恵果の存在。

ダメ元でオレは、瀬川さんに頭を下げて恵果も一緒にやダメかという話を提案した。

オレは歌ってギターを弾く。対して恵果もベースで、学生時代は一緒に奏でたりもした。

V T u b e rを通して音楽活動をするなら、恵果も一緒に良かった。一人より、二人で活動をしたかった。

オレの言葉に、瀬川さんはしばらく悩んだ後に微笑んで了承してくれた。

その時ほど、オレは誰かに感謝したことがなかった。そしてオレは恵果と二人で活動することを叶えられた。

まあ、両親を説得するには苦労したが。

「テメエら、オレ様と“ホムラ”の演奏、そして魂の歌で燃え尽きていきやがれええええええええええッ!!!」

——そして、今現在。オレがボーカル&ギターを担当し、V T u b e r名ホムラこと、妹の恵果がベース&作詞作曲をして二人で一つの

音楽活動を果たした。

『相変わらず二人の演奏エグイ!!』

『さすが二人で一つの音楽V T u b e r!!』

『今日も気合い、そして息ピッタシ!』

『燃え尽きすぎて灰も残らなさそう、もっとやれ!』

3Dモデルをフル活用したスタジオでの音楽配信。恵果が曲を作り、オレがそれを言葉にして歌にする。

親父、そして母さん。夢を叶えるまで戻るつもりは無いぜ。だって今は、これが楽しくて帰る時間さえ惜しいからな!

#11 最高の曲を作る為の原動力【赤城恵果】

私は赤城恵果、18歳。お兄ちゃんに誘われ、一緒に音楽系V T U b e rとして活動している。

お兄ちゃんが過去に両親から夢を笑われ、家出をした時の事は忘れることができない。

当時、私は両親に対して恨んだりもした。まさかお兄ちゃんの夢を嘲笑い、否定的だったと知らなかったから。

でもお兄ちゃんが家出した後に、事の重大さを理解した両親はお兄ちゃんと繋がった時、安堵の溜息や涙を流した。

自業自得、それで居て情けない。そんな気持ちで哀れみ、とりあえずお兄ちゃんが無事であることに私は安心した。

それからお兄ちゃんに誘われるがままミライバのD r e a m L i f eに所属した後、人生はこんなにも楽しいものなんだって知った。

今までは自分を評価してくれる人なんて居なかったし、やりたいことがあっても両親の目や世間の目があってできなかった。

でもV T u b e rを通して、私はお兄ちゃんと一緒に曲を作ったり、それを奏でるといふ夢を難なくこなせるようになった。

『ねえお兄ちゃん、次はどんな曲調にしようかな』

『そうだなあ……。最初は普通のテンポで続けて、サビの部分でアップするような感じがいいな。最初から沸かすのもいいけど、サビからグワア！と来るようなアップもいいかなと』

『あ、O O E O K O O C KのO全O覚D r e m O e rみたいな？』

『いや、それは最初から飛ばしてるだろ。けどサビの盛り上がり的にはそれが近いな』

V T u b e r 活動の休暇を利用して、私はお兄ちゃんと打ち合わせ

をしたりする。

基本的にはお兄ちゃんが想像する曲に寄せて、そのリズムに沿った歌詞を紙に記していく。

他にも機材を用いてドラムの追加やピアノの追加、色々と工夫を加えてそれらを何度も繰り返し返す。

良い曲を作るには、決して妥協をしない。それは当然の事で、聞いてくれる人を楽しませることができれば余計に。

二人で一つのVTubeerということもあって、配信をするときもコンビで開始する。

私のVTubeer名が『ホムラ』で、お兄ちゃんが『カゲロウ』。設定は世界にも通用するプロの作曲家と歌手になることだけど、これはリアルで本気で目指している。

二人で一つだから、アカウントも一つを共有している。チャンネル登録者は38万人。

ゲーム配信はしたことがなく、基本的に雑談と音楽で此処まで成り上がってきた。

曲を作るペースとしては不定期が多いけど、三カ月に一曲は作れるようにしている。

それまでは他の曲をカバー、アレンジをさせてもらって繋いだりはしている。

『そーいやお兄ちゃん、瀬川さんが言ってたけど新人が近々所属するんだって』

『なにっ、それは本当か!?!』

『うん、女の子で私の一つ下みたいだよ。詳しい事情はまだ知らされてないけど、色々と面倒を見てあげて欲しいって』

『オレたちにもついに後輩が……! くうううッ! なんか嬉しさでソワソワが止まらないぜ!!』

ジャカジャカとギターを鳴らしながら興奮を隠しきれないお兄ちゃんに、私は苦笑した。

感情を表に出しやすいのは昔から変わらない。私も、自分に後輩ができるのだと知ると嬉しさが止まらない。

それも女の子だから余計に、友達になれたらいいなと思う。先輩たちは少し、絡みづらかつたりする部分があるから……。

『となれば新人の歓迎に曲を作りたくなってくるなあ。最初はまだわからないけど、後々にコラボとかできたらその時に披露する！みたいな』

『でもさすがにロックで歓迎は激しすぎる気はするかな』

『なにもロックしかできないわけじゃないだろ。そうだなあ、引き語りで、落ち着きのあるメロデー。それでいて明るい雰囲気曲が妥当だな。やべえ、想像力が引き立つぜ！』

お兄ちゃんの持つ想像力は幅広く、無限大だ。自分が想像した通りに上手くいくまで、何度もやり直す。

でも、私はそれでも付いていけない。私が今こうして楽しめるのは全て、お兄ちゃんが誘ってくれたから。

そしてなにより、曲を作ることの楽しさがあるのは、お兄ちゃんが原動力であるのに変わりないから。

——私は、お兄ちゃんと世界にも通用するプロを目指す。例え高い壁があっても、二人で乗り越えて。

#12 自分が良いと思ったモノを勧めてはいけない 事案

瀬川さんとの話し合いが終わり、涼音も翔太くん達と打ち解けることが出来た後。

俺と涼音は瀬川さんにこれから使用する楽屋まで案内された。三階から四階、エレベーターが開くとホールに続き、その奥では左右にそれぞれ各部屋があった。

406号室と記された表札が、俺と涼音が使用する楽屋。瀬川さんが続いて中に入ると、楽屋といえば楽屋なのだが、傍から見れば事務所並みに広がった。

「これからは此処が裕也さん達の使用する楽屋になります。物や道具類、家具などはご自由に置いて貰っても構いません。それこそ一室のワンルームと考えて頂ければ良いかと」

「いや、楽屋にしては少し豪華な感じがしますが……。トイレに、もしかしてあれは風呂場ですか？」

「はい、そうですよ。お湯を沸かすポットなど、最低限生活ができる形には保っています。泊まり込みで作業をするマネージャーやV T u b e rの方々が居ますので。そしてこれが楽屋の鍵になります」

「しかも、カードキーって……」

淡々と説明をしてくれる瀬川さんから受け取る鍵は、カードキーだった。

……楽屋にしては間違いなく贅沢の極みだろ。下手な一室のワンルームより、良物件じゃねえか……。

「プライバシー保護に徹する業界だからこそ、セキュリティは万全にしています。なのでピッキングなどが通用しないカードキーを搭載することで、対策をしています。ちなみにあそのこのマッサージ機は備え付けなので、ご自由に使用してください」

「やべえ、此処に住もうかな」

「兄さん……?」

「すまん、冗談だ。だから安心しろ」

思わず口に出た言葉に、涼音が物悲しそうな目で訴えてくる。やめろ、俺は地味にそれに弱いんだ。

しかし口に出る程に見ただけで快適を感じられる楽屋に、悩んでしまったことは此処だけの話である。

「では私は仕事に戻りますので、ご自由に見学なさって下さい。許可証をそれぞれ渡しておきますので、首から下げて下さい。会社の見取り図も渡しておきます、一応赤く文字が記されているところは立ち入り禁止ですのでくれぐれも気を付けてくださいね」

「なにからなにまですみません。あつ、よろしければ連絡先の交換をしませんか? 見学した後、帰る際の報告はしたいので」

「そういえばそうですね、では交換しましょう」

これから世話になる人であるのは間違いないので、しっかりと俺は連絡先を交換した。

社会でまともに連絡先を交換したのは、何気に初めてだな。というのも、俺の連絡先はこうなっている。

・アホ(親父)

・奏さん

・涼音

・池上海斗(例のPCに詳しい奴)

・その他諸々

……んあつ、まともなのが奏さんと涼音しか居ないな。

俺と連絡先を交換した後、瀬川さんは軽くお辞儀をしてその場を後にした。

楽屋に残された俺と涼音は気を楽しんで、とりあえずまずは休むことに決めた。

涼音は中央にある椅子に座り、俺は備え付けのマッサージ機に座り込んだ。

「疲れたね、兄さん……」

「んあつ、そうだな……。とりあえず許可証に加えカードキーも受け

取ったことだし、少しゆつくりしていこうか。と言っても、14時過ぎか……。認識すると腹減ったな……。おつ……」

「私もお腹空いた……。あつ、この会社ってレストランもあるんだ……」

「マジか。けど家に帰る頃には夕飯だし、軽く済ませる程度で食べていくか……。んおつ、気持ちいいなこれ……ッ」

「ねえ、兄さん……」

「なんだ？ おお、そこ効く……。最高だな……！」

「兄さん……!!」

マッサージ機のモードを選択して快楽に満ちながら涼音と会話をしていると、珍しくも力強い声で呼ばれた。

しかし快楽に逆らえない俺は首だけを涼音の方に向けて、表情を伺った。

なんか、そわそわしてるがどうしたんだ一体。

「ちよつと声を抑えて欲しい……。その、変な意味とかじゃなくてその……」

「いや、そう言われてもこのマッサージ機すげえ的確にツボを突いてくんだよ。涼音もやってみたらどうだ？」

「そういうのじゃないもん……！」

なにをそんなに過剰な反応をするんだ此奴は。あはあ……それともなにか。

俺が気持ちよさそうにしているのを見て、乗りたくなったりとかそういうことか？

涼音はなにかと俺のすることをやったり、真似たりすることがあるからな。

仕方ない、変わってやるか。

「来いよ、涼音」

「えっ？ ベ、別に大丈夫だよ……！」

「遠慮すんな、お前も乗ってみればわかる。この楽屋において最高の快楽を与えてくれるコイツの実力をな」

引き気味に抵抗する涼音の腕を掴んで、俺はマッサージ機の魅力を

存分に知って欲しいと強制的に座らせる。

「兄さん……！」

「騙されたと思ってやってみな、飛ぶぞオ！」

若干ふざけながら、俺は涼音を背もたれに軽く押し倒してスイッチを入れた。

社畜、及び年寄りには最高の相棒ともいえるであろうこの機械の魅力、そして有難みを若い内に知るのはいいことだ。

……と、最初は思っていた。

マツサージ機が作動し、背中を中心に揉み解し始める。すると慌ただしかった涼音は、大人しくなった。

「んっ……ふぁ……！」

「……ん？」

「あつ……これ、確かにいいかも……。んう、気持ちいい……！」

……やっべえ!! なんか、思ってたのとちげえ!!

というか、俺よりも声出してるのお前じゃねえか。つか、これ普通にセンチティブを感じるのはいのせいか？

「すまん涼音、チェンジだ」

「なん……で……？」

「いや、これはちよつと教育によくねえわ。うん、お前にはまだ早かったかもしれない。チェンジだ」

「待って、もう少しだけ……。んんっ……！」

わかる、そいつの魅力はわかる。けど違う、違うんだよ。涼音分かってくれ、男性諸君の気持ちを。

俺は涼音を引きずり下ろそうとするが、それを拒まれる。無理やり下ろしては可哀想という善良な気持ちと、このままじゃダメな気がする善良の気持ちが入り混じる。

誰か、誰か涼音を止めてくれ！ 俺が悪かったからあ!!

悲痛の叫びを撒き散らしていると、部屋のドアがノックされた。まさか本当に瀬川さんが戻って来てくれたのか？と思いつながらすぐに駆け寄り、俺はロックを解除してドアを捻り開けた。

「いえええええええええええい!! ロックンロール!!! 神代の兄貴、そして涼音! さっそく遊びに来たぜえええええええええええええええ!!」

ドアを開いたその先に、先ほどまで涼音と仲良くしてくれていた翔太くんが居た。

だがこのタイミングだからこそ、言わせてもらおう。今求めているのはお前じゃない、瀬川さん、もしくは妹の恵果ちゃんだ。

「んっ……翔太、さん……。いらっしやい……。ふあ……!」

「……ッ。ぶふあああああああああああああッ!!!」
翔太くんの再来に、マツサージ機を堪能しつつも視線を送り返事を返す涼音。

その状況、そして絶妙に妖艶さのある声で名を呼ばれた翔太くんは勢いよく鼻血を出して床に仰向けで倒れ込んだ。

「おいおいおい、翔太くん! 気を確かにしろ!」

「か……神代の、兄貴……。オレ、死んでもいいかもしれねえ……」

「バカヤロオ!! こんなところで死ぬような玉じゃねえだろ!」

「ふっ……恵果にはねえ色気をあんたの妹さんから感じれて、よかったです……!」

「——へえ、私には色気が無くて涼音ちゃんにはあると。なるほどね、お兄ちゃん。死にたいなら私の手で逝かせてあげる」

「あっ、死神が見える」

「誰が死神よ! このバカあああああああッ!!!」

「ぬあああああああああああああッ!!!」

翔太くんを抱き抱えていたが、恵果ちゃんの登場により俺は後ろに下がった。

今日の前で起きている状況、それは翔太くんに跨り頬をおうふくピントする鬼の形相をした恵果ちゃんだった。

その光景にゾツとしていると、後ろから涼音が背中の裾を掴んできた。

「兄さん、なにがあったの……?」

「……すまん、涼音。本当にすまねえ……」

「……？」

我ながら恐ろしい妹だと、この日初めて思った。そして翔太くんの言うように、色気があったのは認めよう。

だからこそこれからはマッサージ機は禁止だ。少し俺も男としての反応してしまった、故に他の男性諸君が暴走しかねない。

——その後、頬をパンパンに腫れさせた翔太くんと、再度突撃したことを謝罪してくる恵果ちゃんだった。

これまでのキャラクター紹介【2】※挿絵あり

1. 赤城翔太 | Akagi Syouta |

年齢：19歳

身長：170cm

趣味：音楽活動

特技：即興で弾き語り

好きなもの：肉類全般、ギター

嫌いなもの：自分で決めたことを投げ出すこと

【備考】

株式会社ミライバのDream Lifeに所属している音楽系VTuber。本名は赤城翔太で、VTuber名は『カゲロウ』。

赤髪が特徴で、何事にも本気で取り組むことや音楽活動に情熱を注いでいる。

ギターを担当し、妹の恵果とは二人で一つのVTuberでもある。夢は世界にも通用するプロになること。

性格は至って前向きで、活発的。自分の意見を決して簡単に捻じ曲げない故、他人に左右されることを苦手とする。

過去に両親から夢を嘲笑われ、嫌気を差したところ家出するという行動を見せた。

成人一歩手前の年齢にしては行動力が凄まじく、そこに関しても自分の決めたことを貫いたりする。

そのことについて妹の恵果は『前向きで情熱バカ』と思っているようだが、その反面、一人だと危なっかしいとも感じている。

現にVTuberの誘いが来た際も、そこは自覚しているようであり、人じゃダメということもあり、恵果と一緒に望んだ。

2. 赤城恵果 | Akagi Keika |

年齢：18歳

身長：154 cm

趣味：音楽活動、翔太の見張り

特技：作詞作曲

好きなもの：デザート類（特にティラミス）

嫌いなもの：好きなことをバカにされること

【備考】

株式会社ミライバのDream Lifeに所属している音楽系V T u b e r。本名は赤城恵果で、V T u b e r名は『ホムラ』。

赤髪のロングに眼鏡をしている。というのもし少し視力が下がっているだけで、作詞作曲する時のみ眼鏡をする。

両親が兄の夢を嘲笑う過去もあって、自分や他人の目指す夢をバカにしたりする人を嫌う。

その反面、兄である翔太のように前向きで困難も乗り越えようとする人は好きで、その為であるなら手助けをする。

翔太の誘いによってV T u b e rになれたことを後悔しておらず、寧ろ感謝しており、世界が広まったことで楽しめている。

作詞作曲に加え、ベースの腕もあるようで、翔太自身から『器用の差では断トツに恵果が上』と称賛されている。

兄妹仲も悪いわけではなく、普通に良い関係を築いている。が、翔太の突拍子の無い行動にはいつも困らされている。

翔太と共有アカウトで、チャンネル登録者数は38万超え。

3. 瀬川玲奈 | Segawa Reina |

年齢：32歳

身長：165 cm

趣味：読書、V T u b e r鑑賞

特技：仕事の管理

好きなもの：休暇の一時

嫌いなもの：めんどくさい上司

【備考】

株式会社ミライバで、マネージャーの取締役をしている女性。今あるVTuberグループの『Dream Life』と『Smile Road』の総括もしている。

この二つのグループに所属している大半のVTuberは玲奈が直で見定め、スカウトした。

それが面接の代わりであり、所属したVTuberは大きく成長していることから見る目は確かである。

黒髪のショートで花のヘアピンをしているのが特徴で、見た感じでは普通に美人という印象。

しかしそれでも独身であるようで、年齢も考慮して運命の人を探しているが中々に見つからないで居る。

というのも、見る目が凄いだけに相手の素性を見ただけであらかたわかるというエスパ―並みの洞察力のせいで、相手からのアプローチがあっても断っている。

ちなみに好みの男性は、ヒモにさせてくれる人とのこと。

DreamLife活動編

#13 個人勢と企業勢のスタートライン

涼音の一件で赤城兄妹に一悶着があった後。まるで何事も無かったかのように楽屋でくつろぐ翔太くと恵果ちゃん。

まあ一步譲って恵果ちゃんは礼儀正しく、今こうしてくつろいでいるとは言え、女の子らしく大人しさを感ずる。

故に、まあ許容範囲で許せる。

しかし一方で、問題なのは翔太くん。ソファーに腰を掛け、大股開きでジャカジャカとギターを鳴らしている。

本来、いや……普通なら態度の悪さで叱るところだが如何せんこれが翔太くんではないかと許してしまう。

というか、涼音と打ち解けてる時点で悪い奴ではない。現に翔太くんのギターをその隣で座っている涼音は聞き入れていた。

「翔太さん、凄い上手……！」

「ありがとう。けどオレなんか全然だぜ？ 技術で言えば、恵果の方が多彩で器用だし、楽器の種類は違えどベースがクソうめえ」

「ちよつとやめてよお兄ちゃん。私よりお兄ちゃんの方がハイスペックじゃない」

「いや、オレなんかギターが弾けて歌えるっただけだよ。作詞作曲もお前が居ないと成り立たないし、スペックで言えばお前には劣るんだよ」

へえ……意外と謙虚なんだな。

涼音の言葉に若干の照れ臭さを見せる翔太くんだったが、自分を持ち上げるよりも妹の恵果ちゃんを持ち上げる。

俺からすればギターを弾いて歌える翔太くんもすげえと思うし、一から作曲する恵果ちゃんも同じレベルですげえわ。

「神代の兄貴や涼音は何か楽器を弾いたり、歌ったりするんすか？」
「私はあまり歌わないかな……あまり、上手くないから……。楽器はピアノを少しだけ……」

「如何にも涼音ちゃんらしいって感じだね。涼音ちゃんのお兄さんは？」

「ギターとドラム程度なら弾けるぐらいだな」

「えっ、マジっすか!？」

「ああ、中学と高校で知り合いと軽音楽部に入ってたからな。そこで結成したバンドで、活動してた時期があった」

「兄さんのギター、ドラム姿……ッ」

知り合いと言っても、大体はわかるだろう。そう、涼音のPCを用意してくれた唯一の親友。

池上海斗、俺と同年代だ。実家が地元で有名なパソコン店で、中高共にしてきた大事な知り合いだ。

学生だった当時、海斗に誘われて入った軽音楽部でバンドをする際、青春の二文字を知った気がしたのはいい思い出。

気がしただけで、実際はそんなことなかったが。

「くうううううッ!! オレがギターで恵果がベース、そこに涼音のピアノに神代の兄貴によるドラム……!! これは後々に是非ともコラボしたいぜえ!!」

俺と涼音が多少の楽器を弾けると知った翔太くんは、嬉しいという感情が際立ちジャカジャカと鳴らし始める。

しかし不思議とその行動は不快にならない。寧ろ、本当に音楽を心の底から好きなんだと感じたからだ。

「そういえば翔太くん、コラボってV Tuber同士のことだよな？」

俺は今まで動画で色んなV Tuberのコラボを見てきたが、あれって実際には難しいのか？」

「まあそうっすね。少なくともこの会社では新人V Tuberは最初からコラボはできないと思うっす。オレらの時はどれくらいの期間が空いたっけかな」

「確か一カ月ぐらいじゃなかったかな。活動開始の日から一カ月間は

新人V T u b e rは企業勢として自分の世界を作り出してほしいとのことで集中する期間を設けられるんです。私たちは職業が同じでも配信環境やスタイル、そもそもの主旨が若干違うので慣れる為の期間と言えればわかりやすいかもしれません」

「なるほどな……。だが逆にそれは有難い事ではあると思うし、会社はしつかりしてくれていると印象が付く」

「けど、涼音の場合はコラボ以前に難しい所があると思うっス」
「翔太さん、それはどういう……？」

翔太くんの言葉に少し不安を感じた涼音が問う。少し表情を曇らせる翔太くんだったが、持っていたギターをケースにしまい込み、近くにあったホワイトボードの前に水性ペンを持って立つ。

「わかりやすく説明すると、V T u b e rの始まりは二つの種類に分けられるんスよ。趣味として始める個人勢と、仕事として始める企業勢スね。涼音は前者の個人勢から始めたよな？」

「は、はい……」

「企業勢から始めたV T u b e rは会社の支援の元で機材や自分の分身となり得るイラストを用意してもらえるんスよね。そして企業勢から始めたことによるメリットは、”まだ誰一人として認知されていない状態”でのスタートなんスよ」

「それがなにか、問題でもあるのか？」

「このポイントが個人勢と企業勢の違いなんスよ。確かに神代の兄貴みたいにおおまかに見れば何の問題が無い様に見える。でも、企業勢のスタート地点と個人勢のスタート地点とじゃ、後々のデメリットの差が違うんスよ」

個人勢と企業勢の文字に円を描き、俺たちにわかりやすくホワイトボードを活用した説明をしてくれる翔太くん。

スタート地点、後々のデメリットがなにか考えてみるが的確な推測ができなかった。

「企業勢でスタートしたV T u b e rに求められるのは、言わずもがなコミュニケーション能力が基本っス。登録者数0の状態から、如何に視聴者を獲得することができるか。自己紹介の動画から始まり、雑

談粹などで成功すれば流れは掴んだようなもんっス。けど失敗すれば会社としては赤字みたいなんスよね。だから個人勢よりも遥かに企業勢でのスタートはよりシビアで厳しい」

「……そうか。個人勢が企業勢に転換した場合、元々居る登録者数はそのまま始められる。しかし企業勢でのスタートは、そのままの意味でゼロでのスタート……。よって、始めた現段階では会社が得られる利益は不安定でしかない」

「ズバリ、そういうことっス。Dream Lifeというブランドで多少の保証はあるようなもんですが、それはオレたちの先輩であるVTuberたちが作り出してくれた保険なんスよね。だから余計にオレたちのような後から来たVTuberは先輩たち、そして企業たちの為にも最初の流れをどうしても掴まなきゃダメなんス。けど先ほども言ったように、企業勢でのスタートは視聴者に認知されていない状態での始まりなんで大きな失敗はしなければ上手く流れは掴めるっス。そして長くなって申し訳ないけど、次にオレがなんで涼音がコラボ以前に難しい場面があると言ったかについてなんスけど――」

丁寧に書き記しながら説明をする翔太くんの話に、俺を含めた涼音たちは釘付けになっていた。

それはまるで授業を受けるかのように、気付けばメモを取り出して俺は知識として残す。

そして涼音に難しい場面があると言ったその理由としては、個人勢の時に獲得した視聴者たちが、素直に企業勢として活動する涼音を受け入れられるかどうかにあった。

翔太くんはありのままにこう言った。

「VTuberは本当に十人十色っス。その人のスタイルで成り立つ配信や世界が絶対にある。そんなオレたちの世界を、視聴者は見えてくれているのではなく、付いてきてくれているとオレは捉えてる。それ同様に『夢を与える』のではなく、『笑顔』を届けるのがVTuberの本質だとオレは思ってるっス」

自分の世界、それつまり自分が持つ主観。VTuberも視聴者

も、形が違うだけで同じ土俵の上で対面しているのだと翔太くんは自分の考えをハッキリと伝えてきた。

そして話を戻し、涼音が企業勢として活動することに視聴者はどれくらい付いてきてくれるのか。

……否、どうすれば理解してもらえるのかを考えなければ多くを失うということだ。

確かに個人勢として活動していたからこそ馴染み深く、そして絡みやすいというのもある。

涼音が作り出す世界に、浸れる視聴者が多かったかもしれない。だが企業勢として活動することにより涼音の世界が遠く感じてしまい、同じ土俵から降りてしまう者も出てくる可能性。

それが、まず最初に涼音のすべきことだった。

「離れていく視聴者は放っておけ、なんて言う奴も居ますがオレは極力それを避けたいっす。だってこれまで自分の世界に付いてきてくれていた視聴者の一人っすよ？ その一人の存在がどれだけ大きいか、そう言葉を吐く奴は理解していない。例えそれが画面越しであっても、オレたちはその一人を雑に扱っちゃいけない……。音楽だってそうだ、観客の声が重なれば小さく見える一人の存在でも、その一人が発してくれる応援で頑張れているのは事実……」

「お兄ちゃん……」

「だから、オレは視聴者一人一人の為に全力で応える。曲も歌も演奏も、本気で取り組む。だから涼音、先輩としてオレが言えるのは視聴者を粗末な扱いたないようにというぐらいだ。けどきつと大丈夫、オレたちが応えるように視聴者も応えてくれる。だから企業に所属したこと、正面切って伝えるべきだ。それを乗り越えてからが個人勢だった者のスタート地点だ。……以上っす」

最後、涼音にフオローを付け加え無造作に頭を搔いて翔太くんはソファアに戻る。

俺はホワイトボードにびっしりと書き記された情報を、重要部分だけを切り抜きメモに移す。

すると後ろから、会話が聞こえてくる。

「お兄ちゃん、熱烈な解説を、ご苦労様」

「やめろ、オレもなんでこんなことをしたんだ……!! 神代の兄貴を前に偉そうなこと言っちゃまった!! 説明しなくてもわかってると思うのにいいいいいいッ!!」

「そんなこと、ないよ……? 翔太さん、ありがとう……」
「……ッ」

「なに鼻の下伸ばしてんの、お兄ちゃん。気持ち悪い」

「べ、別に伸ばしてねえよ!!」

「ふふっ……!」

背中で感じる三人のやり取りに、俺は小さく微笑んだ。なんだかなだ、翔太くんたちの存在は涼音に大きい。

ライブとしてのスタート地点はまだだが、先輩と後輩のスタート地点は良い感じみたいだ。

そう俺が思い、書き続けていると。

「なにお兄ちゃん、もしかして涼音ちゃんのこと気になってる?」

恵果ちゃんの何気ない言葉で、心臓がドクンと大きく鳴った。

なんだ、今の……。翔太くんが涼音のことを気になってる、それつまりは別の意味でつてことか?

だとしても、なぜ俺は鼓動が早い? 別に涼音とは年齢が近い、それに同じVTubeとしても気が合う。

待て、俺は何を考えている?

「はあ!? バツカじゃねえの!」 別に涼音はお前と同じ、妹みたいに思えるだけだ! それに後輩、面倒見てやらねえと先輩として顔が立たねえだろうが!」

「ふーん……。けど、確かに私も涼音ちゃんみたいな妹が欲しかったなあ。だって凄く可愛いんだもん」

「えっ……? 別に、可愛くはないよ……?」

「いやいや、可愛いよ? ねっ、お兄ちゃん」

「まあ、確かに可愛いとは思う」

「ちよつと、恵果さん……!」

後ろのやり取りを聞いていた、ただそれだけだ。けど俺の中で何か
が煮え手繰ったのか、思わずホワイトボードを殴りつけてしまった。

俺自身、自分の行動が理解できなかつた。

「に、兄さん……?」

「ツ!!」

耳に聞こえる涼音の声。俺はハツとなり、そこで自分が起こした行
動を目にし、気付く。

慌てて振り返ると、そこには心配そうに見てくる涼音の姿と、驚い
て緊迫している赤城兄妹が居た。

「……いや、翔太くんの書いてくれた情報をメモに記していたら蚊が
止まってな。勢い付け過ぎた」

「神代の兄貴、物理的過ぎてヤベエ。けどそこがクレイジーで、痺れる
ぜえ!!」

「びっくりしたあ……! 蚊に同情しちゃうよ、そんな最期の迎え方
は。あはは!」

「悪いな、驚かせてしまつて。はははっ……」
「……兄さん」

俺は振り向き、作業を再開。なんとか誤魔化したが、俺はどうして
こんな行動をしたんだ。意味が分からない。

落ち着きを取り戻し、俺はメモに全部記した。その時、涼音が俺を
見ている事を知らず。

「さてと、小腹も空いてきたしレストランで飯食おうか。詫びと言っ
ちやなんだが、翔太くんも恵果ちゃんも来な。奢つてやるよ」

「えっ? 別に大丈夫です——」

「マジすか!? 行きましよう、是非!!」

「お兄ちゃん……」

俺の言葉に恵果ちゃんは断ろうとしたが、それを上書きするように
翔太くんが元気に誘いを受けてきた。

それに対して恵果ちゃんは諦めるように溜息を吐いた。それから
準備をし、気分変えも含めてレストランに向かおうとした時。

涼音は考え込むようにその場で止まった。

「どうした、涼音」

「……兄さん、私は——」

「神代の兄貴、早く行きましようぜ!!」

「ああ、ちよつと待ってくれ。あまり腹減ってないか？」

「ううん、違う……。やっぱり、大丈夫だよ……」

なにか言いたげな涼音だったが、外で既に待機している翔太くんと恵果ちゃんが居た為に涼音を連れて早く出るようにした。

しかしその後、涼音の言いたげなことも含め俺のモヤモヤとした感情はしばらく取れなかった。

#14 こんな感情を知るつもりはなかった

翔太さんと恵果さんを交えて軽く食事を済ませた後、これからの予定を立てたり、事務所を持っていく物などの整理をする為に、私は先輩二人に挨拶をして会社を後にした。

その時、翔太さんと恵果さんの連絡先も登録した。

会社から自宅に帰る道中、兄さんはずっと運転に集中して私と話すことがなかった。

運転や瀬川さんとの話し合い、これからの事を考えているから疲れているのかなと思った。

それは確かにあるかもしれない。でも、私は他にも兄さんがホワイボードを殴りつけたことが気掛かりだった。

兄さんはその後、蚊が止まっていたと言っていたけど、その表情は二年間の間でも初めて見た曇った表情だった。

なにか不安で、動揺しているような表情……。

直接聞くにしても、きつと兄さんは教えてくれない。いつも、言葉に出さない感情に関してはずっと隠しているから……。

翔太さんに言われた企業勢として活動することを視聴者の皆に報告しないとイケないということよりも、私は帰り道も、帰ってきた後でもずっと兄さんのことでモヤモヤしていた。

「あっ……、兄さん……」

「ッ！ よ、よお涼音」

帰ってきて汗を掻いていたこともあり、お風呂に入った。寝間着に着替えてドアを開けると、バツタリと兄さんに出会った。

私の言葉に、兄さんはやっぱり少し動揺している。兄さんは自覚していないからわからないと思うけど、動揺する時、兄さんはいつも目を泳がせる。

「あの、兄さん……。き、今日はありがと……。運転とか、その……話し合いに付き合ってくれて……」

「いや、俺も自分の事とかもあったし大丈夫だ。寧ろこれから大変な

のは涼音の方だろ？ 企業勢としてやっていく姿勢を報告しないと
ならないし……。まあ、出来る限りは俺も支えるから、色々頑張っ
ていこうな」

「うん……。あ、あのね兄さん……。一つだけ、聞いてもいいかな……
？」

「お、おう。なんだ？」

今までとは違う、ぎこちない会話。それでも私は、このモヤモヤが
気になって、聞かずにはいられなかった。

「ホワイトボード殴った時、兄さんは蚊が止まってたと言ったけど
……。本当は、違うことじゃないのかなって……」

「……ッー」

「その……。よく、わからないけど……。兄さんは色々頑張ってくれた
りするけど、なにか、一人で抱え込んだりしてないかなって
思ったの……」

「あー……。それはだな……」

兄さん程ではないけど、私はもし兄さんが抱え込んでることで悩ん
でいるなら助けになりたい。

だから私は今日あった出来事について、聞いた。すると兄さんは頭
を片手で掻きながら、言葉に悩んでいた。

……。やっぱり、私じゃ兄さんの力になれないのかな……。

私と兄さんの間で、数十秒が経つ。少し余計なお世話をしてしまっ
たかもしれないと自己嫌悪に駆られる。

けどその時、兄さんがやっと言葉を発した。

「……変な話、それも飛びつきりアホくさい話なんだが、翔太くんがお
前を気に掛けているかもしれないって思った瞬間、なんか胸のこの辺
りが痛くなって、モヤモヤしたんだよ」

「……えっ？」

「よくわからない感情で、気付いたら殴ってた。翔太くんがお前を気
に掛けることについて、俺は関係ないってのに。けど、なぜか俺の中
では……。嫌だな」って思った。ただ、それだけだ」

初めて見た、兄さんの弱々しい声と顔色。そんな兄さんも珍しいけ

ど、それよりも兄さんがホワイトボードを殴った理由の方が私は驚愕した。

兄さんのお父さん、雅也さんから兄さんの恋愛面について聞いたことがあった。

なんでも、兄さんにアプローチをする人自体は居たらしいけど、兄さんは恋愛についてよくわからない為に断っていたと。

けど今の兄さんを見て、私は思った。この人はきつと、恋愛よりもまず自分が抱く感情を理解できていないんだと。

前向きでしっかり者、そんなイメージが強い。でもこれまで感じたことのない感情に関してわからないことだらけなんだと。

「悪い、お前にこんなこと言っても仕方ねえよな。これからまだやることあるから、部屋に戻るわ。風邪引かない内に、髪の毛乾かして今日は早く寝ろよ」

「ま、待って兄さん……!」

「ツ!!」

今になって自分がなにを話しているのか、それすらもわからなくなったのだと思う。

兄さんは少し早口で切り上げて、部屋に戻ろうとする。私はそんな兄さん呼び止め、背中から抱き着いた。

「翔太さんと恵果さんと食べに行こうとする前、私は兄さんに言いたかったことあるの……。それはね、どんなことがあっても私は大丈夫だよってことを言いたかったの……。私は、兄さんを信じてるから……」

「な、なにがだ?」

「……ふふっ、それは内緒だよ……。今はまだ、頑張らないとダメだから……。それに、私のこの言葉を兄さんには考えて欲しい……」

私は兄さんから離れて、先に階段に足をかけた。振り向いて私は兄さんに、少しの課題を出した。

案の定、兄さんはまた困惑した表情を見せる。私は、そういう一面も大好きなんだよ。

そして、ごめんなさい。気持ち悪いかもしれない、思い違いかもし

れない。

それでも今だけは、自惚れさせてください。きっと兄さんは、私のことを意識してくれているのかもしれないって。

でも今はまだ、タイミングじゃない。互いにやらなきゃいけないこともあるし、これからが大変な時期に入るから。

——兄さんのモヤモヤ、それはきつと本当の恋愛なんだよ。



涼音が俺に抱き着き、部屋に戻った後。俺は同じように、ゆっくりと部屋に戻った。

今日の出来事もそうだが、それ以上に先ほどの涼音が抱き着く感触が忘れられない。

なぜ、俺に抱き着いてきた？ 大丈夫ってどういうことだ？

ベッドで横になり天井を見上げ、考える。しかし一方的に解決策が出てこず、俺はスマホを取り出してある人物に掛けた。

「……もしもし、海斗か。俺だ」

『オレオレ詐欺は古いぜ、時代遅れかよ』

「ぶっ殺すぞ」

『ひゅ〜！ 相変わらず毒があるねえ。んで、今日はどうしたんだ？』

まさか、またパソコン関係か？』

「いや、そういうわけじゃねえけど……。なんだ、ちよつと相談に乗って欲しくてよ」

池上海斗、唯一中高を共にした親友だ。電話をかけた際のやり取りはいつものことだ、気にするな。

『お前が相談？ それも、プライベートの？ こりや明日は天変地異だな、あっはっは！』

「笑い事じゃねえ……。今日は色々ありすぎたんだよ。色々あり過ぎ

て、ちよつと整理が追いつかねんだ」

『本当に珍しいな。それで、なにがあつたんだ？』

親友である海斗は信用に値する関係だ。だからこそ、俺は今日の一日の流れを話した。

その中で特に、涼音の事を話した。海斗は俺の親父が再婚したことも、義妹が居ることについても知っている。

だからこそ話しやすいというのもあつた。その中で俺は、義妹に抱く感情が一体なんなのかを、相談した。

すると海斗は、こう言つた。

『お前、それ……恋愛感情じゃねえの？』

結論的に、俺の抱く思いは恋愛感情じゃないかと言つてきた。とはいえ、理解できるはずもなく。

「バカ言えクソ野郎。義理とはいえ妹だぞ？ それに恋愛感情で胸が痛くなるわけがないだろ。なんか、病気じゃねえのか？」

『うっわあ……、リアルで鈍感を目の当たりにすると二次元の鈍感がすげえ可愛く見えるわ。んじゃ、診断してやるよ。俺の質問に一言で答えていけ、いいな？』

『お前の診断は宛てにならんと思うが、いいだろう』

『妹に好きな人が居る、どう思う？』

「気になる」

『妹がその好きな人とデート、どう思う？』

「結構気になる」

『妹が正式にその男と付き合つた、どう思う？』

「コロス」

『おーん、恋愛感情決定だわ。もう最後の返答が決定打だわ。今こうして淡々と受け答えしたが、ちよつと脳内で妹が好きな奴と絡んでるシーンを想像してみな』

海斗の言う通り、俺は天井を見上げて想像する。涼音が好きな奴と、デートをする……。

以下、俺の想像世界。

嫉妬、あるいはヤキモチを焼いたわけだ。特にV T u b e rを通して妹との接点が増えたが為に、隠し抑えていた感情が爆発したって話じゃねえの?』

海斗に論され、俺はなんにも言い返せなくなる。しかし、これまでまともに恋愛感情を抱いたことがない俺からすれば、新鮮と言えばそうなのだが、不思議な気持ちだ。

いや、というか普通にダメじゃね?

「しかし、俺は兄で涼音は妹だぞ……。傍から見れば気持ち悪いかもしれないのに、それで好きになつたら余計に……」

『ちなみに、義理とはいえ結婚出来るぜ』

「そうなのか? ……じゃねえよ! 世間から見たらヤベェし、普通に論外だろ!」

『はあ……。お前が世間の目を気にする時が来るとはな。そういうところに限っては本当にチキンだな』

なぜか深い溜息と共に幻滅された。だが実際にそんなのはアニメや漫画での話であつて、リアルでは厳しいだろ……。

『ともかくだ、お前は妹に恋愛感情を抱いた。その事実は間違いないと思うし、覆らない。それに言っておくが、俺は別にお前がどうしようと思えるようなことはしないぜ。冗談抜きで気持ちに整理を付けてどうするべきかを考えた方がいい。お前の本当のお母さん方の時のような後悔をしないようにな』

海斗の言葉に、俺は身体を伸ばして深い溜息を吐いた。ここまで悟らされたら、受け入れるしかない……。か。

ここにきて俺は、涼音のことをちゃんと気に掛けたんだな。それも兄としての感情と一緒に、恋愛感情も。

後悔しないように、とはいえ今回の話は違う。また難しい問題が出てきたことで、俺は軽い頭痛を起こす。

神代裕也は義妹を気になっていた。その事実だけが、今日一番の出来事じゃねえかと、改めて思った。

#15 神代涼音の分身Ⅱヒスイ【義妹side】

「あつ、あく……。えっと、ヒスイです……。聞こえるかな……」

『キタコレッ』

『待ってた、今日も癒してくれ』

『聞こえるよ！久しぶり！』

『仕事終わりにこの声、成仏できる』

「あつ、聞こえてる……。よかった……！」

お風呂上りに兄さんと出会い、言い逃げをした後。私は少しゆっくりしてから、配信の準備をして、始めた。

SNS自体は活動していたけれど、配信をするのは久しぶり。ここ最近色々と行動してたから、余計に。

ちなみに配信のタイトルは「お久しぶりです。ご報告があります」と、至ってシンプルなものにした。

15万人ということもあって、始まる30分前ぐらいから既に200人以上の方々が待機してくれていたみたい。

「本当に久しぶりだね……。あつ、仕事お疲れ様です……。ゆっくり休んでください」

『いや、今ので元氣出た。最後まで付き合うわ』

『俺も嘘で仕事終わりって言えばよかった』

『どうせニートだろ』

『なぜわかったし』

『俺もニートだからな。同士よ』

『運命を感じた』

「ふふっ……。皆相変わらずでよかった」

私のアバターはエルフをモデルにしている。特徴なのは、白色のマフラード口元を隠していることかな。

もちろんエルフに沿って、金髪にしてある。私はコメント欄が相変わらずで、嬉しかった。

とはいえ本番は此処からだった。そう、ちゃんと皆にわかりやすく、そして理解してもらえるように企業勢として活動をするということを言わなくちゃいけない。

「えつとね……今日は皆に報告したいことがあるの……。しばらく配信とかできてなかったから、その理由とかも……」

『結婚報告以外なら聞こう』

『俺と付き合うなら聞こう』

『上の二人の理由以外でも、聞こう』

『どんな理由でも聞け、それが俺たちの使命だ』

『御意』

『了解』

『使命なら仕方ない』

「あ、ありがとう……。えつと、単刀直入で言うかね……？」

私は嘘偽り無く、誤魔化すことをせずに話した。皆のおかげでチャンネル登録者数が15万人を到達したこと。

それから企業の方からお誘いを受けて、もっと上を目指してみたいということから、お誘いを受けたこと。

説明をする中で、コメント欄の流れが早くなる。その中で見たコメントの中には、『ちよつとなあ……』といったものがあつたりしたのを見て、怖くなる。

「ツイートでの予告も無し、それで久しぶりの配信で唐突に言われたらやっぱりその……困る、よね……。でも、私はもつと世界の視野を広げたいと思ってるの……」

『ツイートで予告しなかったのは逆にいいと思う。下手にそこで企業勢になりますと言ったら、その時点で荒れたりするから』

『俺もそれには同感。けど企業勢として活動するってことは、ヒスイちゃんの好きには配信できないってこと？』

『つまりそれって、これまでの絡みはできなくなるってことか。まあブランドの元で活動だから、俺たちも今まで通りに絡んだら目を付け

られかねないもんなあ……』

色んなコメントが流れる。大きく分けて、ある人は賛成、ある人は微妙といったもので溢れた。

それでもコメント欄での言い合いが起きないのは、この人たちが凄い良い人だからだ……。

それでも少し怖くて、コメント欄を見るのを控えようとしたり。けど、ある人のコメントが目に入ってきた。

『お前ら考えてもみろ。俺たちはヒスイちゃんに随分と楽しませてもらえているんだぞ？ 今でも十分なのに、企業勢としてやっていくことで他のV T u b e rとのコラボも見れたりするって思うと、楽しみが減るところが増えるんじゃないのか？』

そのコメントを見た時、不安だった心に少し余裕を与えてくれた。すると他の議論を醸していたコメントも、やがて落ち着きを取り戻して色んな人が押ししてくれる。

『確かにそうだな。ヒスイちゃんの魅力を他のV T u b e rたちにも知らしめることができるしな！』

『V T u b e rコラボ、確かに楽しみだ。けど内気なヒスイちゃんだからなあ、動揺だけして終わりそう』

『おい、ヒスイちゃんをバカにするなよ。やる時はやる子なんだぞ』
『君は父親か母親かい。まあでもヒスイちゃんが決めたことなら俺はついていくよ。もっと楽しませてほしい』

微妙だった人たちもその一つのコメントに感化され、私が企業勢としてやっていくことを受け入れてくれたみたいだった。

それでも少しだけまだ納得できないというコメントもあつたけど、私が頑張つて活動して、またついていきたいと思ってくれるように努力はしなきゃだ。

私は皆に、改めてありがとうと感謝を送る。すると皆は気にしないでいいと、言ってくれたりした。

これからの予定や活動について、そのことも話そうとした時だった。

緒に配信しよ……?」

「えッ」

顔を引きつらせ、あたふたしだす兄さん。可愛い……。

私は悩んでいる兄さんの腕を引つ張って、その後背中を押して無理やり私の部屋に連れて行つた。

すると兄さんは周りをきよろきよろし始めて、如何にも新鮮だといわんばかりの雰囲気を出す。

「私、いつもあそこで配信してるの……。前に兄さんが私のV T u b e rを教えてって言ってたから、これもいい機会だと思う……」

「まあ、涼音がいいってんならやるが……。いきなり兄とはいえ、配信に出て大丈夫なのか?」

「私のリスナーは、ちゃんとわかってくれる人だもん……」

部屋にあったもう一つの椅子を設置して、そこに兄さんを座らせる。私も同じように座り、マイクのミュートを解除した。

「ごめんね、みんな……お待たせ。あのね、兄さんつれてきた」

『おかえりなさい』

『まさかの連行w w w w』

『どうもお兄様、こんばんは』

『これはある意味では神回だぞw w w』

「あ、どうも……初めまして。えつと……」

「ヒスイ、だよ……?」

「ああ、そうか。ヒスイの兄です。妹から聞きましたが、この度は叫んだことにより迷惑をかけたようですみませんでした」

『めつちや礼儀ええやん。しかもイケボ』

『なにこの低音ボイス、男でも惚れる』

『今まで裏で応援してました、けどお兄様で出てきました』

『お兄様、ヒスイちゃんをください』

「やらねえよ、アホか」

「ちよつと兄さん……!」

「あ、やべつ。失礼いたしました」

『秒で素が出てきたんだがw w w』

『これはお兄様の防御が固いぞ』

『すまん、変な性癖に目覚めそう。罵ってくれ』

思わず素で対応してしまった兄さんに声を掛けるが、リスナーの皆は素のまま話してほしいと言う人が多かった。

私も素で話してるけど、兄さんの素を知られるのはなんか複雑な気持ちだな……。

それになんか、閲覧者数が一気に増えてるような……。

兄さんを出すのは少しまだやめた方がよかったかな、と思いつつも上手くやれているみたいで、私と兄さんのコンビで雑談だけでも二時間を超えてしまったのはここだけの話。

#16 この気持ちからはもう逃げない

眩しい日差し、鳥の鳴き声が耳にやんわりと響く。目を開け、日差しに抵抗しながらも重い瞼を開ける。

俺は確か、昨日涼音と配信をして……。

色々あった出来事に続いて涼音と配信をした事実。隣で感じる涼音がV T u b e rをしてている姿……。

新鮮という言葉と同時に、改めて配信をするまでの機材の調整やアバターが可愛かったという印象。

思いに更ける中、俺は身体を動かそうとした。だが、右腕がやけに温かみがあり、少し重い。

なんだと思いい視線を横に向けるとそこには涼音が俺の腕にしがみついて寝ている姿があった。

「なッ……！」

思わず声が出そうになるが、抑える。さすがに寝ているところを起こしてしまうのは申し訳ないからだ。

だが、しがみつかれてはおかげで当たっている。普段は無い様に見える柔らかい二つが、当たっている。

なぜこうなった。というか、普通にここ涼音の部屋じゃね？

声を理性を保ちながら、改めて周囲を見てみると、そこは俺の部屋ではなく如何にも女子って感じの涼音の部屋だった。

昨日の配信終わりをよく思い出せ、裕也。最初は順調に慣れしたんでは居たよな。

そこから二時間ぶっ通しで、終わったのは日付が過ぎた辺り。俺は眠気が限界で部屋に戻ろうして、それで意識が……。

ああ、つまりはそのまま気絶したのか……。

となれば床で倒れた俺をわざわざ自分のベッドに運んでくれたと

思えばいいか。

確かに、俺の部屋まで運ぶにとしては涼音の力じゃなんともならないだろうし。

とはいえ、だな……。

「今、何時だ……?」

気絶という名の深い睡眠を味わったせいで、時間の感覚が一向にわからない。

俺は部屋を視線で漁り、時計を発見する。

あゝ……、七時か。……七時だア!?

「おい、おい! 涼音起きろ、学校だろ!」

今日は月曜日、普段ならもうリビングで朝食を済ませ、登校している時間だ。

俺はそのことに気付き、起こしてはいけないという概念から、起こさなくてはいけないという概念の元、涼音に声を掛けた。

「んっ……。ふああ……。兄さんおはよう……」

「ああ、おはよう。じゃねえ! 早くしないと遅刻するぞ!」

「……? 兄さん、今日は「日曜日」だよ……?」

「んあッ!」

俺の声で起きた涼音は身体をゆっくりと起こし、目を軽くこすりながら日曜日であることを言ってくる。

いや、そんなはずは……。そう思いながら俺はポケットに入れたスマホを取り出して確認する。

【7:13 ○月○日 日曜日】

涼音の言う通り、スマホにはロック画面の段階で時刻と月日、そして曜日が日曜日を指していた。

やべえ……。昨日の一日だけで俺の中では二日分を過ごしたと勘違いしていたってことかよ……。

「昨日は疲れたから、もう少しゆっくりしないと……。兄さんも、まだ横になって……?」

「いやいやいや、俺はやることあるから。それにこんな状況を親父や奏さんに見られたら——」

「涼音、おはよう。朝食できてるわよ」

「ッ」

最悪のパターンを予測した際、さっそくフラグ回収。ノックの後に開けられたドアの先に、奏さんが立っていた。

起こした身体を再び横にした涼音と、その涼音を見下ろすように半分だけ寝かしている俺。

その光景を奏さんはしばらく見つめた後、凄い笑顔でニコニコしながら言った。

「あらあら、前から薄々と気付いてたけど、もうそこまで行つたのね。ふふっ、でも裕也くん。涼音はまだ未成年、然るべき対策はちゃんとしなさいね?」

「いや、これは——」

「別に隠そうとしなくてもいいのよ? ふう、朝からハッピーな現場を見てしまったわ、雅也さんに報告しなきゃ」

「ちよつと待つて!? それはやめてください!!」

「それはつてことは、涼音とそういう関係であることは認めるのね?」

ふふっ、これからも涼音のことをよろしくね?」

奏さんはそう言い終わると同時に、言い逃げをするかの如くドアを閉めて階段を降りていく。

事の次第がヤベエことになるのは明白。俺は涼音の腕を振り切つて、慌てて部屋を出ようとする。

「すまねえ涼音、ちよつと戦争の火種を止めてくる!」

涼音の腕を無理やり解いたことに若干の罪悪感を感じながらも、俺は親父に報告する気満々の奏さんを追って部屋を出た。

「……………私は兄さんとなら、いいのに……………」



部屋を飛び出し、靴下で滑りながらもなんとかドリフトを決めて俺は一目散に階段を降りていく。

リズム良く、そして足を踏み外さないように。降りた先を右に曲がってドアを開ければそこがリビング。

「奏さん!!」

「おう、裕也ア……。オメエ、そこに座れや」
「ッ」

だが時すでに遅し。リビングにある椅子に座り、両手を組んで待ち構える鬼が居た。

対する奏さんは鼻歌交じりにキッチンで洗い物をしている様子が見受けられるが、まずはこの鬼をなんとかしないとイケない。

俺は威圧してくる親父を前に唾を飲み込み、言われた通りに椅子へと座った。

「親父、これはちゃんとした理由があるんだよ」

「話は聞いてやる。とりあえず、一杯飲もうか」

「雅也さん、朝からお酒はダメよ?」

「あつ、ごめんなさい。じゃあ、珈琲を二つ……」

「ぎゅっ……」

さつきまで君臨していた鬼は一気にポメラニアンのように大人しくなり、珈琲を所望した。

思わずその豹変ぶりに本音が漏れてしまった。

「はいどうぞ、裕也くんは確かブラックよね?」

「ええ、ありがとうございます。それで親父、俺は決して涼音に手なんか出してないからな?」

「お前が安易に手を出すような男じゃねえのはわかってる。だが兄妹とはいえ同じ部屋で、それも一緒に寝た事実はある。俺はな、お前に聞きたいことがある」

「なんだよ……」

「——結婚式は、するの?」

「ブフウツ!!!」

圧倒的意外な質問に、俺は口に含んだ珈琲を吹き出した。てつきり

叱られるとは思ったんだがな。

……いや、叱られるってなんだよ。

「ケホッ……。何を言い出すかと思えば、バカなこと言うなよ。結婚する以前に、俺と涼音はそういう関係じゃねえ」

「ふーん。じゃあ涼音ちゃんが他の野郎に取られてもいいんだな？」

「それは……」

親父の返しに、またズキンと胸が締め付けられる。海斗に言われた時の想像でもそうだが、嫌だった。

だが俺は親父と奏さんの前ということもあり、素直にはなれず吐き返すように言った。

「ま、まあ涼音がそいつと幸せになれるってんならいいんじゃないやねえの？ ほら、兄として受け入れるのも大事だしな」

「兄として……か。はあ……、奏さん。どう思う？」

「そうねえ、裕也くんは肝心なところで素直にならないからあ。でも、そういうところが可愛らしいと思うわ。でもね、時としては兄としての立場を捨ててもいいと思うわよ？」

「それを捨てたら俺に何が残るんですか。とりあえず、この話はもう終わりだ！ 俺は涼音に手を出してないし、今後もそういったことをするつもりもねえ！ 俺とあいつは兄妹、それ以上でもそれ以下でもないんだよ。あいつの為にも……ッ」

ダメだ、考える程に涙腺が緩む。俺は強がりを見せて、強制的に話を終わらせた。

俺の言葉に、親父と奏さんは深い溜息を吐いた。すると後ろに気配を感じて、振り返る。

「あ、あら……。涼音、おはよう。起きたのね」

「……うん」

「もしかして聞こえてたかしら……？」

「……大丈夫。お母さん、喉乾いた……」

階段を降りてきた涼音が、暗い表情で立っていた。喉が渴いたと言って、奏さんは涼音にカフェオレを入れた。

それを受け取って、涼音は二階に戻ろうとした。いつもならそのま

まりピングで飲むのだが……。

「お、おい。涼音……」

「……兄さんの、バカ……」

その声は今にも消えそうで、悲しかった。受け取ったカフェオレを持って二階に上がっていく涼音を、俺は見ていることしかできなかった。

「裕也、お前……」

「今のは完全に俺がやらかしたな……。はははっ、最近なにもかも上手くいかねえや……ッ」

強がりを見せて大きな声で言ったことが仇となったのか。涼音にそれを聞かれ、気分を害してしまった。

しかも怒らせてしまったようで、俺は自己嫌悪に駆られ抑えていた涙腺が緩み、泣いてしまう。

「雅也さん、ちよつと裕也くんをお願い。私は涼音の様子を見てくるわ」

「ああ、わかった」

泣いているところを見られたくない為、俺は下を俯いて腕で顔を覆い隠す。

奏さんは涼音の様子を見に行くと言って二階へ行き、親父は俺が泣いているのに気付いているのか、なにも発さない。

本当は、知っている。知っているというか、涼音の行動や言葉を聞いていれば、好意を抱いてくれているのかもしれないという可能性は前々から薄々と勘づいていた。

だがそれを受け入れると自惚れに繋がって、もし違った時が取り返しのつかないことになりそうで怖かった。

昨日、海斗に言われるまでは隠し続けていた。だが、海斗に言われたことで全てを自覚した。

「……親父ッ」

「……なんだ」

「俺、涼音が居ないからって強がっちゃまった。親父たちの前だからって素直になれなかった」

「そんなの、見てりゃわかる」

「でも、本当は自分の気持ちがあんなのかわかってんだ。昨日、海斗と話してそれが確信に変わったってのもあるけどよ……。俺は涼音のことが、好きになっちゃったんだ……ッ」

「……ふっ。好きになっちゃまったじゃなくて、好きであることに気付いたんじゃないのか？ 前までのお前はずっと何かに没頭してて気づいてなかったかもしれないがな、俺たち以上に涼音を気に掛けて頑張ってたのはお前なんだぞ？」

親父は俺に言う。恋は自覚する前まではこれといった予兆は表にないが、自覚した後一気に押し寄せてくると。

それは感情の奥に閉ざしていたものであって、自覚した瞬間に漏れ出すと。

俺は気付かぬうちに、涼音に思いを寄せていた。じゃなきゃ、ここまで誰かの為に動いたり、考えたりはしない。

それでも俺が涼音に思いを寄せているという事実が、もしかしたら今後の足枷となってしまうのではないかという恐怖。

それ以外にも、世間の目や兄として失格になってしまふのではないかという海斗が言うようにチキンな部分がある。

「涼音ちゃんは大丈夫だ。奏が話をしてくれているだろうからな。だがいっまでも逃げていたら、それこそ涼音ちゃんの為にもならないことを肝に銘じることだな。涼音ちゃんはV T u b e r、お前はそのマネージャー。これから忙しくなる上に、その感情に終止符を打たなくちゃいけないえ。大変だが、その気持ちから逃げていたらなにもかもを失うぞ？」

親父の言葉に、俺はただ頷くことしかできなかつた。言葉にしようとしても、嗚咽が混じってくる。

泣きたいのは、きつと涼音の方なのに。俺が泣いている意味が、きつと間違いなんだろう。

親父のいう事に、俺は涙を拭って考える。これから、どのように行動すればいいのか。

自分の気持ちにモヤモヤができないよう、どう涼音と接すればいい

のかを。

逃げていたら、その先にあるのは後悔でしかない。そんなの、実母を失った時に学んだことじゃねえか。

涙を拭って少し考え、落ち着きを取り戻した後。俺は親父の目をしっかりと見て、言った。

「親父、ありがとうな。認めるよ、俺は神代涼音を義妹ではなく、一人の女の子として好きだっことを。気持ち悪いかもしれねえけど、世間は冷たい視線をするだろうけど、そんなの関係ねえ。これからやるマネージャーの仕事も含め、俺は涼音とも前向き合っつてぶつかってみる。逃げて、後悔しないように」

「生意気で前向きなお前の目に、戻ったな」

「ああ、今回はおかげさまでな。それに、まだまだやらないといけないこともあつて、頑張らねえといけないからな。なんとつて義妹がUberで、俺はそのマネージャーらしいからな。全力であいつを支えて、全力であいつと接する。それが今の俺にできることであり、やるべきことだから」

俺は冷めた珈琲を飲み干して、置く。いつまでもうだうだなんてしてられねえ、やるべきことはこれからだ。

その為にもまず、涼音に謝らないといけない。この気持ちは特に放っておくことはできないから。

海斗の言う通り、世間の目を気にするなんて俺らしくねえ。いつ如何なる時も俺が決めた事なら、周りの意見や概念なんてのはどうだっていい。

俺がしたくてする、俺がやりたいようにやる。結果がどうであれ今を全力でやることに、価値がある。

気持ちを入れ替えた俺は、涼音のいる部屋に向かった――。

#17 私が貴方を大好きになったのは「義妹 s i d e」

私のお母さんが再婚した時のこと。当時住んでいた家から新しい家庭が待っている家に引っ越した時、出迎えてくれたのは新しいお父さんと、今の兄さんだった。

お父さんの方は厳つい感じで怖くて、兄さんの方は見た目こそ不良だったけど、優しい雰囲気があった。

『今日から涼音と一緒にお世話になります。えっと、裕也くんでしたよね。娘と上手くやっていけたら、嬉しいですよ』

『あく、堅苦しいの無しでいきましょうよ。親父からあらかた全部聞いてますし、なにより今日からちゃんとした家族なので』

『ふふっ、そう言ってくれると嬉しいわ。なら雅也さんと普段話している感じでいかせてもらおうわ』

堅苦しいと言って素で話してもらおうように兄さんは言ったけど、その表情は少し複雑を抱えている感じだった。

正直、仕方ないと思った。今まではお父さんと二人で過ごしていた日々、私たちが介入することになるのだから。

そんなお父さんと兄さんに続いて、私とお母さんがすることと言えばまずは荷物の解きだった。

その前に運ぶことから始めなきゃと思って、どこに置いてあるかを聞いてみた。

すると、兄さんが――。

『んあつ、それなら全部部屋に運んどいた。後は荷解きをするだけでいいぞ』

『えっ……？』

『二階に運ぶの大変だろ。だから俺と親父で先に届いていた荷物を奏さんと涼音ちゃんが使う部屋に運んどいた』

なに食わぬ顔、それが当然といわんばかりに言われ、私は驚いてしまった。

普通、こういうのは運ぶことから始めるものだと思っていたから余計に。

私は兄さんに感謝して、自分が使う部屋を案内してもらった。お母さんは一階にある部屋みたいで、お父さんとペアだった。

『此処が涼音ちゃんの部屋だ。一応部屋の掃除とか換気はしといたが、なにか足りないものや不便なことがあったら言ってくれ』

『あ、ありがとうございます……』

言葉は少しキツイ感じがしたけど、嫌な気分にはならなかった。必要箇所だけ伝えて、兄さんは部屋を後にした。

私は部屋で一人、荷解きを始めた。というのも、前のお父さんの思い出が嫌いで大抵は捨ててしまったから、あまり荷物というほどのものがなかった。

だから時間にして一時間も掛からなかった。ある程度、部屋に物を設置できたところで、私は一階に降りてお母さんの手伝いをしようかになって思った。

それから少し休憩を挟んで一階に降りたら、私が手伝う前に兄さんがお父さんとお母さんの手伝いをしていた。

『親父、もうちよつと持ち上げろって！ あんたがサボってる分、俺の方に重心が傾いてんだよ！』

『うるせえ！ もうちよつと年寄りを労われ！ そもそも歳さえ食ってなきや、こんなの一人で余裕じゃい！』

『ああそうですかい、ならサボってやるから当時の馬鹿力を発揮してくれ』

『おいおいおいおい！ バカヤロオ！』

お母さんの部屋にどうやらダンスを運んでいるみたいだった。けどお父さんと兄さんのやり取りが面白かった。

声を掛けるタイミングがなかなか見つからずに見ているだけだったけど、ダンスを運び終えて話しかけるタイミングができた。

『えつと、その……。私も何か、手伝い……ます……。』

『おお、涼音ちゃん。気持ち嬉しいけど、重たいものを運ぶ作業だから大丈夫だよ。奏も段ボールの中の衣類とか整理しちやってるみたいだから、ほんと作業はこれだけ』

『そう、ですか……』

軽いものなら手伝えたけど、重いものは力が無いから役には立てない。頑張って新しい家庭や交流を良くしようとしたけど、肝心な時に役に立てない自分に嫌気が差す。

そんなとき、私を見ていた兄さんがなにかを考える素振りをして近づいてきた。

『そういや冷蔵庫の中身、あまりなかったよな』

『そういえばそうだな』

『なら買い物で食材とか買ってくるわ。さすがに最初からラーメンはキツイだろ』

『あと少しで昼だしな。とりあえず運ぶモノ終わったら、買いに行くか』

『いや、親父は一人でやってろ。俺は行ってくる』

『はあ!? お前、なに言ってるの!?!』

『当時の馬鹿力を発揮しろって。それに、奏さんを前に良い所を見せるチャンスだぞ?』

『……よっしゃあ!! 一人でやってやるわい!!』

『ハッ、単細胞』

調子に乗ったお父さんに、毒を吐く兄さん。すると兄さんは私の腕を優しく掴んで、玄関に向かった。

『えっと、あの……!』

『俺は男で買い物なんてのはよくわからないからな。せめてそこに女の子が居てくれたら、色々と助かる。食べたいものとか、決めてくれたら余計にな』

『ッ!』

違う、これは嘘だ。ラーメン店を開いているから、材料や料理のとぐらいわかるはず。

それなのに兄さんは一人で行かず、私を連れて行こうとしてくれた

のには、きつと配慮があつてのことだと思つた。

運ぶことに力になれない私を見て、きつとこの人は機転を利かせてくれたのだと。

私がなにかの役に立ちたがつていることを察してくれたのかもしれないと思う程に。

『私の気持ち……わかるんですか……？』

『いいや、わからねえ。でも、顔色を見れば大体は予測できる。親父や奏さんから聞いてるからこそだが、きつと涼音ちゃんは少しでも早くこの環境に慣れようとしてくれてるんじゃないやねえの？　ほんとよくわからんけど』

ぶつきらぼうだけど、理解してくれていた。だからこそ、私にでも出来ることを提案してくれた。

私は兄さんの準備ができたあと、車に乗って、近くのスーパーまで移動した。

運転してもらつている最中、さつきから兄さんが左手でギアを変えたりしているの見ていた。

それが少しカッコいいと思つたり、運転に慣れてるんだなあと思つたりもした。

それから私は兄さんと買い物を済ませ、帰った頃にはちようど昼過ぎた辺りだったので昼食に入った。

お父さんとお母さんが厨房で料理をする間、私は兄さんと二人きりで話をした。

その中で、兄さんが過去に本当のお母さんを事故で亡くしていることとかも聞いた。

そのこともあつて、実際に再婚という立場が目の前に来た時、受け入れられなかつたりしたみたい。

正直、私も前のお父さんのこともあつて怖い気持ちや、受け入れられない心情もあつた。

それでも兄さんが受け入れることをしたのは、過去の自分にいつまでも囚われないようにする為と言つていた。

二人だけの空間が続く中、私は兄さんに前のお父さんのことがあ

り、少しまだ怖いという話をした。

『私の前のお父さんはお酒を飲んだら怖くて、いつもお母さんを叩いたり殴ったりしてました……。それだけじゃなくて、他の女の人と一緒になってたり、そのこともあつて正直に言っていると、裕也さんや新しいお父さんがまだ少し怖いです……。』

兄さんやお父さんではなく、正確に言うとう男性がだった。それでもこのことを話したのは、これからお世話になることと、少しでも交流して仲良くなれたらなつて思ったからだ。

私の言葉は続き、兄さんは静かに聞いてくれていた。途中で口を挟むわけでもなく、私の話が終わるまで。

数分と過去のことや自分の事を話した後で、兄さんはその口をゆつくりと開いた。

『そんな話を聞かされたところで、俺は涼音ちゃんの前の親父さんを知ってるわけじゃないから安易に口出しはできない。ただそれでも言えるのは、——よく、頑張ったな』

『ッ!!』

隣同士で椅子に座っていた私と兄さん。兄さんはただ一言、私に向けて頑張ったと言いながら、頭に手を置いた。

それだけのことなのに、私はその一言で涙が止まらなかつた。これまで怖い思いを目の前で見てきたからこそ余計に、頭に乘せられた兄さんの手は優しく、温かつた。

『過去はどう抗っても変えられない。けど、今やこれからは自分次第では思い通りに描ける。それが人生だと、前のお袋を失つて俺がわかつたことだ』

『でも、まだ怖いことがあるの……。それはね、前のお父さんは理解した上での離婚じゃなかつたから、その腹いせに此処に私やお母さんが居ることを知つて、裕也さんたちにも迷惑が掛かつたらつて思うと、怖くて、申し訳なくて、その……。ッ』

『前の親父さん？ンなもん過去だ過去。安心しろ、離婚した腹いせに住所特定して乗り込んできた暁には煮え滾つた極熱のスープをぶっかけて、湯がいてやるよ』

涙を流しながら最悪の展開を考えてしまう私の頭をわしやわしやと撫で、兄さんはそう言った。

人生と一緒に謳歌する以上、自分含めお父さんが守ってやると、目を見て言ってくれた。

『裕也さん、ありがとう……ッ』

『気にすんじゃないよ。まあ最初の段階だし、まだわからないことや不安なことあるかもしれないけど、頑張っていこうぜ』

その言葉から始まり、私は兄さんと少しずつ日々を大切に過ごして互いの事を知っていった。

兄さんの仕草や癖、好きなものや嫌いなもの。趣味や、日々の過ごし方を見たりして徐々に打ち解けていった。

それから半年の月日が流れた頃。その日は兄さんとお父さんの、本当のお母さんの墓参りだった。

正直、私とお母さんは複雑な思いを抱いていたのだと思う。その日を共にして、本当に良かったのかと。

けどお父さんが、是非一緒にこのことで墓参りに訪れた。お墓の清掃をして、新しい花に変えた。

お供えもしっかりして、手を合わせてお父さんが先にしゃがみ込んでお参りをした。

それから兄さん、そして私とお母さんが。心の中で、再婚したお母さんの事をどうか、認めてあげてほしいと祈った。

一通りの流れが終わったところで帰ろうとした時。兄さんだけが墓の前でずっと立ち尽くしていた。

『親父、先に戻ってくれ。もうちよつと、此処に居たい』

『……わかった。俺たちは先に車へ戻っているから、気が済んだら来てくれ』

『……ああ』

『行こう奏、涼音ちゃん。あいつはいつも、ああやって墓の前で駄々をこねるんだよ。いつもな……』

一人の時間を、いつも貰うのだとお父さんは言った。背中を向けて戻る時、背後から微かにすすり泣くような声が聞こえた。

決して人前で泣くようなことをしないと、日常を送る中で知った兄さんの一面。

けど、墓の前で泣き崩れているのがわかった。そんな兄さんの状況に、お母さんは歩きながら口元を抑えて泣いていた。

私もお母さんの姿と、兄さんの気持ちを考えると涙が溢れてきて、静かに泣いてしまった。

『裕也は、ああやって墓参りをする度に後悔してるんだ。上手く自分がラーメンを作れるようになったタイミングで、母親を、瑠実を亡くしたから……。瑠実が死ぬ前に、裕也のラーメンを食べてみたいと言ったことがあってな。けど裕也はちゃんと上手いラーメンを作れるまでは瑠実の口に入れようとはしなかった。それ故に、あいつは……』

運転席でそう話してくれるお父さんは当時を振り返っていたのか、腕で口元を隠してハンドルに額を付けた。

そして、泣いていた。そんなお父さんの背中を優しく擦ってあげてお母さん。

その時、私は兄さんを支えてあげられるようになりたいという心が芽生えてしまった。

兄さんは、あの人は一人にしてはいけない気がした。前向きで優しく、しっかり者と思っていた分、話だけでも兄さんの弱い部分を知ってしまったら、余計に……。

それがきつと、些細なきっかけだったのかもしれない。強い部分も弱い部分も含めて、私は兄さんのことが気になった。

——義兄としてではなく、一人の男性として……。

#18ただそれでも、俺の我儘を聞いてくれ

早朝から涼音を悲しませてしまった後、俺は涼音の部屋の前で少しだけ立ち尽くしていた。

中から奏さんが涼音を宥めている声が聞こえてくるが、俺は気持ちを入れ替える為に深く深呼吸をする。

気付いた気持ち、伝えないといけない言葉。俺は少し、言葉を間違えれば余計に悪化するかもしれないという状況を前に、ノックしてドアを勇気づけて開けた。

開けた先で視界に入るのは、体操座りで丸くなっている涼音と、その前に座って話をしていた奏さん。

「奏さん、お騒がせしました。後は俺が話してみますので、ちよつと涼音と二人にしてもらっていいですか」

「私は兄さんと話すことなんか、無い……ッ」

「お前に無くても、俺はあるんだよ。奏さん、お願いします」

少し強引ではあるが、涼音の意見を押し切って俺は奏さんが退いた場所に胡坐を搔いて座った。

心配そうに見てくる奏さんだったが、しばらくして俺の気持ちを尊重してくれたのか部屋を後にしてくれた。

顔を見せないように体操座りで丸くなっている涼音。こうして見ると、本当に小さい。

少し強く触れてしまえば、壊れてしまいそうな程に。

「まず最初に、ごめんな。俺さ、親父や奏さんの前だからって、少し大きい声でお前のことを否定しちゃった」

「……ッ」

「本当はお前の好意は感じていたし、俺も自分で抱えるモヤモヤがなんなのか、わかってたんだ。でも、どうしても俺の中では兄と義妹と

いう関係が概念として残って、上手く気持ちを伝えることも行動を起すこともできずに居たんだ」

決して嘘は吐いてない。俺自身、涼音の思いや自分の抱える感情がなんなのか、理解していた。

ただ理解するまでに、それを受け入れようともせず、見ようともしなかったからこそ、混乱した。

涼音が関係することに全て兄としての立場を優先した結果が招いたことであると、今になって理解した。

俺はただただ話を聞いている涼音の反応を伺うこともせず、言いたいことを述べた。

「けど、今さっき親父にも話してきたよ。俺は、お前の事が大好きなんだよ。義妹としてではなく、一人の女の子として」

「ッ！」

その時、顔を隠していた涼音が表を上げた。少し目は赤くなっていることから、泣いたのだろう。

……いや、泣かせてしまったという方が正しいか。

「おかしな話だろうと、周りが何を言おうと。俺はお前が大好きになっちまったらしいんだ、涼音」

「……。兄さんのそれは、嘘じゃない……？」

「ああ、嘘じゃない」

「無理、してない……？」

「無理って、なんの無理だよ」

やっと言葉にして喋ってくれた涼音は、不安がるように、俺が無理にそう言っているんじゃないかと心配をしてきた。

親父に話して、奏さんに席を外して貰ってまで無理をする必要性がどこにあるんだと、俺は苦笑しながら言う。

「それに、意識してから気付いたことがある。それは、誰よりも俺を陰で支えてくれていたのはお前だったかもしれないって。そりゃ親父や奏さんもそうだけど、俺が悩んでいたたり、頑張り過ぎている時とかに一番声を掛けてくれていたのはお前だった」

仕事で疲れていた時にいつも『お疲れ様』の一言を言ってくれたこ

とや、風邪を引いて寝込んでいた時に心配で様子見しに来てくれたこと。

それ以外にも、涼音が接してきてくれたことは数えきれないほどにある。

だが俺はそんな涼音の気持ちを考えず、気付くことすらせずただ兄として接していた。

涼音がいつから俺を見てくれていたのかまではわからないが、それでも涼音が想いを寄せてくれていた期間を考えると、少しどうしようもない気持ちに駆られる。

だからこそ、涼音の気持ちに気付いた今。俺は兄としてではなく一人の男性、そして涼音を一人の女の子として接して面向かう必要性がある。

ただ、それでも――。

「俺もお前のことが大好きだ。もちろん、改めて何度でも言うが一人の女の子として。でも今は、まだ付き合えない」

「えっ……っ！」

「悪い意味で捉えないでほしい。こんな形で、俺は涼音と付き合いおうと思えないんだ。だって、これからまだやらなくちゃいけないことが沢山ある。涼音はV T u b e r、俺はそれを支えるマネージャー。今後重要視される立場の前に、付き合ってもきつと俺としてはダメな気がする。なにより、こんな告白で涼音が想いを寄せてくれた期間を埋め合わせるようなことをしたくない」

こんな都合がいいと言われても仕方ない状況で、俺は涼音の気持ちに応えたくはなかった。

ちやんとやりたいことをやりきってないこともそうだが、それらを成し得た後に、自分の気持ちを改めて整理をして、兄としてではなく一人の男性として涼音を受け入れられるような環境を作り上げた上で、応えたかった。

そう涼音に、今の俺の気持ちを嘘無く話した。いわば、これは俺の勝手な我儘に過ぎない。

それでも涼音はちやんと俺の目を見て、聞いてくれた。

「……わかった。でも、兄さんに一つだけ約束してほしい……」
「なんだ」

「私の気持ちを知ったからには、私だけを見てほしい……。他の女の子と接しちゃダメなんて言わない……。でも、目移りしてほしくない……。ちゃんとお互いにやりたいことをやって、しつかりできた時、改めて私は兄さんの答えを聞くから……」

俺がもし、涼音の立場だったら同じことを言うかもしれない。不安で、仕方ないのだと思う。

だが俺は、親父たちにも話して、なにより涼音の前で啖呵を切ったようなもの。

目移りなんて、絶対にしない。

だがそれを保証、証拠を出せない。それでも今涼音が抱える不安を少しでも解消する為に俺は大胆な行動に出た。

「涼音、ちよつといいか」

「なに、兄さん——。ツ!!」

涼音がちゃんと聞き返す前に、俺は涼音を胸に抱き寄せた。保証も証拠も無い、だがそれでも……。

「心の中では思っても、口で軽々と絶対なんてことは言えない。人生なにがあるか、わからないからだ。とはいっても、保険として残す言葉じゃないからな。証拠が無い以上、俺が涼音の前で出来る行動といえばこれしかない。今はまだ、これで許してほしい。俺の勝手な我儘、そしてどうしようもない頼みを……」

壊れないように、不安を抱かせないように。俺は両手で優しく抱きしめる。

自分でしておいてなんだが、ドキドキする。感じる涼音の体温が余計に鼓動を早くする。

俺の言葉に、涼音も腕を回して抱き着いてきた。これが、本当はいけない恋愛だろうと知ったことじゃない。

そして、気持ち悪いと言われても知らねえ。好きだと気付いてしまった以上、取り返しも出来ない。

「……兄さんが自分から抱きしめてくれたの初めてだね。うん、今は

これで許してあげる……。兄さんの気持ちが冷めないように、私も頑張る……。ありがとう、兄さん……」

「……お互い様だ」

頭を優しく撫で、しばらく俺たちは抱きしめ合った。そして互いの気持ちを吐き出したところで和解することができた。

その後色々駄弁りを続けていたら、時間が過ぎていた。俺はマネージャーに関する勉強、そして今後の予定を組み立てる為に涼音の部屋を後にした。

それから昼前になった頃。今後の予定をまだ組み立てているとスマホが振動し、画面には『赤城翔太』の文字が浮かび上がった。

「んあつ、もしもし」

『神代の兄貴！ ロックンロールツ!!』

「うるせえ!!」

鼓膜が破れる勢いで叫び散らかす翔太くん。というかロックンロールの意味知ってるのか？

いや、これはきつと翔太くんなりの挨拶なのだろう。だとしてもおかしいが。

「それで、どうしたんだ？」

『聞いてくたせえ！ 神代の兄貴、昨夜涼音と配信したつスよね!!』

「まあ、そうだが。てか何で知ってる？」

『ああ、神代の兄貴が瀬川さんと打ち合わせしてるときに涼音から教えてもらいました。……じゃなくてー!』

「んあつ？」

『今すぐにツイッターのトレンドを見てください！ ヒスイのお兄さんでトレンド入りしてるつスよ!!』

「……。はあああああああああああああああああああああああああああああああッ!」

『うるさっ!!』

翔太くんの言葉に最初思考停止した俺だったが、その言葉を理解した瞬間に叫び散らかした。

慌ててツイッターを開いて言われた通りにトレンドを見ると、確

かにそこにはヒスイのお兄さんで乗っていた。

俺がその状況に唇を噛み締めていると、部屋のドアがいきなり開いて涼音が入ってきた。

「に、兄さん……!! トウイッターで、兄さんが……!!」

「あ、ああ……。今、翔太くんから聞いた……」

入ってきた涼音の言葉に俺が返すと、今度は翔太くんの通話を上書きするように瀬川さんから電話がかかってくる。

「はい、もしもし——」

『ちよつと裕也さん!? 貴方、トウイッターで——』

「いやそれももう三回目! 一分も経たないうちに三回も聞きましたから!!」

怒涛の押し寄せに俺はツツコミを入れ、混乱する思考に飲み込まれてしまった。

——なぜ、俺がトレンド入りしてんだ……?」

#19トレンド入りした理由がまさかの切り抜き？

翔太くん、涼音、そして瀬川さんの三人からトレンド入りしているとの報告を受けた後、俺は原因を探った。

するとなんでも、トレンド入りしたのには「切り抜き」と呼ばれる言わば切り抜き職人という者によるものだった。

しかし彼らは害悪な存在ではなく、寧ろV T u b e rにとって知名度を広げてくれるメリットを持つ故に貴重視されている。

そんな切り抜き師のチャンネル名は『全裸でヒスイ推し』という名前だけ見ればヤベエ。

だが投稿されている涼音の切り抜き動画はしつかりと丁寧な編集された上、概要欄に涼音が使用しているヒスイのトゥイッターのアカウント、そしてチャンネルへのリンクが欠かさず貼られている。

話がそれだが、そんな『全裸でヒスイ推し』さんによる最新の切り抜き動画のタイトルがこれだ。

【脳死で妹のリスナーに質問返しする兄貴】

至ってシンプル、それでいて意味が凝縮されている。だが問題はそこじゃない、俺は昨日の夜の記憶がほぼ無いに等しい。

涼音と並んで配信をしたこと以外、ろくに記憶が無い。そう思い恐る恐る昨日の自分はなにをやらかしたんだと、翔太くんと通話を繋げ、隣に涼音を座らせた状態で動画をクリックして見てみることに。ちなみに、瀬川さんは呼び出しを受けたようであけてる。

『えっと、せっかくだし兄さんに質問したい人とかいるかな……』

『いや、メインはお前だろ』

『そうだけど、コーナーとしては成り立つかなって……』

『俺をコーナー利用するな』

『えへへ……』

…可愛い

…ヒスイの兄貴に質問かあ

…聞きたいこととりあえず聞いていいやつ？

『あ、うん。けど答えるかどうかは兄さんが決めていいよ……』

『じゃあ全部黙秘で』

『さすがにそれは……』

…黙秘権の乱用は草www

…とかいつて、実は答えてくれるやつ

…ヒスイちゃんが上目遣いで見ればチョロくなるだろ

…それただのシスコンじゃねえかwww

『誰がシスコンだ、アホか』

『ちよつと兄さん、口悪いよ……！』

…ヒスイちゃん、大丈夫。これがお兄さんの素なんだろうな

…寧ろこれぐらいがフレンドリーで有難いwww

…アツトホーム全開な感じがしていいよなwww

…私一人っ子だから実際に兄が居たらこんな感じなのだろうか

『皆がそういうなら、いいのかな……？』

『ただただ眠い、それだけはハッキリ答えられる』

『寝落ち、する……？』

『するわけないだろ、公開処刑じゃねえか』

…間違いないwww

…妹に対しても変わらない態度が逆に好印象w

…とりあえず書き込めば答えてくれそう

…質問を一言で返す系にしたら？

…なるほど、じゃあ質問。お兄さんって何歳？

『物理で抵抗、21歳』

…本当に答えたwww

…これはいけるぞwww

…物理で抵抗は兄貴さんらしいw

…彼女はいますか

『年齢||彼女いない歴』

：じゃあ俺が兄貴貰うわw

：は？ 俺のだし

：いや、ヒスイちゃんが怒るぞ。たぶん会話からするにヒスイちゃんの方がブラコン

：それはありえるかも

：お兄さん、ヒスイちゃんをください

『どこの馬の骨とも知らん奴にやるわけないだろ』

：厳しいww

：そりや当然だわなww

：これはガチ恋勢、折れますねえ

：私、お兄さんのガチ恋勢になります

『あつ、兄さんは渡さないよ……』

：ひえっ

：冷たい低い声、初めて聞いたww

：ヒスイちゃん、そんな声出るんかww

：じゃあ両方とも狙えば解決じゃね？

：それ採用

……なんだ、この切り抜き。そしてなんだ、この動画で話している内容は。

淡々と進んでいく質問とその返し、昨日の俺はこんなぶっきらぼうに脳死で会話していたのか。

しかも包み隠す気ゼロじゃねえか。個人情報、自分で漏洩しているようなものだし。

それから数分と見続けるが、あまりの眠たさに半分目を閉じていたことを思い出す。

涼音の配信、そして一緒に居るからこそ頑張っではいたが、眠気に勝てずうとうとしたままにやってたしなあ……。

涼音、そして俺と視聴者たちのやり取りがあまりにも距離詰めすぎているのが伺える。

しかしそれが逆に受けがよかったのか、視聴者の中に指摘するものはいなかった。

「ああ、やり直してえ……!!」

『でも寧ろ神代の兄貴らしくていいと思うっすよ！ それに涼音はチャンネル登録者数15万人越え、切り抜きされれば当然の流れみたいなもんっすよ』

「とは言ってもなあ……」

「あつ……」

「どうした、涼音」

「チャンネル登録者数のことなんだけどね、その……。今さつき確認したら、17万人到達してた……」

「ほああ!？」

『それマジで!？』

登録者数の話題になった時、涼音が俺の袖を引っ張って17万人到達していると報告してきた。

なんでも昨日確認した時点では15万と2千人ちよつと。だが切り抜きされた後に、17万突破とのこと。

だが俺は驚きながらも、冷静に考える。いくら切り抜きとはいえさすがに株上がりし過ぎじゃないかと。

【全裸でヒスイ推し】さんの登録者数が1万とちよつと。仮に他の人が見たとしても、ここまで上がるものなのか？

トレンド入りを含め拡散されたことで涼音の知名度が広がったことには理解できるが、見たからといって誰しもがそれにハマるとは限らない。

「なあ翔太くん。切り抜きの恩恵って5000人以上も登録するっていう事例ってあったりするの？」

『いや、聞いたことも見たこともないのでわからないっすね。オレもそこに引っかかるんでトゥイッターで色々詮索してるんですが決定的なもんが無いっすね』

「じゃあ普通に涼音の配信を見て、純粹に登録してくれた人が居たっていう感じなのか」

『まあそう考えるのが妥当——。ツ!! え〃え〃ツ!?!』

「ど、どうしたの……翔太さん……?」

互いに詮索していると、通話越しに翔太くんがドスの効かせた驚愕を上げる。

それに対して涼音は少し驚き、問いかける。

『神代の兄貴、涼音……。根源見つけたっス……。』

「んあつ、なんだった?」

『——音神 旋律〃さんが引用リトウイトしてらっしやるツ』

「ツ!! え、ええ……!?!」

「えつ、誰だそれ」

「に、兄さん知らないの……!?! 凄い人だよ……!?!」

翔太くんと涼音がある人物について盛り上がる中、俺だけがわからない為に取り残される。

だが二人曰く、音神旋律というVTuber名で活動している少女らしく、なんとDream Lifeに所属しているとのこと。

いや、逆にそっちの方が驚きなんだが。

『Dream Lifeにおいては古株でNo. 2に位置する人なんスよ。配信スタイルはゲーム中心で、その中でも音ゲーに関してはVTuberの中でも右に出る者は居ないぐらいヤバいっス』

「そうなのか。ゲームの中でも音ゲーは集中しなきゃいけないからあまり受けが良くない気がするけど、それでやっていけるのは普通に凄いな」

「それだけじゃないよ、兄さん……。その人の実力はゲームもさながらだけど、チャンネル登録者数もかなりなんだよ……」

「そんなにか?」

『チャンネル登録者数76万人っス』

「ん〃あ〃ツ!?!」

驚愕過ぎて先ほどの翔太くんみたいにドスイ声が出た。音ゲーを中心に活動していると言っても、まさかそれ中心でそんなに登録者数が居るのか、疑わしい程だ。

もちろん雑談もありきみたいだが、ほぼ音ゲーで成り上がったと

言っても過言ではないらしい。

『ただ旋律さんって癖が強いつて噂なんスよね。マイペース過ぎると
いうか、性格に難があつてマネージャーが付いてない状態なんスよ』
「えっ、それは契約上大丈夫なのか？」

『本来はダメっスよ。けどそこは瀬川さんが代役としてマネージャー
の仕事をしてカバーしてるみたいっス。なんでも、我儘というよりも
周りに左右されないというか……。オレも絡んだことあるんスけど、
5分も持たずに心折れました』

「翔太くんが……？」

元氣、そしてコミユカの権化と言えるであろう翔太くんでも苦戦し
て断念するとは、どれだけ癖が強いんだその人は。

「とうかこの話を聞いて思ったのだが、呼び出しを受けて抜けた瀬
川さんはもしかして……。」

新しいV T u b e r、そしてその性格の癖強さ。もし会社で出会う
ことがあるなら、気を付けるべきかと今の内に気を引き締めた。

——それからしばらく三人で雑談し、解散した頃。昼食を終え部屋
に戻ったタイミングで、瀬川さんから電話が。

俺は応答のボタンを押し、耳にスマホを当てた。

『あつ、もしもし。瀬川です……。裕也さん、大変申し訳ありません
が、明日ってこちらに来ることできるでしょうか……。』

「明日ですか？ 涼音は学校なんで、連れていくことできませんよ」

『あつ、いえ……。裕也さん、お一人だけでいいので……』

「俺は別に構いませんが……。もしかして、なにかありました？」

『……なにか、ですか、ふひ、ふひひひ。ふへへへへへへへへへ
へッ！』

「ヒュッ……」

地雷を踏んだのか、あるいは聞かないほうがよかったのか。唐突に
電話越しに聞こえる瀬川さんの壊れた笑い声に、ゾツと身を震わせて
しまった。

一体、なにがあつたんだ……？

#20 バグじやないかと思うエンカウント

後日、俺は会社に向かう為に早起きをした。風呂に入って目を覚まし、リビングに居る親父と奏さんに朝の挨拶。

早起きと言っても7時だが、俺にとつては早いもんだ。そして俺は奏さんが作ってくれた朝食を食べる。

白飯に、大根とネギの入った味噌汁。さんまの塩焼きに、たくあん。やはり俺はパンより、こつちだな。

「なあ、裕也」

「なんだよ」

「パンにラーメン乗つけたら美味しいと思うか？」

親父の言葉に、俺は箸で掴んでいたたくあんを落とす。

えっ、その質問にはどういった意味があるんだ？

ふざけて答えるなら『やってみればいい』と言えるが、真面目に答えるなら『定年退職』の四文字を叩きつけたいたい所だ。

結局のところ俺は答えずに、何も聞かなかつたように食べるのを再開する。

——しかし。

「無視すんなよ、裕也。俺は悲しいぜ」

「いや、朝からボケ老人の相手する風習は俺には無い」

「実の父親に向かってボケ老人だア？ ぶっ飛ばすぞ」

「めんどくせえ！ ったく、一体何があつたんだよ。別に今まで黙って飯食つてもなにも無かつただろうが」

やけにダル絡みをしてくる親父に、最初は二日酔いでもしてんのかと疑ったが、そういう感じではなかった。

故に、なにか悩み事でもあるのだろうかと思は聞き返す。

「いや、実はさ……」

「おう」

うことはない。

悪いのは親父、全ては親父。急いで朝食を掻き込んだ後、立ち上がって地雷を埋めていく。

「親父が欲求不満で○俗に行くみたいなので、俺から制裁を食らわしときました。後はお願いします」

「あらあら……ッ」

「ええ？ そんなあからさまな嘘を吐くの？ 奏、これは違うんだ。あいつの戯言だア!!」

「でも、裕也くんは嘘を吐かないと思うからあ」

「あれ、俺より裕也の意見を聞き入れるの？ あれれ？」

「お話、しましょうね？」

すまない奏さん、嘘を吐きました。けど後悔はしてません、親父の関係だから。

俺は貴重品の入ったカバンを背負い、家を出た。

親父？ その後は知らん、みっちりシバかれとけ。

それから俺は二時間移動し続け、会社に着く。前回は涼音も居たから休憩を挟んだが、今回は無しで飛ばした。

それだけに会社の駐車場に止めた時、結構ケツと腰が痛くて苦い顔をした。

車にはしつかり鍵を掛け、前に瀬川さんから預かった許可証を首から下げ、中に入っていく。

するとフロントにはあの時の受付担当の人が居た。

「この前は怖がらせてしまつてすいません。神代裕也です、今日は瀬川さんに呼ばれてきました」

「あつ、どうもご無沙汰しております！ 私の方こそ、その節は取り乱してしまいすみませんでした！ 今回の件ですが、瀬川さんからお聞きしております。前に向かった部屋でお待ちしていると思いますので、向かってみてください！」

どうやら前に瀬川さんが説明してくれたこともあり、フロントの人と和解できているようで安心した。

俺は言われた通り、軽くお辞儀をしてからエレベーターを利用して

前に訪れた部屋へと向かった。

確か、こつちだったよな。

やはり会社がつっかりしているだけあって、いつ見ても掃除が行き届いていて、綺麗だ。

しかしその反面、一步間違えれば迷子になりかねない。流れる的に知った感じで来たのはいいが、少し不安だな。

ともあれ、当時に出向いた部屋らしきところに着いたので一応ノックして確認する。

「すみません、神代裕也です」

ドア越しというのもあって、俺は少し大きめに名前を言う。しかし中からは何も聞こえない。

まさか部屋を間違っているのかと思うも、それでもしばらく待つていても返事が返ってくることは無かった。

絶対に違う気がする。そう感じた俺は頭を掻き、改めて探してみることにした。最悪、誰かに聞いてみればわかるだろう。

その場を離れようとした時、何も聞こえなかった部屋のドアがゆっくりと開き、女の子が顔を出した。

「ごめん、ゲームしてたばい。なにか用事でもあったと?」
「えっ、いや……。部屋間違えたみたいで、申し訳ない」

水色の髪の毛に眼鏡、そして首に下げているヘッドフォン。色々と独特な女の子に、俺は部屋を間違えたこともあって小さく頭を下げた。

俺は女の子に一言掛けた後、スマホを取り出して瀬川さんに掛ける。しばらくコールが鳴った後、電話越しに瀬川さんの声が聞こえた。

「あ、もしもし。裕也ですけど、今会社に着いて三階に来たのはいいんですが部屋がわからなくて……」

『あ、そうなんです。わかりました。今つてどの辺にいますか?』

「エレベーターのあるホールに戻ってきました」

『ではそちらの方に向かうので、少し待っててください』

そこで電話は途切れる。瀬川さんには二度手間を掛けてしまい申

し訳ない気持ちになる。

俺はホールにある椅子に座り、深い溜息を吐いた。

「——お兄さん、レイちゃんを知り合ってたと?」

「ああ、つい二日前に来て知り合ってたんだ。……って、なんでついてきてるんだ!?!」

自然に、それも友達感覚で話しかけられたことで普通に返答してしまっただが、俺はさっきの女の子が居ることに気付く。

俺の驚いた行動にしばらく女の子は目を見開かせていたが、時間差で口元を緩ませ、小さく笑った。

「そんな驚かなくてもいいのに、面白い反応するとね。あはは!」
「……ッ」

おい、これは一体どういう状況だ?

どこぞの兵長の如く自分に問いたのだが、わからない。俺の反応がやけに気に入ったのか、女の子は人差し指で頬を突いてきては弄んでくる。

「あ、裕也さん! ……って、げえッ!?!」

そこに後から来てくれた瀬川さんだったが、美人から出るとは到底思えない濁った言葉が出た。

「な……なあ……! ……なんでセンリさんが一緒なんですか!?!」

「センリ……。ああ、君の名前か」

「そうばい。如月旋梨、それが私の名前。それはそうとレイちゃんも失礼とね。人を前にげえ!?!なんて、品がないとね」

「裕也さん、今すぐにその子から離れてください!!」

「えっ」

両手を前に出してこっちに来るようジェスチャーする瀬川さん。俺は犬じゃねえんだけど。

この二人がどういう関係なのかわからないが、とりあえずあの瀬川さんが焦っているのはきつと珍しい。

俺は立ち上がり、センリちゃんから離れようとした時。後ろから首に手を回され、抱き着かれた。

——そして、一言。

「とりあえず私と出会ったら勝負。お兄さん、見た感じゲーム上手そうに見えるばい。やけん、ちよつと相手してほしいばい」

「ひえっ……」

ドツドツドツと心臓の鼓動が早くなる。これは決して、涼音の時のように感じたドキドキではない。

そう、言うなれば恐怖による鼓動の速さ。耳に囁かれた言葉は狙いを付けた獲物を逃がさない肉食動物……。

ちなみに昨日、翔太くんの話聞いて出会った時に気を付けておこうと思った相手がセンチちゃんだったことは、後に知ることであり、エンカウント率の高さに打ちひしがれるとはこの時まだ思いもしなかった。

「ああ、裕也さん……。ご愁傷様です……。ッ」

#21 癖の裏にある興味の発端

旋梨ちゃんに連れてこられた部屋は、俺が最初に間違えてしまった元の場所だった。

戻る道中、俺は腕を引かれ、何故か抵抗ができなかった。対して瀬川さんは後ろを歩き、ずっと念仏を唱えるかのように『ごめんなさい』を繰り返していた。

俺は今から、なにをされるんだろうか。

「改めて、私は如月旋梨。ミライバ株式会社のDream Lifeに所属しているVTuber、音神 旋律ばい。普段は四階の事務所じゃなくて三階にあるこの部屋を利用して、ゲームしたりと退屈を凌いでるんよ。やけん特に一人でやるのに少し飽きて、色んな人に声を掛けて遊んでもらってるんやけども、如何せん腕鳴らしにもならんばい」

「……ッ！ ちなみに、赤城翔太って知ってる？」

「赤城翔太……。ああ！ 赤髪、音楽をばり好いとる男の子ばい。以前少し絡んだことあっちゃけど、それ以降はなぜか絡むことがなくなってしまうたけん。なんでだろ……」

「なにかした、とか」

「んー……。ばり必死に話しかけてきたっちゃけど、あまりよくわからなかったから『もういいばい』って返したぐらいけんね」

ダウト、それ原因。翔太くんのコミュニケーションがない以前の問題だった件について。

余裕で脳内再生できる。自分は新人、そして先輩に対して必死に話しかけようとする翔太くんの姿が。

それなのに、たった一言。それも、『もういい』は確かに心折れるよな。

今こうして俺は当時の理由を聞いたからわかるが、翔太くんの視点からするとただただ否定されただけだもんな。

土産話に、翔太くんに真相を教えよう。

「さて、そろそろ遊ぶばい」

「俺は別にいいが、瀬川さん……」

「私の事はお気になさらず。今回呼び出した件は彼女の関係でもあるので。それと裕也さん、死なないでください」

「えっ」

元々は瀬川さんの用事で出勤という形を取ったのだが、如何せん遊び始めても大丈夫なのだろうか。

そう思い瀬川さんに聞いてみると、思う存分に付き合ってくださいという視線と、不穏な言葉だけを残した。

——それから、一時間後。

「真っ白に……燃え尽きたぜ……ッ」

「裕也さああああああああああああんツ!!!」

身体に力が入らない、頭が回らない。溶けるようにうつ伏せで倒れる俺に、瀬川さんが駆け寄る。

挑まれたのは音ゲー、降り注ぐノーツを目で追いかけるのがやっとで、コンボが続かねえ。

というか、得意部門で挑んでくんじゃねえよ。

「あはは！でもお兄さん、筋はなかなかいいばい。私相手に粘れたのは普通に自信持つてよかと？」

「そりやどーも……」

ろくに音ゲーなんてしたことがない。寧ろ、ゲーセンで遊んでたのはどちらからというストリートファーターだわ。

ジャンルが違うのもそうだし、環境が違いすぎる。しかし、せめてコンボは繋がったかった。

「ともかく、満足はしたか？」

「んー、まあまあやけんね。必死にコンボ繋げようとするお兄さんの

姿、ふふっ……面白かったばい」

純粹無垢な笑顔、楽しんで頂けたならなによりだ。その後少し休憩を挟んだ時に聞いたが、勝負を挑んだのは本当に暇だったからという理由だったようだ。

しかし俺はその中で、翔太くんから聞いてた情報として『癖が強い』ということと、瀬川さんが恐れる意味がわからなかった。

今の所、旋梨ちゃんに抱いている印象はゲーム好きの普通の女の子というぐらいだが。

だがソファアに座りくつろいでいる俺に、旋梨ちゃんの癖が強いとされる部分が少し表に顔を出す。

「お兄さん、私のモノにならないと？」

「……んっ？」

静寂の中、耳に聞こえる幻聴。否、幻聴であると思ひ込みただけである。

旋梨ちゃんから放たれたその言葉に思考が停止する中、俺は無意識に隣に座っていた瀬川さんに視線を送る。

すると瀬川さんは、俺の耳に口を近づけ小声で伝えてくる。

「ちよつとこの子、色々とおかしいんです。なんていうか、自分が興味を持ったものを欲しがったり、逆に興味ないものに関わったりするのが嫌いなようで……」

「翔太くんから少し聞きましたが、マネージャーが付いていないというのもそれが原因ですか」

「まあこれに限らずではないですが、大方そうです。過去に半ば強制的にマネージャーを付けたことあるのですが、興味ないモノに指示されたり、ペースを乱されたくないという理由で配信すら行わなくなったりしたこともしばしば……」

「ただのわがままっ子じゃねえか……」

「それでいて尚、会社が彼女を雇用し続けるのには知名度の高さも然り、会社自体に貢献している売り上げが大きく関わっているので目を瞑っているというのが現状です。今は私がこの子の代わりにマネージャーをしているので大丈夫……とは言い切れませんが、今は何とか

なっている感じなんです」

多少遊んで休息を取っている旋梨ちゃんは、クッキーを食べることに夢中で俺たちの会話を聞いてない。

瀬川さんから聞かされる目の前の子の独特な癖に、軽く同情すると、尊敬の意を込める。

そもそもマネージャーについては前に瀬川さんから聞いているが主にスケジュール管理に加え、体調管理。

だがそれを裏手に考えれば、マネージャーの組んだ予定通りに動かなくてはならないということでもあり、それがきつと旋梨ちゃんにとっては縛りとなって好ましく思えないのだろう。

それから他にもマネージャーに対しての態度は配信をしなくなる以外に、反応が薄かったり、引きこもったり、挙句の果てには会話をしなくなるという始末。

……やはりわがままっ子じゃねえか。

「でもそうになると、俺は旋梨ちゃんに興味を抱かれたことになりませんが、正直わからないです」

「きつと裕也さんの雰囲気、じゃないですかね。他にもなにかありそうですね、心当たりは？」

「いや、ないです。そもそも初めて会ったので」

当たり前だが、俺に心当たりなどあるわけがない。初めてこの会社で会ったぐらいで、他にはない。

雰囲気と言われても、自分自身のそういった部分を理解できるわけもなく、ただただ謎が深まるばかりだった。

「んんっ！ クッキー美味しかったばい。それでお兄さん、返事はくれんと？」

「ああ、悪いが却下だ。そもそも出会って間もないのに、その距離の詰め方はいえなと思うている。すまないな」

「ッ！ ……まあそういうと思ったばい。けどお兄さん、ハッキリと物事を言うけんね。他人に嫌われたり、怖がられたりするかもしれないと思っただ事ってない？」

「普段の喋りで嫌われるのならそれまで、寧ろ怖がるなら絡まなければ

ばいいだけだろ。それに、他人の評価なんてのは仕事と客以外では気にしないようにしてる。特に、最近はやな」

涼音と気持ちを言い合った際、世間の評価を気にしないようにしたのは事実だ。

俺が俺である為に、それが無理なら必要以上に絡まなければ済むだけの話だから。

俺の言葉に少し驚愕と言わんばかりに目を見開く旋梨ちゃんだったが、やがてその口元は微笑む。

「とりあえず今は諦めるばい。やけん私は、こう見えて狙ったお気に入りには手に入れない質やけんね。——覚悟、しててほしいばい」

なにがどうして、そう俺を狙うのか。そんなの理解することも難しいし、それはきつと旋梨ちゃんにしかわからない。

ただそれでも何かを決意するかのように部屋を後にする旋梨ちゃんを見送って、その場には俺と瀬川さんだけが残った。

「……やっぱりお兄さんは覚えてないけんね。それでも、私は覚えてるばい。お兄さんが作ってくれたラーメン、そして……。ふふっ」

#22 準備は万全にしないと後に響くもの

旋梨ちゃんが出て行った後、俺は場が落ち着いたこともあって瀬川さんと改めて話をした。

切り出しはまず最初に、電話でも掛けた通り涼音の配信が比較的バズったことに関して。

翔太くんが言ってたように、音神 旋律こと如月 旋梨ちゃんによるリツイートが主に原因だったと話を聞いた。

切り抜きだけでは到底ありえない伸びだった為に、大方それが原因だろうと踏んでいた。

瀬川さんが言うには旋梨ちゃんの疎かな行動を注意、及び止めることができなかったことに対する謝罪だった。

というのも、各書類に目を通してサインしたものの、涼音が正式に活動するのは一週間後の夏休みから。

それまでは内密にという話だったが、今回の件で目立ち過ぎたが為に急遽、涼音が Dream Life に所属して活動することの表明をしたそう。

涼音自身、企業勢としてやっていくと配信で先行報告はしたが、どの企業でどのライバークラウドに所属するかなんてのは控えていた。

しかし事が過ぎてしまった以上、元に戻すことはできない。頭を下げてくる瀬川さんに、俺は大丈夫ですと返す。

それからは改めて旋梨ちゃんのことを聞き、今後の俺と涼音の活動についても教えてもらった。

俺がマネージャーとして活動するのは明日から。午前の部と午後部の部に分けて、三日間特別講習を行う。

そこで世話になる他のマネージャーとの交流も含め、瀬川さんによる特別講習を受けることになった。

必要な持ち物及び、事前に集合時間を聞き出した。

それから涼音の活動についてだが、先ほども言ったように一週間後の夏休み突入と同時に始まる。

それまでに自分が使用する事務所の管理、必要最低限のモノを揃えることをしなくてはならない。

それに、三日間の講習と交流があるなら、会社の内部の把握などもしたいから泊まり込みの方がいいかもしれない。

瀬川さんと話し合いをする中で、俺は自分のスケジュールと泊まり込みの許可を問う。

すると瀬川さんは許可をしてくれた。その他にも色々とするべきこと、揃えるべきものの詳細を聞いた後、お開きとなった。

「……それで、俺の事務所は待ち合わせの集会所じゃないんだが」

「そんな固いこと言わないでくださいよ、神代の兄貴！」

「毎回毎回お兄ちゃんがすみません、裕也さん……」

昼を迎える前の時間、俺は楽屋に戻って必要なモノが何かをまとめている時。

楽屋のドアがノックされ開けてみれば、案の定そこには赤城兄妹が居た。

なんでも午前のライブ配信を終えたばかりで、休憩時間とのことだったが、何故俺が居るのがわかったのか不思議だ。

そう思い聞いてみると、廊下で出くわした瀬川さんから聞いたとのこと知ったようだ。

「もはや腐れ縁だな、俺たち。というか翔太くんはわかるとして恵果ちゃんは学校とか大丈夫なのか？」

「私は通信制に切り替えたので大丈夫なんです。涼音ちゃんと同じ通いながらにしようかなって思ってたんですけど、それだと曲作りする時間を割くことになるので……」

「やりたいことの時間を増やすのは良い事だが、学生としては険しい判断をしたな……」

「ちなみにこいつは通信制に切り替える前は学年トップだったんで頭はいい方っスよ」

「マジ?」

「べ、別に勉強をちゃんとしてれば普通の事です……ッ」

俺と翔太くんの反応に、恵果ちゃんは耳元の髪の毛を指で少し上げながら照れる。

いや、それを普通と言える時点で天才の発言なんだよな。

「勉強と言えば、俺も明日から講習だな」

「講習ってマネージャーのっスか?」

「ああ、三日に分けて瀬川さんが教えてくれるらしい。涼音をしっかりと支える為にも、勉強頑張らねえと……」

「神代の兄貴、雰囲気的にも勉強苦手そうっスもんね!」

「お兄ちゃん!」

「いや、大丈夫だ恵果ちゃん。翔太くんの言う通り、俺は勉強があまり得意じゃなくてな」

「神代の兄貴は学生時代どういった日常送ってたんスか?」

「あ、勉強の方じゃなくて日常の方を聞くんか」

まさかの日常を聞いてくる翔太くん。そんな俺の学生時代を、なぜか恵果ちゃんも気になると言わんばかりに目を輝かせる。

俺の、学生時代……か。主に海斗としか絡んでなかったな……。

『おい裕也、○○高の奴らが呼び出してんで。どうする?』

『完膚無きまでにブツ殺す』

『おつ、あの子ナンパされてんじゃん。助ける?』

『ストレス発散にブツ殺す』

『そういや○○の奴が虐められてるって聞いた?』

『ダチに手を出した奴は骨も残らずブチ殺すツ!!!』

脳内に過る中学、高校の記憶。お袋を亡くしてから荒れに荒れた俺は海斗と共にして暴れていた。

故に、黒歴史となって鮮明に頭の中で映像化される。思い出してお

いてなんだが、自分がガキ過ぎて憐れんでしまう。

「いつそのこと殺してくれ……ッ」

「えっ!? ゆ、裕也さん!？」

「神代の兄貴が急に弱々しくなった!？」

軽音部に入っていると聞けば普通なのかもしれないが、学生時代は中学以降不良として生きてきた。

いや、一応勉強はしていたんだが頭に入ってこずに、成績は卒業できるかできないかというギリギリだった。

思い出したくないことだったかもしれない、と恵果ちゃんが気を利かせてくれたおかげで、話さずには済んだ。

「と、とにかく勉強なんてのは話を聞くのが肝心っすよ! それに神代の兄貴の学生時代がどんなだったかなんてのは知らないっすけど、きつと大丈夫っすよ!」

「そ、そうですよ! 大事なのは過去じゃなくて今です! それに裕也さんならお兄ちゃんが言うように大丈夫です! やれば、出来る子です!」

「おい恵果ちゃん、それ子供を宥める時に使う言葉だ」

必死にフォローしてくれるのは有難いが、なにが悲しくて年下の女の子にあやされなきゃいけないんだ。

聞こえるか聞こえないかの声量でツツコミを入れ、俺は気持ちを切り替えて家具や家電製品を Aruzon で調べる。

湯沸かしのポットがあったり、マッサージ機などはあるが他にもバスタオルやシャンプーなど日用品も揃えないといけないな。

着替えも多少置くとして、必要なモノと言えばベッドや室内でも乾かせる物干し系か。

んー、考える程に自分でアレンジできるから意外に楽しいな。

目の前でごく当たり前のように作詞作曲の作業をする恵果ちゃんと、ギターの練習をする翔太くん。

まあ逆にこういうのが俺にとって本当の日常に思えるから、安心はするけど。

それぞれがしたいようにしていると、再びドアがノックされた。

「——お覚悟を」

「んぎやあああああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああッ!!!」

君は一体なにをしたら、そう怒られることになるんだ。

腰にしがみついていた翔太くんの首根っこを掴んで引き離し、その場に押し倒して馬乗りになる遠藤さん。

恵果ちゃんはそんな光景に両手で目を隠し、見ないようにするので必死だった。

押し倒し、馬乗りになった遠藤さんはおもむろに胸元から一枚のクレジットカードを取り出した。

「配信する上で必要な機材、及び小道具などは会社からの経費で落ちます。しかし翔太さん、貴方は関係のない物を買いましたよね」

「な、なんのことですかなあ!」

「なるほど、あくまでシラを押し通すつもりですか。ではこの電子明細書はなんですか?」

「ぬあ!? ……ギターのピック、買いました……。オレの好きなバンドの限定品だったので、思わず……ッ」

スマホに記載されている明細書を見せつけられたことにより、翔太くんは自白した。

言い逃れできない状況に、俺はそんな翔太くんを憐れむ。間違いなく自業自得であると。

「素直でよろしい。しかし、購入するにしてもしつかり相談してください。別に買うなどは言いませんので」

「は、はい……。本当にすみませんでした」

「はあ……。まあこれが初めてなので大目に見ます。それと翔太くん、そして恵果さんに残念なお知らせがあります。……お二人の使用しているパソコンが不調で、午後に予定していた配信はできなさそうです」

「……………ふあ?」

翔太くん個人の問題に続いて、仕事に関する問題が出たと遠藤さんは言う。

その後聞いてみると、使用年数もそうだが、なにより音楽活動をす
る上で機材への負担が大きく一気に不調に繋がったという。

今から新しいモノに切り替えるとしても、数日は見越す必要がある
ようで、その間は配信ができないという。

そのことを聞いた翔太くんと恵果ちゃんはショックを受けたよう
で、二人して死んだ目をしていた。

即行でパソコンと言えば、あいつがいるじゃねえか。

「遠藤さん、ちなみに午後の配信は何時からですか」

「えっ？ えっと、19時からですね。なんでですか？」

「こういう関係で頼りになる知り合いが居るので、今日中になんとか
なると思いますよ」

俺の言葉に、遠藤さんは驚く。対して落ち込んでいた二人も、キラ
キラと目を輝かせて希望を抱いた。

俺は遠藤さんにも座ってもらい、スマホを取り出して海斗に電話を
掛けてみる。

コールが続いた後、繋がる。

『あいよ、どうした裕也』

『パソコンの注文をしたい、今日中に』

『また横暴なことを言うよな、お前は。まあこちらとしても売り上げ
に繋がるから有難いけど……。ちなみにパソコンのスペック、種類と
かあるのか？』

「ああ、ちよつと待ってくれ。遠藤さん、パソコンの希望するスペック
や種類つてありますか？」

「えっと、確か……」

遠藤さんは赤城兄妹が使用していた種類と同じパソコン、そしてス
ペックについて教えてくれた。

その通りに俺は海斗に伝えると、少し悩ましいように唸った後、
キーボードを操作する雰囲気伝わった。

『おっ、在庫は残り二つあるわ。それにしてもこのパソコンでよく一
年半以上も持ったな。特にPCオーディオとの相性によっては本当
にすぐガタが来るからな。けどこの種類で最近に出た最新式がある

けど、そっちにするか?』

「状態が良い方がいいだろうし、そっちにするか」

『了解。一台でいいのか?』

「待ってくれ。遠藤さん、一台でいいですか?」

「本当は二台が欲しい所ですが、とりあえずは一台で……。けど本当に大丈夫ですか……?」

「なにがですか?」

「その、お知り合いさんに申し訳なくて……」

「ああ、大丈夫です。気にしないでください」

『おいコラ、俺の意見を尊重しろよ。まあ別にお前の頼みだからいいけどよ。それでいつ受け取りに来る?』

海斗と相変わらざるのやり取りをしながら、進める。しかし思えば海斗に俺が離れた場所に居ると伝えてない為、俺は住所をメールで送り、此処に届けるように指示を出した。

『おまつ、ちよ……。えつ、二時間?』

「まあそう言うなよ、可愛い女の子が待ってるぞ」

『……年齢は』

「現役女子高生」

『特急で行くわ』

「クズがッ」

恵果ちゃんを餌に来る気にさせたものの、俺は決して海斗を恵果ちゃんに近付けさせないように気を付けることに。

しかし一応卒業してからは常識人ではある為、見積もりなどしっかりと作った上で来るため、予定より一時間は多く掛かるかもしれないと言っていた。

海斗とのやり取りを終え、今日中になんとかできると伝えたら遠藤さん含め、全員が感謝して喜んでくれた。

それから自分自身も海斗が来るまでにやりたいことがある為、準備をしている時。

涼音からメールが届いた。

『兄さん……寂しい』

俺はそのメールに胸を貫かれた。故に腕を胸の前で十字に組んでその場で仰向けに倒れた。

駆け寄る遠藤さん達は俺を囲んで心配してくる。

「——俺、もうシスコンでいいや」

#23 日常というのは案外、賑やかなのが丁度いい

唐突、いや……本当に唐突だが海斗が赤城兄妹のパソコンを設備してから一週間が経った。

ということ、この一週間に何があったのか、進況報告然りダイジェストで送ろうと思う。

まず手始めに、瀬川さんの講習について。俺は実家と会社を行き来するのに往復四時間という地味に辛いことを考慮して、会社の近くにあるファッションセンターを利用し服を買い、三日間の泊まり込み講習を行った。

前に勉強が苦手と言っていたが、その分逆に話を聞くことを意識してたが為に、内容は覚えている。

基本的には月曜から金曜日までの週五日、ライバーの活動に応じて出勤日は変動するらしいが。

それでもマネージャーとしての仕事はVTuberに限らず、互いが担当しているVTuberの進況報告や、良い部分悪い部分などの提案をし合う会議が月に一度は開かれるという。

知識も経験、何に対しても経験が浅いとはいえ正社員で雇ってくれるらしく、給料面は固定給とのこと。

その他にも社会保険やら何やらと色々あったが、そこに関しては別に重要ではないので省くとする。

まあ簡単に言ってしまうえば、ライバー中心の活動になる。

それから、俺が使用する事務所を紹介しよう。最初は家具も少なく、ただ広いだけの殺風景だったものがあら不思議。

なんということでしょう。

入って中央奥にある窓ガラスにはシンプルでありながらも映えている黒色のカーテンが、朝のクツソ鬱陶しい日差しを遮断してくれるように飾られている。

更にその窓際の両サイドにはそれぞれベッドが設置されており、寝泊りした時の安眠も保証されている。

そして中央部には元々あったソファードとテーブルを退かし、新しいテーブルに、オフィスチェアを五つ設置した。

ちなみにテーブルの上には、俺と涼音専用のパソコンが備えられている。これも、海斗に頼んだ。もちろん、デスクトップ。

退かしたソファードは出入り口のドア、壁際に寄せてそれぞれ両サイドに設置することにした。

それだけではなく、冷蔵庫、電子レンジ、その他には非常食としてカップラーメンやインスタント系の食べ物を置いた。

それだけじゃない。もちろん来客用に菓子類や紅茶のティーパツクなども常時完備している。

その他にも色々と好みに合わせて設置したことで、殺風景から一気に生活感溢れる事務所へと変貌を遂げた。

んゝ、我ながら素晴らしい。

日曜日の晴天、窓を開けていることで流れてくる美味しい新鮮な空気を味わいながら、俺は一人酔い知れる。

……だが。

「んゝあゝあゝ……ッ。この事務所のマッサージ機、そこらのは比べ物にならないぐらい最高だな裕也」

「涼音ちゃん、これ美味しいね」

「うん……。兄さんが、選んでくれたものだから……」

「12時間ぶつ通しで音楽配信するんじゃないやなかつた、のど飴が足りなさすぎる……ッ」

「ちよつと翔太さん、だらしないですよ。しっかりしてください」

マッサージ機を嗜む海斗に菓子を食べて女子会を開いている涼音と恵果ちゃん。

そして出入り口付近にあるソファードで横になり項垂れている翔太くんを咎める、遠藤さん。

しまいは……。

「あゝ！ またミスしたばい！ やっぱり目隠しでフルパーフェクト

取るのは難しいとね〜！」

涼音と恵果に並んでオフィスチェアに座っているのは、癖が強い有名な旋梨ちゃんだった。

「お前らなア!? ーここは集会所じゃねえって何回言えば気が済むんだコラア!! 特に海斗オ! テメエは部外者だろうがア!？」

「うっせえな。残念ながら部外者じゃないんだよなあ、これが。この会社から正式に認められてます〜」

「はあ!？」

「ほれ」

そう言つて、海斗はマツサージ機を堪能しながら許可証の入ったホルダーを投げてくる。

俺はそれを受けとり見てみると、こいつの親父さんが経営している会社名と共に、名前とミライバ株式会社の専属元であることの記載がされていた。

「いやあ、お前の紹介のおかげで親父のともガツポリよ。ありがとうな、クソジャップ」

「いつの間に……! てか、他も出て行かんかい!!」

部外者から関係者に昇格している海斗に歯を噛み締めながら、涼音以外の全員に出ていくように暗示を掛ける。

すると涼音を除く全員から一言。

「嫌っス」

「私はお兄ちゃんを見ないといけないので……。いえ、涼音ちゃんと話していたいので」

「そんな固い事言わんでいいとね。ほら、そんなに怒つとつと、眉間にしわが増えるけんよ」

「す、すみません……。私も最初はこの二人を連れて行こうと思ったのですが、此処があまりにも居心地良すぎて……」

「満場一致、諦めろ裕也」

「く……クソがア!!」

怒り散らしたところで、此奴らは出ていかない。ちなみに涼音と旋梨ちゃんは最初こそおどおどしい感じだったが、なぜか二人の中で意

気投合、いや……決意をし合ったようで険悪にはなっていないようだ。

まあ涼音の成長も含めて頑張っていると思えばいいか。

今日に限って午後からは全員予定が無いようで、涼音は明日から本格的に配信が始まる。

それらも含めて準備は既に終わらせているのだが、あまりにも賑やかすぎるだろ。

「ふう、暑いば〜い！ お兄さん、クーラー付けてくれんと？」

「空気の入替えもだいぶしたし、入れるか……」

「おつ、旋梨ちゃんエロいな。そんな胸袖をパタパタして」

「は？ この場で死にたいと？」

「なんでもないです。ねえ恵果ちゃん、俺とデートしない？」

「ふあ!? で、デート!? そ、そんなまだ私たちお互いを知らないですし……!」

「恵果ちゃん、このバカという言葉を鵜?みにしなくていいぞ。可愛けりや誰でもこんな風に言ってるから」

「二「うわあ……ッ」二」

「えっ、ちよ……。女性陣の視線が痛いんだけど」

「自業自得だ、バーカ」

哀れみ、そして冷たい視線を浴びる海斗に俺は毒を吐いてリモコンを持ち、クーラーを付ける。

最初こそは暑苦しい空間も、やがて数分とすれば快適でいい涼しい空間に早変わり。

俺は空いているオフィスチェアに座り、壁に設置されているテレビを付けた。

昼を迎える前のニュースなどが流れ始め、遠藤さんは翔太くんから離れて、同じように椅子に座った。

「それにしても、裕也さんって海斗さんとなんだかんだ仲がいいですよね」

「まあ俺と裕也は腐れ縁だからなあ」

「腐れ縁以上にクソだな」

「兄さんはそういうけど、信頼し合ってるのわかるよ……?」

「こいつは昔から素直じゃないんだよ。不良時代が一番ツンツンしてたんだぜ?」

「おい海斗、その話は――」

「に、兄さんが不良……?」

「ッ! 改めて気になるばい!」

皆の前、特に涼音の前で不良をしていた時代があると暴露した海斗によつて、最初は考えられないという表情をしていた涼音も興味を示し、なにより旋梨ちゃんが食いついてきた。

そして奥の方のソファで横になっていた翔太くんが起き上がり膝の上に肘を置いて、両手を組み顎を乗せて言った。

「話を聞きましょう、神代の兄貴」

「なんだこいつ」

12時間ぶつ通しで音楽配信をしたせいで、ガラガラの声。かつこつけてる割には、死に過ぎてて逆に心配だ。

「さて、何処から話そうか……。そう、あれは確か……」

「テメエも続けようとするなや、コラッ」

天井を見上げながら過去を振り替えようとする海斗に、俺は圧をかける。しかしそれでも辞める気がないと、周りの興味の圧に俺が押し負けてしまい、あらいざらい暴露された。

海斗が俺の学生、もとい不良時代の話をしている間、俺は常にテールの上に顔を付けて伏せていた。

なぜか周りは興味津々に聞いていたが、前も言ったように俺の中では黒歴史。

後で海斗の野郎、締めとくか。

話が終わった後、やけに翔太くんが目を輝かせて絡んできたり、俺が不良だった事実には涼音は何故かふわふわしていた。

何を考えてるんだ、幻滅でもされたか? ともあれ、昼時を迎えて多くは解散することになった。

だが、その場には涼音だけでなく旋梨ちゃんも残った。

「皆、昼飯食べに行つたけど旋梨ちゃんは行かないのか?」

「お兄さんが行くなら私も行くばい。それまではやることもないけん、ここでまったりするばい」

「……一人でも、いけると思いますが……」

「一人で食べるなんて、寂しいばい。それとも涼音ちゃんが一緒に行ってくれると？」

「私は兄さんと一緒にいい……から……」

「私も涼音ちゃんと同じばい。だからお兄さんが動くまで此処に残るんよ。生憎とマネージャーに私は縛られないけん、どうしようが私の自由ばい」

「むう……!」

涼音ならわかるが、本当に旋梨ちゃんの考えがわからない。というか、目の前で二人の背後にそれぞれ化身が見えるんだが。

というよりも、普通にマネージャーの縛りが無いって断言してるけど、一応瀬川さんが付いていること忘れないであげて欲しい。

とはいえ流石に一人だけ蔑ろな扱いをするわけにもいかない、俺は財布と車の鍵を持ち、立ち上がる。

「三人で食いに行くぞ、何が食べたい？」

「お寿司が食べたい……!!」

「そこは意気投合するんかい」

仲がいいのか悪いのか、全くわからねえ。けどこれも、涼音にしては成長の糧の一部だろう。

俺の後に続いて二人も準備をし、楽屋を後にする。寿司なら、外食先の方で美味そうな店があったんだよな……。

廊下を歩く中で、後ろで二人が何かのやり取りをしていた。だが小声だった為、聞こえなかった。

……悪口、とかじゃないよな。

「兄さんは、渡しませんから……ッ」

「例えお兄さんが涼音ちゃんに目を向けていても、私は上書きするように見てもらおうようにするけん。覚悟、してほしいばい」

「私のだもん……。絶対に、負けない……!」

これまでのキャラクター紹介【3】※挿絵あり

1. 如月旋梨 | Kisaragi Senri |
年齢：19歳
身長：154cm
趣味：ゲーム、読書
特技：一度見た譜面を覚えること
好きなもの：菓子類、炭酸系
嫌いなもの：自分を束縛するもの

【備考】

株式会社ミライバのDream Lifeに所属しているゲームVTuber。

本名は如月旋梨、VTuber名は音神旋律。

生粋の天才ゲーマーで、チャンネル登録者数0人の状態からほとんど音楽ゲームだけの配信で76万人の登録者数を獲得している。

色んなゲームをかじり続けている記録ならまだしも、旋梨の音ゲー配信は多くのプレイヤーを引き付けた。

容姿は水色の髪の毛、ミディアム系。視力が悪いのか、オシャレな眼鏡を掛けている。

首からはヘッドフォンをいつも下げており、作業やゲームをするときは使用する。

Dream Lifeの中では古参勢でもあり、No.2の座に就いている。しかし旋梨自身が言うには、上下関係は必要ないのと。

やりたいようにやる、誰にも縛られることもなく自由が一番という概念の元でマネージャーを付けたがらない。

それを翔太曰く癖が強い一部であるのだが、それ以外にも自分が興味を示したモノには執念を見せ、手に入れようとす。

今回は裕也がそのターゲットになったみたいだが、旋梨は過去に裕也と面識があるような物言いもしている。

当の本人、裕也は全く覚えていないようだが――。

2. 遠藤里美 | Endou Satomi |

年齢：27歳

身長：166cm

趣味：飼っているウサギの世話をすること

特技：特になし

好きなもの：翔太、恵果の世話をすること

嫌いなもの：一部の上司

【備考】

Dream Lifeに所属している赤城兄妹のマネージャーをしている。

平凡といえばそうであり、有能といえばそうであるようにバランスが良いと評判がいい。

マネージャーとしての動きも玲奈から絶賛されており、上層部からの言いつけもしっかりと守っている。

しかし上層部には嫌いな上司が居る為に、その度に抱えるストレスを家で飼っているウサギに愚痴を吐いて発散している模様。

赤城兄妹が使用した後の機材を元にあつた場所に戻したり、手入れを欠かさない几帳面な性格をしている。

几帳面故に翔太の世話には手を焼いており、裕也が居ない所でも大体は説教が生じている。

このことから翔太からは恐れられているが、里美自身はそれでも翔太と恵果の世話が大好きな模様。

それと、実は隠れオタクでもある。

3. 池上海斗 | Ikegami Kaito |

年齢：21歳

身長：176cm

趣味：ドライブ、魚釣り

特技：機械の修理

好きなもの：可愛い女の子、裕也（※友達として）

嫌いなもの：ムカつく奴、話が通じない奴

【備考】

父親が経営しているパソコン店で働く副店長。それでいて、裕也の数少ない幼馴染。

学生時代は裕也とタッグで不良をしていた過去を持ち、口の荒さや行動はその名残りから来ている。

海斗曰く裕也と不良をしていた時が楽しかった時期であり、色々と発散ができたという。

しかし卒業以来はまともな改心し、父親の元で副店長を務める程に機械に、特にパソコンに対しての知識がある。

それもあってか涼音のパソコンも然り、裕也の頼みだからこそ用意したというのもある。

今では話をいつ付けたかは知らないが、ミライバの専属に昇格。

容姿は紫色の刈り上げ、それでいて作業服を主に着ている。私服に關してはそこまで興味無いのか、シンプル。

可愛い女の子が好きだが、至って常識人ではある。

DreamLife 配信編

#24 Dream Life 所属のヒスイ

昼食を終えた後、俺は涼音にカードキーを預け、旋梨ちゃんと二人で先に戻っておくようにと言った。

というのも、寿司屋で食べている最中に海斗からメールが届き、内容を確認すると『話したいことがある』と来たからだ。

電話ではなくメール、それがどうも引つ掛かり、恐らく真面目な話なのだろうと俺は『了解』の二文字だけは送り返した。

そして集まる場所はミライバの屋上。涼音と旋梨ちゃんと別れた後、俺は屋上に着いた。

すると鉄製の柵に背中を預け、煙草を吹かしている海斗の姿がそこにあった。

「飯を食った後に悪いな、裕也」

「別に構わねえよ。というか、相変わらず吸ってんだな」

「やめようにも依存しちまって、手遅れだわ。お前も吸うか？」

「禁煙に成功した人間に勧めるなや」

「禁煙……ねえ。それも、義妹の涼音ちゃんが関係してるだろ」

付き合いが悪いと見越しながらも、俺が禁煙した理由が涼音であることを突いてくる。

まあ時期的に涼音が来て以来のことだから、言わずとも此奴にはわかるんだろうな。

だが海斗が真面目な話をするために呼び出すのは珍しい。俺は海斗の横に並んで、鉄製の柵に腕を乗つける。

すると正面に、煙草が差し出される。

「付き合えよ、裕也」

「……はあ、一本だけだからな？」

「おうよ、それで十分だ」

お袋が死んだことで、見失った自分。その時に俺は、不良に成り下がり、社会のルールに反抗した。

高校生でありながらも煙草の味を噛み締めた。今思うと、本当に悪い奴だと自分で自覚する。

俺は海斗から煙草を受け取り、取り出して口に啜える。そして借りたZIPPOで、火を付ける。

喉に来る刺激、口から漏れる煙。成人になってから吸う煙草は、学生だった頃とは違い美味く感じる。

「屋上で一緒に吸うと、学生の頃を思い出す。絡んでくる気に入らない奴は片っ端に潰したり、いじめの現場に介入したり。その度に先生の野郎に呼び出されて、こっぴどく叱られて……。それでもあん時が俺にとって一番楽しかった時期ともいえる」

「……納得いかなかったのは、いじめの現場に介入してその虐められていた奴の保護者に感謝されたことだけだな。当時の心境を考えたら色々複雑だわ」

「あく、確かにな。先生に怒られながらも保護者には感謝されるってそりゃ複雑だったわ。けど結局それが原因で虐めが発覚して、それを放置してた先生は退職していったのも覚えている。そんな時はまさにしてやったりだったわ」

「俺たちも相当に荒れていたが、学校側自身も荒れていた。虐めは放置、先生の中には女子生徒に手を出す奴が居て、その問題全てを隠蔽しようとするクソ校長。ほんと、俺ら含めてゴミしか居なかったな」

俺は海斗と昔を振り返りながら、煙草を吹かす。当時の記憶が蘇る度に、今の自分とは大違いなことをしていた。

「中学、そして高校。軽音部に入ってバンド結成したものの、青春という青春は結局無かったしなあ。あくあ、過去の自分に言ってやりてえよ。女は食い荒らせて」

「最低且つクズ発言をどうも。そういう癖して、手を出さなかったのは勇気が無かったただけだろ。口先だけならどうとでも言える」

「おっほ、言うね。そりや俺は当時から健全で繊細だからな、良い事悪い事の区別ぐらいはできるさ。……でも、高校の後半期。お前はガラリと変わっちゃった。人を殴るのはやめるだの、煙草は吸わねえと言いつたり。唐突過ぎて、俺は虚無に駆られたぜ」

「お前がさつき言つたように、俺には大事にしたい存在ができたからな……。それに続けていたら、お袋に顔を向けられねえ」

海斗自身、自由に好き勝手していた学生時代が続くと思つていたのである。

だがそんなの、未成年を卒業すればどのみち変えなくてはいけないものだ。

そんなこと海斗も言われずともわかつていた。だがこうやって過去を振り返るといふことは、それでも海斗の中で拭い切れないモヤモヤがあるのだと勘づく。

「俺は元々ラーメン店で仕事をしていた、だが今は涼音を支えないといけないマネージャーの仕事に就いた。お前も学生の頃に好き勝手しただろうが、今の自分を見てみる。親父さんの店で働く副店長だ。もう、あの時みたいに羽目を外すことは簡単にできないってわかつてるだろう」

俺も海斗も、ガキじゃない。社会を補わないといけない社会人の一人だ。

守るものがあれば、捨てることもしないといけない。海斗の心情は恐らく、あの頃みたいにもう一度戻りたいというもの。

「そんなこと言われずともわかつてる。俺も親父の跡取りとしてまだ覚えなきやいけないことあるし、お前もこれからはマネージャーとして色々頑張んねえといけないからな。それに、涼音ちゃんのことも一人の女の子として好きなんだろう？」

「ああ、恥ずかしながらそうだよ。だから尚更、俺は羽目を外さずに一つ一つあいつが上手くいけるように頑張るんだよ」

「告白はもうしたのか？」

「いや、涼音にはまだ付き合えないと言った」

「……なんで」

「互いにやることをやり切れてないからだ。それに、自分がしつかりして胸張って幸せにできるようにしたいからだ。だから涼音には待つて欲しいと言った」

「変なところだけ律儀なんだよなあ。俺なら押し倒してるわ」

「一緒にすんじゃねえよ」

「痛でエ!!」

俺は海斗の横腹を蹴った。海斗は体勢を崩して尻もちを付き、すぐさま起き上がり顔を寄せてくる。

だから俺は口に含んでいた煙を顔面に吐いてやった。すると今度は目を抑えながら倒れ込み、じたばたし始める。

なにがしたいんだ、こいつは。

俺は置いてあつた携帯灰皿を手を持ち、吸い終えた煙草の火を決して中に入れる。

「ともかく、今は互いに頑張ろうぜ。やることやって、時間が出来た時はまた昔みたいバイクでツーリングしようや」

「……はあ、仕方ない。それまで待つてやるか。けど途中で投げ出すんじゃねえぞ？ お前なら出来る限りのことは助けてやるからよ、前みたいになくなつたお袋さんの時のように一人で抱え込んだりするんよ」

「もう既にお前には頼りっぱなしだよ。じゃあそろそろ戻るわ、ありがとうな。海斗」

これが、俺と海斗の関係。互いに助け合い、話し合い、そして支え合う。

学生時代を共にした仲だからこそ、信頼できる。俺はそれを、嬉しくもあり、誇りであると思える。

大丈夫、俺はもう一人で抱え込まない。海斗も然り、俺の周りには多くの人が支えてくれるから。

だからこそ、もう後ろは向かない。絶対に――。

■

親父たちの許可を取り、楽屋で寝泊りをした次の日。俺と涼音は瀬川さんに案内され、さつそくと今日から企業勢としてのV T u b e r活動に加え、マネージャーとしての仕事が始まった。

今日は午前の部と午後の部に分けて配信をする。故に朝8時には打ち合わせをし、雑談をする上でなにを話すのかなどの提案をし、決まったところで準備を始める。

機材の調子、セッティング。一つ一つを確かめながら、正常に動作することを確認する。

「に、兄さん……。私、その……」

「大丈夫だ、裏でちゃんと見てるから。もしなにかあっても、すぐにカバーできるようにしとくから、今まで通りに配信をすればきつと上手くいくさ」

ライブルームの中にある椅子に座り、俺の袖を引っ張る涼音。緊張しているのが伝わり、俺は涼音の手を両手で握り締める。

無理もない、慣れない環境下での配信。それに加え、企業勢としての活動。

なにもかもがこれまでと違う。それでも一つだけ変わらないのは涼音の配信スタイル、そして想い。

俺の目を見て言葉を聞いた涼音は、緊張で涙目になっていたが、やがて落ち着き小さく頷いた。

「そろそろ始まります、裕也さんは別室にある部屋で涼音さんの配信を見ていてください。コメント欄やスーパーチャットに不審、及び度の過ぎた卑猥な言葉や煽りを見つけ次第対処してください。一応企業勢としての活動は初めてということでも私も近場で見守りますが、基本的には自分で考え判断の方をよろしくお願いします」

瀬川さんの合図に、俺は涼音の頭を撫でて部屋を後にする。そして俺は別室に移動し、設置されているデスクトップから涼音の配信を守る。

今回は瀬川さんが近くに居てくれるとのこと、わからないことがあればすぐに聞ける。

だが講習会で教えてもらった通りに動けば、自分の判断だけでもなんとかできる部分はあるはず。

涼音も然り、俺も緊張してくる。マネージャーとしての仕事が初めてというのもあるが、涼音がしつかりと配信している場をこの目にしながらコメントを打つユーザーなどの監視をするのは、少し疲れそうだ。

涼音と俺、互いに準備が完了した所で瀬川さんに合図を出す。すると瀬川さんは領き、涼音が使用するライブルームのドアを閉めて一人の空間を作り出した。

それからしばらくして、涼音の配信が始まった――。

『あ、あく……。えっと、どうも皆さん……。！　おはようございます、本日よりDream Lifeに所属しましたヒスイです……。！』

：キターーーーッ!!!

：俺らの癒し、ヒスイちゃんだぞおおお!!1

：初めて来たけど、めっちゃ声が可愛い

：聞いただけでわかる妹属性、最高

：Dream Lifeに所属おめでとう!!

Dream Life公式のツイッターによる告知の効果もあり、閲覧数は驚異の二万越え。

始まると同時にコメント欄の流れは勢いがよく、それでありながらも掴みはバッチリだった。

『無事にDream Lifeに所属できたことに加え、告知で私の事を知ってくれた方々の為にもまずは自己紹介を頑張ります……。！』

：自己紹介せずとも推します

：やっぱり個人勢だった時とは違って口調が固いな

：仕方ない、緊張しているんだよ

：そりゃこれだけの閲覧数、俺ならゲロってる

：草w w w w

手始めに自己紹介から入る涼音。今回、個人勢の時に見てくれた視聴者に加え、新しい視聴者が多く居る。

故にまずは自己紹介で自分の事を知ってもらうのが基本中の基本ではある。

それにVTuberとして肝心なのは自己紹介でもある。そこで流れを掴めれば、伸びしろは大きく見受けられるからだ。

緊張で声が震えている箇所、そしてもどかしい所もあるが、涼音はゆつくりと自己紹介を始める。

コメント欄は相変わらず流れが早いがある程度は見れる。やはり涼音はリアルでもそうだが、VTuberとしても可愛い故に受けはいい方であるのがわかる。

『い、以上が自己紹介……です。えっと、その……。少し、水を飲んでもいいですか……？』

：別にいいよw w w w

：飲み物を飲むのに聞いてくるVTuberは初めてw w w

：くっそ可愛いかよw w w

：ヒスイちゃん、飲みたいときに飲みな

：リラックスリラックス！ ひっひっふー！

：ラマーズ法はヒスイ氏にとつてまだ早いでござる

相当緊張しているな、涼音。コメント欄でもあるが、飲み物を飲むのに許可はいらなんだぞ。

というかラマーズ法を指摘した奴ナイスツツコミだろ。センスが輝き過ぎている。

語尾が古臭いが。

それから30分が経過した。雑談だけとはいえ上手く事が進んでおり、今の所怪しげなコメントなどは見受けられない。

そして珈琲を口にして気付いたが、スーパーチャットの総計額が既に32万を超えていた。

いや、エッグ……。俺もVTuberになろうかな。

期待の新人、それも大手のDream Lifeというブランドで

の立場故にきつと視聴者からの期待が凄いのだろう。

だとしても投資し過ぎだろ、もつと金は大事にしろ。

それから更に涼音の配信を見ながらチェックしていると、20,000円という赤色の表示と共に「カゲロウ&ホムラ」がスーパーチャットを送った。

これって、まさか……。

カゲロウ&ホムラ：ヒスイさん！ Dream Life所属おめでとございます!!

『ふあ……!?!? カゲロウさんに、ホムラさん……!?!?』

：マジで!?

：おいおい、本物かよ!?

：嘘だろwww 凄いてこれはwww

：あの熱血兄妹のカゲロウとホムラ!?

：うおおおおおおおおおおおお!!!

翔太くん、そして恵果ちゃんのスーパーチャットにコメント欄は祭り状態になった。

対する涼音もビックリと言わんばかりの声を上げ、興奮を隠しきれない模様。

そして、立て続けに――。

音神 旋律：私からも祝福やけんね。おめでと、ヒスイちゃん

：なっ、マジでエ!?

：あの引きこもり音ゲーのセンちゃんだと!?

：やばいやばいw 初配信にして神回www

：いや、真面目に旋律が出てくるのは異常過ぎるww

：なにこれ、好きなVTuberが集うって殺す気?

：切り抜き確定不可避www

赤城兄妹に続いて投げられた赤色のスーパーチャット。その額にして50,000円。

旋梨ちゃんが涼音の配信に現れたことで、更にコメント欄は荒れに荒れまくり、和気藹々状態となった。

『旋律さんも、ありがとございます……!?!? こ、こんなに祝福された

の初めてで、嬉しいです……!』

：ヒスイちゃん、この子は大物だ

：バックが強すぎる、冗談抜きにww

：ヒスイちゃん可愛いし先輩たちは尊いし何なん

：よかつたなあ、ヒスイちゃん。お父さんは嬉しいよ

皆が皆して、歓喜合切で涼音を祝福する。それが嬉しいのか、少し涙声になっている涼音。

始まりが上手く成功しているようで、俺も涼音が楽しそうにしているのを見ると涙腺が緩む。

きつと涼音が緊張していると、赤城兄妹や旋梨ちゃんも気付いていてくれたのだろう。

本来なら新人V T u b e rを目立たせないといけないはずなのだが、これは逆に涼音としても助かっていると思う。

その証拠に、最初は弱々しく緊張で震えていた声も元気を取り戻して、意気揚々と話し出している。

俺は不意に瀬川さんに視線を向けた。すると瀬川さんは優しく微笑み、人差し指を鼻に当てていた。

粹な計らい、さすがです。

そして瀬川さんはペンを取り出し、紙に何かを書いていく。そして書き終え、それを俺に見せてくる。

【今回は特別に、更にサプライズを用意してます】

俺はそれを見た時に、サプライズは決して赤城兄妹や旋梨ちゃんのスーパーチャットじゃないことに気付く。

じゃあそれは一体なんなのか。俺は画面に視線を戻して見ていると、再び赤城兄妹からコメントが貼られる。

カゲロウ&ホムラ：記念に、前代未聞のコラボしましょう！

決して最初からコラボというのは先輩後輩の立場上あることがないもの。しかし先輩の方から誘うことで、視聴者には涼音が調子に乗っているという捉え方にはならない。

だからこそ、前代未聞という言葉を見せたのだろう。俺は此処まで許可をしてくれた瀬川さんに、小さく頭を下げた。

——涼音、今をもっと楽しめ。俺はお前より先に、楽しんでるぞ。

#25後輩V T u b e rに送る先輩からのメッセージ

『記念に、前代未聞のコラボしましょう!』

企業勢としての配信活動、翔太くと恵果ちゃんの誘いによるコラボが初配信にして始まるうとしていた。

コメント欄はざわつき、不穏な空気は流れない。寧ろ歓迎しているようで、皆がまだかまだかという状態だった。

涼音は通話アプリであるJ a s c o e dを起動し、画面には表示されてはいないが二人のリアルナンバーを入力しフレンド追加する。

雑談でコラボするまでなんとか繋いでいる涼音。嬉しさの反面、視聴者による期待が圧となつて焦っているようだった。

そこで俺は涼音にメールを送った。配信中は声を出しての以心伝心が出来ない為、こうやって指示を出したりする。

「周りは楽しみでソワソワしてるだけだ。焦らず、ゆっくりと与太話をしながら準備しな」

俺のメールが届き、見てくれたのか。雑談をする涼音の声が少し落ち着いた気がした。

そして準備が無事に整い、画面上には涼音のアバターであるエルフの少女の隣に、赤と黒が入り混じった髪型をしている龍をモチーフにしたアバターと、可愛い黄髪をモチーフにしたアバターが並んだ。

なるほど、龍と虎か。アバターの性別を見れば龍が翔太くんで虎が恵果ちゃんだな。

涼音の初配信で目にする二人のアバターに、俺はその仕上がりの完成度に見惚れる。

『いええええええええええい!! ヒスイさんのリスナー達、元気にやってるか!? ロックンロール!!』

『ふあああああ……!?!』

：ロックンロール!!! w w w

：バカ野郎 w w ヒスイちゃんビツクリしてんじゃねえか w w w

：相変わらず痺れる声してるわ w w w

：逆にカゲロウが元氣過ぎて疲れる w w w

：ヒスイちゃん鼓膜大丈夫かな w w

『ちよつとカゲロウ兄さん、うるさい。元氣を確かめる前に視聴者とヒスイさんの鼓膜を破壊してどうすんのよ』

『えっ、そんなにうるさい?』

『ちよ、ちよつとだけだよ……大丈夫……!』

：無自覚なのが性質悪い w w w

：音のポリユーム30でもうるさいわい w w

：ヒスイちゃんいい子、尊い

：早速ホムラたそに怒られてやがる w w w

翔太くんが登場際に元氣のいい挨拶をしたものの、視聴者の言うように俺は鼓膜が破壊された。

涼音の心地いい声色とは反対に、元氣の権化ともいえるバカでかい音量に音量を下げ損ねた。

耳が痛てえ……。

『こほん、まあとりあえずだ! スパチャでも伝えた通り、無事に DreamLife 所属おめでとう!』

『こ、こちらこそありがとう……! びつくりしたけど……!』

『ごめんねヒスイさん。これでもカゲロウ兄さん、後輩が出来るってずっとソワソワしてたから……!』

『おい、裏話をするなよ』

：カゲロウの性格でソワソワはギャップ萌え w

：まあでも、確かに DreamLife ではこれまでカゲロウとホムラちゃんが下だったからね。後輩が出来るのは仕方ない

：V T u b e rに限らず、後輩ができるのは嬉しいよな!

・あれだ、ホムラちゃんは然り、カゲロウは後輩に対して甘々になりそうwww

・あく、安易に想像できるwwww

・暴露される裏話で戸惑ってて草wwww

『だがまあ後輩が出来て嬉しいけど、先輩だからって余計な遠慮はしないでくれ！ フレンドリーが一番、楽だからな！』

『カゲロウ兄さんの言う通り、気を遣わなくて大丈夫だからね』

『う、うん……！』

『それに視聴者たちが文句言うようであれば、オレの熱い魂を込めたシャウトで黙らせてやるぜ！』

・おい、開き直るなwww

・それは勘弁願いたいwwww

・でも実際、この雰囲気が好きだから賛成

・間違いない

・というかカゲロウとホムラちゃんが兄と姉で、ヒスイちゃんが妹みたいに感じるのはなんでだろw

・そりゃヒスイちゃんも可愛くてお姉さんっぽくないからなw

涼音、そして翔太くんと恵果ちゃんのやり取り。それに加えてコメント欄の状況を見て俺はあることに気付く。

それは決して、呼び捨てにしないことだ。些細なことであるかもしれないが、上下関係の差を固定する上で先輩後輩関係無しに最初は互いにさん付けをする。

特に瀬川さんから聞いているが、DreamLifeにおいて男性ライバーは翔太くんしか居ない。

それ故に距離の詰め方、及び呼び方などに細心の注意を払わなければ、最悪のパターンとして直結厨と呼ばれるモノが現れる。

直結厨というのは、ネット上において厄介な存在にもなり得る者たちの事だ。

当然これも一部の者に限るが、○○×○○○と言った感じにカップルとして作り出す。

まあこれは、直結というよりかはカップル厨だが。

これの何が原因かと言えば、数少ない男性ライバーの翔太くんにとっては炎上しかねないものである。

そりやそうだ、自分が決めたことでもない直結厨による行動でありもせぬ噂を立てられたりする。

平和に仲睦まじくやってても、視聴者の中に度が過ぎていると感じた奴らで付き合ってるんじゃないかという考察が過る。

そうなるど拡散されたり、考察程度の噂で荒れたりもする。故に距離を離し過ぎても、詰めすぎてもダメ。

ただ翔太くんの場合はそれが比較的に安全だとは思う。というのも隣には常に恵果ちゃん存在があるからだ。

それによって下手に直結される心配も無いし、逆にカゲロウとホムラのコンビが多く取り上げられている。

それを上手く活用した上で、涼音に対する接し方。翔太くんだけが接するのではなく、バランスよくそこに恵果ちゃんが介入。

——やっぱ、すげえな。

『……それで最初は緊張してたけど、カゲロウ先輩やホムラ先輩が来てくれて正直言うど心に余裕ができたかな……』

『あく、わかるわ。オレも最初は初配信の時にすんげえ緊張したもんな。けど、自己紹介も含めてしつかりと視聴者に面向かってやったら、受け入れてくれたんだよなあ』

『ちなみにカゲロウ兄さんは緊張のあまり、肝心の初配信で歌うことがままならなかったよね』

『えっ、なにこれ。後輩にオレの失態集を晒す回?』

『ふふっ……』

・懐かしいなあww

・やばい、天使の笑い声や

・ホムラちゃんによつて晒される兄の失態ww

・もつとやれww

・コラボによつてポテンシャルティを失う兄の囧

『さて、そろそろカゲロウ兄さん始めようよ。後輩の為に、今日はプレゼント用意したんでしょ?』

『おっ、そーいやそーうだった!』

『プレゼントなんてとんでもないよ……! わ、私は先輩たちがコラボが上がってくれただけで凄く嬉しいのに……ッ』

『まあまあ、そう言うなって! プレゼントって言っても、オレたちに出来るのは音楽……。そう、つまりはヒスイさんの為に作ったオリジナル曲だ!』

：なにそれエモいんだけど! w w

：マジかよ!! w w

：一体いつから用意してたんだろ

：私たちも楽しみなんだけど

：うおあああああああッ!!!

コメント欄が一気に盛り上がる。通話越しに、慣らしでギターを弾く音が聞こえてくる。

オリジナル曲、それも弾き語りをするようだった。涼音も自分に向けての曲を披露ということに、驚いている様子だった。

『しかも今回はオレじゃなく、ホムラが歌うぜ! 最初はロックでもいいかと思っただが、それじゃ歓迎に向いてねえ。だから俺が弾くのはバラード系だ!』

『上手く歌えるかな……。けど、頑張るね。こほん、あー、あー』

：ホムラちゃんが歌うのって激レアすぎん?

：というかメインで歌うのは何気に初じゃね w

：やばい、この腐った耳に刻み込もう

チューニング、そして声の調整をした恵果ちゃんの準備が整ったところで静かになる。

涼音も静かに待ち、始まるのを楽しみにする。そして小さい声で翔太くんと恵果ちゃんが合図を出し合った後に、ゆっくりと心地のいいギターの音色が聞こえてくる。

天真爛漫、いつも元気の権化である翔太くんからは到底想像のできない心地のよい音色は、最初にして視聴者と涼音の気持ちをしっかり掴んだ。

それから曲の入りと同時に、恵果ちゃんの歌が聞こえる。透き通っ

ていて、混じりけの無い繊細な声。

それはV T u b e r 業界の厳しい所、そして苦しい事。それがあ
りながらも、楽しいこともある。

そんな歌詞の意味に続いて、涼音を心の底から歓迎する意味のある
恵果ちゃんの歌い方に、涼音のすすり泣く声が聞こえる。

実際、俺も泣きそうになっている。思えば、所属が決定し配信をす
る前までは内気だった涼音。

それが今では支えてくれる仲間、同時に新しい道を歩んだ。これは
きつと、大きなプレッシャーだったに違いない。

音楽とは心に染みる程に感動を知るモノ。成長に繋がる良い思
い出の数々が、きつとこれからもあるだろう。

数分と翔太くんのギター、そして恵果ちゃんの歌が続いた後、終わ
りが近づく。

そして最後のフレーズは、『これからも、よろしくね』という歓迎の
エールだった。

『うっ……ああ……！　あ、ありがとう……！　ほんとうに、ありがと
う……！』

：ダメだ、目から行水だわ

：こんなに先輩に歓迎された新人が居るだろうか

：ヒスイちゃん、D r e a m L i f e に来てくれてありがとう！

：ありがとうおおおおお!!

：これからもよろしくね!!

赤城兄妹の曲が終わると同時に、視聴者によるコメントも盛大に歓
迎するものが流れた。

嬉しさ、そして感動で涙声でありながらも感謝の意を忘れない涼音
は、幸せ者だと思う。

そして、俺からありがとう。V T u b e r の世界が、こんなにも
綺麗で美しいものだと思えて認識できた。

俺は別室の場で、小さく拍手を送った。全ては涼音の歓迎、そして
赤城兄妹のサプライズに対して――。

#26 如月旋梨にとっては大きな運命だった―前編

企業勢としての初配信は、午前の部でありながらも大成功で幕を閉じた。前代未聞の先輩V T u b e rである翔太くんと恵果ちゃんのコラボ凸はあつという間にトウィッターで話題となり、トレンド入りを冠することとなった。

涼音自身、最初はプレッシャーを感じて上手く動けなかった所もあったが、赤城兄妹のコラボをきっかけに肩の荷が下りたようで、コラボが終わった後の雑談も難なくと乗り越えることができた。

時間にして約二時間、V T u b e rとしては短い時間での配信ではあるが、涼音のチャンネル登録者数は17万人から怒涛の追い上げでなんと32万まで増えた。

午前の配信を終えて確認した時、涼音と俺は顔を見合わせながらそのありえない伸び方に身体を震わせた。

しかしよく考えれば、D r e a m L i f eの公式トウィッターによる先行予告に加え、赤城兄妹のコラボ凸があれば当然のように涼音がどういった子なのかと確認しに来る視聴者が居るだろう。

見に来てくれたと同時に今後の期待として登録してくれる視聴者たちが居たことが、功を成したと言える。

それから涼音は無意識に溜め込んでしまっていた緊張の糸が解けたのか、俺に抱き着いてきた。

背中に回された手が震えているのを感じる。だから俺は同じように涼音を抱きしめ、『よく頑張った、おつかれ』とだけ返して褒めて返した。

俺は先に楽屋で休んで貰おうと涼音にカードキーを渡し、使用後の

機材の片付け、手入れをすることに。

これは赤城兄妹のマネージャーである遠藤さんに感化されたからこそ、俺もやってみようという行動だった。

するとしばらくして、別室から瀬川さんが入ってきた。

「お疲れ様です、裕也さん」

「瀬川さんもお疲れ様です、今日はありがとうございます」

「いえいえ、とんでもない。裕也さん、そして涼音さんがしっかりしているおかげで結局私は隣に居るだけでしたから」

小さく笑いながら、瀬川さんは機材の手入れをしている俺の隣でしゃがみ込んで、同じように違う機材を手入れし始めた。

俺は別に大丈夫ですと伝えたが、やらせてくださいと瀬川さんに押し入れ一緒にすることに。

「機材の手入れ、遠藤マネージャーに教わりましたか？」

「えっ？ まあ、そうですね。以前に赤城兄妹の使用するパソコンが不調になった時、実際現場で聞きました。知り合いもそれは絶賛するぐらいに丁寧な手入れをしていたみたいなので、俺も受けよりですがやってみよう」と

「ふふっ、そうなんです。ちなみになんですが、機材を元の場所にあった位置に戻したり手入れをしたりするのは私が最初にやりだしたことなんですよ」

「そうなんですか？」

てつきり遠藤さんが始めたことなのかと思っていた為に、少しアホみたいな問い方をしてしまう。

瀬川さん曰く、自分がやっている現場を遠藤さんが見てくれていたのがきっかけと言う。

それが今回、たまたま俺が重なった。現に機材の手入れ等は俺を含めて遠藤さんと瀬川さんの三人しかしないらしい。

「私はそもそも、自分が好きでやっていたことなんです。だから当時、私は遠藤マネージャーにやらなくても大丈夫と伝えました。しかし真面目な性格をしている彼女はこれも仕事の内と言って、それから毎日するようになったんです。本当は配信する予定の前日とかに軽く

チェックする程度でいいんですけどね」

「なるほど、そうだったんですね」

「だから今回、裕也さんが自発的に私や遠藤マネージャーみたいに機材の手入れを始めた時にビックリしちゃいました。けどその反面として、嬉しくも思います」

最初は自分がやりたいという理由でしていたことを、遠藤さん含め俺がしていることを喜ばしく思うと瀬川さんは言った。

俺はそんな瀬川さんの反応、純粹な笑顔を真横で確認しては、改めて綺麗な人だと感じた。

俺の場合は受けよりでやろうと思ったが、よく考えてみれば機材はいつ不調になるかわからない。

以前のように不調でV T u b e r が配信できなくなるというのは、この会社的にもキツイことなのだと思う。

だからこそ始まる前と終わった後の定期的なメンテナンスは取り入れた方がいいと、思った。

不調で配信ができないかもしれないとなった時に見せた赤城兄妹の残念そうな表情も然り、配信が出来なくなつて急遽休みになることは彼ら自身望んでいるものじゃないだろうしな。

「涼音は今でこそ成長して色んな人と話したり、接したりできるようにはなつてきましたが、その前までは身内以外と話すのは苦手な子でした。でも個人勢でV T u b e r を始めた時から、それが涼音にとつて大きなきっかけだったのかもしれない。あいつが自分から、これがしたいあれがしたいと言いつけるようになったのはそれが大きいと思うので」

事実、V T u b e r は涼音の中で大きい存在なのは間違いない。企業に属すことも、マネージャーに俺を選んでくれたことも、しっかりと面向かって頼つてくれたのは、それが初めてだった。

涼音はV T u b e r が大好きであり、唯一心の拠り所。だから、涼音にはD r e a m L i f e に所属したこともそうだが、今を全力で楽しんでほしい。

だから決して、涼音を悲しませるようなことはしたくない。

「ふふっ、裕也さんは本当に涼音さんのことが大好きなんですね」
「ん〱あッ!? そ、それはどういう!?」

「えっ? どういうもなにも、面倒見の良いお兄さんという意味でなんですけど……」

「あ、ああ……! そうですよ、本当にあいつは俺がすっかり見てないといけない気がしてるので。あはは……!」

あつぶねええええええええええ!! てつきり瀬川さんにも見透かされてるのかと思つたあああああああ!!

純粹な意味で聞かれたことに異様な食い付きで反応してしまった俺は、墓穴掘る寸前だった。本当に焦つたわあ……。

それから瀬川さんとは世間話などをしながら作業し、終わつてその場はひとまず解散となつた。

午後の配信は俺が決めればいらしく、開始時刻は16時からとのことで時間には余裕がある。

最後にもう一度部屋を見渡して確認し、俺はライブルームから出ては深く深呼吸をした。

謎の達成感、素晴らしい。

部屋の外の空気を吸い、俺はふと思つてしまう。そう、こういう達成感、一仕事した後を考えてしまうのは一服……。

禁煙したのにも関わらず、海斗の付き合いで吸つたあの煙草一本の味が沸々と蘇る。

脳内で天使と悪魔が勝負を始める――。

【涼音の為に禁煙したんだろ? やめとけつて】

【いやいや、一仕事したんだから褒美に吸つちまえよ】

【お前はバカか? その一本が辞められなくするんだろ?】

【だが現にこいつは海斗の付き合いで吸いたくなつてんぞ?】

【確かに〜!】

【それに決められた場所で周りに迷惑を掛けなければ、別に吸つても問題なくね? 自分の金だし】

【確かに〜!!】

【てことで、吸おう】

「へい大将、メビ〇スで頼むぜ」

おいしいおいしいおいしいッ!! 俺の中の天使、秒で論されてんじやねえかああああああああッ!!

脳内の天使が墮天したことにより、俺の足取りは一階にある売店へと歩み始める。

身体が動く、勝手に動く……! 抗え、ここでこそ精神力の強さを表に出していけ……!

しかし人間とは虚しいもので、気付く時には俺の右手には煙草、左手にはライターと携帯灰皿を手にしていた。

海斗と一緒に吸った屋上にて、俺は自分の弱さに打ちひしがれて仰向けに倒れ、空を見上げていた。

「涼音、すまねえ……。恨むなら海斗を、意志の弱い兄貴をどうかお許しくだせえ……。アーメン」

謎に祈り終えた俺は、うつ伏せに状態を変えて、さっそくと煙草を開封する。

一本を取り出し、口に咥える。そしてライターでカチツと火を付けたことで、口の中に入ってくる煙……。

「んっ……ふう……。あゝ、生きてるしうめえ……ッ」
喉に来る刺激、これだよこれ。なんか吸い始めたことで、もうどうでもよくなった。

二口目を吸った時、不意に屋上のドアが開く。あまりの不意な出来事に、俺はうつ伏せで吸っている状態で視線を向ける。

「あゝ！ お兄さん、煙草吸ってるよね!?!」
「ッ」

そこに居たのは旋梨ちゃんだった。意外な人物に、俺は思考停止と共にフリーズした。

しかしそんな俺を気にもせず。旋梨ちゃんは近付いてきて、何故か俺同様にうつ伏せで横になった。

しばらくして思考が復活したと同時に、俺は慌てて吸い始めたばかりの煙草の火を消し、携帯灰皿に入れた。

「終わった、全てが終わった。てかなんで此処に旋梨ちゃんが?」

「お兄さんが屋上に上がっていくのが見えればいい、やけんちよつと興味本位で後を付けたんよ。そしたらお兄さんが煙草吸ってたよね、悪い人やけんね〜」

「ぐぬう……… この事は涼音に黙っててくれ」

「黙っててもよかと。でも、匂いでバレるけんよ」

「ですよね〜」

痛いところを突いてくる旋梨ちゃんに、俺は涼音に隠れて悪いことをしてしまっている自分が情けないと思う。

コンクリートの冷たい感触を感じながらも、俺はうつ伏せのまま虚無に駆られる。

「それにしても、お兄さんが煙草吸ってるの久方に見たばい」

「……ん？」

ちよつと待て、旋梨ちゃんはなんて言った？ 俺が煙草を吸うところを久しぶりに見たって？

それはおかしな話だ。俺が煙草を辞めた時期は涼音と奏さんが来た時で、最近吸ったのは海斗の付き合いぐらいだ。

そこに旋梨ちゃんは居なかったし、そもそもそこで見ていたとしても久方という発言をするか？

「ふふっ、驚いてるお兄さん可愛いとね。今は二人きりやから言っちゃうけん。私は二年半前から、お兄さんのこと知ってるばい」

「……ッ!! どういうことだ……？」

「んー、口で説明するよりもまずは見せた方が早いとね。これで少しでも思い出してくれたら、嬉しいばい」

そう言つて旋梨ちゃんはスマホを取り出し、少し操作をした後に体勢の向きをこちらに変えてきて、画面を見せてくる。

——そこに映っていた写真は、黒髪の女の子だった。俺はその写真を目に映すと同時に、記憶が蘇った。

#27 如月旋梨にとっては大きな運命だった―中編

――約一年半前の事。

現在の母親である奏さんが親父と再婚する半年前、言い方を変えればまだ俺が海斗と不良をしていた頃の話だ。

学校終わりに一度帰り、親父に一言掛けた後に俺はバイクで海斗と待ち合わせ場所である廃墟まで飛ばした。

場所的には遠くも無く、信号に捕まりながらも20分程度で廃墟と化した建物に着いた。

既にそこでは海斗がバイクにもたれ掛かっており、後から来た俺はその隣にバイクを止めてヘルメットを外した。

『悪い、見事綺麗に全部の信号に捕まったわ。詫びに飲み物と少しのつまみを持ってきた』

『おっ、気が利くじゃん。とりあえず一服しようぜ』

誰も寄り付かない、人気の無い場所であるからこそ俺と海斗は煙草を吸い始めた。

まだ寒い時期ということもあって、陽が落ちるのが早い。俺は煙草を吸いながらも、海斗の左腕に巻かれた包帯が目に入り、なにがあったのか聞いた。

『また俺の知らねえところでやり合ったか？』

『ああ、前にお前と二人で潰した○○高の連中とな。此処に来る前に俺が一人って所を狙って仕掛けてきた』

『ははははッ！ 本当に懲りねえよな、あいつら』

『全くだ、数さえ多けりやいってもんじゃねえのにな。あいつらが束になろうと、負ける気がしねえ』

『単細胞だから仕方ねえよ、俺にも仕掛けてこねえかな』

『無理無理、やめときな』

『あ？ それは俺が負けるって言いてえのかよ』

『違う、お前が相手だと本気であいつら死ぬかもしれないからって意味だよ。加減つてのを知らないだろ？』

『いつでも全力、それが俺の生き方だ』

当時、不穏な会話が俺と海斗の間ではごく当たり前だった。だが決して勘違いしないしてほしいのは、俺たちが喧嘩を売ったわけじゃないということ。

過去にホームレス相手に集団で集っていた奴らがたまたま近場の別高校の連中だったということもあって、撃退したはいいもの。それ以来目を付けられて週に一度二度のペースで絡まれるようになったということぐらい。

しかし俺も海斗も結局はストレス発散にも繋がるという理由から退くつもりなど毛頭に無かったわけだが……。

『それはそうと腹減ったな……。ゲーセン行く前に、腹ごしらえにファミレス行こうぜ』

『帰った時に少し親父の飯を食べてきたからあまり腹は減ってないんだよな……』

『おい、少し遅れた理由って信号じゃなくてそれじゃね？』

『やべっ、墓穴掘った』

『テメエ、この野郎』

ケツを軽く蹴られて前に押された俺は、これ以上文句を言わずに海斗のファミレスで飯を食うことに賛成した。

二人同時にバイクに跨り、吹かす。そして準備ができたことを確認し、並んで移動をする。

目的があろうとなかろうと、二人でこうして移動するだけでも当時の俺たちにとっては楽しみの一つだった。

それから数十分と、あえて距離の離れたファミレスにまで移動し着いた頃。

俺と海斗はバイクに鍵を掛け、忘れ物がないか確認。互いに大丈夫とわかったところで動こうとした時、海斗が目線の先にある出来事に気付き、声を掛けてきた。

『おつ、あの子ナンパされてんじやん。助ける?』

海斗に指差され、俺はその先に視線を向ける。すると少し距離が空いているが、確かに人気のない路地裏で一人の女の子を囲んでいる連中がそこには居た。

俺は先ほど此処に来る前、海斗に蹴られた部分がヒリヒリとするということもあって、若干のストレスを感じていた。

しかしそれを本人にあえて言わないのは、やはり仲が良いからという保険があるからだろう。

故に俺は、海斗にサインを出しながらその方向に歩いていった。

『ストレス発散にブツ殺す』

『いや、殺しはするな。俺まで巻き添えじゃねえか』

なにやらブツブツと文句を垂れる海斗を他所に、背後から忍び寄り俺たちは声を掛ける。

『一人は危ないから、俺たちが家まで送ってあげるよ』

『だ、大丈夫です……。私、一人でも大丈夫……。』

『えー? 君可愛いからすぐに襲われちゃうよ? だから俺たちが優しく声を掛けてあげてるのにさあ』

『——オイ、集団で女の子を狙うぐらい自分に自信が無いなら二次元で一人虚しくシッコってな』

『ああ? なんだテメエ——。ガハッ!』

そいつの肩を手で叩き、注意を引くことに成功し振り返ったと同時に頬を殴った。

連中の一人が横に向けて吹っ飛び、残りの奴らはいきなり起きた出来事にあっけらかんとしていた。

『ッ!』

『うっわあ……。不意打ちは外道だわ……。』

『テメエよくも!!』

『ナイフとか普通に銃刀法違反だろうが。それに男なら、拳で掛かってこいよ!!』

ナイフを取り出してこちらに向かって振り下ろしてくる男に、海斗が庇うようにして前に立った。

自身の腕を男の腕に被せ、弾いた。それと同時に強烈な膝蹴りが見事にヒット。

……お前が殺す勢いなんだけど。

それから揉みくちやになりながらも、俺と海斗は思うがままに暴れまわった。

女の子を助けるといふよりかは、完全に自分らが抱えるストレスを発散する形だったが。

それから喧嘩が終わり、辺りには半殺しにした連中たちが気絶して倒れていた。

俺と海斗は呼吸を整えながらも、辺りに倒れている連中を目にしている互いに笑い合っていた。

『あ、あの……い！』

そこで女の子から声を掛けられ、俺たちは最初の主旨である助けるといふことを忘れていた。

しかし声を掛けられたことで思い出し、あからさまにそうであったかのように俺は声を掛けた。

『あく……、大丈夫か？』

『だ、大丈夫です……ッ』

両手を握り締めながら大丈夫と言う割には、その両手と身体が震えていた。

嘘を吐くのが下手と思いつつも、この場にずっと居させるのは余計にダメと感じた。

海斗と目を合わせながらも、どうしたもんかと考えた。その末に俺は、頭を掻きむしりながら言った。

『飯、一緒に食うか？』

『えっ……？』

『それで海斗の野郎が一人で全部倒しちまってよ、俺の苦労が水の泡だったんだよ』

『そもそも、誰もお前の手を借りようなんざ思っていないわ。そこにお前が勝手に介入してきただけであって』

『ふふっ、そういうことがあったとね……！』

半ば強制的に飯を食うことになった俺たちは、最初こそ警戒していたがほんの数分で打ち解けるまでに至った。

女の子の名前は如月旋梨と言い、身内で言い合いをしてしまった家を出してきた先にナンパで囲まれてしまったとのこと。

たまたまそこに俺と海斗が駆けつけたからこそよかったが、そうじゃなかったらゾツとする話だった。

海斗自身、まだ高校生である旋梨ちゃんを連れ回すのはさすがにヤバイのではと反対気味だったが、今では寧ろこれが正解だったと言わんばかりに話をしている。

『だが裕也、これからどうする？ さすがに旋梨ちゃんを連れてここ以外を回るのは危ないぜ』

『ハッ！ 既に社会のルールに反してる俺らが心配することかよ。それに家庭の事情は知らずとも、旋梨ちゃんも日頃の鬱憤が蓄積されてるだろうし、遊び倒せばいいんだよ』

『そ、そんなとんでもないばい……！ 私はこの時間だけでも楽しめてるし、ちゃんとこの後家に帰るとね……』

語尾に近付くにつれて、弱々しくなる旋梨ちゃん。本当は帰りたくないのだと、俺も海斗も感じた。

言い合いの内容はうっすらと聞いたが、なんでも旋梨ちゃんは本気でV T u b e r を目指しているとのこと。

当時の俺はそこまで興味無かったものだが、目指しているものを否定された旋梨ちゃんの心境を考えると同情してしまう。

この時点でV T u b e r の一次審査は通っているみたいだったが、親の賛成を得らなければ難しいということだった。

それで話はしてみたが、根本的に学生であることも然り、年齢にそぐわないということでもかなりキツめに言われたようだ。

『けど目指している夢を笑われたのであれば、それ相当に反抗する意思は持つていてもいいと思うぞ。帰りたくないなら帰りたくないでいいと俺は思うしな。ただ、そうだな……。だからといって親に言われたから諦めますも、俺なら癪に障るしなあ……。』

『それは間違いないな。だが、俺は旋梨ちゃんの両親の気持ちもわからなくはない。V T u b e r は少し耳にした程度だが、いわば将来性が見込みが極めて低いに等しい部分もあるからさ。家出する際に呼び止める行為があつたとも聞いたけど、その時点で決して両親は旋梨ちゃんのことを蔑ろにしているわけじゃないってのはわかるし』

『う、うん……。私も本当はわかってるんよ、お父さんやお母さんが心配して、将来を考えて言ってくれていると……。でも家出するまでは、考えられなかっただけやけん……。でも、お兄さんたちはなんでそこまで親身になって考えてくれると……。？』

『そりや旋梨ちゃんの立場だつたらって考えるからだよ』

『俺も裕也も、社会ではゴミの立ち位置かもしれないが相手の気持ちになつて物事を考えるようにはしてるからな。ああ、ちなみにムカつく奴やナンパしていた輩みたいなのやつは一切考えるつもりはない』

『はははっ！ そりや違いねえ！』

海斗の言葉を受けた俺は笑い、それに釣られたのか旋梨ちゃんも小さく笑う。

確かに海斗の言うように、俺たちはゴミだ。けどゴミなりに、夢を追いかける誰かの背中を押してやりたかった。

しばらく飯を食いながら駄弁り、時間を過ごした後。会計を済ませて俺たちは外に出た。

『ちよつと良い提案が浮かんだから、此处で解散するわ』

『オイオイ、またろくでもない企みしてるな？』

『まあ結果は後程にでも教えてやるよ。旋梨ちゃん、ヘルメット被つて後ろに乗りな』

『ええ……!?!』

後部座席に設置してあった予備のヘルメットを旋梨ちゃんに向けて渡し、俺は先に乗り上げエンジンを入れる。

深く追及してこない海斗は小さく微笑んだ後、『あまり厄介事は生むなよ』とだけ残してその場を去った。

『お兄さん、何処に行く……?!』

『んー? ああ、俺の家』

『ふえ……?!』

俺の言葉に惚けた声を漏らし、固まる旋梨ちゃん。いつまでも乗らない故に、俺は急かすように親指で後ろにサインを出した。

するとそれに気づいたのか、旋梨ちゃんは急いでヘルメットを被り言われるがままに乗った。

『安全運転は心掛けるが、しっかりと俺の身体にしがみついているよ』

『ひ、ひゃい……!』

バイクに乗るのは初めてだろう。故に、きつと緊張していたのかもしれない。

しっかりと俺の腹部に腕を回してしがみついていたのを確認し、俺はゆっくりと走行させ、家に向かった。

道中、異様な程に旋梨ちゃんの小さい手が俺の服を鷲掴みにしていたが、そんなに俺の運転って怖いかな?

程なくして家に着き、俺は駐車場に止めエンジンを切る。ヘルメットを外して、旋梨ちゃんからも受け取った。

『一応言っておくが、なにもしないからかな? 悪巧みなのは認めるが、決してやましいことをするつもりで家に連れてきたわけじゃないかな?』

『そ、そんなに強調して言わなくてもわかってるばい……!!』
念の為に釘を刺しておく……!というのもおかしな話だが、俺はなにもしないと誓う。

それに対して旋梨ちゃんは顔を真っ赤にして、返してきた。
そんな怒らんでもいいやろ……!

『親父、帰ったぞ』

『お、お邪魔します……』

『おお、おかえり裕也——。って、誰だその子は!?!』

『うっせえよ……、声がでけえ。まあなんだ、拾ってきた』

『わ、私は猫じゃないばい!!』

『拾ってきたって、お前……! ついに犯罪へと、俺はお前をそんな風に育てた覚えはないぞおおおおおッ!!』

そう叫びながら親父はスマホを取り出し、警察へと連絡しようとした。俺は慌てて親父に駆け寄り、そのスマホを取り上げて壁に向けて投げ捨てた。

『バカヤロオ!?! 此処に来る前にメールで事情説明しただろうがア!?!』

『事情説明ってこの文章でか!?!』

【親父、なんか拾った。持って帰るからちよつと手助けしてほしい】

『……ちよつと端折りすぎたな』

『端折りにも程があるだろうが!?!』

この上ない親父の正論に、俺は頭を掻きむしって改めて事情説明をした。

ナンパされている旋梨ちゃんを海斗と一緒に助けたことから、家出をした理由。

テーブル席に座り話をする中で最初は貧乏揺すりをして落ち着きが無かった親父だったが、やがては内容を理解したようで深い溜息と同時に背中を背もたれに預ける。

『それで、俺になにをしろってんだ?』

『ちよつと俺の悪巧みに付き合ってほしい。結果はどうであれ、少なからず良い方向には向かうと思ってる』

『ほう……。まあ平和に解決できるならいいけどよ、それでどういう悪巧みの内容なんだ?』

『それはだな——』

悪巧みの内容を、俺は説明する。まず一つ目に、旋梨ちゃんの両親に電話を掛けて保護していると伝える。

住所を伝えてこっちに来るように仕向け、二つ目に旋梨ちゃんから家出をした内容をチラつと聞いたと言う。

まあ、少しと言うよりかは結構聞いたが。

三つ目、これは大胆な行動ではあるのだが、親父含め俺で両親に旋梨ちゃんの夢を応援して貰えるように諭すことだ。

そんな内容に隣で聞いていた旋梨ちゃんは慌てふためき、そこまでしなくていいと言ってきた。

しかし俺の話聞いた親父はそんな旋梨ちゃんを落ち着かせ、最終的には二ヤリと不敵な笑みを浮かべた。

『——裕也、これは是非ともやろう』

#28 如月旋梨にとっては大きな運命だった―後編

俺の悪巧みに賛成した親父は、旋梨ちゃんから両親の電話番号を聞き出し、なんの迷いも無く掛けた。

何回かコールした後、応答あつたのだろう。親父は旋梨ちゃんの両親に、分かりやすく丁寧に説明をした。

それから一時間後、店のドアが開き旋梨ちゃんの両親が入ってきた。その時にまず両親の視線は旋梨ちゃんに向けられ、それは安堵や安心といった溜息だった。

海斗の言うように、決して旋梨ちゃんのことを蔑ろにしたいわけじゃなかったというのが見て取れた。

その際、旋梨ちゃんは両親に何か言われるのかもしれないと恐怖心があつたのだろう。

俺の背中に身を隠し、袖を握ってきた。しかし、両親は最早に俺と親父に頭を下げ、旋梨ちゃんが迷惑をお掛けしたこと、保護したことに対して謝罪と感謝の意を述べてきた。

俺と親父は頭を下げることはしなくていいと言い、ひとまず話をしようとしてテーブル席に案内した。

親父は近くのカウンター席の椅子に座り、俺と旋梨ちゃん。そして向かい側には両親が座った。

『少し話をする前に、ご両親に心配を掛けたんだ。そこはまず謝らなきゃいけないと、おじさんは思うぞ』

『……お父さん、お母さん。心配かけて、本当にごめんなさい』

親父に諭され、旋梨ちゃんはスカートをギュッと握り締めて素直に謝った。それに対して旋梨ちゃんの両親は互いに顔を見合わせながらも、同じように小さく頭を下げてきた。

『俺たちの方こそ、ごめんな。まさかお前が家を飛び出す程に、嫌だったと思わなかったんだ。けどお前が飛び出てしまった後、お母さんと考えを改めて、わかったんだ』

『でも決して間違えないでほしいのは、私もお父さんもあなたの夢に對して悪口を言ったんじゃないということ……。やっぱり親としては、成功する確率の低い夢が貴方の為になるかということを考えてたの。でもダメね、強い口調になってしまったから……。』

言い合いの中で両者の感情が高ぶる、というのはよくありがちな現象だ。それは互いに言いたいことを全部吐き出そうとする故、相手の気持ち、言葉を理解しようとしなからだ。

旋梨ちゃんの行動も両親にとつては驚愕する者であり、両親が素直に謝ってきたことも旋梨ちゃんにとつては驚愕だった。

てつきり怒られるのではないかと思っていたが為に、それも驚きに繋がったのだろう。

親子共々、考えがあつての今回の件。それでありながらも、しっかりと和解をすることができた。

それから俺と親父の二人で、節介ながらもV Tuberを目指す旋梨ちゃんの夢を応援するだけでもできないかとお願いをした。

決して両親の気持ちが変わらないわけでもない。しかし、俺も親父もやりたいこととしたいことを残したまま、実母を失った経験があつての頼みでもあつた。

過去を引き出してお願いをしたわけではない、ただそうしてあげてほしいというお願いをしたのだ。

数十分と話し合いをした。旋梨ちゃんは自分の想いを、両親は自分の想いを。

その中で生じているすれ違いを上手く繋ぎ合わせ、まとめることで状況は整理ができる。

やがて両親は、不安がまだ残る形ではあるものの旋梨ちゃんの夢を応援、背中を押してみると決断をしてくれた。

その時、俺と親父は顔を見合わせ笑いあつた。それから仲直りをしたことに、俺と親父はラーメンを振る舞うことにした。

もちろん、無料だ。是非とも食べて行つて欲しいと、俺と親父は二人で作業して特製醤油ラーメンを差し出した。

『親父、本当はラーメン食わせたかったんだろ?』

『これで常連になってくれりゃ売り上げに繋がるからな。ムフフ』

『親父も悪よのう』

『なになに、お主も悪よのう』

小声でくだらない会話をしながらも、実のところ冗談である。親父も俺も、ちゃんと旋梨ちゃんの夢を支えてあげて欲しいと心から思つての行動だ。

美味しい美味いと言って食べてくれる旋梨ちゃんに、両親。やっぱり自分で作つたラーメンを美味いと言って食べてくれる人は、本当の意味での神様であると思えた。

それから無事に家に帰ることになった旋梨ちゃんは、俺と連絡先の交換をしてほしいと言つてきた。

断る理由も無く、俺は喜んで交換をした。

それからは休日を利用してゲーセンで色んなゲーム、特に音ゲーを中心にやったりと遊んだり、海斗も含めて三人でドライブなどもした。

しかしそれから数カ月経つた頃、旋梨ちゃんから別の地域に引っ越すから会えなくなるとメールが届いた。

悲しくもあり、寂しくも感じながら『諦めず、頑張れよ』とだけ返した。

最後に届いた旋梨ちゃんのメールは、『お兄さんらしくて好き』というものだった。

それから更に時が経ち、親父が再婚して奏さんと涼音を迎えた日から俺はこれまで以上に忙しくなり、まともに遊んだりすることがなくなつた。

俺の記憶から旋梨ちゃんとの思い出が薄れていつてしまったのも、その忙しさに加え、連絡先の交換をしたのにも関わらずある日に起きた唐突な故障によるもの……。

言い訳に過ぎないが、再婚した後は本当に店が繁盛し、奏さんや涼

音との思い出作りに勤しんでいた。

よく考えれば、すぐに思い出すことだった。当時の旋梨ちゃんは黒髪だったとはいえ、改めて隣で同じように横になっている旋梨ちゃんを見れば全くの同一人物だった――。



「……そうか、君はあの時の……」

「やっと思いついてくれたばい……。でも、お兄さんは忙しそうだったし、責めたりはしないけん。ただ正直に言おうと、少し寂しかったりするけんね」

「本当にすまない……」

これだけの思い出がありながらも、忘れていた。その事実が罪悪感として押し寄せてきて、俺は寝かしていた身体を起こして胡坐を掻いた。

それに伴い旋梨ちゃんも身体を起こし、正座を崩した座り方に変える。

「涼音ちゃんが企業勢として活動する報告をした配信……、あれはたまたまツイッターを見てるときに切り抜きが流れてきたとね。最初は新人の子が増える程度で見てたんやけど、切り抜きの途中で決して忘れることのないお兄さんの声が聞こえてきたばい。聞き間違いとかではなくて、私の中にあるお兄さんの声はこれしかないって確信があったからばい」

「だからリトウィートしたのか……」

「もちろん、此処だけの話にしといてほしいけん。周りからすれば私が涼音ちゃんに興味あるって話で落ち着いていると思うから。でも私の本命は、お兄さんやけん」

「このミライバで出会った時に興味を示してきたのも、俺と出会った過去があるからこそなのか」

「そういうことばい。あくあ、けどお兄さんは私が話すまでは思い出すことすらしてくれなかったとね」

「いや、本当に申し訳ない……」

旋梨ちゃんのおわざとらしい言葉に、胸が痛くなる。いや、本当になんで忘れてしまったのか自分でもビックリだ。

これは親父に定年退職だの言える立場じゃないレベルで、記憶力が無さ過ぎて口からスープ吐き出しそうだわ。

「お兄さんとの最初の出会い、それから海斗さんとかと遊んだりした日々は私の中で最高の出会いやけん。やから此処に来た時、お兄さんが煙草を吸ってる姿も久々に見れたばい。けどすぐに消してしまっただけど、もう吸わないと?」

「実は禁煙に成功してたんだよ。けど先日海斗の野郎に付き合わされてから、また吸いたくなってしまったんだよ……」

「あらら、悪魔に負けてしまったとね。ふふっ、けど私はお兄さんの吸ってる姿は大好きやけん。だから見せて欲しいばい」

「勘弁してくれ、未成年の前で吸えるかっての」

アホなことを言ってくる旋梨ちゃんに、俺は頭を掻きながら煙草を無造作にポケットへしまう。

それにしても髪色を変えるだけでこんなにも人は変わるのかと、思ったりしてしまう。

決して言い訳ではない、そう信じたい。

「まあでも、改めてお兄さんと出会えて気持ちを伝えられて今日は満足したばい。そろそろ行くけんね、配信の打ち合わせをしないとレイちゃんがうるさいけん」

「ああ、わかった。話してくれてありがとうな、同時に改めてすまない。埋め合わせは後日させてほしい」

「埋め合わせ……とね? なら、これで勘弁しといてあげるばい」

「——ッ!?!」

頬に感じる、柔らかい感触。それは旋梨ちゃんが、俺の頬にキスをしたことよって感じるものだった。

不意な出来事に身体が硬直し、フリーズ。機械のように首を動かし

#29 女の子ってこんなにも勘が良いものなのだろうか

「……兄さん、煙草吸った？」

「いえ、吸ってません」

「嘘は、嫌い……」

「すいません、吸いました」

「それと、微かに香水の匂いもする……」

「いえ、女の子とは会ってません」

「まだ女の子なんて、言っていないけど……」

「すいません、墓穴掘りました。会いました、はい」

数十分と意識を手放した俺は、目を覚ますと同時に楽屋へと全力疾走した。

部屋に一人で涼音を残しておく事が少し不安だったというのもあり駆け込んだのだが、俺に付着している匂い、それと戻ってくるのが遅いという事で正座＋尋問を受けていた。

「ちなみに、誰と会ったの……？」

「旋梨ちゃんです」

「なにを、してたの……？」

「禁煙に成功したものの、海斗という悪魔の付き合いで一本吸ったことでまた吸いたくなり、売店で購入した煙草を屋上で吸ってたら旋梨ちゃんに見つかりました。不可抗力です、はい」

「別に兄さんが煙草吸う過程はいいよ……。私は旋梨さんとなにをしてたのかを、聞いてるの……」

「すいません、なにもありませんでした」

「本当に……？」

「本当、です」

「じー……」

「……ッ」

俺の記憶は、意識を手放したというのに覚えている。そう、こういう時だけはしっかりと覚えている。

旋梨ちゃんが、俺の頬にキスをしたこと。しかし、それでも俺は涼音にその出来事を話すべきではないと判断した。

だが俺がまたもや嘘を吐いていると思っっている涼音は、顔を近づけて見つめてくる。

うーん、やっぱ可愛いんだよなあ。

いや、今はそういう事を考えている場合じゃない。これは返答次第によってはバッドエンド、せめてこの場繋ぎだけでも、俺は無理にでもハッピーエンドに繋げなければいけない。

そこで俺は、ふと昼ドラの内容を思い出す。確かワンシーンの内容で、今この現状のように追い込まれた男が言い訳苦しくも発した一言によって誤魔化されたセリフがあった。

キャラではないが、ダメ元で俺は涼音に受けよりのセリフを言う事にした。

「涼音」

「……なに、兄さん」

「俺の中の一番は、お前だけだ。——愛してる」
「……ッ!？」

あああああああああッ!!! すいません、本当にすいませえええええええええんツ!!

いやね、確かに俺の中の一番は涼音で間違いないんだよ。問題なのはこのセリフなんだよ。

完全に浮気してる奴が言いそうな台詞ランキング1位2位を争うレベルの口説き文句だぞコレッ。

幸いにも俺の一言で顔を赤くして距離を離れた涼音だが、やはりこれを言うのは俺じゃなくて寧ろ海斗みたいなやつだろ。

やばい、自分で考えて自分でやった結果によって吐き気が込み上げてきた。おえ……。

「し、仕方ないから許してあげる……！ でも、なかなか帰ってこないから心配だった……。これからはちゃんと、一言メールでもいいから欲しいな……」

「善処する、本当に申し訳ない」

「うん……。それと、兄さん……」

「はい兄さんです、なんででしょうか」

「煙草出して……？ 持ってたら、いっぱい吸っちゃうでしょ……？」
「んふう……ッ」

隙を見せない涼音に、俺は苦い顔をしながら澁々とポケットに入っていた煙草とライター、そして携帯灰皿を取り出して涼音の両手に置いた。

「兄さんには健康で居てほしいから……。吸っちゃダメとは言わないけど、管理はする……」

「ちなみに、一日に何本までよろしいのでしょうか」

「5本……かな……？」

「んふう……ッ」

多少なりとも禁煙には成功しているから我慢しようと思えばできるのだが、一日5本だけか……。

再びレモンでも噛み締めたのかと言わんばかりの唸り声を上げながら、俺は首を縦に振った。

それから涼音の機嫌を取り、許して貰えた所で俺は椅子に座り、午前に行った配信の内容を書き記す作業に入る。

一日に行った配信の数に応じて、これが良かった、これが悪かったなどの改善案と同時に記録する。

コメント欄に害のある視聴者などが居た場合も目星として書き記し、一カ月単位で開かれるマネージャーの会議で情報共有などを行ったりにするのに必要な情報だ。

俺が作業に入っていると、テレビに接続されていたゲーム機を起動させて涼音はどう○つの森を始めた。

なにやらルンルン気分にあ足を揺らしながら鼻歌が聞こえるが、なにかいい事でもあったのだろうか。

「そーいや涼音、午後の配信は16時からだからな。午前は挨拶も含めて自己紹介枠の雑談だったが、午後の配信ではこれがやりたいとか何か提案はあるか?」

「んー……、ゲームしながらの雑談かな……」

「それじゃあ、ちようど今やってるどう〇つの森の実況配信とかでもするか」

「うん……。他にも、色んなゲームとか考えとこうかな……」

「一応、受けがいいのはホラゲーだな」

「えっ……。そ、それは嫌かな……」

先ほどまでルンルン気分だった表情が、一気に嫌悪感満載のものに変わった。

どうやら、苦手の部類らしい。確かに俺と親父がリビングで心霊系の番組を見た時、真っ先に部屋に戻っていたな。

しかし、なんだろうな。逆に怯えている涼音の姿や反応を見てみたいという気持ちもある。

しかしまあ、尊重して止めといた方がいいか。

とりあえず本人の提案的にも午後の配信はゆるくゲーム配信という事で予定を立てるとして、そうなるとキャプチャーする機材も後で動作確認しとかなないといけないな。

書き記しながら俺はあれこれと予定を考えながら、時に涼音の遊んでいるゲーム画面を見ながら事を進める。

それから少し時間が経ち、少し伸びをしたところで俺はある疑問が思い浮かぶ。

そーいや海斗は旋梨ちゃんのこと、覚えていたのだろうか。

そう思うと気になってしまい、俺はスマホを手にしてメールで海斗に送り付けた。

「そーいや思ったことあるんだが、海斗って旋梨ちゃんのこと覚えてたりする?」

俺のメールが送られてから、数分後。

「なに言ってるんだお前、覚えてるに決まってるだろ。寧ろ覚えてるからこそ、前のやり取りなんだが。えっ、まさかお前って覚えてません

でしたっていうパターン？」

「全く覚えてなかった。さつき、本人から聞かされてようやく思い出した。てか覚えてるなら教えてくれよ」

「うっわあ、なんて冷たい奴なんだお前は。どうせあれだろ、髪色が前と違ってたから思い出せなかったとかだろ」

ぐぬう……、やけに鋭いな此奴。海斗の癖に……。

それから何度かメールのやり取りを繰り返し、キリがついたところで返信はやめて終わらせた。

海斗は覚えていて、俺は覚えてないことがなにより不思議と悔しさが込み上げてきた。

しかしそうになると、色々と複雑な気持ちにもなる。旋梨ちゃんの行動、そして言い残した言葉。

きつとあれは、言わずもがなそういうことなのだろう。俺が忘れている中、二年半も俺の事を覚えていてくれて、尚且つ今になって気持ちを伝えられたって、どんだけ純粹なんだよ……。

しかしそう思ってしまうが、それでも俺は涼音を裏切るわけにはいかない。

というか、涼音じゃないと俺はダメかもしれない。しかし、なんだかなあ……。

別の形でいいから、その二年半の埋め合わせをしてあげたいという気持ちも出てきてしまう。

俺がそんな思いに更けていると、涼音がゲームのコントローラーを置いてこちらに歩いてきた。

一体なんだろうかと思ひ、椅子ごと涼音の方に身体を向けて首を傾げる。

すると唐突に、俺の腹部に向けて涼音が抱き着いてきた。

「今度はどうしたんだ？」

「……ううん、なんか兄さんが別の女の子のこと考えているような気がしただけ……」

「……なんだそれ。安心しろ、大丈夫だから」

なに、俺の義妹はエスパ―能力でも身に着けたのか？ それとも女

の子ってこういうの勘づきやすかったりする？

抱き着いてきた涼音の背中を撫でながら、俺は背中に冷や汗を流しながら冷静を保った。

「兄さんは、渡さないもん……」

「んあつ？」

「先輩とか関係ない、兄さんは私のだもん……」

「ちよ、涼音……ッ」

「絶対に、負けない……!!」

「あく痛い痛い痛い痛い痛い痛いッ!!?」

なにやら感情が高ぶっているのか、背中に回された腕の力が強くなり、やがては爪が食い込む程に抱擁が増した。

非力でか弱い女の子というものでは済まされない程の力強さに俺は悶絶した。

——おけ、もう義妹しか勝たん。これ決定だわ。

#30 序曲として大切なのは

涼音を落ち着かせた後、書き物のまとめも終わり昼食を食べ、一息吐いた頃に俺は落胆している。

配信前にベッドで昼寝をしている涼音を横目で見ながら、俺は再びテーブルの上にあるお小遣い帳と預金通帳に視線を移す。

一言で言おう、出費が酷過ぎると。

しかし別にギリギリというわけではない。単純にこの一カ月での出費が多すぎるということ。

自慢ではないが16歳までは小遣い制、16歳からは給料制で親父の店で働き、コツコツと貯蓄していた故に余裕はある。

最低限必要以上に物を買う習慣が無かった為に、十代の頃から貯金をひたすらにしていた。

だが奏さん、涼音が来てからというもの俺は不自由のない生活をさせたいと思いいろんな物を買ったりしていた。

しかしだ、大きな買い物と言えば実家にある涼音のパソコンから始まり、この楽屋で揃えた家具の数々……。

余裕があるとはいえ、少し無暗に使いすぎていると改めて確認して思ったのだ。

貯金残高、72万とちよつと……。

ちなみにパソコンやら家具を購入する前は150万以上はあったが、僅かこの期間でこんなにも減っている。

実母の保険金などは親父に任せているため、完全に小遣いでのもやり取りをしなくてはならない。

見直さねば、いけないな……。

俺は深い溜息を吐きつつも、疎かになってきている自分に喝を入れて整理する。

しばらくその作業をして、キリが付いた頃に缶コーヒーを口にしていると、楽屋のドアがノックされた。

俺は声を出して返事をしながら、ドアを開けた。

「あ、どうもこんにちは。今お時間ってよろしいでしょうか」

「こんにちは、遠藤さん。ええ、大丈夫ですよ」

ドアを開けた先に立っていたのは、遠藤さんだった。用事があつて訪れた遠藤さんを招き入れ、空いている椅子に座るように指示を出した。

紅茶を淹れ、座っている遠藤さんの前に差し出す。遠藤さんは小さく会釈して、淹れた紅茶を一口と飲む。

「それにしても珍しいですね。前までは基本的に赤城兄妹が居るときにいらっしやってたので」

「いつもあのお二人がご迷惑をお掛けしてすいません。しかし、今日は個人的なお話で来たんです。恐らく、裕也さんと涼音ちゃんの為にもなるかと思つて……」

「なるほど、それはどういった内容なんですか」

俺は遠藤さんの話に耳を傾けた。なんでも、涼音が午後の配信を終えた一時間後に赤城兄妹の配信が控えているとのこと。

もし俺たちの都合がよければ、見学という名目でより近くの場所で見えないかという提案だった。

大抵のマネージャー、そしてVTuberは自分の空間を大事にしている者が多く、基本的には部外者の立ち入りは禁止しているようだが遠藤さんは逆にそれをする事で、企業勢として活動をする涼音やマネージャーとして日が浅い俺の成長やヒントに繋がったりするのではということ。

確かにそれは有難い話ではある。実際に先輩である赤城兄妹がどういう感じの配信をしているのか、どうやって視聴者のコメントや反応を捌いているのか。

多少以上に、興味はあつたりする。

「もちろん私の判断で翔太さんと恵果さんに迷惑を掛けるわけにもいかないのです、お二人にもこの話を提案してみました。そしたら嫌がることも無く、逆にそうすることでなにかいいアイデアにも繋がればこのことで承諾してくださりました」

「あの二人にはいつも涼音がお世話になってますし、そこまで頂けるのは嬉しい限りですが少し調子が良すぎとは思われたりしませんかね……」

「と、とんでもありません！ 私もお二人も、出来る限りなにか協力したいと思ってるので気にすることないですよ。ただ涼音ちゃんの見聞も聞こうと思っただけでしたが、お昼寝中だったのでね」

「如何せん俺よりも涼音の方が大きな挑戦ですので、きつと緊張やプレッシャーで疲れてしまっているんだと思います。VTubeとしての経験は個人勢の時からあるとはいえ、企業での活動は大きく異なる部分がありますから」

「ふふっ、そうですね。それにしても本当に可愛らしいですよね、涼音ちゃん」

紅茶を一口飲んだ後、視線は涼音に向けられる。気持ちよさそうに寝息を立てている涼音を見ながら、遠藤さんは優しい笑みを浮かべていた。

言われずとも、涼音が可愛いのは前々からなんだよな。そう思いながら俺も珈琲を口にする。

それから遠藤さんと世間話、先輩として色々知識を与えてもらいながら平和な一時が過ぎる。

大体1時間ぐらい話だろうか。互いに満足し、遠藤さんは赤城兄妹の配信前の打ち合わせをする為に部屋を後にした。

——此処からは少し、端折りで流れを伝えよう。

それから15時頃、俺は涼音を揺すり起こす。眠そうにしている涼音の準備を待つて、打ち合わせをすることに。

打ち合わせを少し挟んだ後、ゲーム配信で雑談を踏まえるという流れとして、16時に配信を始めて午後の部も何事も無く終わることができた。

午前の部で既に緊張やプレッシャーは少しだけ緩和されていたのか、此処でも涼音の成長が見受けられた。

約二時間後の18時、赤城兄妹が配信を始めるのは19時から。その間の時間を利用して、涼音はテーブルの上に教科書やノートを広げて夏休みの課題を始めた。

昼寝したということもあって、涼音は活気に満ちていた。飲み物にはミルクティー、そしてクツキーを時々つまみながら勉強を進める姿はこの場の癒しというものだった。

対して俺は連絡先を交換した遠藤さんに、メールで配信始まる15分前には行きますと一応送っておいた。

すぐに返信が返ってきて、『慌てなくても大丈夫ですからね』という文章と共に、可愛いスタンプが送られてきた。

ちなみにメールと言っているが、REINというSNSアプリである。そして地味に可愛い、遠藤さん。

二人で別々の事をして休憩を活用し、時間が迫った頃。俺は涼音に声を掛けて、準備するように促した。

俺の言葉に涼音は頷き、鼻歌交じりに広げていた教科書などをしまし始め、言われた通り準備を始める。

気分がいいのはとても良い事だが、鼻歌は珍しいな。そう思いながら準備を終わらせ、楽屋を後にした。

——赤城兄妹が配信をする、ライブルームにて。

「あつ、涼音ちゃん！ やっほー！」

「恵果さん……！ や、やっほ……！」

ノックして確かめた後、俺はドアを開けた。中に入ると恵果ちゃんが涼音に気付き、小走りで近付いてくる。

対する涼音も恵果ちゃんと同じように挨拶を交わすも、恵果ちゃんはその前に涼音を抱きしめた。

尊いが、目の前にある。眼福眼福……。

「神代の兄貴、ご無沙汰っス！ オレも恵果みたいに抱きしめた方がいいっスか？」

「芸人魂を宿してるんじゃないよ、翔太くん」

両手を広げてぐねぐねと近付いてくる翔太くんを咎めながら、俺は機材の最終チェックをしている遠藤さんに寄った。

「遠藤さん、今日はありがとうございます」

「いえいえ、大丈夫ですよ。先ほども言いましたが、この見学で少しでも力になれたらと思っっていますので。ちなみに今日の配信は面白いと思いますよ」

「どういった配信をするんですかね」

「——約三時間の間で、視聴者の要望を取り入れて曲を作ります」

「……えっ?」

さらっとエグイことを言う遠藤さんは、困惑して固まった俺を他所に準備が出来たと赤城兄妹に指示を出した。

三時間の間で、曲を作る……? それも、自分らの提案ではなく視聴者の提案を掻き集めて……?

なにがなんだか、わからずじまいで俺と涼音は別室に移動し、遠藤さんと並んで椅子に座った。

目の前にあるデスクトップで赤城兄妹の配信枠に待機し、やがて赤城兄妹の準備ができたところで配信は始まる。

『こゝん〰〰ん〰はッ、ロ〰ッ〰ク〰ン〰ロ〰ー〰ル〰ッ〰!!!』

『ちよ、カゲロウ兄さん……。打ち合わせに無い挨拶の仕方やめてくれない? びつくりしたんだけど……。』

：初手デスポは草生えるwww

：打ち合わせとか裏の話をするなw

：今日のカゲロウやけに気分が良さそうだw

：これから曲作ったり歌ったりするのに喉潰すぞwww

：いや、つい最近12時間ぶっ通しで配信した時に潰してたぞ

：草www

始まる同時にお茶を口に含んでいた為に、最初の挨拶をデスポで繰り広げた翔太くんのせいで吹きそうになる。

慌てて口を手で覆ったが、少し漏れてしまった。それぐらいにインパクトがあり、想像を絶する形で面白さがあった。

心配する視聴者、もつとやれと望む視聴者。中には呆れている視聴

者と多種多様だった。

『いやあ、デスボつて難しいよな。練習を重ねるうちに続くようにはなったんだが、最初は淡吐き爺さんだった。カアアア、ツペ!』

『汚い汚い! そんなことしてると本当に飽きられて視聴者さんが減っちゃうよ?』

『それは困る、すみませんでした。お詫びに脱ぎます』

『ちよつと本当に脱ごうとしないでよ!』

・ホムラちゃんが脱ぐならまだしも、カゲロウが脱いでもな……

・それなw誰得状態だわw w w

・せめてアバターの方を脱がせw wリアルで脱ぐんじゃないw w

・妹にセクハラ行為、いいぞもつとやれ

・反応的にマジもんのやつw w w

『オレ、こう見えて腹筋バキバキだぜ?』

『違う、そうじゃない! ていうかどうでもいい!』

『またまた〜! ちよつとマジで見ても、割れてるから。あつ、今気づいたけどパンツ履き忘れてるわ』

『嫌あああああああああああああああああッ!!』

・w w w w w w

・どういことだよw w

・腹筋見せるついでに気付くんじやないw w w

・ホムラちゃん、強く生きて……

・せめてパンツは履けw w w

『なに叫んでんだお前。嘘に決まってるだろ』

『バカア!!』

『痛いッ!』

画面に接続されているスピーカーからは、ビンタを食らったであろう綺麗な音が鳴り響いた。

パンツを履いていないというネタに、隣で見ていた涼音は顔を赤くしていた。

しかし恵果ちゃんが翔太くんを叩いた時、なぜか納得したように頭を縦にうんうんと頷かせていた。

ちなみにこのノリは遠藤さん曰くいつものことらしく、これを最初に出して曲作りへと入るらしい。

——兄妹仲睦まじく、それでいて騒がしい。でもそれが、赤城兄妹の配信が面白い理由なのかもしれない。

#31 Go To Pants

赤城兄妹の配信が始まって、30分が経過した。最初の雑談から既に兄妹は互いに曲作りに必要なメインのギターやベース、他のセッション機材の画面を映して作業に取り組んでいた。

対する涼音も画面で曲が作られていく様が新鮮で興味があるようで、画面に釘付けになっていた。

遠藤さんは配信を見ながらコメント欄、ユーザーのチェックをしながら、15分毎に配信の様子を書き記したりしていた。

『カゲロウ兄さん、このセッションにギターって合うかな。バックを重ねすぎて澱んだりしたら汚くなっちゃったりするから』

『いや、もうちよつとベースの音を大きくしていいかもな。前にギターが来るのは前提かもしれないが、ベースもその中間あたりに響かせた方がオシヤレになるんじゃないか』

『じゃあそのようにちよつと調整してみるね』

：これこれ、この作ってる雰囲気の話がすこ

：集中してる時のカゲロウくんはカッコいい

：二人のギターとベース、相変わらず上手いよなあ

：ちよつとトイレ行ってくる

：生きて帰って来いよ

：僅かこの時間で組み上げるもんな、すげえよ

『んじゃホムラが調整してくれてる間に曲のお題でも決めるか。リスナーども、とりあえず適当にワード打ってくれ』

：パンツで

：じゃあ便乗してパンツ

：パンツwww

：パンツ一択

：パンツしか勝たん状態

『なんでだよ、おかしいだろ。てかなんだよ、パンツの曲って』

：そりやパンツに捧げる歌だろ

：ネタでも履いていないと言ったことを呪うが良い

：でもカゲロウのパンツは嫌なので、ホムラさんのパンツで

：確かに野郎のパンツより美少女のパンツがいい

：カゲロウお得意の魂の籠ったパンツの歌

『は？ ロック+デスボで歌うぞコラッ』

『ふふっ……！』

『なに吹いてんだよ、ホムラ』

『いや、カゲロウ兄さんがロックの曲調でパンツに捧げる歌をデスボで歌うって想像したらおかしすぎて』

：世界でもはやカゲロウしかないわ、そんなのw

：パンツに全力を捧げるV T u b e r w w w

：ある意味では知名度上がりそう

：上がったとしてもろくな噂にならんぞw w

：これは決定だなw w w w

『いや勝手に決定すんな？ 別のにしろ、別のに』

最初のネタでパンツを持ち出したばかりに、コメント欄ではパンツの曲が既に決定されている様子が流れる。

それに対して翔太くんは若干引き気味に答えるも、どうやら恵果ちゃんは乗り気らしい。

遠藤さんも恵果ちゃんのように想像したのだろうか。口元を抑えて顔を背け、身体を震わして笑っている。

「いや、本当にこんな感じで配信は進むんですよね。前も翔太さんの発言をリスナーの皆がやり始めて、収束が付かなかつたり。私はいいと思えますよ、パンツの曲。ふふっ……」

「確かに興味はありますが、完成されたパンツの曲っていうワードでもはやインパクト強すぎでしょうよ。しかもそれを歌うのは翔太くん本人、そりや傑作ですね」

「なにかの罰ゲームみたい……」

淡々と進む会話の中で、涼音の一言に俺は納得。確かにこれは罰ゲームで間違いないわ、うん。

『わかったわかった！ もうパンツでいいわ！ ホムラ、パンツを作ろう！』

『ちよつと！ 言い方に語弊あるんだけど!?』

『パンツパンツ言すぎてパンツのゲシュタルト崩壊が起きてるんだよ！ お前はパンツだ！』

『はあ!?』

：やけくそになるなやwww

：ホムラちゃんかわいそすwww

：ただの投げやりじゃねえかw

：ホムラちゃんはパンツだったのか……

：言い値で買おう、いくらだ

：5千兆円です

：来来来世払いでいけるな……

もはや考えることをやめた翔太くんは『パンツ』のお題で曲調や歌詞などを恵果ちゃんと組み上げていく。

その作業が雑談と共に一時間以上経過し、大方それが形になってきたところで試しに歌うことになった。

『よし、行くぞホムラ。パンツに捧げる熱き魂を、リスナーどもにぶつけてやんぞ!!』

『えー……。本当にこの入り方でいくの……?』

『この入り方で全てが決まると言っても過言じゃない。ということだリスナーども、オレ様の歌を聞けやあああああああああああああああああッ!!!』

：おおっ!! こりや楽しみだwww

：入り方ってどんな感じなんだろ

：まあカゲロウの雰囲気からしてロックだな

：間違いないw

：すこぶる魂が煮え滾ってるぜ!!

だがそんな恵果ちゃんと視聴者を置いてけぼりで、翔太くんの世界が繰り広げられる。

なんだかドツタンバツタンと音が聞こえる為、俺と遠藤さん、そして涼音はライブルームに続くドアを少し開けて確認する。

するとそこには椅子から立ち上がり、マイクを前に激しく上下にヘドバンする翔太くんの姿があった。

そんな翔太くんの暴走に、恵果ちゃんは笑いながらも腰を砕けさせ床で四つん這いになっていた。

対する俺たちも翔太くんのその姿に笑いが込み上げてきて、恵果ちゃんには悪いがそつとドアを閉めた。

「フハッ!! え、遠藤さん早く恵果ちゃん助けの方がいいかもしれないですよ!! ははははははっ!!」

「や、やめて兄さん……!! 笑いに釣られちゃう……!!」

「ふふっ、あはははははは!! こ、これは私にどうすることもできない事態ですよ! あはははははは!!」

翔太くん初号機、制御できません。しかもこれで始まったばかり故に、まだ続く。

スピーカーから漏れる翔太くんの歌、そして歌詞。それら全部がわけわからないというのもあるが、なにより本当にパンツに対して情熱を向けているようで笑いが止まらなかった。

それに続いてヘドバン、恵果ちゃんを置いてけぼりだ。歌の上手さに加えて体力やスタミナが有り余っているのは大方わかりきっていたが、まさか視聴者が見えないところでわざわざ体力を消費して歌う姿は圧巻過ぎた。

『ヴォ〃オ〃オ〃イッ!!』

「やめてくれ翔太くん、頼むからア!!」

『——パンツって、凄いやな。結局ズボンやスカートで隠れるというのに、色とりどりに種類があるし……』

「歌詞にセリフ投入はするい!! 翔太さん、やめてえ!! しかも無駄にいい声!!」

『でも世の中、隠れるからこそ成り立つものがあるってオレは知って

#32 違う意味での告白を朝に受けるとは思いもしない

パンツの歌を完成させた赤城兄妹の配信は笑いが絶えることもなく、終了予定時刻の22時を迎え、終わりを告げた。

見学を通して何かを学ぶつもりが、ほとんどゲラ笑いして終わってしまうという事態に、俺は冷静を取り戻して遠藤さんに頭を深く下げた。

遠藤さん曰く、翔太くんが悪いとのことでした。

ちなみに打ち合わせの6割以上をアドリブで通したというのもあって、翔太くんは配信が終わると同時に恵果ちゃんから幾度のおうふくビンタを食らい、遠藤さんには暴走し過ぎであると深く注意を受けていた。

しかしそのコメディ感ある流れと完成されたネタ曲によって多少のチャンネル登録者数が増え、スパチャの合計額が16万という成果を叩き出していた。

それから片付けをしながら赤城兄妹、遠藤さんと駄弁りをした後、俺と涼音はライブルームを後にした。

赤城兄妹の配信が終わり、疲れが後から出てくる。思えば、慣れないこともそうだが、あれこれと作業したり考えたりしたりで久しぶりに疲労が押し寄せてきた。

楽屋に戻り、俺はマッサージ機にその腰を深々と下ろした。

「んああ……、さすがに疲れた……」

「兄さん、お疲れ様……。私たちVTuberは配信ですぐに時間が進む感覚だけど、兄さんたちはそれをチェックする為に目も身体も疲れちゃうよね……」

「いや、それがマネージャーとしての仕事だし仕方ねえよ。それに案外、見てる方も楽しいし時間の流れの感覚は一緒ぐらいだと思うぞ。ただ前までは立ち作業だったから、座つての作業にあまり慣れてないというかなんというか」

マッサージで身体をほぐしながら思う。親父とラーメンを作つていた頃はずっと立ちっぱなし、それも身体を高い頻度で動かして休む間も無かつたぐらいだ。

けどそれは俺にとって性に合っていたのかもしれない。程よく身体を動かすだけでも身体の作りはしっかりするしな。

けどマネージャーの仕事は基本的に座つての作業。配信を見に来るユーザー、コメントのチェック。

それを数十分単位で書き記したり、指示を出したり。ほとんど立つことがない。

それ故か、一日だけで腰に負担が掛かつてしまった。今こうしてほぐされている瞬間も、しみじみに思う。

「涼音の方は今日一日を通してどうだった？」

「楽しかった……。最初は緊張が凄かつたけど、翔太さんや恵果さん、それに兄さんが支えたりしてくれたから頑張れたよ……。それにやっぱり、VTubeerは楽しい……」

「そうか、ならよかつた」

視線を涼音に向けると、本当に心から楽しかつたのだろう。そこには可愛らしく微笑む姿があった。

それから数分、ポッドのお湯が沸いた頃を見計らつて涼音が自分の飲むミルクティーと、俺の分の珈琲を淹れた。

俺はそれを見て、マッサージを止めては涼音の隣に座つた。

「ありがとう、涼音」

「んっ……。これぐらいしか、できないから……」

俺に対する労いはこれぐらいしかできないと、少し残念でもあり悲しそうな表情をする涼音。

だが俺は、珈琲を淹れて貰えるだけでもありがたいと思うし、なにより涼音がそれをしてくれたから余計に感じる。

「これぐらいと言わず、涼音が企業に勤めてV T u b e rをして頑張っている姿だけでも俺は嬉しいぞ？」というのも、ここに来てから涼音はなんというか、本気で楽しめている気がするし。まあ、赤城兄妹や旋梨ちゃんといった同じV T u b e rの友達が増えたつても大きいかもしれないな」

「うん……。翔太さんも恵果さんも、優しいし色んなことを教えてくれる……。でも、旋梨さんは危険……。ッ」

「危険って、なにが？」

「その……に、兄さんを取られる……。」「えっ」

涼音の反応に、俺は思ったことがある。そういえば何気なく旋梨ちゃんと関わりを持っていたみたいだが、俺は特に旋梨ちゃんの話をした覚えはないな……。

しかし昨日、大勢がこの楽屋に集まった時には同じ席に座って会話をしていたことから、俺が居ないところで知り合ったことになるんだよな。

「そういえば思ったんだが、涼音は旋梨ちゃんと何処で出会ったんだ？」

「えっと……。昨日みんなが楽屋に集まる前に、売店で買い物してたときかな……。兄さん、楽屋の家具とかを改めてチェックしてたから気付いてなかったの……。？ 一応、声掛けたんだけど……。」「マジ？ すまん、気付いてなかった……。」

涼音曰く、売店で買い物をしている時に旋梨ちゃんと出会ったみたいだ。俺は楽屋の最終チェックをしていた為に、気付く頃には涼音が戻ってきていたという状態。

その間に涼音は旋梨ちゃんと色々話をしてみたみたいだ。その内容がなんなのかは、教えてくれなかったが。

ともあれ、旋梨ちゃんが危険であるのは多少理解できる。いや、決して悪い子とかそういうのではない。

思い出すのは屋上でやり取り、まさしくあれだ。不意とはいえ大胆な行動を見せてきた旋梨ちゃんは、距離感を間違えると一気に縮め

て来そうで怖い。

いや待て、もうあれをされた時点で距離は近いのでは……？

しかし俺の中での一番は変わらない。旋梨ちゃんには申し訳ないが、もし本当にそうであるなら応えることはできない。

頑張るところも含めて、俺は涼音が大好きだからな。珈琲を一口飲んで、俺は罪悪感を抱きながらも整理した。

「兄さんは、まだ私の事好きで居てくれる……？」

「なんだ唐突に。変わることもなく、大好きだ」

そんな俺の気持ちを感じ取ったのか、不意にそんなことを聞いてくる。俺は安心させるように頭に手を置いて、撫でた。

俺の言葉に涼音は嬉しそうな表情を見せる。しかし付き合っていない以上は、これって周りが見てもシスコンなんだよなあ。

そう思いながらも時間が過ぎ、眠気も限界が来たところで俺は先にベッドで横になった。

布団って本当に偉大だと思う。一日に蓄積された疲れが、一気に緩和され癒される。

涼音は昼寝したこともあり、まだ起きていると言ってアプリゲームを始めたようだ。

あまり夜更かしはしないようにと促して、俺はエアコンにタイマーを掛けて眠りに付いた。

——熟睡した末に、迎える朝方。

「……なんか増えてるんだが」

起床し、カーテンを開けて日差しを部屋に差し込む。その後涼音が寝ているベッドへ視線を移し、気付いた。

なんか、旋梨ちゃんが涼音と同じベッドで寝てるんだよなあ。

つくづく思うのだが、本当にこの二人は仲が悪いのか良いのか、そこが全くもってわからなくなる。

まだ7時というのもあつて起こすことはしないが、如何せん何故このようになってるのが不思議でたまらない。

とりあえず小腹が空いた為に、俺は冷蔵庫を開けて中からヨーグルトを取り出す。

それを持って椅子に座り、一息吐いたところで思った。そういえば、ヨーグルト食べる前に一服したいな……。

だがその時の俺は寝起きでぼけていた。それ故、涼音に預けていることを忘れていた。

仕方ない、諦めるかと思った矢先にタイミングよく涼音がもぞもぞと動き、ゆつくりと身体を起こした。

「……んっ、おはよう……兄さん……」

「めちやくちやいいタイミングだな、おはよう。起きたところ悪いけど、一本だけ煙草欲しい」

「えつと……その引き出しに入ってるよ……」

涼音に指差して言われた場所を調べると、確かにそこには煙草が入っていた。

しかも俺が勝手に吸うと思っていたのか、一枚の紙に『ちゃんと許可をとってね、兄さん』と可愛い文字で注意書きされていた。

抜け目のない涼音、感服いたします。

俺が煙草とライターを手にした時、涼音が起きたのに気付いたのか、旋梨ちゃんまでもが起床する。

「ふああ……。あつ、お兄さん」

「おう、おはよう。なんで此処に居るのか聞いても？」

「昨日、寝る前にお兄さんと涼音ちゃんに挨拶しようと思ったんだけど、出たのは涼音ちゃんでお兄さんは既に寝てたばい。やけん少し涼音ちゃんと話してたんやけど、睡魔が限界でここで寝かせて貰ったばい」

「違う……。旋梨さん、兄さんが寝てるベッドに入ろうとしたから私のベッドで寝かせた……」

「ひ、人聞きの悪いこと言わんで欲しいけん」

「旋梨ちゃん、お前……っ」

下手くそな口笛を吹いて誤魔化そうとする旋梨ちゃんに、俺はげんなりとした表情になる。

対する涼音はなにやら守ったと言わんばかりのムフウ！という感じで達成感を味わっているようだった。

ともかく、喧嘩はしてないことが幸いだ。俺は屋上で吸ってこようと二人に一言掛けて部屋を出ようとした時、思い出したかのように旋梨ちゃんに呼び止められる。

「なんだ？」

「あのね、お兄さん。——私のマネージャーになって欲しいけん」

「……はっ？」

あまりの唐突な発言に、俺は手に持っていた煙草を床に落としてしまふ。対する涼音もビックリしているようで、口を少し開けた状態で固まっている。

朝から胃がキリキリとする状況の中、縛られることを苦手としているはずの旋梨ちゃんがそういう理由を聞くことにした。

するとどうやら、一人のマネージャーが関わっているようだった。

#333 救いようのない存在

煙草を吸うのはやめて、俺はひとまず旋梨ちゃんの話聞く為に椅子へと座り直した。

対する涼音も隣に座り、旋梨ちゃんは目の前に座った。まあ俺が起きている時を狙って顔を出したというのも、恐らく今から話す内容が本題なのだろうと思った。

「まず、マネージャーとしての立場を持つお兄さんの意見を聞きたいけん。お兄さんにとって、私たちVTuberはどう見えて、どんな存在って思ってる？」

「どんな存在って、そりやマネージャーはVTuberを支えるのが仕事だと思ってるし、互いに必要な存在とは思っている。一人じゃなく二人で頑張る、そんな感じじゃねえかな」

「……そっか。元からわかってたけど、改めてお兄さんは優しいって知れて嬉しいばい」

旋梨ちゃんという言葉がなにを指しているのか、その時点ではまだわからなかった。

涼音も真面目な声で話す旋梨ちゃんを前に、いつもと雰囲気が違うのを感じているのか心配そうな表情をしていた。

「マネージャーが作り上げてくれるスケジュールに従って活動するのが企業に務めた主なVTuberの活動やけん。けどそもそも私はそれに縛られるのがあまり好きじゃないというのは、レイちゃんを通して理解してくれてるやんね？」

「ああそうだな、瀬川さんからはその部分を聞かされてる」

「でも、その部分は苦手というだけであって本当は別の理由があるんだよ。それは、『Smile Road』に所属しているVTuberのマネージャーが原因ばい……」

それは瀬川さんからも聞かされていない、初めて知る旋梨ちゃんの話だった。

話を聞くと、所属したばかりの時はマネージャーを付けて活動に動
しんでいた時期があったらしい。

当時は特に縛られるような感覚はなかったようで、上手く共にこな
すことができた。

担当していたマネージャーはどちらかという気遣ってくれる人
だったみたいで、慣れ親しみやすいというのもあって、互いに信頼を
寄せる程のコンビだった。

だがある日を境に、その日常は壊れた。それら全ては smile
Road に所属する一人のマネージャーによるもの。

「私は別に音ゲーに対する上手さとか、配信での立ち振る舞いとかの
評価はどうでもよかったばい。自分が楽しめて、その良し悪しを伝
えてくれるマネージャーとの絡みが好きだったとね。その何気ない
日常があるだけで、凄く頑張れたばい。けど私のなにを評価したの
か、宮田マネージャーが引き抜こうとしてきたばい」

宮田和利、Smile Road のマネージャーを務める男性。そ
の宮田マネージャーが旋梨ちゃんに目を付けて、あろうことか引き抜
き行為に及んできたと話す。

しかも厄介なのが、当時旋梨ちゃんの担当をしていたマネージャー
が居ないところでの接触を常に凶ってきたらしく、挙句の果てには脅
し文句まで吐いてきた。

だが人に左右されない旋梨ちゃんは断り続け、あまりにもしつこい
宮田マネージャーのことを相談した。

すると旋梨ちゃんのマネージャーは事の事態が悪化している道中
であると警戒、そして対策を練ることに。

その対策というのは、瀬川さん含め社長に直談判するというもので
あった。

「マネージャーは正義感が強い人だったばい。私が相談した後で、す
ぐに上へ報告したとね。けどマネージャーから聞いた話は、証拠もな
い状態では掛け持つことはできないという一点張りだったらしいけ
ん」

悔しそうに唇を少し噛み締めながら、旋梨ちゃんは言う。社長の発

言は理解しがたいものであると同時に、理解してしまいかねない一言だった。

というのも、人を呪わば穴二つという言葉があるように、誰かを疑うということはそれに見合った代償が返ってくる可能性が少なからずあるわけだ。

なにせ旋梨ちゃんのマネージャーが直談判したと言っても、それは双方の意見ではなく片方の意見に過ぎない。

判断が難しいというのは、間違いないだろう。例えばの話、裏で旋梨ちゃんに詰める宮田というマネージャーの現場を他の人が目にしていたのであれば証拠として残るかもしれないが、そういったことはなかったみたいだしな……。

「ちなみに担当していたマネージャーと、その宮田マネージャーの現状はどうなってるんだ？」

「……私の担当をしていたマネージャーは、つい最近に辞めてしまったばい。お兄さんたちが来る半年ほど前ぐらいに……。けど宮田マネージャーはまだ現役でおるばい。マネージャーとしての成果は上やけん、社長も残す価値はあると思ってるやんね……」

実に皮肉で、腹立たしい結果だ。旋梨ちゃんのマネージャーは辞める際に『ごめんね』と何度も謝り続けた。

なにもできない自分に打ちひしがれ、精神的にも相当に来てしまい辞めてしまったのだろう。

誰にも左右されない、そして束縛を嫌うという性格からもきつとそれが本当の始まりであるのだろう。

そして今も尚、その宮田マネージャーからの誘いという名の鬱陶しいアプローチが絶えないという。

そりゃ旋梨ちゃんからしても、悔しい結果だ。証拠を残すにしても、一人の場を狙っていつ現れるかわからない相手ということもありそれなりに口は達者か……。

「兄さん……なんとか、してあげられない……？」

「なんとかしてあげたいが、俺も新入りっていう立場があるから下手に調子乗った動きはできないんだよな……。マネージャーになると

いう話に関しては瀬川さんを通せばなんとかなるかもしれないが、その宮田マネージャーの件は難しいな……」

「今でもあまりにしつこいけん……。やけん、私をお兄さんの元に置いてくれたら諦めてくれるかもしれない……」

「諦めるって言ったって、前のマネージャーさんの時から既にそういう行動を起こしてたん难道？ なら俺がマネージャーになったところで変わるような奴とは思えんが」

「そ、そうやけど……。ほら、お兄さんって見た目は怖い雰囲気あったりするけん。やから、宮田マネージャーもそれで腰を引いてくれるかもって思うばい……」

「いやちよつと待て、人を魔除けに使うな？」

確かに昔から周りに人を殺してそうな面してると言われたことはあるけど、実際はその気なんてないからな？

魔除けに使うなどは言ったけど、それで簡単に解決できるのであれば苦労はしないだろうし。

しかし此処で旋梨ちゃんが話してきたということは、彼女自身も相当にキている可能性が少なからずある。

その証拠に、この内容を話しているときの旋梨ちゃんはいつもと違って元気が無く、少し怯えている雰囲気もあった。

「それに、私はお兄さんがマネージャーをしてくれるならば嬉しいとね。涼音ちゃんは不快に思うかもしれないけど、それでも私はお兄さんがいいばい」

「不快には、思わないよ……。今話を聞いたら、兄さんの傍に居た方が安心かもしれないし……」

安心できるできないはよくわからないが、マネージャーを付けてない状態での現状は確かによくないと思う。

せめて目があるというアピールする形だけでも、多少なりとも下手に動くことはできないだろ。

「まあ、瀬川さんに持ち掛けて旋梨ちゃんマネージャーをする話は頑張ってみる。ただ最終的に解決しないといけないのは、その宮田マネージャーの件だ。証拠が無い状態で取り繕って貰えないというの

なら証拠を掻き集める必要もあるし、なによりずっと抱え込む問題になっちまう。言い方はあれだが、ここまで生き残れているのも向こう側からして逃れる術を持っているということになる。そこも上手く掘り起こさなきゃいけない」

確かに調子こいた大きな動きはできない。だが、新入りだからこそ動けるものがあつたりする。

そこを見出してなんとか解決できるように動きたいものだが、如何せん俺は宮田というマネージャーに会ったことすらない。

そして言ってしまうえば、この現状も旋梨ちゃんから一方的に聞いている話に過ぎない。

信じてないわけではないが、片方だけの意見だとどうしても淀みが生じている部分もあつたりする。

実際にこの目で見て、判断することも大事だ。そう俺が色々考えて、マグカップに手を付けた時。

全部を話そうと決意してくれたのだろう。旋梨ちゃんがこれまでよりも喉から声を振り絞って、教えてくれた。

「わ、私もすぐにこの問題を解決したいばい……。口は強気で言っても、実際になにかあつた場合じゃ勝てないけん……。だから、もう頼れるのお兄さんぐらいしか居なくて……！」

それを聞いた瞬間、俺は沸々と上がってくる怒りの感情のままマグカップに力が入り、割ってしまった。

手に浴びる熱い珈琲、そして割れた破片が刺さる感触。それに驚いた涼音と旋梨ちゃんが近付いてきては、俺の手を掴み、ゆつくりと開かせる。

すると破片が刺さった場所から、出血していた。

「あつ、痛てエ」

「兄さん……!!」

「急にどうしたばい!? す、すぐに血を止めないと……!!」

意識を向けてから感じるジワジワとした痛み。涼音と旋梨ちゃんが慌てて救急箱を手にして俺の手当をする中で、俺はそれよりも宮田というクソ野郎が移した行動に対して自然と怒りが湧いて止まらな

かった。

破片が刺さったことで病院に行くべきと促す涼音、それと共に心配してくる旋梨ちゃん。

思うことはいっぱいになっている俺を他所に、涼音は涙声で瀬川さんに連絡したらしく、数分後に瀬川さんが駆けつけてくる。

俺の手から止まらない出血に、瀬川さんは然るべき手当の処置をして、俺の手を引いて病院へ連れていこうとした。

そして俺は強制的に瀬川さんの車に乗せられ、その間もずっと怒りで放心状態だった。

#34 放置できない問題

会社から車を数十分走らせた先に着いた病院で、俺は看護師から治療を受けた。

瀬川さんに支えられながらも入り口を通して入った瞬間、受付の人が事の重大さに気付いてくれたのか、すぐに先生を呼んでくれたようですぐに治療を受けることに。

とりあえず形だけの止血として巻かれていたガーゼと包帯を解いて状態を見せた時、マグカップの破片がこんなにも深く刺さることは早々に無いと言われ、改めて自分が無意識に強く握り壊したのかとそこで気付いた。

よって部分麻酔をしてもらい、ちよつとした手術をすることになり一時間が経過した。

適切な処置を受け、看護師と先生に頭を下げてお礼を言い、受付ホールへ向かった。

そこにはそわそわして、落ち着きがない瀬川さんの姿があった。

「瀬川さん、終わりましたよ。迷惑を掛けてすいません」

「ツ！ 裕也さん、よかった……！」

「本当にすみません。先生が言うには、幸いに神経は傷付いていることはなく、破片の摘出と消毒、しばらくは右手を安静にとのことで済みました。……受付だけ、済ませてきます」

自分でも何故、あんなにも冷静を欠いたのかわからない。ただそれでも言えるのは、知り合った一人がそういう目に遭っているという事実、実に苛立ったということだけ。

過去にそういう現場があつてとか、知り合いがそういう目に遭ったからとかじゃない。

恐らく仲を良くしている関係の子がそういう目に遭っているからという単純な理由だ。

瀬川さんに頭を下げ、受付を済ませて俺は瀬川さんと一緒に外へ出た。

「……瀬川さん、少し話したいことがあるんですが、いいですか」

「旋梨ちゃんのことと、宮田マネージャーのこと……ですよね」

「ッ！ 知ってたんですか」

「裕也さんが治療を受けている間に、涼音さんや旋梨さんからメールを通して聞きました。立ちっぱなしもよくありません、車の中でお聞きします」

その表情は、悲しい何かを感じた。俺は瀬川さんの後ろをついて車の中に乗った。

「まず一つ、旋梨さんのマネージャーに関してですが、彼女がそう望んだのであれば私は許可します。その方が、あの子の為にも少なからずなると思いますので。しかし本題は、恐らく一番裕也さんが知りたいたいと思われてる宮田マネージャーの件……ですよね」

「そうですね。朝方、旋梨ちゃんが全部話してくれました。相当に精神への負荷があるみたいで、雰囲気そのものが辛そうでした。普段は元気に振る舞う旋梨ちゃんが、助けて欲しいと言葉には出さずとも救いを求めている気がしました」

確かに旋梨ちゃんは、才能を秘めている。じゃないと、音ゲーをメインに何十万人と登録者数は増えない。

皆が彼女に注目することがなによりの証拠で、そのプレイを見たいが為に集まる。

だが旋梨ちゃん自身、上手さよりも楽しむことを優先する。それは基本的にV T u b e rをしてるほとんどが思う事。

しかしそれを狙う宮田マネージャーの所業。才能ある者を傍に置いておき、自分の評価に繋げようとしている。

それらを踏まえての恐喝、そしてつい最近ではセクハラ行為。瀬川さんが言うには、宮田マネージャーの所業による噂はほとんどのマネージャーにも流れている。

だが結局のところ会社というのは売上重視なのが基本だ。それに証拠が無ければ、問い詰めることすらできない。

更に瀬川さんが話す上で知ったのは、宮田マネージャーはV T u b e rのスケジュール、及び健康管理はろくに取り扱わないそうだ。全ては成績というレッテルを上げる為の商売道具としてしか、見ていないようだ。

「……まさにクソ野郎ですね」

「私含めマネージャーの界限では、裕也さんの言うように良い印象はありません。ここまで噂だけでも悪印象がある為、宮田マネージャーの所業を知っている者で掛け合ってみたのですが、どうしても証拠を出せの一点張りで取り扱ってくれませんでした。本当に頑固な、人です」

証人、証言はあれどそういった現場の証拠が無ければなにをしようとも無駄。

頑固以上にわからずやだと、俺は思った。瀬川さんは悔しそうに握り拳を作っていた。

宮田マネージャーはざる賢い。そう噂が流れているとわかっている上で、逃げる術を持っているからこそ続けるのかもしれない。

俺の中であらゆる憶測を考え、なんとかして旋梨ちゃんをそいつから引き離せないか考える。

直談判するにしても立場上無理だ。それに、瀬川さんから前に別グループであるSmile Roadとの交流は極めて少ない。

V T u b e rであるなら、マネージャーは特にだ。だがそれと同時に俺の中で、チャンスがある場面を思い出す。

それは、月に一度行われる意見交流会だ。

その時こそが、しっかりと面向かって出会えるチャンス。それまでに証拠を取り揃えれば、なんとかなる可能性もある。

しかもその時に社長も顔を出すと言っていた。なら余計に、これを逃す術はない。

「瀬川さんに一つだけ質問があります。新人の立場として言うべきことではないのは承知なんですが」

「大丈夫です、あの人に関して私は私も頭を抱えているので。それで一体なんですか？」

「……俺がもし、宮田マネージャーを潰すと言ったらどう思いますか？」

「……えっ?」

俺の言葉に、瀬川さんはポカンとした表情で固まる。しかし言葉の意味を理解したのか、クスッと笑い窓側に視線を移した。

「そうですね、私もこの場を借りて少し荒い言い方をしましょう。潰せるのなら、是非ともって言いたいですね。ただそれをするのになにか考えがあるんですか?」

「今の時点では二つ程だけですが、やってみる価値はあります。この件に関しては早急に解決しないと、旋梨ちゃんが報われない気がしますので」

「ふふっ、あははははは！ いや、本当に貴方は面白いですね。普通はそんなこと言わないし、やろうとも思いませんよ。はあ、しかしそうであるなら私も協力させてください。一人よりも二人の方が情報も行動もしやすいでしょう?」

「取締役が悪い事を考えている奴に協力して大丈夫なんですか?」

「いえいえ、取締役としてではなく個人的にです」

微笑んだその表情は、やってやりましょうという意思表示と思えた。俺は形上では新人、だから表に立つことはできない。

しかし裏で一つずつ行動する分には別にいいだろう。それが旋梨ちゃんの為にもなり、会社の為にもなるなら。

——それに、こういうのは意外と得意分野だったりするもんだ。



「兄さん……兄さん……!!」

「お兄さん、お兄さん……!!」

瀬川さんに送迎をもらった後、俺は一度瀬川さんと別れ楽屋へと足を運んだ。

ドアを開け、中に入るとそこには気分を沈ませていた涼音と旋梨ちゃん、そして何故か海斗が居た。

しかし俺が入ってきたと知った瞬間に、涼音と旋梨ちゃんが泣きながら抱き着いてきた。

かなり不安と心配を掛けてしまったようだ。せめて、俺からもメールを送っておくべきだったか。

「お前が病院に運ばれたと瀬川さんから連絡あつて来たが、どうやら無事みたいだな」

「そんな大したことじゃねえ。ただ自分で傷付けただけだ」

「そうだろうと、今はその二人の前で大したことないなんて言うべきじゃない。特に旋梨ちゃんなんて自分のせいかもしれないと、責めてたんだからな」

「ごめんなさい、お兄さん……!」

「いや、別に旋梨ちゃんが悪いわけじゃないから大丈夫だ。それに涼音も、心配掛けた。ごめんな」

「うん……ッ」

「とりあえず何があつたか俺にも話せよ。事の次第によつては、協力してやる」

そういう海斗は、どうやら旋梨ちゃんからは聞かされていないようだった。

どのみち俺がこれからする上で、海斗にも協力してもらおうと思つていた。

抱き着いてなかなか離れない涼音と旋梨ちゃんを引き離し、俺は椅子に座つて一息吐いた。

すると海斗も同じように対向側に座り、なぜか涼音と旋梨ちゃんはピツタリと左右にそれぞれ座ってくる。

大丈夫と言つても、恐らく信用されていないなこれは。俺はひとまず、海斗になにがあつたのか、そしてどう動こうとしているかをすべて話すことにした。

#35ちよつとした出会い

ひとまずという形で海斗、及び涼音と旋梨ちゃんにも全てを話した。協力者は多いほどに得る情報量も違い、動く予定の細かな組み立ても可能になるからだ。

幸いにも瀬川さんから旋梨ちゃんのマネージャーをするという許可は貰えたということで、俺はこの楽屋の中に旋梨ちゃんが使用する着替えやパソコンなどの機材を移し替え、寝泊りするのに必要なベツドも一つ更に注文をした。

そして俺の話を聞いた海斗は、最初こそ悩みつつ難しい問題に対して意見を述べていたが、古き友である旋梨ちゃんの現状を変える為ならと提案に乗ってくれた。

しかし最初から飛ばして動くと余計に危ないので、これまで通りマネージャーとしての質を向上させつつ、涼音や旋梨ちゃんの活動を支えることに。

それと驚いた事実があるのだが、この楽屋に身を移すまでは前に俺が間違えてノックしたあの部屋で過ごしていたという。

あそこは此処のようにオートロック式のドアじゃない故、あまりにも無防備過ぎると注意を促した。

それに対して旋梨ちゃんはしよんぼりとしつつ、以後気を付けると反省をした。

「裕也、ちよつといいか」

「んあつ、どうした」

旋梨ちゃん的生活用品の整理を手伝っていると海斗に呼ばれて、俺は涼音に手伝ってあげてくれと伝えて楽屋を出た。

「お前の作戦とやらに必要なもんを揃える為に電話を掛けて聞いてみたんだが、使ってないのがあるみたいで貸してくれるってよ。ただお前はマネージャーとしての活動があるから、あまり実家の方面には帰らないだろ？」

「ああそうだな、親父と奏さんにもとりあえず一週間は帰らないと伝えてある。往復するのに大変だしな。それにしても繋がったのは運がいいな、生きてるかどうかも怪しかったのに」

「お前って奴は本当に非情だな……。とりあえず俺は生憎と休みだから代わりに受け取ってきてやるよ。ただ、戻ってくるのは夕方頃になりそうだ」

「構わない、準備は時間掛けて念入りにする方が安全だしな。向こうに行ったら、燐にありがとうと伝えておいてくれ」

——木島 燐。俺と海斗より一つ下の年齢で、かつての後輩だった者だ。名前は女っぽいが、れきつとした男だ。

高校時代に学校内でよく付きまとっては謎に弟子志願してきた奴で少し頭はおかしい。

機種変更した時に連絡先が消えて以来、連絡を取り合うことが無くなったが海斗を通して連絡が付いた。

燐は思考回路こそおかしい部分があるものの、海斗から現在大手企業に勤めていることを知った。

戻ってくる頃には夕方ぐらいにはなりそうという海斗に、俺は了承し頼んだ。

そこで別れ、俺は楽屋に戻って中の状況に目を通す。あらかた片付けも終わったみたいで、二人はやりきった達成感なのか、満足そうにお茶会を開いていた。

「おかえり、兄さん……。海斗さんは……。？」

「ちよつと用事で一度家に帰るってよ。また夕方頃には戻ってくるらしい」

「お兄さんの珈琲も淹れてあげるばい、待ってて」

「すまない、ありがとうな」

自業自得とはいえ、利き手を怪我してから異様に気遣われている感じが否めない。

海斗に話をするときも常に密着されてたし、なにより涼音はちらちらと俺の方を見たりしている。

いや、本当に大丈夫なんだがな……。

そう思っていると旋梨ちゃんが珈琲を淹れてくれて、差し出してきた。俺はそれを受け取り、一口飲む。

「とりあえず、今日からよろしくな旋梨ちゃん。スケジュールに関してだが、俺もまだ学んでいる最中……。好きなときにやればいいと思うぞ」

「私はお兄さんなら別にスケジュールを組んでもらっても大丈夫ばい。寧ろ、そうして欲しいと思うけん」

「……その方が、兄さんも組み方の練習にはなるかも」

「確かに、そう思うとそうだな。涼音のは既にあらかた決めているが、それなら旋梨ちゃんのも組み立てるか。それと、あまり深く考えなくていいからな。宮田マネージャーに関しては瀬川さんも把握してるし、俺の目がある内は手を出させないようにするさ」

「うん、本当にありがとうお兄さん……」

「気にするな。それと涼音、今日はこの後に午前の配信予定だったけど、午後の部を二回する形に変更するけど大丈夫そうか？」

「うん……大丈夫。今日はお絵かき配信する……」

怪我の具合的にも瀬川さんからは活発的に動かないようにと嚴重注意を受けてしまったからな。

涼音には申し訳ないが、午前は様子見して午後から頑張ってもらおう事にしよう。

何気ない日常、その中にある会話。それらを通して見ていたがやはり旋梨ちゃんの表情はまだ不安があるみたいだ。

しかし仕方ないと思う。宮田マネージャーの行動を聞く限りでは一人を狙って現れるらしいからな……。

出来るだけ一人にしないほうが安全かもしれないな。

マネージャーとしての仕事に、変な話護衛のような動き。これは忙しいというか、一人じゃ身体を潰してしまうな。

そう色々考えながらも俺はすべきことをやって、午前は三人で自由時間を潰した。

——そして迎えた昼、俺たちは会社内にある食堂へ足を運んだ。

「あつ、新人さんと旋梨ちゃんや！ お〜い！」

「んあつ？」

昼という事もあつて食堂は大勢の社員で混んでいる。その中で声を上げる一人の少女と、男性が居た。

その少女は声を上げた後に、小走りで近付いてくる。男性の方も小走りではないが、後を追うようにこちらへ向かってきた。

「……鳴海先輩、こんにちは」

「相変わらずしけた反応するやん。ほんま可愛い顔が台無しやで？」

それとこの子が噂に聞いてた新人かあ！ 旋梨ちゃんに負けず可愛い顔しとる。好き、是非抱きしめさせてもらうわあ！」

「ふああ……!？」

「なんだこのハイペースは……ッ」

近付くにつれて挨拶をしてくる少女に、旋梨ちゃんは冷たく返事を返し、涼音はなぜか抱きしめられて困惑している。

同じように向かつてきた男性はその光景に大きな溜め息を吐いて涼音から少女を引き離れた。

「楓、新人の子もそうだがマネージャーも居るだろう。礼儀としてまず初対面には名前を告げ、しっかり挨拶しなさい。私は八神 和馬と言う、君が最近入ってきた新しいマネージャーだね？」

「神代 裕也です。妹の涼音と一緒にこのミライブで働くことになりました、不束者ですがよろしくお願いします」

「ふむ、礼儀が良いのはしっかりしている証拠だな」

八神さんが手を差し出してきたので、俺も同じように差し出し握手を交わした。

年配の方という印象で、雰囲気も大人だ。落ち着いていて、それでありながら俺が若いからといって見下ろすような姿勢ではなかった。

「はあ……八神さんは本当に事細かいわ。だから周りからも絡みづらいつて言われるんとかやうか？ と言つても、確かに挨拶は大事やね。改めて、うちは鳴海 楓。Dream Life古参にして、最初のVTuberやで。以後、お見知りおきを」

「よ、よろしくおねがいます……!」

「Dream Life古参、それも最初つてことは……」

「Dream Lifeの中でトップに立つ人やけん。チャンネル登録者数は100万人越え、実力も全て大手の存在ばい」

目の前で恐る恐る鳴海ちゃんと握手を交わす涼音。その隣で旋梨ちゃんが小声で情報を教えてくれた。

つまり、旋梨ちゃん先輩でありDream Lifeの中ではトップに立つVTuber……。

しかも聞き捨てならないのが、100万人越えつて……。確かにノリがよさそうに見える以上、雑談もそれなりに面白そうだが、そんな桁違いの実力を持つているのは珍しいぞ……。

「挨拶もしたところで、裕也くん達もこれから昼食を？」

「ええ、お腹が空いている状態の維持は身体に悪いですから。八神さんたちはもう済ませた後ですか？」

「いや、私たちもこれからだ。食券を買おうとしたところ、楓が君たちを見つけたようだね。もしよければだが、ちよつとした交流会も含めて一緒に食事でもどうだね？」

「それいい提案やねえ！ 是非とも一緒に食べへん？」

変な社会の掟として、先輩方の誘いを断るわけにもいかない。それに、せつかく距離を詰めて貰える機会だ。

俺は小さく頭を下げて、受け入れた。対する涼音も同じように緊張はしているものの頭を下げたが、対する旋梨ちゃんは俺の服袖を掴んであまり乗り気じゃなかったみたいだ。

——鳴海ちゃんと、なにか関係があるのか……？

#36 問題よりも貢献

八神さんに食事を誘われた俺たちは食券で食べたいものを注文して、空いているテーブル席へと腰を下ろした。

涼音、旋梨、そして楓ちゃん、三人はドリンクを取りに行くようであらと席を外した。

その時に何が飲みたいかを聞かれたので、俺はお茶を、八神さんはカルピスを頼んだ。

意外にも可愛い飲み物を頼む人だなと思った。

「楓が騒々しくて申し訳ないね、ただ彼女も同じ所属の同士と出会えて嬉しさが抑えられないみたいだ。最初だけ見たところ、裕也くんの妹さんは人との関わりが得意じゃなさそうだが……」

「そうですね、苦手というのが正しいと思います。しかしミライバで活動を始めから、少しはマシになった方ですよ。それに鳴海さんの行動に関しては大丈夫ですよ。ああやって率先して動いてくれた方が、涼音の為にもなると踏んでいますので」

「君は実に言葉遣い、そして礼儀がしっかりしているようだ。見た目で言えばやんちゃしてそうな雰囲気も、やはり外見で人を語るのはいさか古い考えなのかもしれないな」

八神さんの言葉に、俺は内心冷や汗を掻く。見た目の限りではそうかもしれないが、実際には海斗と不良をしていたからな。

乾いた笑いで受け答えるが、さすがに自ら言う事ではないと思っ

た。

「私たちのような年配者はよく若者を見た目、そして年齢だけで下に見る傾向があったりする。私もかつてそうだった……。しかし最近流行りのVTuberとやらを知ってからは、若者とはいえ自分よりも上に立つ存在が居ることを知らされた。時代の変わりというのはなにがあるかなんてのはわからないものだ」

「最初の印象からするに、八神さんと鳴海ちゃんはかなり信頼し合っ

ているようにも思えました。この業界ではお互いとも長い感じですか?」

「V Tuberを支援する会社、ミライバよりも以前に私は他所でも同じ仕事をしていた。もうかれこれ20年だろうか……。此処へ来たのも三年前ぐらいだよ。別グループのSmile Roadが結成された後に出来たのがDream Life、そこで最初にV Tuberとなったのが楓であり、その次に旋梨くんということだ」

「ということはDream Lifeそのものが三年目ということか。それよりも前に出来たのがSmile Roadだから、そこに所属するV Tuberたちはより長いこと続けているのだろうか……。」

しかしマネージャーの仕事は20年も続けていると言っていたが、この落ち着き具合からして昇進もできたはず……。

俺は僣越ながらも、聞いてみた。すると八神さんは、昇進することの全てが自分の為になるとは限らないと答えてくれた。

自分のペースで頑張れる立ち位置、そして役割。マネージャーの位置で留まることが自分にとっての働き方、目指し方であると丁寧に教えてくれた。

それから色々お互いの事を話していく中で、八神さんは41歳とのことらしい。このミライバにおいてのマネージャーの中では最年長とも教えてくれた。

……俺も、こんなダンディなおじさまになりてえな。

「君は実に話しやすく、それでいて絡みやすい。こんな年寄りを相手にめんどくさそうな表情もせず、態度にも出さない。涼音くんの頼みとは言え、瀬川くんが君を受け入れた理由がわかった気がするよ」

「いえ、俺もまだまだ何もわからないド素人ですから。特に八神さんのような年上の方から聞ける話は貴重ですし。ちなみにご結婚とかされてるんですか?」

「ふむ、大変恥ずかしいことながら結婚自体したことがなくてね。というよりも世間からすれば受け入れがたい事であるが、私は楓の恋人であるのだよ」

「……んあッ!？」

とんでもない事を最後に知つてしまい、俺はドスの効いた驚きの声を上げた。

するとそのタイミングでこちらに小走りで戻ってくる涼音達の姿が見えた。

「に、兄さん……! 遅くなっちゃった、ごめんね……!」

「ドリンクバー、結構混んでたばい。はいこれ、お兄さんのお茶やけんね」

「ああ……ありがとう……」

「兄さん、元気ない……? なにかあった……?」

「八神さん、もしかしてもう説教したん? あかんよ、そんなんしたら可哀想やないの!」

「いやいや、私は裕也くんと世間話を嗜んでいたのだよ。その中で結婚しているか問われたので、隠す必要もないと思ひ私と君が恋人関係であることを教えた、ただそれだけだ」

鳴海ちゃんの気迫に、八神さんは受け取ったカルピスを一口飲んで事の説明をした。

すると鳴海ちゃんは顔を赤くして言葉が出ないようで、涼音も隣に座ったまま情報の処理が追いつかず首を傾げる。

旋梨ちゃんはそのことを知っていたのか、あまり驚きはせずに深い溜息を吐いた。

「驚くのも無理はないだろう。しかし、好意も告白も全て楓が仕掛けてきてね。私も最初は戸惑い、何かの悪戯なのではないかと疑ったものだよ」

「八神さん、ストップ! ストップ!! もうええやん、別にそんな話せんでも! なっ!？」

「しかし楓は本気だったようだね。なんでも世間という、オジ専というものらしい」

「八神さああああああああああああああんツ!!」

予想外の話をしていたと踏んだ鳴海ちゃんは、必死に八神さんの口元を両手で塞ぎ止めようとする。

しかしその手を退けて面白がるように続けて言った。

いやまあ、恋愛の形はそれぞれというし理解はある方だ。逆に年齢の差はあるが、八神さんという大人が鳴海ちゃんの恋人という事実がそもそも安心できる感じがする。

しかも丁寧に、『未だに手は出していないので安心してくれたまえ』などという情報も吐き出された。

未成年である以上、手を出すことは成人として我慢しなくてはならないことであるのと、常識の範囲内だと言う。

次々と語られる二人の関係に、鳴海ちゃんはテーブルに顔を埋めてプシュ〜と言わんばかりに蒸発していた。

「ちなみに、今はまだ八神さんがいるから自制してるけん、これが二人きりとか八神さんが居ないところであつたら惚気で数十分は捕まるから私は少し苦手やけん……」

「ああ、だから最初の挨拶の時乗り気じゃなかったんだな」

八神さんが居る居ない以前に、鳴海ちゃんとの相性がそもそも良くないのかもしれない。

小声でそう伝えてくる旋梨ちゃんに、俺は把握したと返した。

それから俺たちは親睦を深め、料理を堪能しながら昼の時間を過ごした。

涼音も最初は困惑、緊張していたがそれも打ち解け、上手く鳴海ちゃんとも話で盛り上がる事ができた。

それから昼食を食べ終え、一息を吐いた頃。

「少し気になったことがあるのだが、その右手はどうしたのかね」

「えっ？ ああ、これですか……」

負傷した右手を使わずにずっと左手で飲んだり食べたりしていることや、包帯を巻いていることからもう気になっていたのだろう。

そう問うてきた八神さんに、隣で座っていた旋梨ちゃんや涼音の表情が曇る。

「作業している時に深く切っちゃって、この有様です。しかしこれからの動きには何の不便も影響もないんで、大丈夫ですよ」

「ふむ、切ったとしても全体的に包帯が必要な程の怪我はなかなか出

来ないと思うがね。しかし話しづらいことは誰にでもあるようなもの、だが無理だけはよくない。今回私たちは出会ったばかり、遠慮もするかもしれないが、悩みなどがあるならいつでも聞こう」

「ありがとうございます。悩み、ですか……。じゃあ一つだけ聞いてもいいですか？」

「うむ、構わない」

「では、本当に一つだけ。——宮田マネージャーのこと、知ってますか」

現状、少しでも情報として欲しい人物の名前を俺は出した。すると隣に座っていた旋梨ちゃんはその単語に反応したのか、身体を身震いさせた。

だが俺はそんな旋梨ちゃんの手を、見えない位置で握り締めた。言葉には出さず、大丈夫と伝える為に。

すると旋梨ちゃんは俺の手を握り返し、小さく息を吐いた。

「……宮田 翔、私が最も毛嫌いしている者の名前だね。あまり良い噂は聞かないが、その者について知りたいのかな？」

「ええ、深く事情を話すことはできませんが……」

「なるほど。しかし君は、少し慎重に欠けるね。もし私が宮田と繋がりのある人間だったら、どうするつもりだい？」

「貴方の器が、良くない噂で塗れている人物と仲を良くするわけがないと見込んでの質問です。それに繋がっていたとしたら、それは貴方の言うように慎重性に欠けた俺の落ち度です。けどこの質問には、大きな意味があります」

「……フフツ、そうか」

先走りだとか、慎重性に欠けると言われようとも俺はこうした地味で大きな一步を踏み出さないと状況は変わらないと思った。

俺の返事に八神さんは微笑み、笑いを堪えた。

「若さ故の大胆ともいえる行動だな。宮田に関しては私含め、楓も嫌っているのだよ。無論本人の前では最低限のマナーで接するが、それ以外では関わるつもりはない。だが間違いなく言えるのは、あまり彼と深く関わるのは辞めたほうがいい」

「そうみたいです。しかし瀬川さんから聞いた話の中で、売上重視で動いていると聞きました。V T u b e r の健康管理は然り、配信のスケジュールはめちゃくちゃだとか。しかしこれだけ噂が耳に入っていて、過去に何度も掛け合っただものの受け入れて貰えていないということは聞きました」

「そこまで聞いているということは、瀬川くんは相当に君を見越しているのだろうね。ふむ、それら全ては事実だ。実際に彼が担当しているV T u b e r たちはほぼ毎日の活動を配信で行っている。コメント欄では心配する声もあるが、それでも元気に仮面を被っているのは背後に宮田の存在があるからだろう」

ミライバはV T u b e r を支援する会社としてあるが、瀬川さんから最初に話をされたときにもそうだが、V T u b e r よりもマネージャーが不足している。

それ故にV T u b e r をすることが大好きで続けたという宮田マネージャーが担当しているV T u b e r 達は頑張る他ないという現状。

旋梨ちゃんの場合は代役として瀬川さんが最初やっていたが、基本的にはマネージャーが居ないと規約上において活動が難しくなってしまう。

だからこそ無茶なスケジュールの通り動くしかないのだと、八神さんは事細かく説明をしてくれた。

「私たちマネージャーはV T u b e r である彼らの意見、そして体調などの管理を尊重しなければならぬ。しかし宮田は売上重視、この子たちV T u b e r のことは商売道具でしか見ていないのだろう。しかしだな裕也くん、これは社会の闇であり変えることの難しい横暴な常識に過ぎないのだよ」

「えっ?」

「会社として売り上げというのは最も大切な常識だ。それはどの会社でも掲げる最終地点……。雇っている社員の素性が問題ではなくて、売り上げに繋がる人材なのかそうでないのかを見据え判断するのが会社であり、そのトップなのだよ。宮田の性格は腐っている、それに

加え良くない噂が流れている。だが売り上げという成果を出している以上、会社には貢献しているということだ」

俺は改めて、八神さんから社会のどうしようもない現実を教え込まれた。

俺たち社員が求める事と、会社そのものが求める事の大きなすれ違い、そして根本的な掲げる思想の違い。

どんな状況においてもそれを判断するのは社長であり、全ての取り決めはそこで完結するもの。

幾ら宮田マネージャーが嫌われ、良くない噂があり、酷い所業がそこにあるとも、会社が残すと言えればそれまでだと。

「君は若い、それでいてまだ色んな可能性を秘めている。だがね、冷静と判断は決して欠けちゃダメだよ。時には我慢し、時には引くことを覚えるべきだ。君が何を考え何を成そうとしているかまでは深く聞くつもりはない。それに新人という立場上、あまり目立った行動は良いものとされないだろう」

「そう、ですね……ッ」

「その悔しさ、悩みというのは君一人で抱え込めるような大きさじゃないだろう。もし君が私、そして楓を信じてくれるというなら是非話を聞かせて頂きたいものだ」

八神さんのご厚意に、俺は考える。そもそもこれは俺の問題ではなく、旋梨ちゃんの問題だ。

俺はふと旋梨ちゃんの方に視線を移した。下を俯いたまま、俺の手を握り続ける。

考えていてくれてるようで、俺は待った。そしてやがて、その顔は俺に向けられ、小さく頷かれた。

きつと旋梨ちゃんは、俺を信用してくれたのだろう。そしてなにより、頼ってくれた。

俺も頷き返し、思い切って八神さんと鳴海ちゃんに事の経由、そして全てを話すことにした。

#37 感情全てが正しいとは限らない後悔

俺は旋梨ちゃんの意思を尊重した上で、事の経由を全て辿りながら八神さん、そして鳴海ちゃんへ全てを話した。

今現在、宮田マネージャーの狙いが主に旋梨ちゃんに向けられている事実と、その内容。

度が過ぎていると思われる行動の数々に、精神的にも辛い部分があることを、旋梨ちゃんは自らの口で伝えた。

その深刻な状況に、八神さん達も知らなかったのだろう。旋梨ちゃんが裏で受けていた状況を知ると、目を細め、顎に手を当て深く考え込んだ。

「そうか、そのようなことが……。一人の人間として、恥ずべき行動をしていたものだな……。しかもやり口が余りにも汚い、ちなみにその現状を知っているのは誰だね？」

「お兄さんと、その知り合い。それと涼音ちゃん、そして今話した八神さんと鳴海先輩だけやけん……。レイちゃんにも話そうと思っただい、けど……。負担を掛けたくないけん……」

「裕也くんを始めとし、その話をした相手は旋梨くんからして信用できる人ということだね。そして今回、勇気を振り絞って私たちに話す許可をくれた。なかなか辛い状況の中、よく話をしてくれたね。ありがとう」

「それにしても、うちの可愛い旋梨ちゃんに手を出してたなんて死刑じゃ物足りへんなあ！ 生き地獄を味わってもらわな割に合わんぐらいやわ。なつ、八神さんもそう思うやろ？」

「気持ち的にはわかるがね、中々大きな動きはできない。今できるこ

とと言えば、彼の言う準備が整うまでは旋梨くんを極力一人にしないこと、宮田に会わせないことだ」

かなり物騒な物事を言う鳴海ちゃんに、八神さんは落ち着かせ肝心なのは冷静になることだと言う。

俺も状況を知る一人としては極力ではあるが、旋梨ちゃんを一人にするつもりはない。

だがどうしても抜けなくてはならない用事が出来た場合、涼音が代わりに傍に居てくれると言ってくれている。

今回の件は涼音も事の次第が大きなものであると理解しているために協力はしてくれる。

旋梨ちゃんにも一応そこは縛ってしまうかもしれないと聞いてみたが、大丈夫とのことだった。

「ただ、宮田マネージャーは旋梨ちゃんが一人の時を狙って現れるとこのできつとこちらの動作を見ているものだと思われ——」

「——僕が、なんだって？」

「ツ！」

突如として掛けられた声。それはすぐ背後、目の前に座る八神さんの表情は一瞬で強張り、鳴海ちゃんは目を見開く。

俺はその唐突に掛けられた声が異様に低いものである上に、ゾツと身を震わせる程の圧に身体が硬直した。

視線を横に向けると、旋梨ちゃんは身体を震わせていた。涼音も俺の袖を掴み、同じように強張っていた。

「……食事後の場に何の用だね、宮田くん」

「あはは！ 八神さんは変わらさず怖い表情をしますねえ。そりや僕の事を話していたら嫌でも耳に入りますよ。ほら、どうでもいい話は聞こえないのに、陰口だけは良く聞こえる……的なね」

ゆつくりと振り向き、宮田という男の表情を拝む。それは一言で表すならピエロの皮を被った不気味なものだった。

何を考えているかわからない、動物に例えるのであれば、まさにヘビと言えるだろう。

「それと、此処に居たんだね旋梨ちゃん」

「うっ……あ……ッ」

「やだなあ、そう怯えないでくれよ。僕は君の才能を認めてあげてるんだよ？ そろそろ僕のところに来てくれないかなあ」

そう嫌らしく言いながら、その手は旋梨ちゃんの肩にゆっくりと伸ばされる。

それに気づいた旋梨ちゃんは恐怖で声を震わせた。だがその手が触れるよりも早く、俺は宮田マネージャー……いや、宮田の腕を左手で掴んだ。

「お兄……さん……ッ」

「こいつの担当マネージャーは俺です、勝手に引き抜き行為をしないで頂きたい」

「君が、旋梨ちゃんの……？ ふふっ、あはははは！ そうか、君は最近噂の新人くんかあ！ 僕の耳にも入ってくるよ。でも、これは決して認められないなあ。こんな『三流』をマネージャーにしちゃうなんてどうかしてるよ！」

「ッ！ に、兄さんをバカにしないでください……！」

「おや？」

「涼音……ッ」

俺の手を振り払う宮田。俺をバカにされたのが癪に障ったのか、あの涼音が声を張って言い返した。

それに対して宮田は最初こそ驚きを見せたが、すぐに涼音のことを下から舐めるように見つめた。

「君も噂になっっているDream Lifeに所属した新人ちゃんか。へえ、涼音ちゃんって言うんだ。可愛らしい名前だねえ、君もお兄さんよりも僕のところに来た方が成長も出来るし、色々なことを教えてあげれるよ？」

「テメエ……ッ！」

「おっと、暴力はいけないなあ。それに此処は食堂、かなり目立つ

ちやつてるけど大丈夫かい？」

「……ッ」

旋梨ちゃんに限らず、嫌らしい視線を涼音に向ける宮田。俺は無意識に胸ぐらを掴んでいた。

だが宮田の言うようにここは食堂、周りの注意を引いてしまっている。

俺は齒を噛み締めながらも、胸ぐらから手を離す。すると宮田が服の乱れを直して、また不気味な笑顔を向けてくる。

「さつきも言ったが、此処は君が参加できる場所じゃない。今すぐに消えたまえ」

「そう言わないでくださいよ、八神さん。いやね、この野蛮で常識のない三流が僕の事を言ってみたいでね。まあ大体の予測、きつと、ありもしない”噂を信じているみたいだけ……”。どうなのかな、新人くん？」

言えるものなら言ってみると、あえて挑発気味に顔を近づけ言ってくる宮田。

腸の奥から沸々と、怒りの感情が込み上げてくる。今すぐにでも此奴を、ぶん殴りてえ……。

だが既にこちらから手を出してしまった。それに加え言い返してしまえば、今後もずっと不利になってしまう。

今になって後悔する中で、俺は両手をグツと握り締めて宮田に頭を下げた。

「……この度は、無礼極まりない態度、そして行動すみませんでした。確かに宮田マネージャーの噂について話をしましたが、ただそれだけです」

「ふくん、意外にも場の弁え方は知ってるみたいだね。でも先輩に向かって胸ぐらを掴んだことはそう簡単に許せるものじゃないんだよねえ。だからさあ、これで勘弁して上げる」

「——ッ!!」

とつさに右手を掴まれ、力強く握られた。収まってきていた痛みがぶり返し、俺は激痛に顔を歪める。

「宮田くん！ 君と言う奴は……!!」

「八神、さん……大丈夫、です……!!!」

「しかし……!!」

「大丈夫だと……言っている……!!」

あまりの痛みに、俺は口調が荒くなる。それに対して涼音たちも動かず、ただ見守っていた。

「これで、気が済みましたか……!」

「……君、意外とタフだねえ。まあいいや、今回はこの辺で止めといてあげるよ。けどあまり調子乗った動きはしないことだ。それに無いと思うけど、僕を潰すような事を考えても無駄だよ。じゃあまた会おう、特に旋梨ちゃん……」

捨て台詞に旋梨ちゃんを見て舌舐めた後、宮田は満足したのかその場から離れていった。

俺は椅子に座り直し、傷口が開いたのか赤く染まってきている包帯を左手で押さえながら、ジンジンとする痛みに顔を歪ませた。

「はあ……はあ……! クソ、クソがア……!!」

「兄さん、しつかりして……!」

「ごめんね、お兄さん……! ごめんなさい……!」

立場として、実に自分が脆く弱い存在なのかを身を通してよく知ることになった。

痛みで苦痛に満ちる俺は、涼音と旋梨ちゃん、そして八神さんたちの付き添いの元で会社内にある小さな治療部屋へ足を運び、手当てをしてもらった。

それから楽屋に足を運び、一息吐いた後。本来なら自分でやらないといけないところを、八神さんが変わってくれて、涼音の午後の配信を見守ってくれた。

俺は楽屋で安静にするよう言われ、ベッドで横になっていた。そして楽屋には旋梨ちゃんと鳴海ちゃんが残ってくれた。

「お兄さん、具合はどう……?」

「さつきは取り乱してすまない。だいぶ落ち着いてきた、痛みは多少あるが、それでもマシだ……。はあ、感情的になってしまっなのは俺の

悪い癖だな……」

「そんなことあらへんよ、うちがもし裕也さんの立場だったらと考えたら、同じことしたかもしれへんよ。それに宮田さんは裕也さんが止めなかったら、旋梨ちゃんに触れてたんやし。止めたのは正しいと思う」

「だからと言って、俺の行動を正当化するわけにはいかない。ただあの野郎、旋梨ちゃんじゃ足らず俺の妹にまで……!!」

「ちよつとちよつと！ かんだらまた開いてまうよ！」

思い出すだけで、腹が立つ。自然と手に力が籠るが、慌てて鳴海ちゃんが止めに入ってくる。

「はあ……自分が情けねえ……ッ」

「そんなことないばい……。お兄さんが止めてくれたの、凄い嬉しかったし、助かったんよ……？」

「だが結果的に、俺は……ッ」

一歩間違えれば、状況が悪化した。話し合いの中で八神さんから冷静こそが大事と教えられていたのにも関わらず、感情を抑えきれず行動に出てしまった。

学生の頃とはもう違う。今自分が立っている場所は社会を生きる一人の成人だ。

それなのに関わらず、俺は我慢強さが無かった。考える程に、俺の行動一つで取り返しのない状況になっていたかもしれないという自己嫌悪に、自然と涙が込み上げてきた。

俺は慌てて左腕で目を隠すが、悔しさと自分の情けなさに、涙は溢れるばかりだった。

「すまない、本当にすまない……！」

ただ俺は謝ることしかできなかった。それは自分の愚かさに対してなのか、旋梨ちゃんを危険に晒すかもしれないことに対するものなのか。

——そんなことも理解できず、俺は歯を噛み締めた。

これまでのキャラクター紹介【4】

1. 八神 和馬 | Yagami Kazuma |

年齢：41歳

身長：177cm

【備考】

Dream Lifeに所属している鳴海 楓の担当マネージャーを務めている。刈り上げの黒髪に、鋭い目付きをしている。マネージャーの中では最年長とのことで、慕われている部分も数多い。年齢の差が激しいものの、楓とは恋人同士。なんでも、アプローチは全て向こう側によるものだとか。

悪戯と思っていた気持ちも、やがて楓の本気を受け止めて、互いの事を知りつつも受け入れた過去を持つ。

性格は生真面目で、且つ冷静。物事に対して感情よりもまずは考えて動くことを徹している。

裕也にもそのことを伝えたりと、先輩としての立場を見せたりもしている。

長年とマネージャーとしての仕事を続けている中で、昇格の話を持ち出されたこともあるようだが、断っている。

無理のない働き方を求めていることや、年齢での限界を考慮して今の立場で満足しているようだ。

ちなみに宮田 翔のことをかなり嫌っている模様。

2. 鳴海 楓 | Narumi Kaede |

年齢：19歳

身長：164cm

【備考】

Dream Life所属のVTuber。一番の古株であり、登録チャンネル数は100万人を超えている。

主に雑談を通じた視聴者との絡みをメインに配信活動を行っており、コラボ時にはその本領を発揮することが多い。

明るく後輩思いの姉的ポジションを持つっており、頼られることもあつたりなかつたりする。

茶髪のセミロングに、同色の目が特徴。大阪出身と言うのもありノリは大事にしており、和馬にはゾッコンしている。

ただし、旋梨曰く二人きりで会った際は惚気で大半の時間が経過するとのこと。

ちなみにゲームは大の苦手。どのジャンルでも基本的にミスが多いのだが、それを面白がる視聴者が大半を占めたりする。

3. 宮田 翔 | Miyata Syou |

年齢：28歳

身長：175cm

【備考】

Smile Roadに所属するVTuberの担当マネージャーを務める。動物に例えるとヘビであるように、不気味な雰囲気を持つ。

売り上げ重視の成績による実力思考の持ち主で、VTuberを主に自分の地位を上げる為の道具に過ぎないという思想を持つ。

その思想によるものから、才能を秘めている旋梨を裏表共に目を付けており、引き込もうと企んでいる。

自分の成績に繋がる利用価値あるものに対しては手に入れようとする性格から、マネージャー然り一部の職員からは良い噂をされてない。

本人もその噂を耳にしているが、特に気にする素振りは見せたりしない。それら全て、宮田なりに揉み消すことができる手法を持っているようにも思えるが、実際の所まだわからない。

ミライバ改革編―前編―

#38 ヒントを求めるのなら身近な存在から

宮田と衝突してから、約三日後。怪我をした右手も無事に治り、包帯を外した。

握ったり開けたりと具合確認しながら、傷口こそは少しまだ残ってしまっているが、特に問題はないようだった。

心配してくれていた涼音と旋梨ちゃんにも大丈夫というサインで見せてみたら、安心してくれたものの無理はしないよう強く言われた。

そして今日は、二人のスケジュールは休みにしてある。というのも、今日は予定より早く実家の方へ帰るつもりだからだ。

宮田を潰すと意気込んだはいいものの、準備こそ順調に進められたが、気持ち的に余裕が無いと海斗に促され、相談で親父に電話。

事の次第を説明すると、親父からは一度帰ってこいとだけ言われてしまったわけだ。

「……それで、なぜお前らが居んの？」

「いやあ、ほんと偶然ツスね！ まさか都合良くオレたちも休暇日だったなんて！」

「本当にごめんなさい、私は止めたんです。でもお兄ちゃん、言う事聞かなくて……」

「いや赤城兄妹もそうなんだが、遠藤さんも別に着いてこなくていいのでは？」

「い、一応この子たちの両親方に保護者の代わりを任されていますので……。その、温かく目を瞑って下さると嬉しいです……」

弱々しく、そして申し訳なさそうに謝ってくる遠藤さん。いや、まあ確かに赤城兄妹……特に翔太くんの制御できるの恐らくこの人しか居ないだろうし仕方ない気はする。

しかもこうなった理由としては、涼音がきつと休みである今日は実家に帰る、そしてその実家がラーメン店ということも含め、色々と教えてしまったからだろう。

じゃなきや、翔太くんらが興味を示すわけもないんだよな。

「むう……兄さんの隣、座りたかった……」

「そう不貞腐れるなよ、涼音。一応遠藤さんは俺の上司に当たる人なんだから……」

「わ、私は別によかったんですよ!?!」

「いいえ、そこはしっかりしますよ。それに涼音も、わかってくれるよな?」

「うん……」

「じゃあ間を取って私が隣に座るばい!」

「アホか」

ちなみに乗っている車は贅沢にも黒のヴェ○ファイアで、そこそこ余裕がある。

後ろから旋梨ちゃんがなにか言ってるが、俺は一言で返す。

三列目には赤城が、二列目に涼音と旋梨ちゃん、助手席には遠藤さんという並びだ。

運転する者として安全運転を心掛けている中で耳に付けていたBluetoothのイヤホンが着信を受信し、俺は応答する。

『もしもし、俺だけど』

「オレオレ詐欺は古いぞ、出直してこい」

『あ? 後ろから突っ込むぞコラッ』

応答した先に聞こえてくるのは海斗の声。ふざけて始まる会話に、それを聞いていた遠藤さんたちは笑う。

『途中でパーキング寄るか?』

「あー、そうだな。ちよつとした菓子類や飲み物も買いたいし」

『了解。あつ、ちなみになんだが……』

「んあ?」

『……すんげえ言いづらいんだけど、そして今更なんだけどよ。俺の車に八神さんと鳴海ちゃんも乗ってるから親父さんに人数付け足し

て報告しといてくれねえか』

「……はあ!？」

俺の驚愕に、今度はその場の全員がビクツと身体を震わせた。

どういふことなのかと聞いてみると、なんでも車を発進させる前に八神さんが運転席の窓から見つめていたという。

何か用があるのかと聞いてみれば、なんでも俺のことを知りたいという事と、鳴海ちゃんの息抜き……つまりは鈴音たちとの交流を更に深めておきたいという理由だった。

宮田を潰す計画に加担してる者として、俺を見定める必要があるのはわかる。

しかし、実家にまで付いてくるとなると、あまり信用されてないのかと不安にもなる。

まあけど、鳴海ちゃんも鈴音のことを気にかけてたり、旋梨ちゃんの事情を聞いてなにか手伝えることがあればと積極的になってくれているから悪くは無いかもしれない。

それについてきてしまっている以上は途中で降ろすわけにもいかないし、俺は海斗に了解とだけ返して、途中のパーキングエリアで休憩を挟む間に親父へとメールした。

【親父、人数追加で。計8人ぐらいだ。世話になってる上司の方々も居るから、挨拶もしたいとのことで把握よろしく】
すると、すぐに連絡が返ってきた。

【8人!? 随分と大団円だなあ! とりあえず奏にも伝えておく、気をつけて帰ってこいよ】

そんな親父のメールを確認した後、道中で嗜む菓子や飲み物を買ってきた鈴音たち。

俺は遠藤さんに一言だけ残し、海斗と合流して喫煙所へ。

「あれ、一本だけしか持つてねえの?」

「涼音に管理されてんだよ。タバコの申請して許可が出れば吸える」

「ははははっ!! なんだそれ、妹に管理されるのは大笑いものだわ。嫌味ったらしく二本吸いしてやるわ」

「そのままさっさとくたばれ」

口にタバコを咥えると、海斗がZIPPOを近付けて火を灯してきた。

俺は先端を近付け、火をつける。そして海斗からZIPPOを受け取り、同じように先端へ火を灯して付けた。

「ふう……。それにしても、この短期間で色々なことが起きたもんだな」

「ああ、そうだな。新人の立場でありながらやる事が多すぎる」

「宮田だっけか。話聞く限りでは、かなり手強いぞ。大丈夫なのか？」
「……正直、不気味で何を考えているのかわからない。自分の悪い噂自体、知ってるような素振りしてたしな。けどそれを理解していながら、大胆にも行動できるのは余程隠しきれない自信があるからだろうな」

「あく、間違いないな」

互いに煙を吐き出しながら、宮田に対する対策を考え合う。

一応、前に話していた木島 燐という人物の手を借り、あらゆる対策アイテムは手に入れた。

今回は帰省するというのもあり、付けていないが、ミライバでの活動する際は常にボイスレコーダーを旋梨ちゃんには持って貰っている。

それに加え、燐の自作である特殊な緊急用ボタンも預けてある。

仕組みとしてはワンタッチで俺のスマホに位置情報を知らせるものだ。

もしも一人の場を狙って宮田が旋梨ちゃんに接した時、スマホを取って助けを呼ぶ余裕はないと思われる。

それ故に、とっさの判断で素早く緊急を知らせるアイテムだ。

ちなみに製造方法は教えて貰えなかった。なんでも、企業秘密……みたく断られた。

「学生時代に宮田みたいな野郎が居たら殴って解決なのに、今は立場が違うもんなあ。陥れるというのも新人である俺らが考えるのもおかしい話だが、生け簀かねえのも違うない」

「それに、きつと宮田は俺がしようとしていることは全て見抜いてい

る気がする。例えば旋梨ちゃんにボイスレコーダーを持たせて警戒させていることかな……」

「けど、それだけでも行動に制限を掛けられるのは大きい。今は互いに冷戦状態、そして探り合いの真っ只中だろう。……はあ、ほんとお前と関わってるよろくなことになんねえな。いつも巻き添え、トラブルだ」

「俺は別に無理して付き合えなんて言っただけでねえからな」

「……マブダチが困ってるのに、見てないふりできるかよ」

「自分で言っただけで恥ずかしくなってるんじゃないよ、気持ち悪いな」

「うるせえ」

俺の起こす厄介事に、なんだかんだ付き合ってきてくれて来た。

無理強いはいらない俺の性格を唯一理解した上でそう判断してくれるのは、やはり本当の意味での親友だからなのだろうか。

それからいつものように駄べり、バカな会話をして一服の時間が過ぎる。

喫煙所から離れて互いに車の方へ戻ろうとした時、悲痛に満ちた誰かの声が響いた。

「ぜえ……、ぜえ……！　だ、誰かその人を捕まえてくれええええええっ!!」

「ひったくりか……！　おい、裕也!!」

「言われずともわかってらア!!」

翔太くんと同じぐらいの少年が、その場で膝を着きながらも指差して犯人を示していた。

俺はとっさに少年の方を海斗に任せ、俺は犯人の方へ走り、距離を詰めた。

そして背後から思い切って抱きつき、念の為に怪我は負わせまいと自分が下敷きになる形で押さえ込んだ。

「は、離せッ!!」

「こんな朝っぱらから大勢の場でひったくりとはいいい度胸してんじゃないか！　おい海斗！　その子は無事か!?!」

「なんだか呼吸が荒い状況だ！　恐らく喘息の発作かもしれない！

……そうか！ 裕也！ なんでも、その野郎が奪ったカバンの中に携帯吸入器があるみたいだ！」

「ああ!? ンなこと言ったって、こっちはこの野郎を抑えてねえと……!!」

じたばたと逃れようと足掻く犯人に、俺は地固めで逃げられないようにする。

周りは騒然としているだけで、誰も手伝おうとすらしねえ……! つーか、写真撮ってんじゃねえよ……!

俺は仕方なしに片手を空け、すぐ側にあつたカバンを雑に漁り、携帯吸入器を取り出す。

そして俺はそのまま離れている海斗に向かって放り投げた。

「さんきゅ、裕也!!」

「礼はいいから早く警備員でもなんでも呼んでくれねえか!? おい周りのアンタらもただ見てないで手伝うとかしろやア!!」

俺の怒号に、周りはたじろぐ。ただそれでも届いたのか、次々と男性たちが近付いてきては一斉に取り押さえる。

それからしばらくして奥の方から女性が警察を連れて、走ってきた。

「君、大丈夫かい！ よくやってくれた、後は私たちに任せてくれ！」
「じゃあお言葉に甘えてお願いします！」

警察に犯人を引き渡し、俺は解放されてすぐにカバンを持って海斗の方へ向かった。

すると俺が犯人を取り押さえている間に吸引することができたのだろう。

少年は呼吸をゆっくり整えながらも、安堵のため息を吐いていた。
「おい、大丈夫か？」

「あ、はい……。おかげさまで、なんとか……。この度は本当にありがとうございました……」

少年はカバンを大事そうに抱き締めながら、小さく頭を下げて礼を言ってきた。

ひとまずという形で俺と海斗は少年を日陰になっているベンチの

所まで誘導し、座らせた。

その隣にある自動販売機で水を買ひ、少年にそれを差し出す。

「ネットやテレビでの知識だが、喘息は水を飲んだりして深呼吸がいんだろ？ 別に金は取らないから、これを飲みな。それと海斗、ちよつとこの子のこと頼むわ。車に戻って、待機してる涼音たちに事情を話してくる」

「互いに停めた場所遠いしな……。わかった、なら八神さん達にも事情を説明しておいてくれ」

「ああ、じゃあちよつと行ってくる」

俺は海斗にこの場を任せ、停めている車の方へ戻り鈴音たちに事情を説明した。

海斗の言うように停めた場所が遠いだけに、事態に気付いてなかったようだ。

それから犯行現場に関与したことで、俺と海斗と少年は事情聴取を受けた。

事細かく、どういう経由でこうなったのかなど繊細に説明したせいで、予定より大幅に帰省する時間が遅れてしまった。

一応親父にもこの事を連絡しておいた。しかし返信を見る暇もなかったので、警察の事情聴取に加えて少年が無事であることを確認して、すぐに車を発信させた。

ちなみに後からではあるが、海斗によると少年の名前は天道 祐樹と云うらしい。

しかも驚くことに、ミライバとは別のVTuberを支援する会社でVTuber活動をしているとのこと。

まだ一年にも満たない新人VTuberとも言ってたみたいだが、それでもしつかりしているという印象があった。

というか、別の会社のVTuber……か。ミライバ以外のライバーはどういった活動をしているのか気になってしまふな。

そんなことを考えながらも運転し、やがては久々という感覚で実家に帰ってきたー。

#39 一筋のアドバイス、根本的な間違い

実家のラーメン店が有する敷地の駐車場に俺と海斗は車を止めて降りる。

座りっぱなしだったということもあり、全員は外の空気を味わいながら身体を伸ばした。

それから忘れ物が無いように確認をして、全員の準備が出来たところでスライド式の入り口の前まで移動した。

だが入り口のドアから透けて誰かが立っているのが目に見える。

「……ちよつと全員下がっててくれ」

俺の言葉に皆は一步後ろに下がる。俺はそれを確認した後、勢いのままにドアを開けた。

「隙ありだあああああああああッ!!」

「バレバレなんだよクソ親父がア!!」

「ぎゃあああああああああッ!!」

開けた先で待ち構えてたのは親父。思い切ってハグをしようと来たが、俺は親父に対して目潰しで返した。

大きく後ろに下がって倒れ込み、その場で左右にゴロゴロと転がり続けた。

「えっ……。これ、どういう状況っスか……?」

「ビ、ビックリしたば〜い!」

「お父さん……。はあ……」

「ふむ、この方がお父様方か……。それにしても随分と元気のあるお方だな」

「すまない、とりあえずこのバカは無視でいいから入ってくれ」

俺と親父のやり取りに翔太くん達は困惑していたが、気にする必要はないとだけ付け加えて中へ案内をした。

「あらあら、旦那が見苦しいところを見せてしまったようで申し訳な

いわあ。裕也くん、そして涼音、おかえりなさい」

「お母さん……！」

「ただいま、奏さん」

遅れて厨房の方から顔を出した奏さんに、涼音は駆け寄り抱きついた。

それに対して奏さんは優しく抱きしめ返し、目の前には尊いシーンがあった。

そのあとに復活した親父は荷物は空いている座席などに置いて、自由に寛ぐようにと目を押さえながら言った。

それぞれが言われた通りに荷物を置いて、そこそこ長い距離を走ったことで疲れた身体を休ませるように座った。

「改めまして、私は神代奏と言います。二人が大変お世話になってるようで、本当にありがとうございます」

「いえいえ！ こちらの方こそ涼音さんや裕也さんとは良くしてもらったり、楽しませてもらったりしてます！ 申し遅れました、私はミライバ株式会社でこの赤城翔太と恵果のマネージャーをさせて頂いてる遠藤里美と言います。今回はこのお二人の保護者代役としてお邪魔させて頂く形になりますが、よろしくお願いします」

「同じく、ミライバ株式会社でこの子のマネージャーをさせて頂いている八神和馬と言います。勝手ながら裕也くんと涼音ちゃんに興味があり、彼らがどのような人物像であるのかが気になってしまっています。誠にすみません」

「あらあら。ふふつ、お二人ともそんな固くならないでくださいな。この子達の母親として、そして私個人としても深く関わってください。ことは大変嬉しく思います。まだ二人とも未熟故、迷惑をお掛けするかもしれませんが、何卒ご指導の方よろしく願います」

遠藤さん、そして八神さんは自己紹介を挟んで奏さんと握手を交わした。

その間に親父がそれぞれに何が飲みたいのかを聞き出して、コップにジュースやコーヒーなどを入れて提供していた。

「それにしても、こうしてすっかり前向いて会うのは久しぶりだね海

斗くん。君のお父さんは元気にしてるかい？」

「うっす、親父さんも相変わらずのようでよかったです。それに俺んとこの父親も健康に支障なく元気にやっていますよ。まあ強いて言うなら、最近やたらと裕世のトラブルに巻き込まれてるということぐらいですかね」

「おいコラ」

「はははははっ！ そんなの今更じゃないか。だけど海斗くんは裕也に限らず俺も信用してる。これからも仲良くしてやってくれ」

「ええ、そのつもりですよ。それに、こいつの紹介のおかげでミライバの専属になれたりもしてるんで感謝もありますし」

「そうかそうか！ それと確か君は……、ああそうか！ 久しぶりだね、旋梨ちゃん！」

「お兄さんと違つて覚えてくれてたど？ その都度はお世話になりました、そしてお久しぶりです」

淡々と流れる日常会話。その中で少しトゲが刺さる感じで旋梨ちゃんから何か言われた気がしたが、互いに上手く馴染めているようにでなによりだった。

ちなみに店は午前で今日は終了。俺たちが戻るのに合わせて、午後からは臨時休業として畳んでくれた。

なので特に客は来ないので、ここからは完全にフリーに話し合いができた。

俺と涼音はカウンター席に座り、両親と皆のたわいもない話を聞いたりして楽しんだ。

特にギターを弾ける翔太くんに、親父と奏さんが聴いてみたいと言った時はなにか嫌な予感がした。

というのも、つい最近完成させたばかりのいわくつきの歌……。

そう、Go To Pantsの弾き語りを歌い始めてしまったのだ。

翔太くと関わり持つようになって気づいたことがあるのだが、ギターを手にして歌い始めると周りに注意がいなくなり、自分の世界に入り込んでしまう為に手が付けられなくなる。

その結果、完走してしまう。だが歌詞はともかくしてギターの技術に加え、力強い歌唱力に歌い終えたあと、拍手が巻き起こった。受けはよかったが、そのあと遠藤さんにこっぴどく説教されていたが。

「そういうえば、皆さんってお昼は食べたのかしら？」

全員がそれぞれ話し合いで盛り上がって、一息ついていた時。

奏さんが両手を合わせて昼食を取ったかと聞いてきた。

ここに来るまでの道中で少しの菓子類をつまんだだけで、これといったものは食べていない。

俺がまだ特にはと言うと、親父はニヤリと笑い俺に指をクイツとやって、合図してきた。

「だったら皆さん、俺と裕也の作るラーメンでも食べませんか？ もちろん無料で提供させていただきますよ」

「あら、それはいい提案ねえ。お腹空かせてるだろうし、私も賛成だわ」

「ほう、是非とも食べてみたいものですね」

「私、お兄さんが作ったラーメン食べたいけん！ とても久しぶりやけんー！」

「オレ味噌バター醤油がいいっス！」

粋な計らいをしやがるな、親父……。

けどまあ、確かに俺もラーメンを作ることには好きなのでやる気はある。

奏さんが皆の注文を受けている間に、俺は頭にタオルを巻いて、エプロンを付けた。

既に厨房で準備に入っている親父。俺は注文を取り終えた奏さんから教えてもらい、親父にそれを伝えた。

「マネージャーの仕事に勤しんでたからって言い訳は通用しねえからな、裕也」

「ハッ、伊達に親父の元でラーメン作ってたわけじゃねえよ。舐めんな」

「あらあら、二人ともやる気満々ねえ」

「はわあ……お兄さん、カッコイイばい……」

「うん、兄さん本当にカッコいい……」

「くうううっ!! オレもなにか手伝いますよ神代の兄貴いいいい!!」

「いや、お兄ちゃんは此処で大人しくしてて?」

「あははは! 翔太くんが出来ることと言えば恐らく皿洗いぐらいやろうなあ」

「なにを言うんですか! オレだってラーメンの湯切りぐらいはできますよ!」

「翔太さん、お兄さんの邪魔しないでほしいばい」

「アツ、ハイ」

なにやら席の方で話しているみたいだが、楽しみにしてくれているのは嬉しいものだ。

より作ることに力を入れてしまう。だが意外にもブランクは感じることはなく、親父のペースに合わせて動くことができた。

それに、まだ期間としては短いのに懐かしさを感じてしまう。

思えば、ラーメン一筋でやっていくつもりだったのに、今ではマネージャー。

大き過ぎる変化、環境の違い。別に涼音の誘いを批判したいわけじゃ無いが、こつちの方がやはり性に合っているのかもしれない。

親父と厨房に立ち、作業する。前からある風景と流れに、俺は自然と笑みが溢れる。

「……裕也、お前最近頑張り過ぎてねえか」

「んあつ? 急にどうしたんだよ」

「度々、涼音ちゃんからそつちでの出来事とかを聞いてたんだが、内容的にも頭も身体も使えばならしいからな。息抜きはしつかりしているのか心配だな」

作業しながら親父と会話する。どうやら、向こうでの仕事が気になるようだった。

「別に無理をしているつもりはねえよ。そりやまだ覚えなきやいけないこともあるし、頑張らないといけない場面は幾つもある。でも、親父

とラーメンを作ること以外は俺にとってすげえ新鮮だと感じるし、やりがいもあったりする」

「そうか。ならその右手の傷に関して、言うことはあるか？」

「……ッ。ちよつと、切っただけだ」

「さつきも言ったが、涼音ちゃんから全て聞いている。俺はな、裕也。お前の口からちゃんと聞きたいんだよ」

さつきまでのふざけた態度から一変して、親父の雰囲気は至って真面目だった。

親の前で下手な嘘をつくもんじやないとまで言われる始末で、俺は少し考えた後に、改めて出来事の数々を話した。

その中で特に、今大きな問題として抱えている宮田のことも話した。

右手の傷に関しては俺が感情的になってしまったことによるモノであると説明をした上で、どうしりたいのか。

そして、宮田という存在に対して不気味だと感じて、不安になっている自分が居るということ加えて、あらいざらいを話した。

「そうか、そういうことがあったんだな。だがな裕也、例え感情的になって自分で傷つけたとはいえ、その一つが親として心配な部分があるもんなんだよ。俺と奏が知らない、見ていないところで傷付いたり、悩んだり……。今までは側に居てやれたから助けられたが、今は違う。距離もそうだが、なにかあってもすぐにお前たちを助けにいけない。俺たちは、それが心配なんだ」

「親父の気持ちはわかる。けど、俺はもうガキじゃない。自分で考えて、動ける歳だ。心配かけちゃうのは申し訳ないと思ってる、けど俺なりに息抜きも挟んでいるつもりだし、無理はしていないつもりなんだよ」

「まだ二十代前半のクソガキが一丁前に言ってるじゃねえよ。海斗くんからも聞いたが、宮田という奴と一悶着あってから様子がおかしいとまで連絡を受けたぞ。事情は今お前から聞いた、だが問題なのは、お前がこれからどうするつもりでいるのかだ」

俺がこれから、どうしたいのか。そんなの、宮田の所業を証拠とし

て突き止めて、今後一切旋梨ちゃんに近付けさせないようにしたい。
そしてあわよくば、八神さんから聞かされた通りであるなら、宮田
が担当するV T u b e rの解放もしてやりたいとまで思っている。

強欲、そして実に傲慢かもしれない。けど、宮田の存在を野放しに
しているミライバの現状は維持してならないものだ。

俺は予定している動きについて、親父へ話してみた。すると親父
は、小さい溜息を吐いた。

「俺はお前たちみたいになくはないから、ネットの世界について詳し
くはわからない。だがそれでも言えるのは、決して物理で解決しよう
としちゃいけないことだ。涼音はV T u b e rで、お前はそれを支え
るマネージャーだ。そして、今後ろの方で楽しげに話している遠藤さ
んや八神さんも、立場でいえばお前と変わらない」

「ああ、そうだな」

「ならその宮田とかいう奴の所業を止める手として、それ相応のやり
方ってのがあるんじゃないかねえのか」

「……確たる証拠を突き止めて、提示することじゃねえのか？ 社長
も証拠が無ければ対応することはできないと言ってたし」

「確たる証拠と言っても、自分の悪質な行動を揉み消せる方法のある
相手なんだろう。正規じゃ間違いないく、無理に等しいはずだ。そしてこ
れはしがない時代遅れのオヤジが出すアドバイスだが、大概そういう
奴に限ってプライドは高いもんだ」

正直、親父が一体なにを伝えようとしているのかわからなかった。

だが、宮田の喋り方、そして俺を見下すように三流とまで放つとい
うことは、より自分に自信を持っているのは確かだ。

親父はそれこそが宮田の弱い部分でもあると、俺にアドバイスをし
てきた。

「プライドが高い奴に限って、自分が持っている自信に対してツボを
突かれると脆くなる。特に下と捉えている存在から突かれれば、お前
が感情的になるようになる」

「まどろっこしいな、なにが言いたい？」

「――証拠なんざ揃えなくても、奴の持つプライドそのものをへし折

れば自ずと地に膝を付けざる得ないということだよ」

「……は？」

「ここまで言っただけわからないのか？ 全くそういうところは変わらず鈍いなお前は。つまりだな裕也、奴を極限までに刺激しろ。そして鈴音とお前、V T u b e rとマネージャーの立場として奴を潰せばいい」

そこまで言われて、俺は自然と作業の手を止めて気付いてしまう。

俺は親父に言われるこの時まで、ずっと宮田の証拠をどうしたらかき集められるのかを考えて悩んでいた。

だが本質として、それはそもそも時間が掛かりすぎるといふ事と、非合理的であることだと間違いに気付く。

そうだ、そもそも俺も涼音も働いている場所は主にV T u b e r活動だ。

となれば、親父がさつき言っただけのように相応の立場で挑めばいいってことだ。

「ははっ、ははははは!! なるほど、そういうことか……!!」

「ようやく気付いたか、バカ息子」

「ああ、おかげさまでな。俺はなにを悩む必要があったんだ、そして……なにを恐れる必要があったのかバカみたいだわ!」

親父の言葉に背中を押され、俺は作業の手を再び動かして閃いた。つまり、奴を刺激した上でV T u b e rの活動を通してプライドをへし折ればいいんだ。

それすなわち、本質は宮田を潰すことだが、表上では「V T u b e rコラボ企画」で奴を炙り出し誘うことが出来れば可能性はある。もちろんデメリットもある。だが、実際にやる価値はあるようなものだ。

形上はなんの変哲もないコラボ企画、だがその裏では俺と宮田の相互による駆け引き。

奴が今一番欲しがっているのは旋梨ちゃんであり、きつとこの先も狙い続ける。

となれば勝敗による報酬をそれぞれ決めて手を打てば、奴なら乗っ

てくるはず。

だが間違えてはいけないのは、これは旋梨ちゃんの意見を聞かなくてはならないこと。

言葉はあれだが、彼女は一人の女の子であって物ではない。

本人の意見を聞いたあとで、不安で怖がるなら別のことでも対策は練れる。

無論、勝てる保証もないからな。けど、親父のアドバイスを俺は信じたい。

素早く、それでいて徹底的にするのであればこれが最善の手と考える他ない。

ー俺は、ラーメンを作る最中でありながら既に多くのパターンを限りなく想定し、組み立て上げることにした。

#40 俺とVTuber達の作戦会議

親父からアドバイスを受け、完成したラーメンを皆に提供した。よ
り力を、そして気持ちを入れて作ったからなのか、自信があった。

「元気よくいただきます！」と翔太くんが続いて、全員が口にラーメン
を啜った。

しばらく味を噛み締め、スープを一口。口に合っているだろうか
少し不安にもなったが、わなわなと翔太くんが震えだし叫んだ。

「うっ……美味えええええええええええええええええええええええ
ええツ!!」

「ん〜！ 幸せやけん〜!!」

「うむ、彼らの言う通りこれは絶品だ。コクの効いたスープに、程よい
麺のコシ……。いやはや、病みつきになってしまおうというものだな」
「これをタダなんて、もつたいたいぐらい美味しいです!!」

「裕也と親父さん、相変わらず美味しいもん作るよなあ」

全員がそれぞれ感想を言っていていき、笑顔で食べてくれた。

俺と親父はそんな全員の幸せを感じ取りながらも、手の甲でハイ
タツチをした。

それから昼食を取り終えた後。片付けをして俺とVTuber組
は二階にある部屋へ。

親父と奏さんは遠藤さんと八神さん、そして海斗と話すことがある
と言って、二つのグループに分かれた。

てつきり女子組と男子組で分かれるのかと思いきや、全員俺の部屋
に集まった。

別に入られて困るような部屋じゃない為いいのだが、入ると同時に
翔太くんは一目散に俺のベッド下を覗き込んだ。

「ちよつとお兄ちゃん！ なにをしているの!?!」

「いや……神代の兄貴もちやんと男なのかと思ってエロ本探してるん

「だけど、無いなあ……」

「ンなもんねえよ、なにやってんだバカ」

「痛い!？」

うつ伏せになっている翔太くんのケツを軽く蹴り、俺はデスクトップが置かれているテーブルの前の椅子に座った。

部屋にしてはそこそこの広さがある為に、6人が居ても狭さを感じない。

俺は涼音に棚の間に挟んである折りたたみ式のテーブルを使っていいと言った。

「よいしょ……。んっ、旋梨さん……。?」

「これがお兄さんの寝てる……。ベッド……。!」

「ッ! だ、だめ……。!」

「もう遅いば〜い!」

「二ッ!？」

涼音が言われた通りにテーブルを設置したその時、旋梨ちゃんは俺の使用しているベッドに向かってダイブした。

そんな彼女の行動に、翔太くと恵果ちゃん、そして鳴海ちゃんの三人はギョツとする。

「んふふ〜!」

「離れて、旋梨さん……。!」

頬を膨らませながらベッドでじたばたする旋梨ちゃんに、涼音は引き離そうとする。

しかし離れる気は毛頭ないようで、そのまま涼音の腕を掴んで引きずり込んだ。

「ふああ……。!？」

「二人で使えば問題ないかね?」

「そ、そういうことじゃ……。!」

「神代の兄貴、目の前で起きている状況になにか一言を」

「……。ノーコメント」

「前から思ってたんですけど、旋梨さんってお兄ちゃんには厳しいのに、裕也さんには凄く懐いてますよね。付き合ってるんですか?」

「これからそうなる予定やけん」

「ち、違うもん……!!」

「あらあ、これは修羅場になりそうやねえ」

エアーマイクを近付けてくる翔太くんの手を払い退け、俺はデスクトップを起動させる。

恵果ちゃんの爆弾発言にアホなことを言い出す旋梨ちゃんと、否定する鈴音。

そして何故かワクワクというか、ウキウキしている鳴海ちゃん。

「けど実際どうなんスか？ 旋梨さんはともかくとして、涼音もなか神代の兄貴に気があるような感じ出しまくってるけど」

「確かにそれ気になるわあ。さつきも旋梨ちゃんに対して対抗してたみたいやし、もしかして禁断の恋ってものなん?」

「……説明すると長くなるからノーコメントで」

「なるほど、神代の兄貴は二股しているということだで認知するしかないっスね」

「おい待てコラッ」

「はつきりせんと男として情けないで?」

「お前らはどうしても恋バナしたいのかよ。めんどくせえな」

起動させたデスクトップで動画サイトのページを開き、音楽を流す。

問い詰めというなの尋問が始まり、しつこくどうなのかと聞かれる始末。

「旋梨ちゃんには悪いが、俺の中では涼音って決めてる。それだけだ」

「えっ!? でも、涼音ちゃんって妹なんですよ……?」

「妹って言っても、義理のな。だから好きになっても、ギリ許されるんじゃないねえの」

「なんちゆう適当なことを言うねん。まあハッキリしてるならいいとは思うけど、旋梨ちゃんが報われへんなあ」

「あつ、私は涼音ちゃんが義妹ってこともお兄さんが涼音ちゃんを好きってことは知ってるばい」

「えっ、知ってんスか!? 知ってて神代の兄貴のこと好きなんスか!?!」

「そんなのもちろんやけん。それも涼音ちゃんとは正式のライバルたい。欲しいものは手に入れる主義やけん、奪えばよかと」

「意外にも肉食だった……。けど、まさかお二人とも義兄妹だったんですね。ちよつと気になるんですけど、聞いても大丈夫ですか？」

「んあつ、まあ恵果ちゃんたちには仲良くしてもらってるし、別にいいけど長くなるぞ？」

それでもいいならと聞いてみると、寧ろ俺と涼音のことを知りたいと言って頷いてきた。

だから俺は涼音と交互に自分たちのことを深く話をした。

俺の過去、鈴音の過去。それらに加え再婚してからの出来事や、今に至るまでの出来事。

前までだったら話すのも互いに辛かった出来事だったが、今は違う。

その証拠に涼音もすっかりと皆を信用しているのか、弱々しい赴きというよりかは既に吹っ切れているような話し方だった。

数十分と俺たちのことを話した後――。

「うっ……えぐっ……！ そんなことがありながらも、神代の兄貴に涼音は……！ オレ、ますます神代の兄貴に惚れちまうっス……！」

「汚ねえなオイ、鼻水拭けや」

「うう……面目ねえっス……！ スビー!!」

「いや、ほんとに汚いよお兄ちゃん」

「だって、だってよお……！」

どこぞの謝罪会見をした議員みたく顔をぐちゃぐちゃにして泣き晴らす翔太くんに、俺は近くにあったティッシュを渡した。

「けど二人ともよく乗り越えられたもんやね。うちだったら立ち直るのに結構かかったかもしれへんのに」

「まあほとんど気合いみたいなもんだったところあるけどな。けど後悔はもうしてねえよ、それに今を楽しまなきゃ寧ろ損だしな」

「オレも兄貴なら同性でもイける気がするっス」

「翔太くん、ちよつと黙っててくれる？」

危ない発言に匂いを漂わせる翔太くんに、俺だけじゃなく恵果ちゃ

んすらドン引きしている。

とまあこんな感じでそれぞれが話して楽しんだ後、俺は本題に移ることにした。

「さて、そろそろ本題に入ろうと思う」

「本題ですか？」

「ああ。この場の全員が既に知ってる現状の一つとして、宮田マネージャーに関することだ」

宮田の名前を出した瞬間、全員の表情が一斉に豹変する。それはふざける様子を感じさせない真面目な表情。

その中でも特に、旋梨ちゃんは被害者の一人である為に、曇った表情をしている。

「元々俺が実家に帰ってきた理由として、宮田に対して不気味な雰囲気、そして情けない話だが少し恐怖を感じたことから来る息抜き、そして親父に促されたからなんだ」

「不気味……確かにそうやね。裕也さんも思っているかもしれないけど、あの男はまさに蛇。何を考えているのが全く読めへん」

「それだけじゃないっすよ。これだけ悪い噂が流れているながらも余裕を見せるところが余計に怖いところなんスよね」

「翔太くんの言う通り、そこもやけに引つかかる所がある。まあ俺も実際に奴と接触して一つの推測を立てたんだが、あの余裕は恐らく裏でなにか秘策を持っていると思うんだよ」

「兄さん……それって……」

「ほんとにこれはあくまで推測だが、恐らくミライバの社長が下手に手出しできない存在が宮田の背後に居る可能性がある」

俺の言葉に、全員が言葉を詰まらせる。

どうも引つかかる部分として宮田もそうだが、なによりミライバの社長にも引つかかるところがあると俺は踏んだ。

そりや会社としての売り上げに貢献している宮田の存在は大きいだろう。

しかしその反面、社内にいる社員たちに悪い噂が流れている事実は確かにある。

すれば必然的にミライバという会社そのものに汚点があると言っているようなものだ。

だがそれでも確たる証拠が無ければどうすることもできないという社長の考えには、些か怪しいところがある。

ミライバの社長が安易に手出しできない理由として考えられるのは、宮田の背後に居るであろう人物が社長同格の存在。

もしくは汚いやり取りとして、宮田自身かその背後に居る存在による賄賂説……。

どちらにせよ現状におけるミライバは変えなきやいけないものであるのに変わりない。

「でも、これまで悪い噂だけが流れてるだけで誰も確たる証拠は集められなかったんですね。となるとやっぱり、裕也さんの言うように賄賂とかで揉み消しにしてる……ってこともありえるのかもしれないですね」

「まあ推測ではあるが、その可能性も少なからずあるってだけだな」

「じゃあ、証拠集めはやっぱり難しいと……？」

「旋梨ちゃんには申し訳ないけど、その選択をした場合どうしても時間が掛かりすぎる。その期間の間、必ずしも旋梨ちゃんの安全性を保証することができない。だからー」

「」「だから……？」」「」

「俺は奴を挑発して、誘い込もうと思う」

俺の言葉に全員が首を傾げた。だからこそ分かりやすいように、俺はスケッチブックとペンを取り出して折り畳み式のテーブルの上に広げた。

「いいかお前ら、俺が言いたいことはつまりこういうことだ」

スケッチブックに俺は全員に分かりやすくペんで書き記し、説明する。

まず第一段階として、俺が宮田にあえて挑発する素振りをチラつかせる。

だが一度接触した上で、宮田はその時点で警戒して探りを入れてくるだろう。

だからこそ第二段階として、奴が俺の挑発に乗る燃料を投下する。それは表面上ごく普通のVTubeによるコラボ企画で、実際は俺と宮田の勝負だ。

無論、新人である俺が企画を持ち込んだところでおかしな話だ。

だからこそ瀬川さんの許可をもらう必要がある。

もし許可を貰えたなら、瀬川さんから許可を得たというこじつけが出来るからだ。

此処に関しては心配する必要性が無い。きっと瀬川さんは協力してくれる。

そして第三段階として、挑発に乗ってきた宮田と俺の間で交わす契約内容について。

今現状で考えついているものとして、俺が勝負に勝てば宮田が自発的にマネージャーから降りて貰うことだ。

逆に俺はそれに見合った対価として、それ以上のものを賭けなくてはならない。

こちらが出せるカードとしては、旋梨ちゃんを宮田に預けることと、俺自身が今後一切関わらない為に会社を辞めることだ。

「奴は間違いなく旋梨ちゃんを欲する。その為ならきつと、こんなバカげた俺の挑発に乗ってくるはずだ。ただこれは俺が現状で思いついている考えに過ぎない……。遠目で見てもこちら側のリスクが高い故、その中心となる旋梨ちゃんの意見を聞きたい」

「私は……」

圧をかけないように、俺は決して視線を合わせることをせずに答えを待つ。

対する翔太くんたちも、リスクを考えた上で簡単に頷けるものじゃなかった。

だがそれでも、宮田を手つ取り早く旋梨ちゃんから引き離すには最適な作戦だと思う。

過ぎる時間が長ければ長いほど、宮田はなにを考え仕掛けてくるかわからない。

ならばこちら側から手を出す他は無く、仕掛ける必要性がある。

旋梨ちゃんは深く考える。それが数分と続いたが、やがて口が開かれる。

「……長い期間を有して証拠を集めるその間、ずっと怖い思いをするのは耐えられないけん。だったらいつそのこと、早く解決したいばい。それに私はお兄さんを信じてるけん、きつとなんとかしてくれるって」

その言葉、そして綺麗な瞳。儂くも決意に満ちた表情に、俺は微かに微笑む。

「ああ、出来る限り……いや、絶対になんとかする。ありがとう、旋梨ちゃん」

「本人がそう言うんなら、この作戦は決行できそうやなあ。けど、企画と言っても形上とはいえ視聴者らが盛り上がるようなもんにせんと、VTuberとして話にならへんよ？」

「鳴海ちゃんの言う通り、そうだよな。だからそこに関して俺は頭の中で企画の内容を思い描いている」

「どんな企画なんスか？」

「ズバリ、企画に名前をつけるならこうだ」

【ミライバ対抗戦！】

【 DreamLife VS SmileRoad 】

「兄さん、これってつまり……！」

「俺が担当するVTuber、つまり涼音と旋梨ちゃんのDreamLifeと、宮田が担当するSmileRoadのVTuberによるチーム対抗戦を企画として考えている」

「なるほど、これは確かに面白いやんなあ！ もしこの勝負で勝てば、マネージャーとしての素質に対するプライドはへし折れるやろうし、三流と裕也さんを煽ってた言葉が返される……！ それだけじゃない、視聴者を楽しませるゆう条件も満たされてるやん……！」

「対抗戦とあれば、オレたちVTuberの技術も然りマネージャーとして指示を出す側の素質も必要されたりするツスもんね。ただ視聴者からすれば単純にVTuberが楽しんでる様子しか伺えないし、これはいい提案かもしれないツスね」

「うーん、そうだけど……」

「どうした恵果ちゃん」

「裕也さんのところは鈴音ちゃんと旋梨先輩の二人に対して、確か宮田マネージャーのところは四人VTuberを担当しているんですよね……」

「……えっつ」

そもそもの問題点を突いてきた恵果ちゃんに、俺は濁点の付いた驚きの声を上げる。

鳴海ちゃんたちも『あゝ……』と、苦笑しながら思い出していた。

瀬川さんから基本的に一人のマネージャーに三人のVTuberがくと聞いていた為に、まさか宮田の野郎が4人も抱えていたとは……。

立て続けに恵果ちゃんから、SmileRoadは涼音たちが所属しているDreamLifeに比べてVTuberが多いらしく、上限超えは普通とのこと。

「4人……4人、かあ……」

「まあでも深く考える必要性はあらへんと思うわあ。足りへんなら足せばええだけのこと、宮田マネージャーにも人数合わせとして補充だけはすると言っても通用すると思うで。ちなみになんやけど、ジャンルと方式はどうするん？」

「ジャンルはゲームだな、その方が視聴者たちも白熱して楽しめるだろうし。勝負の方式としては1V1の三本勝負にしようと考えている。ゲームの種類はまだだがな」

「おう、ええやん。まあゲームの種類は宮田マネージャーと打ち合わせするべきやな。こちらで決めるのはあまりにも向こうが不利やろうし」

「ああ、そうするつもりだ。ちなみにだが、この中でゲームが得意って奴はどれくらい居る？」

少し頭を抱える俺はふと聞いてみた。すると周りはそれぞれ顔を見合わせた後、ゲームを得意とする人だけが手を挙げた。

ー旋梨ちゃんと、鳴海ちゃんだった。

……結局二人足りないんだよなあ。

5人中2人だけしか得意じゃないことを知った俺は苦笑しながら天井を見上げた。

そんな俺の真っ白に燃え尽きたぜの雰囲気を感じ取った翔太くんが、ゆっくりとギターを手に取って和ませようとしてきた。

「えー……神代の兄貴が真っ白になってるといふことで元気にしたいと思います。聞いてください、Go To Pants」
「……ッ」

どんだけ気に入ってんだよ。

ジャカジャカと弾き始め、デスボでは無く覇気のない声で歌い出す翔太くん。

その場の全員がなんともいえない感情を抱きながらも、虚しさを感じた。

俺の部屋全体に、パンツマンの歌声だけが悲しく響いたのであったー。

#41 酒は飲んでも飲まれるな

VTuberである涼音たちと作戦の内容を伝え、話し合ってから夜を迎えた。

時刻にして20時ぐらいだろうか。

夜飯を食べた後、涼音たちは同じVTuberということもあり、二階にある涼音の部屋で盛り上がりを見せていた。

「裕也、親父さんが呼んでるぞ。なんでも、話したいことがあるらしい」

「んあ？ わかった、すぐに行く」

自室でマネージャーについての勉強をしている時、海斗がドアをノックして入ってきた。

「どうやら一階の方で親父たちが俺を待っているとのこと、すぐに作業の手を止めて海斗と一緒に降りていく。」

するとそこには親父と奏さん、遠藤さんに八神さんが既に駄弁っていた。

俺と海斗は空いているカウンター席の椅子に座った。

「来たか裕也。ミライブでの問題について、八神さんから既に聞いているぞ。そこで、大人組で裕也の話は是非聞きたくてな」

「話つてのは、俺の考えか？」

「うむ、その通りだ。楓から聞かされてね、彼女曰く本人から聞いた方が面白いとのこと、私が君を交えて話したいと申したのだよ」

「だからって夜になってからじゃなくてもいいんですが」

「安心しろ裕也、親父さんらの目当てはただの酒飲みだからよ。お前の話はおまけみたいなもんだよ」

海斗に言われてから気付いたが、確かに親父達が座っているテーブル席の上には既にビールやつまみなどが広げられていた。

しかも海斗の言い方からするに、こいつ俺をこの宴会に誘い込む為のこじつけで真剣な顔つきで話したいことがあるって言いやがったな……。

俺がまんまと嵌められたとげんなりしていると、親父がジョッキにビールを入れて俺の方へ持ってきた。

「ほら、飲めよ。グイッと、ほらー！」

「うわっ、酒クセエ！ あんた飲み過ぎだろー！」

「いいんだよ別に、明日も休みにしてあるし。うちは個人店だからな、気にすんなー！」

「そういうことじゃねえ！ 飲み過ぎて明日に支障出たら涼音たちを送迎できないだろうがー！」

「ごちやごちやうるせえな！ さつさと飲まんかい!!」

「いや、だからー」

親父にジャツキを差し出されながらも否定していると、テーブル席の方で大きな音が鳴る。

それに何事かと思つて見てみると、そこにはジャツキを強く置き、ふらふらと立ち上がりこちらへ向かつてくる遠藤さんが居た。

「男なのにごたごたごたごたと……。飲めつて言われたら飲む！ はつきりしなさいよ!!」

「ひえっ……遠藤さん……!?!」

「私はねえ、そういう男が大つつ嫌いなんですよお！ あ、でも裕也さんは嫌いじゃないですよ。……じゃなくて大人の飲み会にトゲ刺すのはよくないつて言ってるんです！ ほら、飲んでください！」「んぐっ!?!」

胸ぐらを掴まれ、強制的にジョッキの飲み口を当てられる。

普段とは違う遠藤さんに、俺は恐怖を感じながらも無理矢理流し込まれるビールを飲んだ。

「えへへ、いい子いい子」

「なんだ、この人ッ……」

「遠藤さん、私たちが飲み始める前から焼酎をもう二升ぐらい飲んでるの。ふふっ、仕事に対する不満が溜まってたみたいなのよ」

「いやはや、きつとこれは後に黒歴史となりかねないな」

そう奏さんが説明してくれる。道理でビールとは違う酒臭さがあるもんだ。

俺の頭を撫でてくる遠藤さんを引き離し、俺は大人しく親父の差し出したジョッキを手にして、如何にも飲んでますアピールだけした。

しかし八神さんが言うように、恐らくここまで酔っているとなると明日の記憶は愚か、二日酔い間違い無しだな……。

「さて、私から君のご両親に宮田について詳しく話をさせて貰ったよ。昼食のラーメンを作る作業の中でお父さんからアドバイスを貰ったとも聞いたが、答えは出たのかね？」

「ええ、そのことなら既に頭の中だけです予定としては仕上がってます。前までの俺は宮田を物理的に潰すことしか考えていませんでしたが、よく考えれば宮田はマネージャーで、この俺も新人とはいえマネージャーの一人です。なので、奴が俺を三流だのと煽ったからには、その素質で勝負しようと思います」

「ふむ、それは実に面白そうだ。では酒を嗜みながら聞くとしよう」
ベロンベロンになっている遠藤さんは次の標的として海斗にダル絡み。

とりあえず遠藤さんのお守りは海斗に任せるとして、俺は八神さんを中心に親父と奏さんにも聞いてもらうことにした。

親父の言うように宮田の人間性、態度を見れば確かにプライドは高い方だ。

それゆえに、マネージャーとしての質で勝負を仕掛け、涼音たちV Tuberを通して企画へと誘惑する。

勝敗を賭ける上で必須なのは、互いのカードを切り出すこと。

メリットが無ければ、そもそも受ける必要性のない勝負だからな。

そこで俺は、自分を信用してくれた旋梨ちゃんと、俺自身の首を差し出すことに。

対して俺が勝った際に求めることは、一切の限り旋梨ちゃんへの接触を禁止すると共に、マネージャーから足を引いてもらうこと。

だがあくまでこれは予定。考えている全てが上手くいくとは限ら

ない。

ただそれでも、企画を通して宮田を誘い込むまでは成り立たさないと話にはならない。

「宮田を企画に誘い込むまでに、色々準備をしなくてはいけない。マネージャー取締役である瀬川さんに企画の説明をして、審査してもらった上で許可を貰うこと。これが最初の手順で、それができたなら次へ……宮田との談話です」

「確かにそうね……。裕也くんの考えを一方的に押し付けてしまうのは、きつと向こうからしても納得いくものではないし。けど、談話するにしても大丈夫なの？」

「一応その時にも俺はボイスレコーダーを仕込んでおきます。まあ、宮田は俺と接触したその日から警戒はしてると思うので、通用はしないと思いますが。それでも俺と宮田はマネージャー、談話する分には問題ないと思います」

宮田は何を考えているのかわからないし、その分しっかりと考え警戒する。

俺の手は見透かされていることを前提に、接触するべきではあるだろう。

態度から見える余裕も結局はなにかしらの手口があるからこそ……。

それから八神さんたちに俺が考えている計画の一つ一つを説明し、その話だけでも時間は過ぎていった。

「とまあ、こんな感じですね。とりあえず瀬川さんに話をすることから始めないと進みはしないので、結局のところは期間が空く感じですよ」

俺はそう全員に計画を話し終えた後、もはや勢いのままにビールを飲み干した。

「裕也、ほらよ」

「んあつ、さんきゅ。というか、遠藤さん引き離れた方がよくねえか？」

ビールを足してくれる海斗だったか、その海斗の胸板に顔を擦り付

けながら幸せそうにしている遠藤さん。

側から見れば付き合ってるんじゃないかと思うも、海斗は深い溜息を吐いて言った。

「腰に回されてる腕の力が尋常じゃなくて引き離せないんだよ」

「……と言いつつ、本当はなんだ？」

「いや、遠藤さんの胸の感触最高だわ」

「うっわあ……」

隠し通すこともせず、あっけらかんにそう言う海斗に俺は引いた。対する遠藤さんは『ふへへ……』と声を漏らしながらそのまま眠りについた。

「きつとそれが本当の姿なのだろうな。遠藤くんは実家との距離が離れている分、ずつとミライバにある楽屋で寝ているようだからね。一人っ子というのもあり、甘えたがりなのだろう」

「あああら、可愛らしいですねえ。でもさすがに海斗くんにくつついたまま寝るのは体制的にも危ないからちゃんとしたところで寝かせましょう」

「二階までは大変だろうから、奥にある居間で寝かせとこうか。確か押し入れに予備の布団があったはずだから。海斗くん、頼むよ」

「親父さんがそう言うなら、布団敷いて寝かせてきます。裕也、ちよつと手伝え」

「んあつ、しゃあねえな」

持っていたジョッキを置いて、俺と海斗で遠藤さんの両脇に腕を入れ運ぶ。

奥の部屋で靴を脱ぎ、俺は海斗に一人で支えて貰い、押し入れから布団を取り出す。

「遠藤さんちよつと飲み過ぎじゃねえか？　こりや二日酔い以上だぞ……」

「焼酎を短時間で二升も飲めばそうなる。よし、寝かせていいぞ海斗」

「おん、さんきゅ。……うおあつ!」

「海斗!」

布団を敷き終え、海斗に遠藤さんを寝かせるように指示を出す。

膝をついて起こさないようにゆっくりと降ろそうとした時、遠藤さんが海斗の首に腕を回してそのまま倒れ込んだ。

その結果、遠藤さんの柔らかな胸に海斗の顔が沈んだ。

「……主人公昇格、おめでとう」

「んなこと言ってる場合か!? つて、マジで力強いんだが!？」

「ふへへ、海斗さんめっちゃ好み。裕也さんもいいけど、海斗さんの方が好き」

「首ッ！ 首がへし折れるって!! 裕也、助けてくれ!」

「ハッ！ 未永くそのまま散つてろクソがア!」

俺は電気を消して、海斗を助けずにそのまま部屋を後にした。

別に遠藤さんを気にかけているとかじゃなく、純粹に海斗に負けた気がしてならなかった。

ドアを閉め部屋を出た後でも海斗からは悲痛に満ちた叫びが聞こえたが、無視した。

そして親父達の元に戻った後、海斗は?と聞かれたので、飲み過ぎで心配だから少し看病するらしいと適当に返した。

とりあえず、瀬川さんにメールだけでも送っておくでしょう。

#42 今成すべきことは普段通りに過ごすこと

その日の夜、晩酌を済ませ、一同が実家で寝泊まりした翌日。

俺たちマネージャーは先に起きて準備をして、寝ている涼音たちに声を掛けて起こした。

午後からはそれぞれ配信のスケジュールがある為に、ミライブへと戻ることに。

ちなみに遠藤さんは案の定二日酔いとのことで記憶が無かった。

海斗といえば、朝からなんだかほわほわとしていおり、ずっと『柔らかい……』と小さく連呼し続けていた。

何があつたのかは、一切聞かなかった。

それから実家へ来る時のメンバーで俺と海斗の車でミライブまで辿り着き、各楽屋へと向かい解散することに。

「お兄さんの実家久しぶりで楽しかったばい。それに涼音ちゃんの部屋、可愛かったとね〜」

「そ、そんなことない……。でも流石に四人で窮屈だったかな……」

「そんなことないけん。寧ろ合宿みたいで私は嬉しかったばい」

楽屋に戻ってきてリラックスする涼音と旋梨ちゃんの会話を耳にする。

そう、実のところ昨夜は涼音の部屋に旋梨ちゃんと恵果ちゃん、そして鳴海ちゃんの4人が一緒に寝たのだが、俺も窮屈すぎるのでは無いかと少し不安だった。

しかしそうでもなかったと知り、安心だ。ちなみに俺は翔太くんと一緒に寝たのだが、真夜中に寝言で『ロックンロール!!』と叫んだりされたので落ち着かなかった。

海斗はあのまま遠藤さんと。八神さんはテーブル席のソファアで寝たそうだ。

まあ俺としても、楽しかったと言う感想だ。

それから俺はメールを確認する。すると瀬川さんから、午前10時

からなら予定が空いているとのこと、時間を確認する。

時計の針は9時15分を示しており、少し余裕があるようだった。

――それから、予定の打ち合わせにて。

「素晴らしい案ですね、採用です！」

「……えッッ」

「形上とはいえ視聴者を楽しませることのできる企画としては成り立ち、実際のところは宮田さんの心をへし折れる！まさに素晴らしいと思います、是非やりましょう！」

たかが新人の提案、幾ら瀬川さんでも判断は厳しいものだろうと構えていた。

しかし瀬川さんは俺の話聞き終わると同時に親指でグツドポーズしながら許可した。

「いやいやいや、もうちょっと考えてもいいのでは？ 流石に俺としてもなかなか難しい提案ではあると思うんですが……」

「そんなの気にしてたらいつまで経っても事態は解決しません。ここは思い切りも必要、裏での口合わせなら任せてください！ なので裕也さんはとことん宮田さんを追い込んでください！」

「ひええ……」

なんだかハイテンションで決定する瀬川さんに俺は不振を抱きつつも、頷く。

いや、まあ……受け入れてくれるのはすごくありがたいことではあるが、こうもあつさりだとなんか……。

「とはいえ、私は裕也さんから宮田さんを潰すと宣言された時から、なにかしらの策は立てるはずと見込んでいました。なので心配せずとも、私は協力するつもりでした。ただ私の許可よりも、これから大変なのは宮田さんとの接触……、つまりは談話することです」

やはり宮田と接触し、談話することが問題であると警戒している。

まあここまで言われるって、宮田の存在と性格は本当に酷いものなのだろう。

しかしそれを承知の上で俺は瀬川さんに無理を言っ、なんとか宮田との談話する時間を作れないかと聞いてみた。

一応取締役として各マネージャーのスケジュールは把握している為、宮田の空いている日を知りそこで談話を設けたい。

俺の言葉に瀬川さんは少し悩む仕草をして、少し時間を有するがそれでもいいならと了承してくれた。

瀬川さんに頭を下げて感謝をした後、俺は部屋を後にして楽屋へ戻ることに。

それからマネージャーの業務をこなし、昼食を取り涼音の配信時間を迎える。

『みんな、こんにちは……！ 今日雑談を交えてスマ○ラをしていこうと思うよ……！』

…こんにちは！

…おつ、これまたヒスイちゃんにしては珍しいジャンルだね

…最近流行ってるからね、楽しみだ

…クソザコプレイが見れそう

…いや、ゲームとはいえやれる子だぞ！

…とはいえ、ゲームのセンスが……○

ライブルームと繋がってるもう一つの部屋で俺は涼音の配信を見守る。

その隣には同じように旋梨ちゃんが座っておりどうやら音ゲーに夢中になっているようだ。

『このゲームね、兄さんがやってるの……。見てて面白そうだと思うってたから、どうせならみんなと楽しもうかなって……』

…そういや前に発狂してたもんなww

…兄貴がやってるゲームか、なるほど

…そう言えばお兄様は生きてるの？

…兄貴コラボはよはよ

…ヒスイちゃんなんのキャラ使うんだろう

『ふふつ、兄さんはちよつと仕事が忙しくてコラボはまた今度かな……。えつとね、使うキャラは兄さんの使ってたのにしようかな

：もう、おしまいだあ……！

：押すなよ、絶対に押すなよ！

：だが時既に遅し

うん、やるような気配はした。案の定涼音の使うキャラが神々しく光、大爆発。

敵に大ダメージは与えたものの、その代わりに優勢だったと言うのにストックが削られる。

『えっ!? な、なにが起きたの……!?』

：これがあるからなあwww

：無知って恐ろしいwww

：めちやくちや流れ良かったのにwww

：メガンテ、つまり自爆技ということ

メガ○テについて説明をしてくれるコメント欄が流れるのと同時に、何が起きたのか全くわからない涼音は混乱。

その間にも敵プレイヤーの攻撃は火を吹き、あっという間にメテオされて終了。

ポカーンとしている涼音に、コメント欄はwwwの嵐で埋め尽くされた。

#43 如月旋梨×音神旋律

涼音の配信は二時間で終わらせ、17時から19時までは旋梨ちゃんの配信回へと繋ぐ。

機材のセッティングを改めて調整し、不具合が無いかの確認をした後、ツールを用いてOP映像からアバターの映る画面の切り替え設定もした。

「本番15分前、準備はどうだ？」

「あー、あー。喉の調子も大丈夫ばい。スマホの画面も安定して映し出されているし、さすがお兄さんやけん」

「これも全部海斗の教えがあつてなんだよな。けどありがとな」

「兄さん……私もなにか手伝うことある……？」

「涼音は旋梨ちゃんの配信が始まったら、俺と一緒に配信の復習するか。善し悪し、改善点など少しあったりしたから」

「うん、わかった……。あつ、マイクの電源入ってないかも……」

「えっ？ あ、本当だ……。ありがとうな」

時間にしてまだ余裕がある為、指摘されたマイクのスイッチをOFFにしたまま、電源を差し込んで直す。

俺は鈴音の頭を撫で、感謝を述べる。気持ちよさそうに目を細めるのは、気持ちいいからなのだろうか。

その時に旋梨ちゃんから何かを訴える眼差しを向けられたが、見えてないことにした。

それから最終確認を行い、俺は涼音を連れて隣の部屋へと移動した。

「それにしても、本当に凄まじいな。開始10分前の段階で視聴者の待機数が9700人って……」

「今日は新しい音楽ゲームのアプリをやるって言ってたから、余計に

かもしれないね……」

俺と涼音は共に座り、画面に映る待機数に仰天していた。

涼音の言うように今日はリリースされた新作の音ゲーをやるみた
いだが、それでもこの数は明らかに多いと感じる。

『ごんにちは、今日は新作の音ゲーをプレイして感想を述べていこう
と思うけん』

：キターーーツ!!

：うん、旋律ならやると思ってたw

：初見です

：今日は一体どんな神プが見れるのか

：可愛い、結婚してくれ

『なんでも “過去最高に難しい音楽ゲーム” がキャッチフレーズみた
いやけん。まあでも過去にそのようなキャッチフレーズは見てきた
けど、そうでもなかったから今回もあまり期待しないようにやろうと
思うばい。ちなみに結婚はしないけん』

：これが案件だったら炎上するぞwww

：このキツパリ具合が素晴らしい

：まあ下手にお膳立てするよりかはなあww

：実際にプレイして感じたことを素直に言う、これぞ旋律ちゃんだ
ねww

：さて、お手並み拝見といこうか（自称名人）

『既にダウンロードは済ませてあるばい、だからチュートリアルから
やけん。……うん、まあ想像通り説明からやね。とりあえず難易度選
択できるみたいやから、Expertで……』

：初手から飛ばすよなw

：どの音楽ゲームでもHARDが限界

：お手並み拝見で最高難易度をする旋律ww

：いや。ここまでは音ゲーのプロ達なら当然。問題は新作の難しさ
だなww

『じゃあ、頑張るばい』

画面越しに小さく息を吸い、吐く音が微かに聞こえた。

きつと集中モードに入ったのだろうか。

俺と涼音はひとまず旋梨ちゃんの腕前を見ようと画面に注目する。すると数秒の時間が流れ終えた瞬間、上からは大量のノーツが降り注いだ。

ペンギンをモチーフとした旋梨ちゃんのアバターが首を上下に動きリズムを刻む。

驚くことに序盤から中盤に掛けて一つもミスすることもなく、ましてや最高判定であるパーフェクトを刻みつけていく。

「いや……えっぐ……」

「いつみても頭が追いつかないよね……」

結局チュートリアル用に用意された曲を最高難易度且つフルパーフェクトでクリア。

俺と涼音、コメント欄の視聴者たちは同じように啞然とした。

『これあれやけん、親指勢はキツイいかもしれんばい。ノーツの量も然り、トリルや階段が非常に嫌らしく組み込まれてるばい』

：見てたけど何一つ理解できなかったw

：確かにこれまでの音ゲーよりは鬼畜かも

：とはいえ普通にフルパするか？w

：これが音神の所以よ……

：けどまあチュートリアルの曲やしなあ

『確かに、○○さんの言う通りこれはチュートリアルやけん。別の曲も色々試すばい』

最初から飛ばして盛り上げたことで、視聴者数は一万越えをした。その視聴者の中には世界大会に出場したことのある経験者たちや、名の知れた有名人がコメントもしたりして、勢いは止まらない。

そんなこんなで無事にスタートは切り出せたことを確認して、俺は涼音の配信を振り返ったり、旋梨ちゃんの配信内容を細かく数十分単位でメモしたりしていく。

『んー、今のところ最高難易度のレベルは31までしか無いとね。もうちよつと速度上げたり、リズム調整しないといかんね』

カゲロウ&ホムラ(10000円)：オレの新曲とかって入ってな

いッスか？

：うおっ w w w でたあ w w w

：カゲロウちーす w w w

：音楽だけど部類がなあ w w w

：入ってるわけねえだろ w w w w

：入ってないッスか？じゃねえよ w w w w

『いや……カゲロウくんの曲入ってたらアンインストールするばい』

：w w w w w

：それは可哀想やめたげて w w w

カゲロウ&ホムラ：えっ、もしかして嫌われてる？

：カゲロウどんまい w w w

：可愛がられてる証拠よ w w

『嫌ってたらそもそも返事しないばい。カゲロウくん、ホムラちゃん
は？』

カゲロウ&ホムラ：昼寝からまだ起きてないッスね。まあだからこ
うしてコメントしてるッス！

：いつもホムラちゃんの監視下だもんな w w

：こんなふざけたコメント許すわけが w w

：寝てるホムラちゃん、ペロペロ

：じゃあ俺は旋律ちゃんを、ペロペロ

：妥協してカゲロウペロペロ

『ホムラちゃんを舐めるのは許さんばい。その代わりにカゲロウくんは
好きにするね』

カゲロウ&ホムラ：えっ？

：w w w w w w w

：どこの世界線でもこの扱い w w w

：そりゃパンツマンだからなあ

：パンツなら仕方ない

：雑な扱いしてプレイしようとするな w w w

気付くと旋梨ちゃんの配信に翔太くんが遊びにきているようだった。

コメント欄の振り返りをしている時、舐め回すようなことが書いてあったが、まあこれはセーフだろう。

それにしても翔太くんの異名、前の新曲作成以来。パンツマンで固定されているのは俺だけじゃなくこの界限でもだったんだな。



それから作業に取り組みながら色々やっていると、時間はあつという間に過ぎた。

時刻19時、時間の流れを気にしてなかった俺はドアを開けて入ってきた旋梨ちゃんに声をかけられて、終わったと聞かされる。

「やつべ、スケジュールや書類の整理してたら配信内容に目を通せれてなかった。んああ……後で見返すかあ。旋梨ちゃん、配信お疲れ様」

「ううん、お兄さんもお疲れ様やけん。それにしても涼音ちゃん、寝ちやつてるとね」

「ああ、まあここ最近よく頑張ってるからな。疲れが溜まりやすくなってるんだろう」

俺に寄りかかって静かに寝息を立てる涼音に、俺は微笑んだ。

すると旋梨ちゃんは近付いてきて、空いているもう一つの席に座り、涼音と同じように俺の方へ寄りかかってきた。

「旋梨ちゃんも眠いのか？」

「んー、どちらかというとお腹空いたばい。けどなんだか、涼音ちゃんが羨ましいばい」

「羨ましいって、なにがだ？」

「誰よりも身近にお兄さんを感じる事ができて甘えられるから……」

少しだけ声のトーンが物悲しく聞こえた。というのも、旋梨ちゃんは一子っ子というのもあり、そういう面でも羨ましく思えるのだらう。

俺は寄りかかってくる旋梨ちゃんを退けることなく、ただ目の前の

作業を進める。

「まあ、俺にとつて旋梨ちゃんも妹みたいなところはあるけどな」

「ふふっ、年齢の差でもそうかもしれない。けどお兄さんの中では涼音ちゃんって決まってるよね？」

「ああ、今は互いにやることがあつて大変な時期だから、それを乗り越えて落ち着いた時、改めてつて約束したからな……」

「そっか……。やけど、薄々は気づいてた。涼音ちゃんには、勝てないやつて……」

持たれかかる力が、少し強くなる。立て続けに旋梨ちゃんは、『それでも諦めたくない』と弱々しく言った。

その言葉に俺は、少し複雑にもなった。旋梨ちゃんの気持ちに応えることができないことや、涼音を裏切るわけにはいかないという気持ち。

だからこそ俺ができるのは、旋梨ちゃんの気持ちをただ静かに聞くことだった。

「勝てないし、きつとお兄さんのことだから涼音ちゃんを裏切るようなことはしない……。だけどお兄さんに、私は一つ我儘を言いたいけん……」

「……なんだ？」

「呼び方……。お兄さんじゃなくて、〃ゆうにい〃つて呼んでもいいと……う？」

「えっ」

俺の心を見透かしているのか、鈴音を裏切るようなことをしないと云った後。

旋梨ちゃんは我儘として、俺の呼び方を変えたいと言ってきた。

あまりの拍子抜けに、俺は一瞬だけ戸惑ったが笑いが少しずつ込み上げてくる。

「わ、笑わんでほしいばい……!」

「はははっ! いや、なんというか……。それぐらいなら別に許可取ろうとせずに、好きにしたらいいのになあつて」

実際、呼び方に関しては相手の呼びやすいように、呼びたいように

すればいい。

なのにそれを断られるかもと恐る恐る聞いてきた旋梨ちゃん。

耳を赤くして、そっぽ向いてしまう。

「でも逆に、旋梨ちゃんにできることと言えばそれぐらいしか無いけどな……」

「別に、これだけでもいいばい……。それにお兄さん……。ゆうにいを好きって気持ちには変わらないけん。ただその中で、自分だけの特別があればって……」

「……そうか」

俺と旋梨ちゃんはそれ以上話すこともなく、ただ俺が作業する音だけが続いた。

しかしどうも腑に落ちない。これだけで、旋梨ちゃんの想いを蔑ろにしてもいいのか。

考えるほどにどうしたらいいか分からなくなってきた俺は、ムシヤクシヤしながらも勢いで旋梨ちゃんの頭を撫でた。

「これぐらいしかできない、すまない」

涼音にしてるような感じで、俺はせめてものと思ひ撫でる。

それに対して旋梨ちゃんは小さく笑い、満足してくれたのか同じように寄りかかってきた。

「ゆうにいい、本当に色々ありがとう……」

「……おう」

お互いに一言で返し、俺は作業を終わらせた。それから涼音を起し、機材の手入れと整理をした後、楽屋へ。

それから夕食を食べ、お風呂に入った二人は疲れもあつて寝てしまった。

そんな二人の寝顔を見ながら、俺はすっかり布団を被せ、テーブルに設置されている電気を付けて、部屋の明かりを落とした。

#44 決して分かり合えることのない談話

三日後のある日ー。

午前8時、朝風呂を済まし髪型を整え、少し生えていたヒゲを剃っていつも以上に自分を作り上げていた。

というのも、涼音と旋梨ちゃんの配信を終えたその翌日に瀬川さんから連絡があり、提案した企画が通ったことと、宮田から談話しても良いという話があったと聞かされた。

それが今日の午前9時、互いにスケジュールの空きがある為、俺はその談話に向けて気合いと細心の注意を払い準備をした。

「兄さん……ほんとに大丈夫なの……？」

「ああ、ばつちりだ。今の俺は奴を片手だけで仕留められるぐらい、気合い入ってる」

「ゆうにいの頭の中では、これから獲物を仕留めに行くハンターみたいなやけん……。けど、手は出したらだめとね」

「いや、例えだよ……。大丈夫、上手くやれるように頑張るさ」

鏡の前で着ているスーツのシワなどを直していると、涼音と旋梨ちゃんが心配してくれた。

「それにしてもスーツはやっぱり違和感があるというか、あまり似合わないな……」

ミライバに来てから最初の頃はスーツを着て活動していた。

しかしその途中、瀬川さんから『別に私服でも大丈夫ですよ』と小さく笑われて以来、言葉に甘えて私服で活動していた。

だが今回は一応相手が宮田であろうと、立場上俺が下であることは社会において変わりない事実の為、スーツを着ることに。

「でも、兄さんのスーツ姿好きだよ……？」

「うんうん、私も涼音ちゃんに同意やけん。なんというか、一際更に大人の男性って感じがするとね」

「そうか……？ んじゃ、俺と八神さんを比べた上でどっちが大人っ

「ほい？」

「……八神さん、かな。ははは……」

「そりゃ八神さんやけんね……」

「知ってた。俺も八神さんみたいだなダンディで素敵なおじさまになりたいなあ」

満場一致で八神さんの勝利。

ちなみに八神さんがどれだけダンディなのかを例えると、スーツにハット帽子、そこに紙タバコではなく葉巻が似合うぐらいだ。

それぐらいまさに男の中の男、それが八神さんなんだよな。

「とりあえず二人とも、今日は午前の配信はお休みになってしまおうけどごめんな。その代わり午後は少し配信時間伸ばすから」

「ううん、気にしなくていいとね。それよりもゆうにい、こつち向いて」

「んあ？」

スケジュールの変更を告げた時、旋梨ちゃんから声をかけられる。

俺は言われるがままに旋梨ちゃんの方へ視線を向けると、パシヤツ！とスマホで写真を撮られてしまう。

「えっ、急になに？」

「ゆうにいコレクション、略してゆうコレの写真ばい。涼音ちゃん見て、凄くいい感じの写真が撮れたばい」

「あっ、ほんとだ……！」

「いや、そのコレクション誰得だよ……。今すぐに消しなさい」

「お断りやけんね〜」

普段と変わらない日常。

俺の写真を撮ってご機嫌の旋梨ちゃんは、涼音と一緒に撮った俺の写真に加工を始めた。

目の前でキャツキャと女の子同士が楽しそうにする尊いものを目の当たりにしながら、俺は涼音から先に貰っていたタバコを吸う為、二人に一声掛けて楽屋を出た。

「おっ、裕也。いつも以上にビツシリと決まってるな」

「なんだ海斗か……。仕事の最中か？」

「いや、まだだな。今日は4箇所パソコンの修理と新規のパソコンを設定するぐらい。タバコでも吸いに行くのか？」

「ああ、付き合うか？」

「まだ時間あるし、そうするか」

楽屋を出た先で海斗と合流し、お互いにまだ時間があるということいつもの屋上へと移動することにした。

そこで互いにタバコを啜え、互いにジツポで火を付け合い最初の1吸いを味わう。

「ふう……。そういや今日が宮田って奴との談話だっけか」

「そうだな。ここで駄弁って、そのまま直行って感じ。場所は5階にある宮田の楽屋で行うらしい」

「そうか。けど5階ってSmile RoadのVTuberが活動しているところだったよな。何気に初めて行くくんじゃねえの？」

「言われてみればそうだな。まああまり変わらないとは思うけど」
鉄製の柵にもたれ掛かりながら、海斗と何気ない会話をする。

しかしまあ、もしかしたらただけどSmile RoadのVTuberと出会うかもしれないってことだよな。

一体どんな方々なのだろうかと、宮田と会うことが本題なのに気になっってしまう。

「どちらにせよ宮田との談話で上手く誘えないと事は始まらないしな……。海斗の方は最近、なにか大きな変化とかあったか？」

「大きな変化、ねえ……。お前に紹介されてミライバの専属になった事以外特には……。あつ、でも一つだけあったわ」

「おつ、なんだよ？」

「恵果ちゃんに、告られた」

何食わぬ顔でタバコを吸う海斗。

俺はそんな海斗の言葉に思考が停止し、間に少し強めの風が吹いた。

んん……。一体それはどういう……。。

「すまん、ちよつと耳が遠くて聞こえてなかったかもしれん。もう一回いいか？」

「恵果ちゃんに告られた」

「んゝんゝッ!! えっ、一体いつから? というかそんな素振り一切知らないんだけど!」

「いや、俺もビツクリし過ぎて告られた時に考えさせて欲しいって動揺したわ」

「なんでまたそんなことに……」

「いや、それがさ。ほら前にお前の楽屋で集まった時あったじゃん?

そんなときに半分冗談で俺が恵果ちゃんに “デートしない?” って言ったことあっただろ」

「あく……思えばそんなこともあったな」

海斗曰く、その冗談から解散したあとに恵果ちゃんから声を掛けられたそうだ。

そこで恵果ちゃんは『あまり無闇に女性の人をデートに誘わない方がいいと思います』と注意を受けたそうだ。

その点に関しては俺も同意だ。

しかしこのバカは『あー、なんかごめんな。じゃあ恵果ちゃんのことと少しづつ知ってからまた言うわ』と返した。

海斗の目線からその言葉の意味は、 “冗談が通じるようになるぐらい仲良くなれたら” というものだったが、恵果ちゃんの目線からすれば、 “自分を見てくれている、知ろうとしてくれている” と捉えたようで、この結果に繋がったという。

「いや、なんか告られてから余計にそうであると言いつらくなってしまつてさ……。最初はそれでも言ったほうがいいのかとも思ったんだけども告つてきた恵果ちゃんは一際可愛くてなんか、すげえ胸がドキツとしたんだよなあ」

「うげえ……タバコが甘く感じる……」

「しかも、ほら。お前の実家に行った時、遠藤さんと色々あったじゃん? それについても笑い話で恵果ちゃんらの前で掘り返したら、泣かれてしまつてさ。罪悪感が……」

乾いた笑いをしながら、遠い目でタバコを吸う海斗に俺はなにも言えなかった。

解釈違いから成り立ったものであるとしても恵果ちゃんの気持ちを考えるとなかなかやるせないものがある。

「まあでも、そこまで来ちまったんなら責任持って一人の女の子として見てあげたらいいんじゃないのか？」

「いや、それでもなんか申し訳ない感じもしたりするんだよ……」

「とは言っても向き合わないと、いつまで経ってもダラダラと引きずるぞ」

「だよなあ……」

項垂れながら深く考え込む海斗に、俺は深いため息を吐くことしかできなかった。

自業自得と言えばそれまでなのだが、それで悩んでいるダチを前に俺なりのアドバイスをする事しかできない。

最終的に海斗は責任持って面向かうことにすると行って、それからは適当に雑談をして時間が過ぎ去っていった。



「よく来たね。食堂では互いに一悶着あった仲だけど、今回は穏便に行こうよ」

「……そうですね。食堂での件は改めてすみませんでした。今回はよろしく願います」

海斗と話をして、時間になった頃。俺は気持ちを入れ替え、エレベーターを通じて5階へと上がり宮田の楽屋へと出向いた。

ノックして返事があるのを確認した後、俺はドアを開け入室。

すると目の前にはソファアーに足を組んで座る宮田の姿あり、相変わらず不気味な感じを漂わせながら座るよう指示をしてきた。

俺は小さく会釈した後、言われた通りもう片方のソファアーに腰を下ろした。

しかし、思ったことがある。

対面する宮田の後ろに、四人の女性たちが立っているのはどういう意図があるんだ……？

「その目はなぜ彼女たちが席を外さずこの場に居るのかっていう疑問を抱いているよね？」

「……ッ。いえ、楽屋ならV T u b e rの方々が居ることはなんら不自然じゃないと思います。ただ一つ言わせてもらおうとするなら、なぜ立たせたままでののかってことです」

「へえ、君って意外と見てるんだねえ。八神さんなら、話の場を設けるなら当人同士だけでいい」と指摘するのに、君はこの楽屋に居ること自体が普通で、立たせていることが不自然と思うんだね」

「楽屋はマネージャーである俺らも然り、V T u b e rたちの憩いの場であると考えてますから。普通に考えて、客人に向かって立たせる事は誰がどう見ても不自然と思うのは仕方ないと思いますか？」

「ふっ、あははははははは！　ほんとに君は思ったことをズバズバと言うねえ。おい神崎、僕と裕也くんにごコーヒーを入れろ」

「ッ！　は、はい……」

強い口調で名前を呼ばれた女性は、身体を震わせながらもマグカップ二つにコーヒーを注ぐ。

その行動は少しでも早くという感じを漂わせており、残された三人の女性も顔色を悪くして下を俯いていた。

「ど、どうぞで……！」

「……ありがとうございます」

差し出されたマグカップを受けとり、テーブルの上に置く。

正直に言うところなのに怯えている女性たちの前で飲むような気持ちにはなれなかった。

「話を始める前に、彼女たちを紹介しよう。今こうしてコーヒーを入れたのは神崎夏目、僕が担当するV T u b e rの中では最年長なんだ」

俺と彼女たちをそっちのけで、宮田は悠長に紹介を始めた。

俺から見て左から神崎夏目さん、黒髪ロングの白いストールを羽織っているのが特徴。

続いて柗真奈さん。ピンク髪に、こちらは薄さのある白いマフラーを巻いている。口元はマフラーで隠され、身体を震わせていることから宮田に限らずそもそもの性格が後ろ向きなのだろう。

沢田やよいさん。黄髪に向日葵の造花が付いたカチューシャを付けているのが特徴。

寡黙で、人見知りな性格をしている。

最後に金髪で碧色の瞳が特徴で、見た感じ日本人ではなさそうだった。

名前はエカチエリーナと言うようで、宮田はリーナと呼んでいるとのこと。

「まあこんな感じだね。さて、なぜ彼女たちが立っているのか。その疑問について答える前に、その胸元に隠しているボイスレコーダーを出してもらえるかな？」

「……お見通しってことですか」

「いやいや、だって君は僕を潰そうとしているんだろう？ 隠さずともわかってるさ。けど僕はそんなことで怒るつもりもない」

道化師のような笑みを浮かべる宮田。

だがボイスレコーダーを仕組んでいることを指摘してくることは、計算済み……。

俺は下手な言い訳をすることもなく、胸元に仕込んでいたボイスレコーダーを取り出して、テーブルの上に置いた。

その光景に後ろの四人が驚愕する。

「素直でいいね。もしかして他にも何か仕組んでいるのかな？」

「まさか。ボイスレコーダーしか無いですよ。俺の言葉を信じるかどうかは貴方次第ですが」

「……いや、どうやらその通りのようだ。君は小細工よりも、考えたという企画で僕を潰そうとしているみたいだからね」

宮田の楽屋に入った時から既に、詮索のし合いは始まっている。

俺が持ってきたのはボイスレコーダーただ一つだけだ。

宮田はそんな俺の言葉を少し考えた後に信用して、コーヒーを一口と飲んだ。

「裕也くん、僕たちはマネージャーだ。彼女たちVTuberを高めへ送り出す為、然るべき教育と知識を教えなければならぬ。その為にもまずは立場というものを教えなければならぬ。立たせている理由としても、客人を前に駄弁ったり日常を晒すのは無粋なものだと思うからなんだよ」

「立場、ですか」

「そう、社会とは立場に始まり立場で終わる。確かにVTuberとマネージャーは表裏一体、互いが求め合うことで成り立つものだよ。でもね、僕は思うんだよ。特にこの業界、僕たちマネージャーが居なければ彼女たちは活動を禁じられる。つまりそれって、僕たちマネージャーの方が立場は上ってことなんだよね」

「……ッ」

「だってよく考えても見てよ。僕たちマネージャーは別にVTuberに限らず他のところでも必要とされる。それこそ探せば多種多様に。けど彼女たちは一度勤めた場所で失敗すれば、他では通用しないし続けることも困難だ。その置かれた立場を考えればバカでもわかるよ」

俺はゆっくりと握り拳を作った。

演説するようにベラベラと発せられる言葉は全て宮田の中で正当化された屁理屈だ。

正当化、そして自分が上であると決して歪まない倫理を前に宮田は自分のしていることが如何に愚行であるよかを理解していなかった。「宮田さん、俺は貴方の言うようなバカだからその言葉には一切の理解ができません。俺たちマネージャーと彼女たちは表裏一体であり、立場に縛られず互いに協力して高みを目指す関係であると俺は思うので」

「ふーん……、君は面白い奴だけど、そういうところは本当につまらないね」

「つまらない奴で結構です。人それぞれと言うように、俺には俺のやり方と考えがあるので」

誰しもが自分のやり方を全うすべきであると考える奴は、決して報

われない。

バカにしてくる宮田に対して、俺は言葉で嘲笑うように返した。すると宮田の表情は険しくなり、納得がいかないといった感じだった。

「まあいいや、僕と君はそもそも相性が悪い。これ以上先輩として教えようとしたところで時間の無駄だ。それで、企画について聞こうか」

呆れたようにソファーにもたれ掛かり、最初の態度から一変し雑になつた。

だがこれは俺からしても好都合だ。きつと反論されて、不服を抱いているのだろう。

こんな幼稚レベルの返しに対して不満を募らせる時点で、プライドは高いと見受けられる。

俺は宮田に対して企画の説明をした。マネージャーとしての素質を試す勝負に加え、その名目として互いが担当するVTubeerをコラボさせて視聴者たちに楽しんでもらうこと。

「貴方は前に俺を三流だのと罵りました。だったら宮田さん、先輩として貴方の素質を見たいと思うんですよ。もちろん、ただとは言いません。入りたての新人が先輩に対して喧嘩を売ってるようなもの……。ですからこの勝負、俺が負けたら潔くマネージャーとしての立場から足を洗い、旋梨ちゃんを貴方に任せます」

「……ッ！。へえ、それは君だけの判断じゃなくて旋梨ちゃんも同意したのかな？」

企画自体の説明には興味を示さなかった。

しかし俺の口から負けたら旋梨ちゃんを渡すと言う発言に、食い付いた。

わかりやすく、それでいて単純だった。

「ええ、この事については旋梨ちゃんからも同意を得ています。ただし俺が勝った場合、逆に貴方にはマネージャーから足を洗ってもらい、今後一切旋梨ちゃんに近づかない事を要求します」

「新人である君が僕に勝負を挑み、更に旋梨ちゃんがそれでいいと

……。はははっ！ となると君の方にも算段はあるってことか。ふーん、あの頑固で僕の言葉に揺らがなかった旋梨ちゃんが、負けたら自ら僕のものに……。いいねその条件。実にそそられる。でもね、物足りないなあ」

「……俺が出せるカードはこれぐらいしかありませんよ」

「いやいや、まだあるじゃないか。ほら、君の可愛い妹の涼音ちゃんだっけ？ フフツ……」

「まさか……」

「だってよく考えてもみてよ。君は新人の立場でありながら先輩に一世一代の大勝負を挑むんだよ？ それって世間からすれば失礼極まりない事であるのに対し、本来するべきようなことでもないだろう？ だったらもうちよつと覚悟と決意を示してもらわなきゃなあ」

ニヤニヤと微笑む宮田。

つまりは、涼音も寄越せと言うのが宮田の勝負を受ける追加条件だった。

旋梨ちゃんを欲しがる傾向に意識が向いてしまってた故に、涼音も切り出せと言われるのは予想もしなかった。

……いや、よく考えてもみる。食堂での一件、その時に宮田は涼音を舐めるように下見して、なにかを見定めていた。

俺は考える。

しかし涼音も条件に乗せないと、宮田はこの勝負を引き受けることをしない。

つまりそれはスタート地点に立つ事すらできなくなるということだ。

「さあ、どうするのか。裕也くん」

「……ッ」

宮田は気付いている。

俺が涼音を差し出すことを渋っていること、そして悩んでいる事。負けた場合、マネージャーの立場や旋梨ちゃんだけでなく、涼音も失う。

すると俺の頭の中に、涼音の姿が過った。

『どんなことがあっても、私は大丈夫だよ。私は兄さんのこと、信じているから……』

それは前に実家で風呂場から出た際、涼音と出くわした時に言われた言葉。

私は大丈夫。俺のことを、信じているから。

どんなことがあってもというのは、決してこういう場面は想像もしていないだろう。

しかし脳裏に過った涼音の姿と言葉は、純粋で真っ直ぐ、それでいて何故か不安で悩んでしまう俺を奮い立たせた。

「ははっ……あははははははははは!!」

「ッ！ 一体、どうしたのかな？ もしかして予定していた通りにいなくてバカらしくなっちゃったのかな」

「宮田さん……」

「なにかな……？」

「貴方の言葉からするに、涼音も条件に乗せれば勝負を引き受けてくれるって解釈してもいいんですかね」

「うん、そういうつもりだけど……。君は、まさか……」

「じゃあこの勝負、引き受けてくださいよ。涼音を条件に出します」

俺の言葉に、宮田は目を見開く。そして後ろに立つ神崎さんたちも同様に。

負ければハイリスクの条件を飲み込んだ俺は側からみれば妹までも売ったクソ野郎だ。

だが、それでも俺は宮田を潰す。負けるつもりがないから、負けるわけにはいかないから。

成すべきことは宮田を誘い込むこと。今はそれ以外を考えるべきではない。

「君は、本気かい？ 妹を売るってことだよ？」

「そう捉えてもらっても構いません。それで、引き受けてくれますよね？」

「それなら引き受けるが……」

「言いましたね？　では、これ以上貴方と話すことはなにもありません。企画の実行日は瀬川さんから再度連絡があると思います。それまでは互いに干渉せず、穏便にいきましょう」

宮田から「引き受ける」と確かに聞いた俺はソファから立ち上がり、神崎さんが出してくれたコーヒを一気に飲み干した。

「そのボイスレコーダーは置いていきます。処理するなり好きにしてください。ただ、最後に失礼を承知に言いたいことがあります」

「なにかな？」

「ーテメエなんか涼音を渡してたまるか、この腐れピエロがツ」
中指を立て、宣戦布告した。

すると宮田は身体を震わせ、やがて小さな笑いから大きな笑いへ。

「ーやってみろよ三流、目に物を見せてやる」

「その言葉、最後にはそっくり返してやるよ。それと神崎さん」

「は、はいー」

「コーヒー、美味しかったです」

「ふえ……っ？」

俺と宮田はそれぞれ宣戦布告し、最後はコーヒを淹れてくれた神崎さんに礼を言つて楽屋を後にした。

四階にある自分の楽屋へ戻る最中のエレベーターの中で俺は、第一段階を突破したことの喜びと同時に、算段を練る事にした。

ー俺と涼音の絆は、奴如きじゃ散らない。

#45 墮天四姉妹×ゲーマーズ

「……ということがあった。俺の勝手な想像に過ぎないかもしれない、それでも俺は絶対に負けない。だから、本当にすまない」

「に、兄さん……」

宮田との談話を切り上げ、俺は楽屋に戻ってすぐに土下座をした。そんな俺の行動に涼音と旋梨ちゃんはびつくり仰天、からの説明を求められた。

俺は洗いざらい、宮田を誘い込むことが出来たものの、引き受ける条件の中に涼音を巻き込んでしまったことを話した。

すると涼音は少し困った感じの様子で、土下座する俺の前で屈んだ。

「兄さん、顔を上げて……？ 私、別に怒ってないから……。それよりも、宮田さんになにもされていない……？」

「ああ、この通り特には。けど、怒ってないとはいえ独自の判断で涼音を危険に晒してしまっている事実が変わらない。だから、これぐらいの謝罪だけはさせてほしい」

「ううん、本当に大丈夫だよ……。それに私は兄さんを信じているから……。だから、顔を上げてほしいな……」

涼音の言葉に、俺は頭を上げる。そこには優しい笑みを浮かべる涼音の姿があった。

「それにしても、宮田マネージャーはやっぱり一筋縄じゃいかんかったとね……。まさか、鈴音ちゃんまで……」

「私は別に大丈夫だよ……。でも、兄さんに負担が凄く掛かっちゃうのが、すごく心配……」

確かに負担はより大きく掛かる。

瀬川さんから日程の連絡が来るまでに、提案した企画に不足してい

る人数集めや、様々なジャンルに応じたゲーム練習。

それだけでなく涼音や旋梨ちゃん、DreamLifeの公式Twitterにて宣伝をしなくてはならない。

まあそこに関しては夏のコラボ企画と称せば問題はないだろう。

「ゆうにい、午後の配信は16時からやけん。それも私と涼音ちゃんのコラボ配信、開始自体は同じばい。やけん、今のうちに息抜きしたほうが思うとね」

「まあ、確かに配信の時間まではまだある。けど息抜きなんて、なにをすれば……」

海斗と遊びに出かけるとしても、あいつは仕事で忙しい。

ゲームでも……と思ったが、そんな気分にはなれない。

旋梨ちゃんの気遣いとも言える提案に悩んでいると、涼音がもしもじとしながら俺の方をチラチラと見てきた。

「んあつ、どうした？」

「あ、あのね……。最近兄さん、旋梨さんの件やマネージャーとしての仕事で忙しくしてて、私に構ってくれる時間が、その……少なくなつたというか……」

「あく……。確かに実家に居た頃と比べると確かにそうだな……」

「だ、だから……。あのね……。特に予定とかないなら、デートとか……してくれないかな……」

椅子に座りスマホでなにか息抜きできる相手やゲームのアプリを探していると、涼音からデートに誘われた。

その言葉に俺はさりげなく検索で『デートとは』と調べた。

すると初めて知つたのだが、別に付き合つてなくても成立するそう
だ。

「デート、かあ……。俺そういうのよくわからないけど、行きたい所とかあるのか？」

「に、兄さんと一緒なら私は……。えっと、旋梨さん行きたい所とか、あるかな……？」

「んー、そうやけんねえ……」

「ちよいちよい!? 待つてくれ! えっ、涼音だけじゃないの?」

えっ?」

「……? もちろん、旋梨さんも一緒だよ……?」

てつきり涼音と二人でデートかと思いきや、まさかの旋梨ちゃんもだった。

俺が困惑していると、涼音の隣に座る旋梨ちゃんがしょんぼりと、そしてうるうるとした目で見つめてくる。

「ゆうにいい、だめ……?」

「いや……大丈夫だ……」

「ツ! ふふっ、やったけん」

どうもまあ、幸せそうな表情。

断ることもできず、涼音と旋梨ちゃんとデートする事に決定した。

しかし俺は知っている。この手の話題に敏感なのが居るといふこと。

コンコン……。

ノックされるドア。頭に浮かぶのは赤髪のパンツマン……。

俺も、ついにはエスパ―能力を手に入れてしまったようだ。

どうせ開けた矢先に、ロックンロール!!と叫び散らかすのだろう。

もはや予想ができると考えた末に、俺はドアを開けて構えた。

「やつほ、裕也さん。なんかこっちの方で面白そうなきめきを感じてな? 通りかかるついでに寄ったんよ!」

「いや、鳴海ちゃんかい!!」

「ほえ?」

俺の期待は裏切られた。

いや、別に鳴海ちゃんは翔太くんと比べると一段マシに見えるからいいけども!

「すまないね、裕也くん。午前の配信が終わって楽屋に戻る道中だったんだが、楓がなにかを嗅ぎつけたようで」

遅れて八神さんも現れる。

俺は目をキラキラと輝かせる鳴海ちゃんと、それを止めようとする八神さんを見ながら、なんでもないといい逃れしようとした。

だが両脇にそれぞれ涼音と旋梨ちゃんが顔を出して、鳴海ちゃんと

挨拶を交わした。

「私たち今からデートするけん。鳴海先輩、邪魔しないでほしいばい」
「えっ、デートするん!? ええやん、うちも混ざりたいやんな!」
「こらこら、君にはまだやることがあるだろう。残念だが、許可はできない」

「ええ!? 八神さんのいけずやなあ!!」

ノリノリな鳴海ちゃんの首根っこを掴み、静かに咎める八神さん。
顔合わせた時、ウイंकをされた。どうやら、氣遣って貰えたくれたようだ。

「しかし、次のスケジュールまで時間はある。多少の雑談程度なら許可しよう」

「むう……。仕方ないからそれで許したる。じゃあ二人とも、少しだけ話そー!」

まあそれぐらいならと、俺は鳴海ちゃんを楽屋に招いた。

二人の腕を引いて進む鳴海ちゃんに続こうとした時、八神さんに肩を叩かれた。

「裕也くん、ちよつと話がある。いいかね?」

「……わかりました、ちよつと涼音たちに一言だけ掛けてきます」

なにやら真剣な表情で話したいことがあると言う八神さんに、俺は涼音たちに声を掛け、少し席を外すと伝えた。

俺と八神さんはエレベーターのあるホールまで移動し、そこにある椅子に座った。

「すまないね、裕也くん」

「いえ、大丈夫です。それでなにかあったんですか?」

「君、午前で宮田くんと談話したそうだね。瀬川くんから連絡があったのだよ」

「はははっ、瀬川さんは本当に連絡が早い人ですね。……ええ、話をしできました。結果的に言えば誘うことはできました。ただ……」

「ただ、なにかね?」

「奴の抱くVTubeに対する価値観、そして思想感はかなりねじ曲がっていました……」

談話での出来事を俺は八神さんに話した。

何一つ、理解しかねないその思想。そして、救いようのない価値観。間近で感じる不気味さと得体の知れない考えに未恐ろしい部分があるということ。

「なるほど、そんなことが……。しかし、それでも成果を出しているのが実に皮肉だな。彼よりも弟さんの方が実に立派だというのに」

「えっ、宮田マネージャーって弟いるんですか!？」

「ああ、ミライバの派系先である子会社、アスノテというV T u b e r 支援会社があるのだよ。ここと比べたら小さいがね」

「ミライバってそんなに凄い会社だったんですね……。ちなみに、その弟さんと知り合いなんですか？」

「過去に楓と用事で出向いた時があつてね。その時にアスノテを案内してくれたのが弟の宮田翔斗だったのだよ。彼はアスノテで瀬川くんと同じ立場、マネージャーの取締役をしているそうだ」

V T u b e r 支援会社「アスノテ」。

ここよりは数少なく、会社も小さいものであるが、新人V T u b e r の採用率は非常に高く、その会社の制度も極めてV T u b e r に対して定められているとのこと。

そこではV T u b e r を一期生や二期生と言ったような形で上下の制度を儲けているらしい。

そしてそんなアスノテのマネージャーの取締役をしているのが、宮田の弟さん。

兄とは違い、善良な方とのこと。アスノテからミライバへ移転するように指示が出たこともあったらしいが、兄である宮田が居るという理由だけで断ったそうだ。

「翔斗くんは兄である彼と極めて仲も悪く、根本的に考えがそぐわないらしい。フフツ、君も一度翔斗くんを見れば、納得するだろうな。さて、そろそろ本題に移ろうか。君が提案した企画、すなわちゲームをメインとした勝負事だ。となると相手の情報は少しでもあったほうが、策を考える上で楽になるのではないか？」

「そうですね……。一応ですが四人で1チームとしてジャンルに沿っ

て一対一で事進めていこうかなと思ってますので」

とはいえ、こちらには今のところ旋梨ちゃんと鳴海ちゃんしか居ない。

残りの二人をどうするかを悩むが、それ以前に相手の情報を知るの
は良いことだ。

「宮田くんの担当するV T u b e rである彼女たちを見たなら、名前
を見れば誰なのか薄らとわかるだろう。そこで、彼女たちの情報をま
とめた資料を君に渡そう」

「えっ?」

手提げカバンから、書類の入った封筒を俺に渡してくる。

それを受け取り、中身を確認してみると宮田の楽屋で会った彼女た
ちのV T u b e r活動やプロフィールが記載されていた。

「個人情報ではないから安心したまえ。彼女たちの活動傾向、及びV
T u b e rとしてのプロフィールが書かれているものだからね」
ホームページを通せば見れるが、この方がいいかと思っ

「凄いですね……。ちよつと今、目を通して大丈夫ですかね」

「うむ、構わない」

俺は八神さんに許可を頂き、まずは渡された資料の簡易的な部分に
だけ目を通す。

【※神崎夏目】

名前：クロナ 種族：墮天使（長女）

登録者数：69万人

所属：ゲーマーズ

得意ジャンル：アクションゲーム

【※柊真奈】

名前：セレナ 種族：墮天使（次女）

登録者数：54万人

所属：ゲーマーズ

得意ジャンル：パズルゲーム

【※沢田やよい】

名前：ヨルナ 種族：墮天使（三女）

登録者数：58万人

所属：ゲーマーズ

得意ジャンル：音楽ゲーム

【※エカチエリーナ】

名前：エリナ 種族：墮天使（四女）

登録者数：72万人

所属：ゲーマーズ

得意ジャンル：全般

「大丈夫かね、裕也くん」

「……ッ」

なつ……なんじゃこりやあ!?

V T u b e r の設定よりもこの所属してるゲーマーズってなんぞ

や!?

えっ、もしかしてこの手のプロ?

勝ち目なくねえか?

「や、八神さん……。ゲーマーズって、ナンデスカ?」

「やはりそこが引つかかったかね。うむ、現実を見るのも大事だ。そのままの通り、彼女たちはゲームのプロ集団なのだよ。愛くるしい見た目に反して、ガチ勢というやつさ」

「俺、終わったかもしれない……」

四枚の資料に目を通す度、現実を受け入れることが出来ず落胆する。

「というかあの見た目でゲームガチ勢、それも女性プレイヤーってどういうことだよ。」

ギヤツプ萌えの領域展開じゃねえか……。

「けど、深く考えたって仕方ない……。か。今はこの資料にある情報を頼りに策を練る以外なにもできないし……。八神さん、資料ありがとうございます」

「私にできることはこれぐらいだ。感謝されるほどのことでもない

さ。しかし楓はパズルゲームが得意でね、ぷ○ぷ○やテト○スはランキング上位に入るぐらいだ。それを考えると、楓の相手は真奈くんにするといいだろう」

「ジャンルで言えばそうですね。音楽ゲームに関しても、こっちには旋梨ちゃんが心強いのでやよいさんと対立させると考えた方が無難かもしれませんね。ただ問題は空席の二人……か」

きつと宮田のことだ。

自分が担当するV T u b e rの得意ジャンルで挑んでくるのは目に見える。

一応、瀬川さんには宮田の意見も取り入れてジャンルは定めるとも言っているし。

予想外なのはゲーム集団だったということに加えて、それぞれが得意ジャンルを持っている。

鳴海ちゃんがパズルゲーム。

そして、旋梨ちゃんが音楽ゲーム。

唯一の救いとしてそこだけは確定で決まっていることだろうな。

「おっと、すまない。そろそろ楓を連れて次の予定に向けて打ち合わせをしなければならぬ時間のようだ。私はこれにて失礼するよ」

「あつ、こちらこそ長々とすみません。ありがとうございます」

「気にすることはない。雀の涙程度の情報しか渡せないが、それでも何かの足しになればたら光栄というものだよ」

八神さんに時間が来たということで、楽屋へ戻ることにした。

そこで楽しいげに話していた鳴海ちゃんに声を掛けて、やがて別れを惜しみながらも鳴海ちゃんは八神さんと次の予定へと向かった。

頭の中で交差する悩み。

しかしこういう時だからこそ、旋梨ちゃんが提案してくれた息抜きをするべきなのだろう。

「涼音、旋梨ちゃん。準備しな。昼は外食で好きなもの食いに行つて、色々周って息抜きしよう」

俺の言葉に二人は頷き、すぐに支度する。

八神さんから渡された書類を引き出しにしまい込み、俺も準備をし

た
ー
ー。
。

#46 晴天の空下に実る恋【赤城恵果】

午後13時から三時間のライブが終わった頃、私は楽屋でゲームするお兄ちゃんを見ていた。

けど裕也さんの実家にお邪魔したその日から、ライブが終わってすぐに今まで興味が無かった色々なジャンルのゲームをするようになった。

「ねえ、お兄ちゃん」

「んー？ どうした恵果」

「あの、さ……。もしかして、裕也さんの力になれないって気にしたりしてる？」

それは素朴な疑問だった。

あの日、ゲームが得意なのは如月先輩と鳴海先輩の二人だけだった。

でもその時、お兄ちゃんは悔しそうで、どこか悲しそうな雰囲気を感じた。

きつと裕也さんの力になれないことを気にしてるのかもしれないと思った。

「……オレ、音楽しか取り柄ないからさ。ゲームなんてろくにしたことないし、ましてや知識も浅はかだから、すぐに上手くなれるとは思ってもない。けど、如月先輩が宮田マネージャーに狙われていることや、それを止めようとする神代の兄貴の力に少しでもなりたいて思ってる」

「うん……」

「神代の兄貴も言ってただろ。残り二人が足りないって。別に選抜されるわけじゃないけど、それでもなにもせずただ見てるだけなんて、オレはしたくない」

これまでちよつとした雑談と音楽活動だけで成り上がってきたお兄ちゃんは、不器用ながらもコントローラーを操作しながら言う。

お兄ちゃんは素直で真つ直ぐな性格。

けどその反面、誰かの為に動くときは自分のことが見えなくなる。現にお兄ちゃんはいつものように振る舞っているけれど、目の下には隈ができている。

基本的に朝の7時半には起きて、その日のライブが終わってゲームの練習。

いつも寝るのは深夜の1〜2時ぐらい。

私はそんなお兄ちゃんが頑張っていることに、とても心配だった。

「お兄ちゃんの言いたいこと、わかるよ。でも頑張りすぎはよくないよ……。まだ今日は午後の配信も控えてるんだし、少し寝た方が……」

「ダメだ、まだノルマは達成してない。それに心配しなくても大丈夫、ちゃんと配信に支障が出ないように気をつける」

「別にそういう意味じゃ……」

なんだか、いつものお兄ちゃんじゃない。

真剣に画面と向き合い、上手くなろうとする努力は確かに身近で感じる。

けれど、最近お兄ちゃんの笑う姿は配信以外で見なくなってしまった。

私たちのマネージャーである遠藤さんもお兄ちゃんの変化に気づいているようで、度々声を掛けているみたいだけど、今私に返したようなことをそのまま遠藤さんにも言っている。

深い溜息を吐き、紅茶を少し飲む。

するとテーブルに置いてあったスマホが振動して、メールを受信した。

その相手は、海斗さんだった。

「告白の返事がしたい。」

もし時間あるなら、屋上で」

届いたメールに、私は胸をドキツとさせた。

一週間前に私は海斗さんに告白をした。

最初は冗談で女の人をたぶらかすような人だと思っていたけど、私が注意した時に、私のことを知りたいと言ってくれた。

視線を逸らすことなく、真面目に。

それから様子見も兼ねて連絡先を交換して絡んで、少しずつ海斗さんを知った。

それは向こうも同じで、互いに知って、試しのデートもしたこともあった。

海斗さんの車に乗って移動する時、ふと横目で海斗さんを見た。

その時、不意にカツコいいと思ってしまった。

食事する時にファミレスへ寄った時も、会計する際に全額奢ってくれようともした。

けど、私はそれが苦手だった。だから海斗さんに割り勘をお願いした。

すると海斗さんはしばらく考えた後、私の意見を尊重して割り勘することを望んだ。

『確かにその方が、優しい恵果ちゃんに下手な罪悪感を与えなくて済むかもしれない』

優しく微笑みながら気遣ってくれた海斗さんを見て、ちゃんと相手のことを気遣って考えてくれる人なんだと再認識。

それから洋服店で選んでる時、積極的にこれが似合うのではないかなどの提案をしてくれたりもして、普通以上に楽しかった。

そうやって知り、触れていく中で私は海斗さんのことを好きになっていった。

けどある日、裕也さんの実家にて遠藤さんと一緒に寝たという話を聞かされた。

海斗さんはおもしろ話で話したのかもしれないけれど、心がもやもやして、気付けば泣いてしまっていた。

きつと、取られてしまうかもしれないっていう醜い妬みがあったの

かもしれない。

そんな私を海斗さんは連れ出し、あたふたした感じでそばに寄り添ってくれた。

私は泣きながらも、ただ感情のままに海斗さんを一人の男性として好きになつてしまったことを打ち明けた。

それが、些細でありながら大きなきっかけ。

【今からでも大丈夫です】

そして今、私の告白に対する返事を決めてくれたのか。

私は届いたメールに、返事を返した。すると海斗さんからすぐに返事が返ってきて、屋上で待ち合わせすることにした。

「お兄ちゃん、ちよつと楽屋出るね」

「んっ、わかった。……あつ、恵果」

「なに？ お兄ちゃん」

「……結果が全てじゃないからな。頑張れよ」

「う、うん……？」

準備をして出ようとした時。

お兄ちゃんの言葉が妙に引つかかる。

もしかして、気づいているのかな？

そう思ったりもしたけど、さすがに鈍感なお兄ちゃんが察することはないだろうと決めつけ、私は屋上へと向かった。

少し小走りで急いで屋上のドアを開けると、既にそこにはタバコを吸う海斗さんの姿があった。

「よお、恵果ちゃん」

「ど、どうも……！」

黒の作業着がとても似合っていて、道具を入れるポーチをつけたベルト。

職人のような海斗さんの格好に、私は大人でかっこいいと思った。私が近付くとタバコを携帯灰皿で消した。

そして海斗さんは作業着のポケットからペットボトルの午後の紅茶を差し出してきた。

「確かアイスティー好きだったよな？ 間違ってたらすまん」

「い、いえ！ 大好きです……！」

「そうか、ならよかった。忙しいだろうに、付き合わせて悪いね」

「一回目の午後の配信が終わって休憩時間だったので大丈夫ですよ！」

「ふっ、そっか」

私の反応が面白いのか、海斗さんは缶コーヒーに口をつけて小さく笑った。

「あ、あの……それで返事は……」

「返事……か」

「……ッ」

少し焦ってしまったかもしれない。

私のそんな言葉に、海斗さんは鉄の柵にもたれ掛かり空を見上げた。

緊張するし、怖い気持ちも出てくる。

なにより、断られるかもしれない。

「俺は裕也の奴と比べたら恋愛に疎いわけじゃないんだが、如何せん年下に告られたりしたの初めてなんだよ。学生時代、年上の先輩から告られたことしか無かったからさ」

「そうなんですか？」

「ああ。でも、当時は裕也と遊び回るのがスゲエ楽しくてさ。恋愛する気も無かったから断ったんだよ。けどよく考えれば、それが最後のモチ期だったのかもしれないって思ったりもするよ」

「あははっ！ そんなことないですよ。海斗さんは素敵な人なので、こっそり狙ってる人とかいるかもしれないですよ？」

「うーん、そうだなあ。例えば、今でいうと恵果ちゃんにか？」

「……ッ！」

何気ない会話の中で、少し墓穴を掘った。

意地悪な笑みを浮かべながら見つめてくる海斗さんに、私は視線を逸らした。

「……俺は裕也と違ってスペックが高いわけでもないし、恵果ちゃんみたいなV T u b e rの事とか全くわからない。言ってしまうえば、俺

と恵果ちゃんの間には共通点がないってことになる。それでも、恵果ちゃんは俺なんかでいいのか？」

「俺なんか……なんて悲しいこと言わないでください。私は、知っていく中でその……好きになってしまったので……」

「ふーん……、そっか」

少しおかしかったかな……？

なんだが素っ気ない気がして、更にモヤモヤが出てきてしまう。

もしかして断るための言葉を選んでいるのかなと、そう思ってしまった。

ーでも、私のそんな気持ちは海斗さんの一言で飛んでしまった。

「じゃあ、よろしく頼むよ」

「……ふえ？」

「彼女がただ単に欲しいからじゃないからな。恵果ちゃんの本気を感じ取れたから、付き合ってもっと知ろうと思えた。ただ、それだけだ」
耳を赤くして、海斗さんは顔が見えないように逸らした。

一方で私は、呆気ない成立を前に最初はポカンとしていた。

けれど、やがてそれは実ったという事実が押し寄せてきて、胸がぽかぽかと暖かくなる。

同時に嬉しさが込み上げ、涙が出てくる。

「ほんとに……いいんですか……？」

「ああ、けど俺はバカだから苦労するかもな」

「ううん、そんなことはありません……！　けど、本当に私でいいんですか……？」

「はあ……。恵果ちゃんがいいから、俺もこうして言ってるんだよ。これ以上はいいだろ……」

「うっ……ああ……！　海斗さん……！」

「ちよっ!？」

私は嬉しさのあまり、抱きついた。

顔を見せないように海斗さんに抱きついて、情けない話、泣きじやくってしまった。

最初は驚いていた海斗さん。

けど、ゆつくりと私の頭を撫でてくれた。

それならしばらくして私は落ち着きを取り戻して、海斗さんと一緒に座っていた。

「取り乱してすみません……」

「いや、別に大丈夫だが……。泣くほどのものなのか、ちよつとわかんないわ」

「そういうものなんです！　けど、本当によかったです……！」

「ははははっ！　まあ、喜んでもらえてるならいいのかと思っておくよ。迷惑かけるかもしれないけど、逆に甘えても大丈夫だからな？」
それぐらいしかできないけど。

そんなことを最後に付け足す海斗さんに、私は小さく笑った。

でも、甘えても大丈夫……かあ。

甘えるというのは、相談とかでも大丈夫なのかなと思い、私は楽屋に残してきたお兄ちゃんのことを思い出す。

「あの……じゃあ早速甘えてもいいですか……？」

「おっ、なんだ？」

「実は……」

私は、最近お兄ちゃんの様子がおかしいという話をした。

裕也さんの実家の件から、役に立てるようにゲームをし始め、睡眠時間を削って体調があまりよくないように思えること。

私の話には海斗さんは静かに聞いていた。

そしてあらかた話し終わると、海斗さんは小さく吹き出して笑った。

「恵果ちゃん、それ甘えるに入らないぞ。それは相談ってやつだ」

「あう……す、すいません」

「いいよ、大丈夫。しかし翔太くんが、ゲームの練習して体調を疎かにしてるねえ……。確かに妹の恵果ちゃんからすれば心配だよな」

「そうなんです。お兄ちゃん、裕也さんのこと尊敬してるみたいで、役に立ちたがっているんですよ。別に悪いことじゃないですよ？　でも、このまま続けていたら倒れちゃいそうで……」

「倒れたりしたら配信にも影響出るしな。けど言っても聞かない……」

そういうことだな?」

「そう、ですね……」

私は深い溜息を吐いてしまう。

どうしたらお兄ちゃんにわかってもらえるのか考える度、強く言った方がいいのかもしれないと思ったりもする。

けど頑張ってることに変わりはないから、あまり口出しもできない気もする。

「そうだな……。翔太くんはまだ楽屋でゲームしてるんだよな?」

「そうだと思います」

「じゃあ一緒に翔太くんの所に行こうか。まだ次の仕事まで時間あるし、俺からもなんとかしてみるよ」

「でも、海斗さんの貴重な休憩が……。それに、迷惑かもしれませんし……」

「なに言ってるんだ?」

「えっ?」

「俺と恵果ちゃんはもう付き合ってたぞ? 彼女の悩みは、俺も一緒に考えてやるのは普通のことだろう。ほら、思いついたらすぐ行動! 行くぞ、恵果ちゃん」

さつきまで耳を赤くしてたのに、今ではなんともないように言い切る海斗さん。

立ち上がり、私に手を差し出してくる。

行動的なのは裕也さんと似てるなあと思いつつも、私はその手に自分の手を重ねた。

そのまま立ち上がる。

でもその際、足のバランスを崩してしまいせつかく起こした身体が揺らぐ。

すると私の腰に手が回される。

倒れないように支えてくれたのは、たった今さつき私の彼氏になった人、海斗さんだった。

「大丈夫か?」

「……ッ!!」

……心臓、もたないかもしれない。

#47役に立ちたい気持ちの裏側【池上海斗】

時刻にして17時。

無事に恵果ちゃんへ想いを伝え、付き合うことになった後。

恵果ちゃんの言っていた通り、楽屋に顔を出すと翔太くんはゲームをしていた。

横顔を見るからに目の下には酷い隈と、疲れ切っている雰囲気を感じた。

「お兄ちゃん、海斗さん来てるよ」

「えっ？ あ、どうもっス。珍しいですね、なにかあつたんですか？」

「ああ、ちよつと翔太くんに手伝ってもらいたいことがあつてな。ゲームしてる最中に悪いんだが少しいいか？」

「……別に、いいっスけど」

ひとまずやることとして、俺は翔太くんをゲームから逸らせることにした。

多少渋々といった形ではあつたが、翔太くんは手を止め、ゲームの電源を落とした。

楽屋にあるソファで座っている恵果ちゃんに言葉ではなく、小さく首を縦に振ってサインを出す。

それは少しばかり、翔太くんを借りるというサインだった。

「ふああ……。それで、手伝って欲しいというのはなんスか？」

「別に難しいことじゃない、ちよつとパソコンを運ぶの手伝って欲しいな」

「それぐらいなら大丈夫っスよ。あつ、でも設置とかはわからないっス」

「運んでもらうだけだから大丈夫だ。ゲームするのは構わないが、息抜きも必要だろう？」

「……そっスね」

二人並んで新品のパソコンがある倉庫へ向かった。

その道中、眠いのを我慢しているのか何度も欠伸をしている。

倉庫に着いて俺は台車を取り出して、その上にパソコン本体と周辺機器を載せていき、翔太くんには指差しであれこれを持ってくるようにと指示を出した。

「海斗さん」

「んっ、どうした？」

「まどろっこしい事はやめましょうよ。これ、本当は一人でも出来る作業内容っスよね」

「ッ！　なんだ、気付いていたのか」

「あからさまに不自然っスよ。……恵果にオレをなんとかするよう言われたんスか？」

指示した機器を運びながら、翔太くんは全てを見抜いていた。

「よく考えれば確かに不自然だな。でも、その通りだ。恵果ちゃんに言われて、翔太くんをゲームから引き離そうとした」

「はあ……。本当に余計なお節介だ……」

「余計な、お節介？」

「オレはあいつが思ってるよりもバカじゃないんで。ゲームのやりすぎってことも、睡眠が取れていないことも自覚してるんスよ。けど、あいつはいつもオレを子供扱いしてくる……。母親じゃなくて、妹なのに」

「……ッ」

いつも元気で明るい翔太くんの言葉に、俺はなにか引っかかる。

考えずともそれは睡眠不足と疲労による思考回路の低下があると思われる。

しかし、恵果ちゃんに八つ当たりするような発言はこれまで見たことがないし、らしくない。

「それは恵果ちゃんが妹だから出る言葉か？　もし本当の母親だったら、翔太くんは言われても仕方ないと思うのか？」

「そうじゃないっスけど……」

「なら、自分より上も下もないだろう？　恵果ちゃんは翔太くんの妹として然るべき心配を寄せているに過ぎない。そうやって人の心配

を蔑ろにするような発言は控えた方がいい」

「……ッ」

納品リストを見ながら、持ち出す物の確認をしながら言葉で叱る。チエックしながら俺はふと、翔太くん視線を移す。

すると言われたことによるものだろうか。

ギリッと歯を噛み締め、どこか不満を抱いているようだった。

「海斗さんも、オレを子供扱いつスカ」

「子供扱いもなにも、実際ガキだろ」

「ッ！ 確か海斗さんって、神代の兄貴と同じ年齢っスよね。だとしたらオレと二つしか違うのに、そこまで言われる道理はないと思うっス」

「確かに二つ違うだけだな。けど、俺と翔太くんの間にあるその二年は小さいようで大きいもんだよ。ましてや、今の翔太くんを見ると恵果ちゃんが可哀想と思える」

あえて挑発するように、俺は言った。

すると翔太くんの身体が小刻みに震え、両拳を握るのが見えた。

「海斗さんに、オレの気持ちのなかがわかるって言うんスカ!!」

倉庫に響く、翔太くんの怒鳴り声。

幸いにも此処には俺たち以外誰も寄り付かない為に、その怒鳴り声は虚しくも響いただけ。

疲労している上で叫んだせいとか、すぐに息切れを起こす翔太くん。

「わかるわけないだろ。遠藤さん、そして恵果ちゃんの心配に耳を傾けようもしないテメエの気持ちなんて」

「じゃあ、余計な口出ししないでください!!」

「そういうわけにはいかない」

「なんで……!!」

「――今の翔太くんは、自分を見失ってるからに決まってるだろ。正直言うと、酷い有様だぞ?」

「ッ!」

なにもできない自分に対する不満。

それをなんとかしようとする努力。

だがそれが足枷になり、結果を出すどころか自分に目を向けられない。

まるで、学生時代の俺と裕也みたいだ。目先のことばかり考えるせいで、周りを見ようとせず自分勝手なことばかり。

「宮田の所業については、この会社全体に噂として流れている。だが、それを揉み消すなにかがあるんだろう。だから裕也の奴は宮田のプライドをへし折る企画を練った。翔太くんは、そんな裕也の力に少しでもなりたいんだろ？」

俺は翔太くんじゃない。

だから気持ちの全部はわからない。

それでも、誰かの役に立ちたいから頑張っていることは見ているだけでもわかる。

普段やらないことをやり出して、妹の恵果ちゃんや遠藤さんの言うことを素直に受け入れられないぐらい集中していることにもなる。

そんな俺の言葉に、翔太くんは下を俯きながら膝から崩れ落ちた。

そして啜り泣く声と共に、目からは涙をポロポロと流していた。

「海斗さん、オレ……ただ見てるだけは嫌なんスよ……！ 特に如月

先輩と深い仲じゃないし、神代の兄貴のことをたくさん知ってるわけじゃないっス……。それでもオレは、一度知った関係の人の力になりたいっス……!!」

打ち明けられる本当の気持ち。

翔太くんは優しいから、仲良くしてくれる相手の為に役立ちたいのだろう。

だが今回の件はゲームがメイン。

音楽活動に熱を入れメインにしている翔太くんにとっては、あまり縁のないもの。

それ故に自負に追われ、なんとかするにしてもひたすら練習する他なかった。

そして更に翔太くんの言葉から知ったことなんだが、遠藤さんに頼らなかつたのは、ただでさえいつも迷惑を掛けているのに、これ以上かけられないという気持ちがあつたそうだ。

そして恵果ちゃんも同様。

音楽以外で妹に頼るのは兄として間違っているかもしれないと思っていたのだ。

「だからと言って、一人で抱え込むのはお門違いだろ。遠藤さんも恵果ちゃんも、きつと頼ってほしいと思ってる。けど、男だからわかる。あまり女子女性に頼るのは嫌なんだろう？」

「そうツスね……ツ」

「ははははっ！ まあ確かにそうだろうな、俺でも嫌だわ。恥ずかしいとか情けないというかあまりしたくはないよな。だったらさ、男同士なら別に本音で吐き出し合えるんじゃないやねえの？」

「えっ？」

「実は一人だけ知り合ってるVTuberをしている男の子がいるんだよ。翔太くんとは一つ違いで、それでもゲームは上手い。そこで、俺は背中を押すことしかできないが、もし翔太くんが本気で祐也たちの力になりたいってんなら掛け合ってみてやるがどうする？」

俺の言葉に、翔太くんは考える。

別に翔太くんのやることに、〃辞めろ〃なんてことは言わない。

本人が望んでやろうとしていることだ。

それを側から見ただけの人間が辞めろなんて凶々しいことはできない。

ただし俺は条件を出した。

それはしつかりと食事をして、睡眠を取って渡に迷惑と心配を掛けないということ。

もしその条件を守ってくれるのであれば間違いなく翔太くんの力にはなれる。

「オレは、役に立つ為に上手くなりたいっす。でも、神代の兄貴がどう言うか……」

「その点に関しては気にしなくていい。俺の方から翔太くんを推薦しといてやるよ。それでもガタガタ言うようなら、シバくだけだ」

俺の冗談に、翔太くんは乾いた笑いをする。

しかしそれから考えたのか、翔太くんは俺に頭を下げてきて決意を

示した。

俺はそんな翔太くんの頭をわしゃわしゃと撫でて、了承した。

あらかた使用する機材を乗せ終えた俺は、翔太くんに楽屋へ戻るよう言った。

協力者であるVTuberの子と、祐也に話をするのもあったからだ。

翔太くんは俺の言葉に頷き、素直に楽屋へと戻っていった。

俺はスマホを取り出して連絡先を漁る。

そしてまずは裕也に電話をかける。

耳につけているBluetoothイヤホンからコールが響き、俺はその状態のまま台車を押して現場へと向かった。

『んあつ、どうした海斗』

「ちよつと話したいことあるんだが、いいか？」

『涼音と旋梨ちゃんが絶賛配信中だが、別室だから大丈夫だ。けど瀬川さんも居るから、なるべく長くはできないぞ』

「いいや、短く話すつもりだから大丈夫だ」

どうやら配信真っ只中に掛けてしまったらしいが、短くなら大丈夫と裕也は言った。

「宮田と勝負するゲームのジャンル内容、もう決めてあるのか？」

『ちよつどそれらを配信のチェックしながら瀬川さんと打ち合わせしてたところだ。一応ジャンルは音楽ゲーム、パズルゲーム、アクションゲームの三つは決まってる。あと一つのジャンルはまだこれららって感じだな』

「なるほどな。ちなみに構成として誰がどのジャンルに配置するかも決めてるか？」

『音楽ゲームは旋梨ちゃんが妥当だな。パズルゲームは八神さん曰く鳴海ちゃんが得意とのことと二人は決まってる』

「旋梨ちゃんと鳴海ちゃんね……。じゃあアクションゲームに翔太くんを推薦したい」

『えっ、翔太くんを？』

「ああ、そうだ。実はな……」

俺は翔太くんの現状について話をした。

裕也の役に立ちたがっていることから、そのせいで自分の生活ペー
スが疎かになってしまっていることまで。

翔太くんを推薦したいという俺の言葉に、しばらく悩む裕也だった
がー。

『わかった、頼りにしていると翔太くんに言っといてくれないか？ 正
直、瀬川さんとも話をしていたが人数に困ってたからな……。それに
翔太くんが頑張ってくれてるのに、それを蔑ろにできるはずもない
し』

「フツ、そういうと思ったよ。ちなみに企画のスケジュールも決まっ
てるのか？」

『今度の土曜日が企画の決行日だ。その日は学生たちも休みで、視聴
者も多くなりそうだな。ちなみに午前の部と午後の部で分ける予定』
電話越しにスケジュールを組み立てたノートのめくる音が聞こえ
る。

午前の部と午後の部に分けて、既に公式ツイッターでは告知がさ
れているとのこと。

「了解、仕事の最中に悪かったな」

『気にすんなよ。んじゃ、またな』

俺は裕也との電話を切った。

……今度の土曜日、もうすぐじゃねえか。

そうなると思うにでも掛け合えないといけないな。

俺はもう一度連絡先を漁り、例のV T u b e rをしている男の子の
番号をタップした。

『……あつ、もしもしー！』

「久しぶりだな、ー 祐樹 くん」

俺が協力を要請した相手は、ミライバとは別の会社でV T u b e r
をしている男の子だった。

同時にあの日、裕也の実家に向かう時にひっそり事件をきっかけ
に知り合った。

ー 天道祐樹、アスノテという会社では新人でありながらも、ゲー

ムにおいてはトップの実力を持つ最高の助っ人だった。

#48 誰かの為に出来る限りの魂を【赤城翔太】

『ーカゲロウって歌は上手いけど、逆にそれが売りで他は特にないよね』

それは視聴者に言われた一言だった。

オレと恵果がV T u b e rとして活動し始めた最初の頃、既存するアニソンやボカロなどのカバーで配信していた。

まだ最初ということもあって、恵果は作詞作曲には手を出せていない状況の中、オレは歌ってみたの配信だけで盛り上げた。

だがそんなある日、上記のような一言が目にとまり、ずっと胸のシコリとして残っていた。

ー確かに、歌が無かったらオレにはなにが残るんだろう？

ギターの腕前もプロには及ばず、あくまで趣味の許容範囲だ。

歌は周りが評価してくれている以上、上手い部類であることは認められている。

だが言ってしまうえば、それだけだ。

恵果が居るから雑談も曲も、そしてオレの歌も一つの完成へと向かっていく。

ただそれがもし、オレ一人だったら？

そう考えた時、きつとV T u b e rに限らずオレの人生は無色でつまらないものだと思う。

だからこそなのかもしれない。

神代の兄貴が宮田マネージャーを如月先輩から引き離し、且つその所業を打ち砕くという話が出た時に、オレは力になりたいと思った。

今まではオレたちが後輩の立場だった。

でも、神代の兄貴やその義妹である涼音が入ってきたことで初めての後輩ができた。

それからだろうか。

オレはそんな後輩である涼音の為に、神代の兄貴みたいな人の役に立ちたいと心の底から湧き上がる感情が芽生えたのは。

オレは神代の兄貴の実家で企画の内容や今後の予定を聞いた際、ゲームが上手い人が誰なのかという質問に対して手を挙げられなかった。

その時に見えた神代の兄貴の表情。

別に神代の兄貴は他人を軽蔑するようなことはしない人だというのはわかつている。

ただそれでも、悔しかった。

力になれない自分の存在が、なんにもできない自分の価値観が。

だからこそ、神代の兄貴には何も言わず、ひたすらにゲームをし続けた。

上手くなって、役に立てるように。ただそんな想いの中、一心不乱に……。

『お兄ちゃん、海斗さん来てるよ』

睡眠時間を削り、ゲームをしていると恵果が楽屋に戻ってきて声をかけてきた。

するとそこには神代の兄貴の幼馴染で親友である海斗さんの姿があった。

オレは恵果が思っている以上にバカじゃない。

きつとオレが睡眠を削ってまでゲームに打ち込んでいることを相談したのだろう。

じやなきやこのタイミングで海斗さんが赴くなんてことは、ありえない。

故に、海斗さんはオレをゲームから引き離して仕事の手伝いをしてほしいと言ってきた。

『まどろっこしい事はやめましょうよ。これ、本当は一人でも出来る作業内容っスよね』

正直に言うと、不愉快だった。

あからさまな行動、遠回しに事情を聞こうとしているのが見え見えだった。

だからこそオレは圧のある言葉で、海斗さんに言葉を吐き捨てた。それから話を聞くと、やはり恵果の相談でなんとかしてほしいとあったそうだ。

それが無性に歯痒く、ストレスだった。恵果は誰かに頼ることが得意。

それ同様に、オレにないものをたくさん才能として持っている。

そんな余計なことを考えるうちに、オレの中で感情が煮えたぎり、気付いたら関係のない海斗さんに向けて爆発していた。

『海斗さんに、オレの気持ちのなにがわかるって言うんすか!!』

『わかるわけないだろ。遠藤さん、そして恵果ちゃんの心配に耳を傾けようともしないテメエの気持ちなんて』

抑え切れない我慢し続けていたオレの感情に対して、海斗さんは冷たく低い声で返した。

思わずゾツとしてしまう。神代の兄貴と違ってこの人は、真正面から堂々と吐き捨てる故に言い返すことができないと。

ただそれは本当に一瞬だった。

それからは海斗さんに色々と言われ、気付けばオレは膝から崩れ落ちて泣いていた。

ただ見ているだけの自分。

なにもできないでいる自分。

そんなのは嫌で嫌で、なんでもいいから少しでも役に立ちたいと心の本音を泣きじゃくりながら吐き出した。

『だからと言って、一人で抱え込むのはお門違いだろ。遠藤さんも恵果ちゃんも、きつと頼ってほしいと思ってる。けど、男だからわかる。あまり女子女性に頼るのは嫌なんだろう?』

優しく語り掛けてくる海斗さんの言葉。

それはオレが頼りたくても頼れない理由や、一人で頑張ってしまうことに対して返した。

海斗さんは理解してくれたんだ。

長男として簡単に妹に頼ることをしたくないオレのバカみたいな気持ち。

それがやけに嬉しくて、オレは絶え間なく流れる涙を腕で拭いた。やがて落ち着き、海斗さんは男同士なら本音で語り合えると言った。

オレはそれに対して返すと、海斗さんなりに背中を押ししてくれるというものだった。

だからこそオレは頭を下げて、海斗さんをお願いをした。――そして時は戻る。

それから楽屋に戻るよう言われて、午後の二回目の配信が始まるというところもあり遠藤さんと軽い打ち合わせをして、準備した。

「あの、お兄ちゃん……」

「大丈夫、そしてごめんな」

「ッ！」

きつと恵果はこんなオレをまだ心配してくれているのだろう。

小さい声で話しかけてきた為に、オレは必要以上に何も言わず、ただ謝った。

もちろん遠藤さんにも謝った。

海斗さんと交わした条件の中で、睡眠はしっかり取ること。

そして迷惑をかけること。

そんなオレの反応に対して、恵果はふと微笑みながら言った。

「お兄ちゃん、頑張ろうね」

「ああ」

距離が離れていた恵果とのわだかまりが、少し埋まったような気がした。

それから睡眠を怠ったせいで睡眠に駆られながらも無事に配信は終えて、その日のスケジュールは完遂した。

遠藤さんはオレに気遣ってくれて、明日は配信休みという形を取ってくれた。

頭を下げて遠藤さんが部屋を出たあと、時刻にして21時頃。

恵果は寝る前の入浴時間で、オレは23時に寝ると決めてゲームをしていた。

するとスマホが振動して、通知を知らせた。オレはゲームを中断して、画面に目を通す。

『夜遅くにすまない、恵果ちゃんから電話番号を聞いてショートメッセージ送らせてもらった。とりあえず俺はゲームに疎いから、助っ人として紹介したい子が居る』

それは海斗さんからのメールだった。

助っ人として紹介したいという文章の最後にはその者の電話番号が載せられていた。

その相手はまだ起きているとのこと、話だけでもしといたほうがいいと書かれており、海斗さんからの返事は無かった。

「なんか、緊張するな……。けど、せつかく海斗さんが勧めてくれたし、かけてみよう」

下手に怖い人じゃなければいいなと思いつつも、オレは電話番号を入力してかけた。

プルルル……プルルル……、ガチャ。

『あ、もしもし』

「夜遅くにすいません。あの、海斗さんからこの電話番号に掛けるようについて言われて掛けたんですけど……。あつ、赤城翔太って言います」

『ああ！ 貴方が海斗さんの言ってた人ですか。わざわざすいませんん』

「いえ、こちらこそすいません」

電話に出た相手の声は低音で、それでいて明るく元氣を感じさせるものだった。

『俺は天道祐樹って言います。ANIMAL四期生のVTuberしてるんですよ。それで海斗さんから同じVTuber同士で尚且つ男同士なら、赤城さんもやりやすいんじゃないかって言われたんです』

「あつ、そうなんですな」

『どうやらゲームが上手くなりたいたいのことで頼まれたんですけど、俺もそこまで上手くないけど大丈夫ですかね?』

「恥ずかしながら教えてもらえる人が居ないので助かります」

『そう言って貰えると少し気持ちが楽です。あ、ちよつと待ってくださいね。……いや、別に女の子じゃないですよ。うん、男の人……。あの、後で埋め合わせするんで……。はい、本当にすみません小鳩さん』

電話越しに祐樹さんが誰かに問い詰められているような雰囲気が漂ってくる。

さつきまでハキハキとしていた喋りが、なぜか物腰低くなっていた。

『電話の最中にすみません』

「いえ、お気になさらず。ちなみに、マネージャーさんですか?」

『えっと、彼女……ですね。痛い!』

「……日を改めましょうか」

『と、とりあえずメッセージのやり取りでも大丈夫でしょうか? なんかこちらの都合で申し訳ないんですけど……あはは』

『そう言い、電話でのやり取りを終える。』

いや、なにこれ。イチヤイチヤ見せつけられただけじゃね?

なんだろ、羨ましいなクソツ。

結局少し話ただけで、メッセージのやり取りが始まった。

アクションゲームとシミュレーションゲームが得意とのこと、オレが練習しているスマホを教えてもらうことになった。

RainのQRコードを教えてもらい追加。

今日はもう遅いということもあり、明日から通話越しに教えてもらうことになった。

ちなみになんだが、ほんとオレからすればどうでもいい話ではあるが、先程に彼女さんからつねられた件に関して説明があった。

なんでも、女の子の曰らしい。

その日に限って構ってあげないと拗ねたり、つねったりしてくるとのこと。

……いや、知らねえ!!

「はあ……オレも欲しくなったなあ」

「えっ、なにが?」

「うおあ!?! 出たんなら出たと言えよ!」

「……? 変なの、お兄ちゃん」

急に掛けられた声に驚き、オレは前のめりに倒れる。

そんなオレの気持ちも知らずに恵果は無防備にも下着にぶかぶかのTシャツを着ていた。

「な、なに見てるの?」

「なんでもない。ただ、そんな無防備の格好を海斗さんがみたらどう思うかなあつて」

「えっ?」

「バレてないと思つてた? 付き合い始めたんだろ、お前と海斗さん」

「ふええ!?! な、なんで知つてんの!?!」

「そんなのお前の反応見てたらわかるだろ。はあああつ、オレも彼女欲しいなあ」

逆にバレてないと思う方がおかしい。

なんとたつてオレは誰よりも恵果の側に居た兄貴なんだぜ?

まあどうであれ、そんな妹が幸せと感じるなら応援するよ。

オレも、オレなりに頑張るから。

#49 夏コラボ企画の打ち合わせ

『どうも皆さん、こんにちは……！ 今日告知した予定通り、大先輩の旋律さんに来ていただきました……！』

『こんにちははやけんね。今日はヒスイちゃんのチャンネルにお邪魔させてもらってるばい。ということで先輩として、色々ヒスイちゃんに聞いていこうと思うとね』

『あ、あれ……？ 予定では私が旋律さんに色々聞くはずなんですけど……』

：草w w w w w

：ヒスイちゃんのチャンネルなのに、乗っ取りされかけとるw w w

：困惑してるヒスイたそh s h s

：神コラボキター!! 楽しみすぎる

：推しと推しの共演は尊死する

涼音と旋梨ちゃんの二人とデートをした後、俺たちはミライブに戻り配信の準備をした。

カウントダウンの合図後、二人は上手く息を合わせて入りは完璧だった。

プライベートにおいて関わることの多かった二人だが、配信上でコラボするのは初だ。

故に立場は先輩と後輩になり、若干そのせいでもあるのか涼音は緊張していた。

あらかたツイッターの方で二人がコラボすると告知していた効果もあってか、待機者は30分前から9000人以上を記録し、始まると同時に跳ね上がり18900人になった。

『あははっ！ でもあれやけんね、そろそろヒスイちゃんも慣れてきたとね？ まだ緊張してる部分もあるかもやけん、それでも前よりか

はほぐれてる感じがするばい』

『そ、そうですね……。最初の頃はやはり個人勢から企業勢になったことで色々な方と接したり話したり、それだけでも大変でした……。でも旋律さんやカゲロウさんにホムラさん。色々な人が優しく教えてくれたり、今見てくれてる視聴者さんたちも受け入れてくれたりしてるので前よりは少し気持ち的にも楽かなって思ってます』

：企業勢として活動する上で、個人勢の時よりは立場が違ったりするからねえ

：まだ日は浅いけど、企業勢での初配信でカゲロウやホムラがオリジナル曲を贈ったりするぐらいだもんなあw

：相当可愛がられてるってことよ

：旋律たんもめちやくちや気に入ってるよねw

：だがカゲロウには厳しいご様子w

『カゲロウ君に対してはあれやけん。弟でもなく兄でもなく、近所の子供……。みたいなの？ 騒いでカミナリ親父に叱られてるイメージがあるばい』

『そのカミナリ親父さんはホムラちゃんかな』

『ふふっ、あはははは！ 違うないばい！ いつも怒られてるけんね！』

：w w w w w

：確かにそうかもしれないw w w

：思えばカゲロウってホムラちゃんに怒られない日ってないよねw

w w

：ナイス例えだ、ヒスイちゃんw w w

：見てるかな、カゲロウw w w

順調に旋梨ちゃんとの絡みを進める涼音。

俺はそんな二人の様子を伺いながら、テーブルに書類を広げる。

マネージャーとしてその日の配信をまとめた書類の提出も然り、宮田との勝負ごとに対する予定を自分なりに書かなくてはならない。

その両方をぎこちなさの残る感じで進めていると、出入り口となっている俺の居る部屋のドアが小さくノックされた。

一応防音となっているが、それでも二人の世界を壊さない為にも気遣い、物音を立てないようにドアに近づき開けた。

「あれ、瀬川さん？」

「お二人の配信中にすみません。今回はコラボ配信で長めとのこと、その間の時間を使つて一緒に打ち合わせをしようかなと思ひまして」

「ああ、宮田との件についてですね。大丈夫ですよ、正直言えば俺一人だと少し悩んだりしてたので」

ドアを開けた先に居たのは瀬川さんだった。

「どうやら気遣つてくれたらしく、一緒に打ち合わせをしてくれるとのこと。」

俺は心強いというもあり、瀬川さんを中心に一緒に座つた。

「涼音ちゃん、変わりましたね。前はあんなにぎこちなかったのに、今では普通にコラボでもこうやって問題なく進行できてるみたいですね」

「此処に来てから涼音の周りに恵果ちゃんは翔太くん、それに旋梨ちゃんや鳴海ちゃんといったように友達が増えたというのも大きいかもしれません。今までは一人だったのが、ここで出来た友達との交流があつてこそだと思ひます」

「そうですね。でも、裕也さんも変わつたと思ひますよ？ 実家がラーメン店というのもあつてマネージャーの知識はゼロに等しい状態だというのに、頑張つてくれてるようで」

「いえ、そんなことありませんよ。知識が無い俺に色々教えてくれた瀬川さんのおかげでもありますから。それに、まだまだです」

事実、ラーメンの知識しか無かつた俺にマネージャーとしての知識を与えてくれたのは瀬川さんだった。

そのおかげで涼音を雀の涙程度とはいえ支えることもできてるだろうし、感謝の気持ちしかないともいえる。

けど瀬川さんは涼音や俺のことを、忙しいながらも見てくれているんだな。

少し嬉しい気持ちになるし、もっと頑張らないといけないと思ひ

た。

「さて、お二人も順調に進行できているということでごちらも打ち合わせをしましょうか。日程やその時刻、配信時間などは宮田さんの話し合いの中で今度の土曜日になりました。学生たちの夏休みが終わる前に企画実行ということになりましたが、裕也さんに決めて欲しいのは対決内容であるゲームのジャンルと、対戦方式です」

「ジャンルと方式に関して、宮田からはこっちで決めていいと言われてたんですか？」

「ええ、なにせ宮田さんの担当するV T u b e rは生粋のゲーマーですからね……。余程、自信があるのでしょうか」

「八神さんからも聞いていますが、ミライバでは四人一組で墮天四姉妹って呼称されてるみたいですね。……名前のインパクトから、勝ち目に関して不安がありますが」

「元々、個人で名を馳せたプロに近いレベルですからね……」

俺と瀬川さんは互いに唇を噛み締め、まさに絶望と言わんばかりに下を俯いた。

とはいえ打開策は必ずあるはずと思いつながら俺は涼音たちの配信を映すデスクトップとは別のノートパソコンで、墮天四姉妹と言われる宮田の担当V T u b e rのプロフィールを開く。

「勝ち目あるがないかは置いといて、ジャンルは相手が得意としているものにします。なので音楽とパズル、アクションの三つは確定事項で進めていくと思います」

「音楽とパズル、アクションですね……。もう一つはどうしますか？」
「そこなんですよね……。今上げたジャンルは4人中3人の得意ジャンルということで対策はそれ集中で出来ると思いますが、それ以上に警戒しないといけないのはエカチエリーナさんです。プロフィールにもある通り、全般って強く主張している以上、下手に選べません」
椅子に背を預け、考える。

他の三人は得意ジャンルが決まっている為、旋梨ちゃんや鳴海ちゃんにはそれぞれ指定されたジャンルの練習をしてもらうことができる。

しかしエカチエリーナさんのように、一括りで全般と示されると予

想ができない。

しかもこつちはまだ二人……。残りの二人を探さないといけないのだが、なかなか見つからない。

それから色々瀬川さんと打ち合わせをしていると、スマホが振動した。

それも連続ということで電話のようだが、俺は手に取り確認する。どうやら海斗からだ。

この時間はあいつもまだ仕事の最中、珍しいと思った。

瀬川さんに一声掛けて、俺は静かに部屋を出て廊下で電話に出た。

「んあつ、どうした海斗」

『ちよつと話したいことあるんだが、いいか?』

ふざける素振りもなく、真面目だった。

俺は瀬川さんとの打ち合わせもあり、長くはできないと一言添えて応じた。

海斗もそれはわかっているようで、手短かに伝えると了承した。

『宮田と勝負するゲームのジャンル内容、もう決めてあるのか?』

「ちよつどそれらを配信のチェックしながら瀬川さんと打ち合わせしてたところだ。一応ジャンルは音楽ゲーム、パズルゲーム、アクションゲームの三つは決まってる。あと一つのジャンルはまだこれからって感じだな」

『なるほどな。ちなみに構成として誰がどのジャンルに配置するかも決めてるか?』

「音楽ゲームは旋梨ちゃんが妥当だな。パズルゲームは八神さん曰く鳴海ちゃんが得意とのことと二人は決まってる」

『旋梨ちゃんと鳴海ちゃんね……。じゃあアクションゲームに翔太くんを推薦したい』

「えっ、翔太くんを?」

『ああ、そうだ。実はな……』

海斗から聞かされた、翔太くんの現状。

実家に帰省した時に開いたVTuber会議で、俺が戦力になるのは旋梨ちゃんと鳴海ちゃんの二人だけと思っていた現場を見て、力になることができないとその日から負い目を感じてしまっていたようだ。

それから裏で俺の力になろうと恵果ちゃんや遠藤さんの言い分も聞かず、睡眠を削ってひたすら練習に時間を割いていた。

それが数日と続いていて、体調は見る限り寝不足や疲労が見えるとのこと。

ちなみに練習しているのはアクションゲームのスマホらしい。

だがそれよりも、俺は翔太くんのことを気遣うこともせず、負い目を感じさせてしまっていたという事実に向けなく思った。

しかし海斗はそんな翔太くんを止めるよりも背中を押す形で事を収めたらしく、空いているアクションゲームの枠に是非と推薦。

聞かされる翔太くんの努力を蔑ろにするわけにはいかない。

同時に俺は深く反省した。

「わかった、頼りにしていると翔太くんに言つといてくれないか？正直、瀬川さんとも話をしていたが人数に困ってたからな……。それに翔太くんが頑張ってくれてるのに、それを蔑ろにできるはずもないし」

俺の言葉に、海斗は小さく笑った。

そして組み立てている現在のスケジュールを聞いてきた為、俺は今の土曜日ということと、その意図を伝えた。

それに関して海斗は頷き、仕事の最中にすまないと言添えて電話は終わった。

それから静かに戻り、待たせていた瀬川さんに軽く謝り座った。

「なにかありましたか？」

「海斗から翔太くんをアクションゲームの枠に推薦したいと言われました。どうやら裏で頑張ってくれていたらしく、その努力を蔑ろにしない為にも受け入れることにしました。これで三人は確定ですね」

「そうですね。となると、あと一人ですね。一応声を掛けている子が居るのですが、現在ミライバには居なくて少し日が空きそうなんです

よね」

「えっ、そうなんですか？」

「ええ、今は子会社であるアスノテに用事があってマネージャと一緒に出張してるのですが、もうすぐ帰ってくるんですよ。男の子で、口調は荒々しいですがゲームは凄く上手い子なんですよ？ まあ……、他人に左右されない、興味ないものにはとことん冷たい旋梨さんと違って、一味二味癖の強い子なんですけど……」

「……DreamLifeって曲者の集まりですか？」

瀬川さんは乾いた笑いをしつつ、協力者になるかもしれないという男の子について触れた。

名前は国枝辰己、くにえだたつみ 齢十八歳。鳴海ちゃんや旋梨ちゃんに続いてDreamLifeでは古参で、ゲームを得意としているとのこと。

今はアスノテに出張とのことでミライブには居ないが、時期に会えると教えてくれた。

まあ翔太くんみたいな癖強いVTuberを見ているから多少は慣れているだろうが、なぜか嫌な予感しかしない。

ひとまず辰己くんのことを頭に入れておき、俺は指定したジャンルのゲームソフトや、対戦方式の調整をすることにした。

期間は二週間、長いようで短い。

その間にも予定を組み上げて、練習の時間を設けないといけない。

まだやることはあると、楽しんで配信をしている涼音たちには視線を向けながらも瀬川さんと一緒に打ち合わせを続けた。

――――

――――

――――

――

――

――VTuber支援会社アスノテにて。

「辰己くん、辰己くん！ 午後の打ち合わせをするから、早く起きなさい！」

「あゝ、うるさいのう……。ちゃんと起きちよるわい……」

「全く！ もっとしっかりしなさい！ だらしないでしょ！」

「ぴーちくぱーちく、口を開けば『姐さん』はやかましいんじゃあ！
起きちよると言つとるじゃろうがあ！ ……ったく」

顔に本を広げて載せ、寝ていた少年はマネージャーに急かされ起き上がる。

手入れされていないボサボサの黒髪のツンツンヘアーに、紅い瞳。

「アスノテの案件の打ち合わせはまだあるし、瀬川さんから話も聞いてるでしょ!? いつまでも屁理屈言つてないで準備する！ 私は先に外で待つてるから、早くしなさい！」

ガミガミと言った末に、プンスカと怒りながら部屋を出ていくマネージャー。

その場に取り残された少年、国枝辰己は寝ていたソファーに背中を預け、深い溜息を吐いた。

「あゝ……、どっかにいい男おらんかのう……。あんな野蠻でやかましい姐さんじゃなくて……」

#50 未来と明日を繋ぐ者の出会い

瀬川さんとの打ち合わせを終えた翌日。

一つのベッドで仲良く規則正しい寝息を立てながらまだ寝ている涼音と旋梨ちゃんよりも早く起きて、軽くシャワーを浴びた。

どうでもいい話、夜に入る風呂よりも、朝に入る風呂の方がサツパリできる気がする。

特にまだ頭が覚めていない時だと尚更気分は爽快、やる気に繋がる。

野郎の入浴シーンはやめてくれって？

ンなもん妥協してくれ。

涼音や旋梨ちゃんの入浴シーンを露わにするわけがないだろう。

しばらくして寝汗と今日のやる気を出した俺は上の服を持つてくるのを忘れ、ひとまずパンツとジーパンだけ風呂場から出た。

「あっ……」

「んあ？」

頭にタオルを被せながら出ると、そこには目を擦って立っている寝起きの涼音が居た。

「おはよう、涼音」

「お、お、おはよう兄さん……」

「お、おう？」

なぜか両手で顔を隠しながら顔を赤くする涼音に、とりあえず挨拶をした。

隠す割には指の間からチラチラと見ているのが丸わかりだが、何か変だろうか。

とりあえず引き出しから半袖を取り出し、半ば濡れているが気にせずに着た。

「ふう……」

「に、兄さん。なにか、飲む？」

「じゃあコーヒーを頼む」

「う、うん……!」

ぎこちなく話してくる涼音に俺はコーヒーを頼み、デスクトップを起動させた。

昨夜は瀬川さんとの打ち合わせで鈴音たちの配信を見逃している部分がある為、その振り返りと提出する書類をまとめなきゃならない。

やがて涼音が自分が飲むミルクティーと、俺が飲むコーヒーを淹れてくれた。

マグカップを受け取り一口飲む。苦味がより引き立ち、気持ち的に旨味を感じさせる。

「あの、兄さん……」

「んあつ、どうした」

「……旋梨さんのこと、好き?」

キーボードを打っていた手が止まる。

なにやらもじもじと、それでいながら不安げにそう問いかけてきた涼音。

しばらくその質問の意図がわからなかったが、俺は涼音に目を向けて言った。

「いや、好きは好きだけでもう一人の妹みたいな感じだな。恋愛感情は抱いてない」

「そ、そうなんだ……」

嘘は言っていない。

旋梨ちゃんにもこの事は伝えてある。

俺の言葉に涼音はホっとしたのか、胸を撫で下ろした。

そういう確かに、ここ最近旋梨ちゃんを中心に動いている気がする。

きっと薄々ながらも、涼音はそれをどこか寂しいと感じていたのかもしれない。

「俺の気持ちは涼音にしか向いてないから、安心してくれ」

「う、うん……。あ、ありがとう……」

これで少しは不安を取り除いてあげられただろうか。

軽く微笑む涼音に、俺も吊られて微笑み片耳にイヤホンを挿してアーカイブを振り返った。

——それから、一時間後。

「ゆうにいい、おはよう」

「あ、ああ……」

「旋梨さん、さすがに近すぎだと思っ……ッ」

「そんなことないばい」

着飾った楽屋は広いし、なにより来客用に座る椅子は多めに置いてある。

それなのにも関わらず、寝惚けた感じで身を寄せてくる旋梨ちゃんは俺の隣に座った。

そして対抗するように涼音も反対に座り、旋梨ちゃんと同じように身を寄せてくる。

だが、なんだろうか。書類が捗らないというよりよりも、押し当てられている感触が如何に豊満ではないのがわかってしまう。

「ゆうにいい、凄くいい匂いするけん」

「まあ、朝風呂したからな」

「兄さん、今日の予定は……?」

「そういえばスケジュール更新するの忘れていたな……。とりあえず午前は二人とも休みで、午後からは配信してもらおう形だ」

なぜか今日はべったりとしてくる二人に、カバンから本日のスケジュールを取り出した。

テーブルに置いたスケジュールに飲み物を口にしながら二人は目を通す。

「いつも通りと同じやけんね」

「下手にあれだこれだと変えても、やりづらいだろうからな。それに、どちらにせよ旋梨ちゃんには音楽ゲームで出してもらおうから、そもそも変えようがない」

「私は雑談だね、兄さん」

「これまでの統計データを見る限りでは、やっぱり涼音の雑談が受けているらしいからな。ゲームもそれなりにいいんだが、なんでも視聴者とのやり取りが上手い分要望が多いんだよ」

実際二人のアーカイブを見直したり、トウイッターのリプ欄を見ると大きく分かれていた。

涼音は個人勢の時から培ってきた視聴者とのコミュニケーションがズバ抜けて上手く、ゲーム配信よりも評価されている。

対して旋梨ちゃんは音楽ゲーム一本だけでやってきたこともあり、音ゲー界隈の有名人含め多くの視聴者を獲得している。

V T u b e r としてやってるだけにそれは一種のエンターテイメントとしてだが、もしこれが個人で本気を出せばすぐさまTOP10には入るぐらいの実力を秘めている。

「涼音たちは自分なりにやればいい。結果は考えず、やれることはやる。ただそれだけ」

「ゆうにいつて、よく考えてくれるとね」

「そもそも束縛が嫌いなら、旋梨ちゃんのにもこの方が気楽だろ？」

「まあそうっちゃけど、ゆうにいいなら束縛されてもよかと？」

「なに言ってるんだ、このバカ」

思わず本音が出てしまう。

しかしそれでも堪えてないのか、旋梨ちゃんはどことなく機嫌良くココアを飲んだ。

すると涼音はムスツとしたまま立ち上がり、壁に設置してあるテレビを付けて、ゲームを起動させた。

しかもコントローラーの代わりに、なにやら丸いリングを持っていった。

「涼音、それはなんだ？」

「リングフィットネスだよ……。今凄く流行ってて、身体を動かすゲームなの……」

「あゝ！ それ知ってるばい！ 他のV T u b e r たちもやってるゲームやけんね」

「うん……！」

涼音と旋梨ちゃんの二人で盛り上がりを見せる中で、俺はカタカタツとそのタイトルを調べてみた。

すると確かにゲームではあるのだが、家で出来る運動ということだからかなり高評価だった。

俺が知ってるの運動じゃないが、その昔マ○オのダンスダンスレボリューションをやったぐらいだぞ……。

「ふっ……はっ……！」

「頑張れ、涼音ちゃん！」

「はあ……はあ……！んんっ……！」

二人の背中を見ながら作業していたが、そのゲームが始まると同時にセンチティブに触れる容量で耳に入ってくる。

次第には旋梨ちゃんも遊び始め、俺は両耳イヤホンして耐えた。

なんだかんだ悲しいかな、男に生まれてしまった定めというべきか。

やはり思ってしまった、なにがとは言わないが。

それから好きな音楽を嗜み、涼音たちの様子を伺いながらも順調に事が進んだ。

テーブルに散乱している各書類をかき集めて整理した後、海斗から連絡が来る。

どうやら午前の仕事が珍しく無いようで、気晴らしにドライブしようという誘いだった。

俺は涼音にすぐ戻ると伝え、旋梨ちゃんから極力目を離さないようにだけ頼み、準備をしてミライバから外へ出た。

「お前の車に乗ることが久しぶりだな。それでどこにドライブする気なんだ？」

「まあちよつと駅近くの喫茶店まである人物を迎えに行こうと思つてな。翔太くんの手助けをしてくれる子でお前にも会いたいらしいんだよ」

「なんだそいつ、物好きだな」

「ああ、違うない。とはいえお前も前に一度会ってる子だぞ？」

「んあつ、そうなのか？」

「ほら、前にお前の実家へ帰省する際に寄ったパーキングエリアでスリに遭った男の子だよ」

「……ああ！ あの子か!？」

海斗の説明に俺は思い出す。

名前は確か天道祐樹、持病で喘息を持っていたと思うが、年齢にそぐわずしつかりしているような子だった覚えがある。

なぜそんな子と接点を持っているのか不思議だった俺は海斗に聞くと、どうやら俺が涼音たちに事情説明しに車へ戻っている間に知り合ったようで、連絡先まで交換したそうだ。

更に追加情報で、祐樹くんは俺のことを前々から知っていたらしい。

パーキングエリアでの出来事を前に混乱、余裕がなかった為に声をかけるどころか、俺を思い出すことができなかったそうだが、なんでもテレビの取材番組を見て知っていたらしい。

それから色々話を聞きながら、車を走らせて数十分。

目的地である駅へと着き、海斗はその近くのコインパーキングへと車を止めた。

それからしばらく二人で歩き、集合場所である喫茶店へと足を運んだ。

「さて、どこに……。おつ、居た居た」

入店すると同時に海斗は辺りを見渡して、祐樹くんを見つける。

俺はそんな海斗の後ろをついて、祐樹くんが座っている席へと向かった。

「よつ、祐樹くん」

「ッ！ お、おはようございます池上さん！ それに、ー神代さん」

海斗に挨拶をした後、俺に挨拶をしてきた。

俺らよりも高い身長、それでありながら威圧感よりも優しさに満ち溢れていた。

そしてなぜか、パーキングエリアで会った時とは別に、祐樹くんから見えない境遇の糸が感じられた。

言葉にするのは難しい。

ただそれでも、パーキングエリアではなくその前から知っていたかのような感じ。

「裕也でいい、海斗の付き添いだが、よろしく頼むよ。祐樹くん」

#51心の支えは誰の中にも

「改めまして、俺は天道祐樹って言います。ミライバの子会社であるアスノテに所属してて、そこでANIMAL四期生としてVTube rをしています。パーキングエリアでの節はどうもご迷惑をお掛けしてしまい申し訳ありませんでした」

「こちらも改めて、俺はミライバでマネージャーをしている神代裕也だ。海斗から聞いている通り、翔太くんにゲームのレクチャーをしてくれるみたいで本当に助かるよ。それとパーキングエリアの出来事についても気にしなくて大丈夫、俺と海斗がそうしたいと思って移した行動だからな」

天道祐樹、 齢十八歳。

身長は180cmを超え、見た目は平均より痩せ細っているものの、服を着飾れば芸能人及び俳優に見間違えるぐらいに整っている。

自己紹介でも語ってくれたように、どうやら親会社であるミライバから派生した子会社であるアスノテに所属しているVTube rのことで、俺と同じまだ一年にも満たない新人枠らしい。

「……やっぱり、裕也さんはテレビで見た時と変わらず前向きで男らしい人ですね」

「男らしいかどうかはわからないが、どうやら俺をテレビの取材番組で既に知っていたらしいけどそれは本当なのか？」

「ええ、数ヶ月前の取材番組で……。今はこうして誰かと会ったり話したりするのは慣れて大丈夫なんですけど、当時の俺は他人と接することに恐怖を抱いてて、大変だったんです。でも先輩たちや憧れの存在、そして当時テレビ越しとはいえ裕也さんの言葉が胸に響いて、前向きに、そして後悔のないように頑張ろうと思えた結果が今に繋がったんです」

祐樹くんは自分を偽ることをせず、しっかりと俺の目を見て語った。

なんでも喘息の他にアトピー性皮膚炎という病気を患っているうえで、それが原因で学生時代は虐められ、引きこもりになったこと。クソ暑い真夏日であるのにも関わらず長袖を着用している祐樹くんは、片腕の袖を捲り包帯している箇所を顕にした。

そしてゆつくりと包帯を外していき、俺と海斗にその全貌を見せてくれた。

お世辞でも綺麗とは言えない。荒れて皮膚がボロボロで、一部は化膿していた。

「前までの俺だったら、誰かにこれを見せることはしなかったと思います。しかし今は違う、これがあっても俺は俺であると、そう胸を張って言える自信があります」

「なかなか痛い痛い……。薬とかはちゃんと塗ってるのか?」

「ええ、今日も朝方に塗ってきています。しかし季節の関係で包帯を巻いていても、汗とかでこの通り意味は無くなっちゃいますけどね。これとはもう長い付き合い、慣れちゃいましたけど」

テレビとかで見たことはある。

しかし、目の当たりにするのは初めてだ。

故に最初は驚きはしたが、それでも今は受け入れ自分の一部であると前向きに話す祐樹くんには俺は感服した。

海斗は痛々しいなどと表現したが、俺は心の中で痒そうと思った。きつと今こうして見せることも辛いはずの皮膚を見せてくれたのは、俺たちを信用してくれたからなのだろう。

「俺が海斗さんに、裕也さんと会えないかと頼んだのは実際に感謝を言いたかったからです。きつと裕也さんのことだから」そんなことで”と思うかもしれませんが、少なからず俺の中では自分に大きく影響を与えてくれた方と認識しています」

「例えそれが今回初めて会う形で、その前まではテレビでの認知だったとしてもか?」

「はい、そうです。大切なのは、何事もキツカケだと思うので……。それと、俺を救ってくれたのは裕也さん以外にも、実は”ヒスイちゃん”も居るんです」

「……ほああ!？」

「ちよ、裕也うつせえ……!」

「す、すまねえ……」

思わぬ人物の名前に、俺は奇声を上げた。

海斗に諭され、慌てて口を手で隠した。幸いにも周りには聞かれていないようで、俺は冷静にコーヒーを口にした。

「涼音……じゃなくて、ヒスイちゃんのこと知ってるんだな」

「あつ、ちなみに隠さなくてもヒスイちゃんが裕也さんの妹さんだつてことは知ってますよ。トゥイッターのDMとかで連絡し合ったりしてるので」

「そ、そそそうか! そ、それは大変仲睦まじくて素敵なことだな! うん、いいことだ!」

「落ち着け裕也、手震えてんぞ」

さて、なんのことやら。

別に祐樹くんが涼音と裏で連絡し合ってることにに関して何の感情も抱いてないけど？

ほら、涼音は俺のこと好きで居てくれるだろうし、そんな浮気みたいなこと、するわけ、ないとは思ってるよ？

自分の中でとりあえず落ち着かせるための自己暗示を掛け、俺は震える手でマグカップを持つ。

そんな俺を見て、海斗が代わりに聞き出してくれることに。

「ちなみに、裕也が涼音ちゃんの兄貴だつてのはどこで知ったんだ？

当時の取材番組は俺も見ていたが、涼音ちゃんは声どころか姿も無い。本人から聞いたのか？」

「裕也さんがヒスイちゃんのお兄さんだつて知ったのは、つい最近のことですよ。ほら、企業勢として活動する前の配信で裕也さんが発狂していた回があつたじゃないですか」

「あく、なんだっけそれ。薄らと覚えてる、確かこいつが涼音ちゃんの配信枠でリスナーの質問に答える……つてやつだったはず」

「そう、まさしくそれです。ちなみに事後報告となつてしまいましたが、その切り抜きをupしたの俺なんです……すみません」

「切り抜き？……まさか、〃全裸でヒスイ推し〃って名前の人か!?」
「そ、そうです……。あ、でも別に裕也さんの妹さんに決してやましい
気持ちがあるとかそういうのではないので悪しからず!!」

あたふたとしながらそう説明をする祐樹くんに俺はもはや啞然と
していた。

彼の性格上、確かに嘘は言っていない。だがそれよりも俺は、こん
な良い子がインパクトある名前で切り抜きを行なっていたことに衝
撃を受けて脳味噌がコテコテになった。

こつてりすぎて、どろっどろだわ。

それから俺たちは祐樹くんの話に耳を傾けた。

パーキングエリアでは互いに忙しなく動いていた為にゆっくりと
接する機会が無かったこと、ただそれでも祐樹くんにとつて最初に救
いの手を差し伸べてくれたのは紛れもないヒスイ……。つまりは涼音
だったという事実。

「中学を卒業してから引きこもるようになった俺は両親と何度も衝突
して、自暴自棄になっていました。持病について理解してくれない
方々からは〃気持ちの問題〃と責められ、やがて自分がこうであるこ
と自体が悪いことなのかもしれないと自己嫌悪に駆られ、リスカもし
たりしました」

「……そうか」

「でも今は悲劇の主人公やヒロインを気取ったりするつもりはありま
せん。だって、一番辛い時期に心も身体も救ってくれたのはヒスイ
ちゃんだったので」

きつとそれは、恋愛感情じゃない。

まさしくそれは憧れや尊敬、そんな感情を表すかのような真っ直ぐ
な目をしていた。

「ちなみに、涼音とは会ったことあるのか?」

「いえ、ありません。連絡もアスノテに所属する前と比べれば減りま
したし、なにより一人前になってから会いたいと思ってますので。俺
もまだ半年ちよつとしか経ってないひよっ子……。頑張るべきことや、
やらなくてはいけないこともたくさんありますから」

「しつかり者だな、祐樹くんは」

「俺をここまで導いてくれたのはヒスイちゃんを始めとして裕也さんの言葉に繋がり、そしてある先輩が支えてくれた結果です。俺はそんな裕也さんたちから与えられたものを結果として見出して返すのが、自分なりの恩返しだと思つてます」

半年前は今と違うと言つていたが、その僅か半年でどれだけ変わったのだろうかと気になるぐらいにしつかりしていた。

恩を返されるほど何かしたわけではないが、それでも本人がその気になつていたのであるなら口を挟む理由がない。

「ただ今日は予定変更で本来はメッセのやり取りや通話繋げながら教える形だったが、昨日の昨晩に休みになったから直接手取り足取り翔太くんに教えてくれるんだよな？　ただそうなると必然的に涼音ちゃんと会つてしまいそうな感じもするが大丈夫なのか？」

そこで海斗が言った。

休みになつて手取り足取り教えてくれるというのは初知りだったが、確かにミライブに来るとなると会う確率が高いな……。

「まあ、そうですね……。けど、海斗さんや裕也さんの頼みなので、教えるなら実際に会つた方が教えやすいですし……。んー……」

「裕也、なにかいい案でもないか？」

「案もなにも、そうだな……。あれ、でもメッセのやり取りだけなら祐樹くんのリアルはわからないんじゃないか？」

「……あつ、確かにそうですね」

「もし涼音と会つても人見知りだからと程を作っておけば、なんとかなりそうだろう」

「うっわあ……。なんつーぶつきらぼうな返しだよ裕也」

「さ、さすが裕也さんです……!!」

「えっ、ちよ、祐樹くん？」

ぶつきらぼうに返しているつもりはない俺に、海斗が冷たい目で見てくる。

しかし祐樹くんは何故か目を輝かせて、俺を見つめてきた。

「俺、裕也さんみたいなカッコいい大人になりたいです！」

「やめとけやめとけ！　こんなやつになっただつてろくなこと無いから！　なっ!?!」

「えっ、そんなんですか？」

「そうそう！　ほら、例えるなら伊○誠みたいに女の子引っ掛けたりしてっから！」

「おいコラ、待てコラ、なんつった？　海斗」

聞き捨てならない例えに、俺は海斗を睨み付ける。挙げ句の果てには『バッグに敷き詰められる未来が待ってる』と付け加えられ、俺はコーヒーに入っていた氷を手に取り海斗の背中の中に入れてやった。「うひょん!?!」

「祐樹くん、このバカの言うことは気にすんな。けど俺みたいになっただつてろくなことにならないのは間違いない、祐樹くんは祐樹くんなりに作り上げていけばいいさ」

「あははっ！　冗談つてのはわかってますよ。あつ、ちよつとすみません」

会話を続けていると、祐樹くんのスマホが振動した。

どうやら電話ではなく、メールのようだ。

すると背中から氷を取り出して軽く頭を殴ってきた海斗が、茶々を入れる。

「なんだ、彼女か？」

「そ、そうです。別に虐げられてるとか強制されてるとかじゃないんですが、個人的にすぐ返してあげたいんです」

「ひゅー、ラブラブだねえ。あつ、俺もメール来てた」

「えっ、海斗さんも彼女さんからですか？」

「ああ、最近付き合い始めた自慢の彼女。やっぱ付き合ってから余計に可愛く思えるし、メールは誰よりも早く返してあげたくなる気持ちってのはわかりみが深いわ」

「やっぱそうですよね！　ちなみにどんな彼女さんなんですか？」

「んっ、この子」

「うわっ、めっちゃ若いですね！　俺と同じぐらいですかね」

「同じぐらいもなにも、同年齢だったはず。ちなに祐樹くんの彼女は

？」

「えつと……この方です！」

「めっちゃ童顔じゃん、可愛いな」

「あははっ、これでも年上なんですよ。俺より4つ上です」

「まさかの年上彼女!? 祐樹くんも面食いだなあ、ははは！」

俺は一体何を聞かされてんだ？

省かれた状態のまま、二人で互いの彼女について盛り上がる光景が繰り広げられた。

別に妬ましくない。

妬ましくなんか、ねえからな。

ブラックのほが甘く感じてしまい、俺は一気に気が抜けてしま
う。

二人の会話を聞きながら頭の中でスケジュールの調整をしてい
と、スマホが振動した。

まさか、涼音から……!?

俺はスマホを手に取り、送信相手を確認せずにメールを開いた。

—————

YO!!! 裕也ツ!!

なんだかんだお前が大好きなパパだぞ♡

最近体調とかどうだ？

涼音ちゃんと、どこまでいったんだ？

ああん、もう!

気になりすぎてお父さん夜しか眠れない!!

返信、待つてるからな!

裕也、アイ・ラブ・ユー♡

—————

「まさか、裕也さんも彼女さんからですか!?!」

「やめろ祐樹くん、これは違う。裕也の表情をよく見てみる、これは親
父さんからだ」

「えっ? ……ひいつ!?!」

俺は今、どんな表情をしているんだ。

自分にはわからない、よくわからない。

ただそれでも理解しているのは、親父のメールにこの上ない怒りと殺意を抱いたということ。

怒りが募りすぎて、手が震える。

俺は片手でフリックしていき、親父へとメールを返した。

死ね

#52 国枝辰巳

喫茶店で翔太くんの助っ人をしてくれる祐樹くんとのお会いを果たした後、海斗には任せて俺は楽屋へと戻った。

「あつ、おかえり。ゆうにいい」

「おかえりなさい、兄さん……」

変わらず楽屋に戻ると、涼音と旋梨ちゃんの二人が出迎えてくれる。

そんな二人に俺は軽く返し、羽織っていたジャケットを脱いでハンガーに掛けた。

ついでに喉が乾いて冷蔵庫の中を開け、そこからお茶を取り出しコップに注いだ。

やはり本格的に夏場突入ということもあつて、窓の外から蝉の鳴き声が余計に暑さを感じさせる。

「暑いな……。空気の入れ替えもしたし、そろそろクーラー付けようか」

俺の言葉に二人から賛成の返事が来る。

お茶を飲みながらも片方空いている手でリモコンを持ち、ピツ！と電源を入れる。

ウイイイイイン、コオオオオオ!!

「んああ、生き返る〜」

「クーラーの最初つて、何故か特別を感じるっちゃけど私だけとね？」

「ううん、旋梨さんの気持ちわかる……」

「なにがどうあれ、この涼しさは扇風機よりも最高つてことだな。んああ〜」

俺が真ん中で左右に涼音と旋梨ちゃん。

そう並び、クーラーから優しく放出される冷風に気持ちよさを感じる。

なんとというか家とかだと電気代とか気になるものの、ここだとそれを気にせず使えるのが素晴らしい。

夜のつけっぱなしはさすがに風邪引くリスクがあるからタイマーを掛けるが、やはりこいつ無しで日中は過ごせない。

「あつ、そういえば兄さん……。見てもらいたいのがあるんだけど、いいかな……」

「んあつ、どうした？」

「実は涼音ちゃんの『夏衣装』を考えとるっちゃけど、なかなかいい案が浮かばないとね。だからゆうにいの意見も聞きたいなって話してたばい」

涼音の夏衣装、それを作つてると旋梨ちゃんから聞いた俺と一緒にデスクトップの前まで移動した。

ペンタブを起動させた画面、そこには涼音の分身であるヒスイが映っていた。

金髪エルフに白色のマフラー。ただ衣装が白のワンピースに変わっていた。

まだ未完成の段階。

それでありながらも目を惹く程に、可愛らしく繊細だった。ただ……。

「白ワンピースもいいと思うが、涼音のアバターにはちよつと味気ない気もするな……。夏衣装ということで薄着がテーマなのはいいけど、それならカーディガンでもいいと個人的に思う」

「でも、そうなると色合いが大変かな……」

「意外と金髪は似合う色が多かつたりするもんなんだよ。そうだな、白シャツに名前にちなんで翡翠色のカーディガン、ただそれだと今度は飾りが欲しくなるから、ちよつと装飾品を付け足してだな……」

俺は検索エンジンに移動して、似合いそうな装飾品類を調べて提案した。

もちろん涼音や旋梨ちゃんの意見も取り入れながら、徐々に完成へと近づけていった。

その途中、横目で二人の表情をチラツと見たりしたが、ほんと楽しそうにしていた。

俺はV T u b e r に対して所詮はにわか程度の知識しか無いし、こうやって衣装が出来上がる工程を目の当たりにするのは初めて。

ただそれでも、一つ一つとパーツを組み合わせて完成に近づく絵にワクワク感があったりした。

それから数時間、昼を迎える。

昼食を取るために食堂に向かおうとしたが、まだ整理しきれていない書類などがあった為、二人には先に行つてもらうよう指示を出した。

数十分と遅れてしまったが無事に整理して、財布などの貴重品を持ったのを確認して俺は楽屋を出た。

「あゝ、ええケツしとるのう兄ちゃん」

「んあつ!？」

楽屋を出た直後、誰かにケツを触られて俺は反射的に前へ飛び退いた。

聞こえたのは明らかに男の声。それでいて、少しトーンがキツめだった。

慌ててケツをさすりながら振り向くと、そこにはボサボサの黒髪に紅い瞳をした少年……、いや青年か？

まあそんなのはさておき、見知らぬ存在が壁に背を預けて立っていた。

「別に驚かせるつもりはなかったけえの。ただ瀬川さんから兄ちゃんの手助けして欲しいって言われて待ち伏せしとったんじゃ」

「いや、なに平然と説明してんのかよくわからないんだが……。てか、なんでケツ触った？」

「ワシの名前は国枝辰己、十九歳。好きなもんは男、嫌いなもんは女じゃけえ。ちなみにケツ判定からするに兄ちゃんは合格、今日ワシと一緒に布団で寝るか？」

「おい待て、会話をしろ会話を。それとケツ判定ってなんだよ、あと一緒には寝んぞ?」

「フツ、そう照れることはないけえの。見たところ兄ちゃん童貞じゃろ? 優しくしてやるけえ、安心しちよき」

なんだこいつは?

いや、ほんとになんだこいつは?

それに冷静に振り返ると、国枝辰己って瀬川さんが昨日話してた子だった気がする。

えっ、まさかこれがその子なの?

やべえ、マジでヤベエ。ヤバすぎて近寄り難いんだけど!

「……………ん? とうるか待て、俺は名乗った記憶ないんだが……………。確かにここは俺の楽屋だけど、どういうことだ?」

「それならワシのマネージャー通して、兄ちゃんの写真見せてもらってたけえの。それに加えてあらかた楽屋の場所も聞き出しておったから、すぐにわかったわい」

タツハツハ!と、独特な笑い方を腕組みながらする辰己くん。

まあマネージャーを通してなら別に問題はないかと思っただが、いかせん相手が相手なだけに警戒してしまう。

それから食堂に向かう前に一つ付き合っただけと欲しいと言われ、俺は近場の自動販売機まで移動した。

「改めて、ワシはミライバの DreamLife に所属する VTuber をしちよる。よく年齢に見合わんと言われがちじゃが、本当に十九歳じゃけえ。ここ最近マネージャーと一緒に案件をメインとした活動したりしちよるんよ」

「へえ、やっぱ案件の方ががめつい話ではあるけど美味しいのか?」

「それなりにはのう。けど企業案件がほぼじゃから失敗は許されんよ。如何にどうしたら視聴者に興味を持たせられるのか、それを先ずと考えると元も子もないけえ」

エナジードリンクをカシュツ!と開けて、辰己くんは飲んだ後に深い溜息を吐いて椅子に腰を下ろした。

「しかしまあ、今回は案件なんてのはどうでもいい。兄ちゃん、あの宮

田に喧嘩吹っ掛けたらしいのう?」

「喧嘩を振ったというか、俺の担当する子が被害に遭ってるみたいだな。例え偽善と言われようと見過ごすことが出来なかっただけのことだよ」

「回りくどい兄ちゃんじゃのう。別に伏せんでも被害者が如月だったのは薄々と知っちよるけえ」

「知り合いなのか? ……いや、それよりもなんで旋梨ちゃんが被害者だって知ってるんだ?」

「知り合いもなにも同じグループに所属してて一切知らないわけがないじゃろ。それに、ワシは宮田の阿呆が如月に手を出してる現場を目の当たりにしちよる」

さりげない事実には、俺は驚愕した。

辰己くんは今、ほんとにさりげなく旋梨ちゃんが宮田に迫られている現場を目の当たりにしたと言ったからだ。

「現場を目の当たりにして、辰己くんはどうしたんだ?」

「どうもなにも、ただ通り過ぎたけえの。それがなにか問題かのう?」

「いや、助けようとはしなかったのか……?」

それは素朴な疑問だった。

通り過ぎただけと言った辰己くんは、俺は上の空で聞いた。

すると辰己くんは深い溜息を吐いて、首の骨を鳴らして言った。

「はあ……。兄ちゃん、ワシらはアニメや漫画の主人公じゃないけえの。でっかいリスク背負ってまで立場を危険に晒してなんになるんじゃ? まあそこは兄ちゃんとワシの価値観の違いっちなう所じやが、ワシは到底兄ちゃんみたいに誰これ構わず助けようとする気持ちはないのう」

本気だろうと偽善だろうと、自分は物事を損得感情で見据えると辰己くんは言った。

俺の価値観を否定するわけでもなく、かといって自分の意志を曲げることなく。

俺はまだこのミライバに入ってから日は浅く、内部の事情は把握していない。

それこそ宮田の所業を周りはよく思っていないという、大まかな情報だけ……。

「助ける助けないは置いといて、ワシは宮田の阿保を潰す兄ちゃんの家には賛成じゃけえ。喧嘩を吹っかけるぐらいじゃから、彼奴が周りからどう思われているのか知っちよるじゃろう?」

「ああ、まあな。けど、なんで辰己くんは協力してくれることを決めてくれたんだ?」

「……瀬川の姐さんからというのもあるが、ワシが協力しようと思っただキツカケは阿保の弟である宮田翔斗に頼まれたからじゃけえ」

上の空で天井を見上げ、辰己くんは語った。

兄の宮田翔と、弟の翔斗は双子とのことで性格も異なると。

それこそ例えるなら陰と陽。

双子でありながらも思想はそれぞれ反対で、相性も最悪……。

ミライバ設立の際は共にしていたが、それもすぐに派閥を生み出し崩壊。

結果が全ての思想を持つ兄に対して、弟は信頼こそが結果に大きな影響を与えるところを持っていると。

「何度かアスノテに出向いて案件やらなにやらと打ち合わせする度に顔を合わせていたからこそわかる。弟の方は心の底から信頼、そして信用ができる。その証拠にアスノテに所属するVTubeらには自由なく、そしてここより楽しく活動に勤しんでおるからう。ただその反面ここは兄の阿呆が暴れ散らかしておるようで、美味しい空気も不味く感じる……」

DreamLifeより、SmileRoadの方はさぞかし窮屈だろうと言った。

「まあけど、兄ちゃんがぶっ飛んだ発想で宮田の阿保を泣かせる機会を作ってくれたことには感謝しちよる。ワシも彼奴に関してはイケすかねえ愚者と思っとならう」

「なにはともあれ、宮田の所業は既に周知の事実で紛れもないこと……。色々と知りたいことはあるが、今の状態で更に情報を敷き詰めたらオーバーヒートしそうだ。でもこれでこちら側の人数は揃った

と確信していいんだな？」

「なんじゃその陰湿な問いかけは。タハハ！今は期待なんかせんでええ、実際にその目でワシの実力見せてやるけえの」

「別に悪気があつて言ってるわけじゃない。ちなみに辰己くんはなんのゲームが得意なんだ？」

「全般じゃけえ」

「……具体的に言うത്？」

「じゃから、全般じゃと言っちよる。なんでもござれって奴じゃけえ」
意気揚々、そして自信満々にそう言う辰己くんは俺は不信感を抱いた。

本当に大丈夫なのだろうか。そう思い、こつそりと後々に辰己くんのプロフィールを調べてみたら驚愕した。

これまで完全にクリアしたゲームの数は70本以上で、そのどれもが一週間に一本のペースで完遂されていた。

その中でも俺がゲーセンなどでよくやっていたゲームの中にあるストーリー○ファイターもあり、なんと家庭用に現販売されているシリーズにおいてランキング10位以内に君臨していた。

#53 強い部分、弱い部分

一度辰巳くんと別れて涼音たちと昼食を取り終えた後、俺は一服する為に屋上へと足を運んでいた。

涼音と共にミライバに入社してからまだそれほど月日は経っていないというのに、なぜか長く感じてしまう。

思えばここに来てから涼音も然り、色んな人との出会いがあり、親父の手伝いをしていた時とは違う楽しさや面白さがある。

しかし、なんだろう。自覚はしているが、宮田の件については大きく出過ぎてしまったと不安や後悔が少しあったりもする。

本命は宮田にこれ以上旋梨ちゃんへ近づけさせないというものが、気付けば宮田が担当しているVTuberの神崎さんらもあわよくば解放してあげたいなど……。

決して新人がしていることではないし、調子に乗っていることに変わりないよな。

更に自暴自棄、勢いのままにこの勝負に負けた際には涼音を宮田に任せると無責任なことを言い放ち、俺はどれだけクズなんだろうか。

「はぁ……」

如何に自分勝手なのか、口に含んだ煙を吐き出して痛感した。

「やっぱり此処に居たか、裕也」

「ッ！ 海斗、それに恵果ちゃんまで……」

「こ、こんには裕也さん！」

鉄格子に脇を当ててダランとしていた俺に声が掛けられる。

振り返るとそこには海斗と恵果ちゃんの姿があり、見るからに距離が近い。

「ンだよ、イチャつきを見せびらかしにでも来たのか？」

「なんだ、妬いてんのか？」

「ハッ！ 妬くわけねえだろ」

「ふくん。恵果ちゃん、よしよし」

「ふああ!?! か、海斗さん!?!」

「ッ」

露骨に海斗は恵果ちゃんの頭を撫で始め、恵果ちゃんは顔を赤らめながらも嫌がる素振りは見せずに受け入れている。

「彼女ってのはすげえよな。付き合ったと意識した途端に全部が可愛く見えて、好きになってしまう。なっ、恵果ちゃん」

「あう……」

「もう結婚でもしろよ」

「それもいいかもしれないな」

「いや、流石にそれは……!」

「冗談だよ恵果ちゃん。けど海斗は決定付けてしまうと行動にすぐ移すからな、気をつけたほうがいいぞ」

「た、例えばなんですか……?」

「例えば? そうだな……、なんだろうな」

「夜の営み」

「……ッ!?!」

「うっわあ……通報しとこ」

包み隠さず、例えの話で答える海斗に俺はドン引きし、恵果ちゃんは少し考えた後に理解したのかプシュー!と蒸発していた。

「まあ弄りすぎると後が怖いから此処までにしといて、お前こそ涼音ちゃんとはどうなんだよ」

「どうって、なにがだよ」

「進展の話に決まってるだろ」

「進展、進展……ねえ……」

フィルターの部分まで吸い終えたタバコを灰皿で消し入れ、俺はすぐに二本目を口に咥えて火を付けた。

海斗はそんな俺を少し見つめた後、頭を掻きむしりながら隣に並んで同じようにタバコを咥えて火を付けた。

「お前、なにか思い詰めてるだろ。道理でらしくないことをするわけ

だ」

「んあ？」

「いつもなら俺と二人きりの時だけだったのに今では恵果ちゃんが居る前でも平気でタバコを吸ってるだろ」

「……ああ、確かに。すまない」

「あつ、私は大丈夫です！ その、裕也さんと海斗さんの付き合い方の一つなんだとわかっていきますので！」

「……そうか」

「あの、裕也さんなにかあつたんですか……？」

心配そうに声を掛けてくる恵果ちゃん。

それと同じように隣でタバコを啜えて俺の返事を待つ海斗の姿があつた。

なにかあつたとかじゃない。

ふとした時に、自分のやっていることが合っているのかそうでないのか、はたまた本当に大丈夫なのかそうでないのかと、不安が一気に押し寄せてきているだけのことだが……。

「ふう……。俺は、最低の兄貴かもしれないと思い込んでしまう。旋梨ちゃんの為にと動いて動いた結果、今では俺の自分勝手に皆を巻き込んでしまっている。挙げ句の果てその中に、負けたら涼音を宮田に引き渡す時まで大きく出てしまい、自ら最悪な未来を作り出してしまったと、不安が大きく募って頭が痛い」

「確かに今回の件、ほぼお前のご都合とやらで周りは巻き込まれてるだろうな。でも、今に始まったことじゃないだろ。お前は前々から考えるよりも先に動いて、なんとか乗り切つて来たじゃねえかよ」

「当時と今を比べるなよ、海斗。今じゃ立場も全部が違ってくる」

「じゃあ此処で引き下がるか？」

「……」

「皆がお前の提案に乗って支える為、各自出来る限りの練習に励んでいる中で今から宮田のところに行つて、”やっぱり辞めます”と言いにいくか？」

「いや、流石にそれは……」

「そうとなれば周りは幻滅するだろうなあ。特に涼音ちゃんなんか、そんなカツコ悪い兄貴を目の当たりにして周りから好きな兄貴を蔑まれる視線を感じたりしなきゃいけないなくなるんだしよ」

「海斗さん、少し言い過ぎなんじゃ……」

「恵果ちゃん、こいつは裕也じゃねえかもしれねえよ。俺の知る神代裕也は、自分から吐いた唾を易々と戻すような奴じゃねえ。なあ裕也、いつからそんな雑魚キャラに成り下がった？」

明らかに海斗の声色は低く、それでいて俺に対して呆れを交えた怒りを募らせていた。

俺は返す言葉もなく、ただただ胸に棘が刺さるような感覚に見舞われた。

そんなこと、言われなくてもわかってる。

ただそれでも、冷静になって考える度に涼音がもしも宮田の手に渡った時のことを考えると俺は自分が許せなくて、なにより実の母親と同じ、もしかしたらそれ以上に後悔するかもしれないと思ってしまう。

周りの幻滅を回避出来ずとも、最悪な結末を迎えるぐらいならと考えてしまうこともある。

そんな思考回路が蔓延り、なかなか返事を返さない俺を見兼ねたのか海斗はタバコの火を消して俺の前に立った。

「裕也、『喧嘩』しようぜ」

「んあ？ お前、なにを言ってるー」

海斗の言葉に一瞬渦巻いていた思考が止まり、俺が言い切る前に海斗の強烈な拳が頬にめり込み痛みと共に横へ俺は倒れた。

「海斗さん!？」

「悪い、恵果ちゃん。これもこの『雑魚』との付き合い方なんだよ。説教なら後で聞く、今は静かに見ててくれ」

「痛てえな……！ 急になにすんだよ!!」

「いやあ、久方に人をぶん殴った。そういやこれが殴るって感触だったな。立てよ雑魚、もしかしてもう立てないのか？ なら立たせてやるよ」

「ッ！ 海斗、テメエ……!!」

俺の胸ぐらを掴んで無理矢理立たせた後、また一発と殴ってきた。これが自分を奮い立たせる、あるいは海斗なりの慰め方であることを知らずして、俺は横暴に出た海斗に向かって同じように殴り返した。

「裕也さんまで……!! こんなの間違ってると思います！ やめてください!!」

「危ないから退いてな、恵果ちゃん。おい、不良やってた頃よりも弱くなってるぞ？ それに今のお前は臆病者じゃねえか、後悔しない生き方が今のモットーだったか？ けど、此処まで来たからには引き下がらるって選択肢はねえぞ!!」

「幼馴染だからってテメエはいつもそうやって人の気も知らずにズカズカと入り込んでくるよな海斗……!! お前は経験したことねえからわかんねえだよ、失うことの辛さってのがあ!!」

「だからお前はお袋さんを失った日から後悔しないような日々を過ごすって誓ったんだろう！ 後悔しないように前だけを見て進む、それがお前のポリシーだろ!!」

「前だけ見てたって、絶対成功するとは限らないだろうが！ 今回の件は特に、お袋の次に涼音を危険な目に合わせて、失うかもしれない！ もしそうなったら俺は、後悔する!! だから嫌でも考えてしまおう、今ならまだ引けば間に合うんじゃないかと!!」

後ろは見ない。

前を見て、進んで、日々を過ごして生きる。

後悔しないようにやりたいことはやり、考えることは考え、満足する。

いつもそれを胸に刻んでやってきた。

しかし今回の件、勢いに身を任せ欲を掻いた結果が不安に移り変わった。

俺はきつと、怖いんだ。

なにが正解で、間違いなのか。

それ故に、自暴自棄になっていた。

怖いという感情と不安という感情。

自分の気持ちは誰にも理解できないと口に出すこともなく、俺は海斗と殴り合った。

数分、数十分と互いに倒れることもせず、切った口の中に広がる血の味を噛み締めながら、息を切らした。

俺たちのやり取りが見てられないのか、恵果ちゃんはその場に座り込んで泣いていた。

「はあ……はあ……い。言われずとも、俺が誰よりも理解してるんだよ!! 此処までできたからにはやるしかない、宮田の所業を止めなくてはいけないということを!! けどその反面、失敗すれば旋梨ちゃんや涼音は奴の手に渡り、せつかく協力してくれた皆の期待や努力を無碍にってしまうんじゃないかと!! 海斗、テメエにはわかんねえだろうけどな!!」

「ーッ!!」

「俺はいつもそうだ、口先だけで結局は心の中で後悔している!! 海斗、俺はテメエの理想像の通りで居ないと雑魚なのか？ 神代裕也じゃないのかよ!! 後ろ向きに考えたり、不安になったり、怖いと感じたりしたら、それはテメエの知る俺じゃないってことなのかよお!!」

感情の制限が外されると、人というのは無意識に言葉にしてしまう。

海斗を押し倒して馬乗りになり、俺は数発と殴った後に胸ぐらを掴み、吐き出した。

しかしそれは言葉としてだけじゃなく、目から溢れる涙としても溢れた。

ポタポタと落ちる雫が、海斗の頬に落ちる。

「テメエは失ったことがないから、そう簡単に言えるだろうが俺は一度失ってるからこそ後ろ向きに考えたりもするんだよ……!!」

「……確かに、俺の言い方が悪かった。ただそれでも、今のお前はちゃんと内に仕舞い込んでた気持ちを吐き出してきてるじゃねえか。全部一人で抱えようとして、勝手に辛くなつて、自己完結しようとする

る。お前の悪い癖だよ。けど、決して諦めようとはだけはすんじやねえよ!!」

馬乗りになっていた俺の身体を押し、海斗は叫びながら腹に蹴りを入れてきた。

痛み、苦しきで嗚咽混じりに咳き込む。それでもフラつきながらも立ち上がり、俺は海斗を睨み付けた。

すると屋上のドアが勢いよく開き、涼音が息を切らしながら現れた。

そして殴り合った末に顔は腫れて、ボロボロになっている俺と海斗を見据えた後、唇を噛み締めて鈴音は叫んだ。

「なに、やってるの!!」

初めてだったかもしれない。

涼音が大きな声で怒鳴り、怒りの表情を露わにしているのを見たのは。

そんな涼音に呆気を取られていると、更にドア越しから見知った人物たちが顔を出した。

「恵果、大丈夫か!」

「お兄ちゃん、お兄ちゃん……!」

「悲惨な状況やけんね……なにが、あつたど?」

「これは少し刺激の強い現場だね。遠藤くん、恵果くんのメンタルケアを頼む。楓、それに涼音くんと旋梨くんは私と一緒に彼らの元へ」
今回、俺の提案に乗ってくれた皆が一斉に集まり始めた。

更に遅れて瀬川さん、そして辰巳くんとそのマネージャーさんも顔を出した。

俺と海斗は同時に力が抜けて、その場で座り込んでしまった。

「兄さん、なんでこんなことを……」

「涼音ちゃん、裕也を責めないであげてくれ。これは俺から始めたことなんだよ……」

口の中が切れて、痛い。

顔も腫れて、視界が狭く見える。

怒った様子で俺に問い詰める涼音に、海斗は小さい溜息を吐きなが

ら言った。

涼音と旋梨ちゃんは俺に寄り添い、海斗には落ち着きを取り戻した
恵果ちゃんが寄り添った。

海斗が代わりに事情を話してくれた。

俺は大の字に倒れ、晴天の青空をその目に映して深いため息を吐い
た。

「……海斗は俺の情けない姿に喝を入れてくれただけに過ぎないん
だ。だから昔馴染みのダチにそう心配掛けて、不満を募らせてしまっ
た俺に非があるも同然なんだよ……」

「お前が内に秘めてる気持ちを抱えるから、見てられなかっただけだ」
「話をしたって、理解してくれるとは限らないだろ……」

「あ？　ちよつともつかい殴らせろ」

「んあつ？　上等だ、クソが」

言い合いの末にまた衝突しそうになる俺たちだったが、俺の前には
涼音が、そして海斗の前には恵果ちゃんが立ち塞がった。

——そして。

「いい加減に、しなさい!!」

「ツ!!」

パアアアアアン!!と、頬にそれなりに強いピンタを俺と海斗はさ
れた。

あまりの出来事にキョトンとした後、俺たちは正座するように諭さ
れた。

「兄さんはいつも誰かのためにと動くけど、不安な気持ちを溜め込ん
で我慢する……!　その結果辛くて苦しくて、悲しいのにまた重ねる
ようなことばかり……!」

「海斗さんも、手を出すのはよくないです!　確かにこれも海斗さん
たちの繋がりの一つに過ぎないかもしれませんが、見ていて私は悲し
かったし怖かったです!」

「人には溜め込まないように」って言うのに、兄さんは人に言うこ
とができてない……!　まずは兄さんがそうしなきゃ、ダメでしょ
……!」

「海斗さんの……」

「兄さんの……」

「バカッ!!」

『バカ』という何食わぬ言葉が胸に刺さり、俺と海斗は魂が抜けた気がした。

確かに嫌われたかもしれないと、今考えることじゃないのに思った。

しかしすぐに涼音たちは俺たちに勢いよく抱きついて、泣き始めてしまった。

好きな人を怒らせて、悲しませてしまった。

そんな罪悪感を海斗も感じているのか、抱きしめてやればいいのかそうでないのかわからず、困惑していた。

するとカコツ、カコツと下駄による足音が聞こえ始め、屋上のドアから辰己くんとそのマネージャーが顔を出した。

「なんじゃあ、ドラマの撮影でもしちよるんかと思う光景じゃけえの」

「辰己くん！ 少しは空気を読みなさい！」

「ドアホ！ 耳元でデカイ声出すのやめろと前々から言っちよるじやろうがあ!!」

顔を見せるなりマネージャーと言い合いになる辰己くんだったが、すぐに冷静になって周りを見渡した後には近付いてきた。

「辰己さん、戻ってきてたんですね。案件とはいえ行き来させてしまつて、すみません」

「そんなこと今はどうだつていいけえの、瀬川の姐さん。ワシは後から来たけえ、じゃから状況なんてのはわからん。けど兄ちゃん、負けらることには不安と恐怖を感じてるけえの？」

「……ああ、情けない話だが」

「タツハツハ！ なんじゃあ、ついさつきまでは気強かつたのに、今じゃ頼り甲斐の無い雰囲気か漂っちよるのう」

「返す言葉も見つからねえな」

「まあ人は誰しも強い部分とは反対に、弱い部分の方があつたりするけえ、気に病む必要はないと思う。けど兄ちゃん、ーおどれの提案

に乗ったワシらはそれ以上にバカらしいのう」

蔑みを含めた低い声が耳に劈く。

周りも辰己くんの圧に押されているのか、咎める者は居ない。

それほどまでに今の俺は情けないということなのかもしれない。

「兄ちゃんの噂を耳にした時、男気ある奴がミライバに入ったと思いつつワクワクしたけえ。そしてさつき会った時、そのワクワクは大きな期待として更に膨れた。もしかしたら本当に兄ちゃんはミライバの問題を解決するかもしれない。けど今の兄ちゃんじゃ、到底それができるとは思えん。大人だのなんだのというプライドは捨てて、この際全てをこの場にいる全員に吐き出してみんなか？ 案外そうすれば、吹っ切れるかもしれないけえ」

だから信じて話してみろ。

そう最後に言つて、また変わった笑いをする。

俺は海斗を見た後、涼音たちにも視線を向けた後に頭を掻きながら想いを告げた。

不思議と恥ずかしさとか感じず、俺はゆっくりでありながらも話を続けた。

周りはただ俺の話が終わるまで静かに聞いてくれていた。

俺は海斗や涼音の言うように、他人には求めることがそもそもできていない。

それは素直になれないのか、はたまた意地になっただけなのか。どちらにせよ、家族以外でまともに内に秘めている気持ちを吐き出したのは、〝初めて〝だった。

#54 実績、成績、貢献【宮田翔side】

僕と弟の翔斗は、双子として生を享けた。

互いに容姿も性格も、趣味でさえ同じだった。

よく世間から見た双子というのは意思疎通が計り知れず、特別性の力があると噂すらされる。

確かに一理あるだろう。僕と翔斗は幼少期から小学生までの間、同じように考え、互いに協力し合いながら生きてきた。

だが小学校を卒業し、中学へ入学した頃。

同じレベルの上を進んでいた僕と翔斗の進む先に、左右に分たれた道が待っていた。

『流石は翔斗、自慢の息子だ』

『頑張った褒美に好きなもの作ってあげるわね』

『そんな翔斗に対してお前はなんだ？ 俺の息子であるのに、この簡単なテストも満点取れないのか？』

『失望だわ。ご飯は後にして、部屋に行って勉強してきなさい』

『……ごめん、わかった』

両親の態度が変わったのだ。

小学生までは大目に見てくれたのだろう。

中学で取り行われる幾度のテストで、僕は翔斗と同じラインに立って、父親の言う簡単なテストさえも満点取れずに居た。

双子といえど、知能的な差は同じじゃない。

故に日々が経つに連れて満点を取り続ける弟と僕の差は開く一方で、その分両親による圧掛けが強まる一方だった。

『翔、俺はお前が嫌いって言ってるんじゃない。お前の将来を思ってるんだ』

——気に食わないことを正当化。

『それに双子なら、才能のある翔斗と並び続けて天才にならないといけない』

——弟を基準に物事を考える。

『世の中は実績だ。俺の息子として生まれたのなら、泥を塗るようなことはせずに簡単な問題の一つや二つ解けるようにしてくれ』

——子を「ブランド」として扱う両親。

『——わかったよ、父さん。どんな手を尽くしても実績を積みめば、いいんだよね？ そしたら父さんも母さんも、僕を許してくれるよね？』

弟に劣る兄。

いつしか僕は、互いに協力して生きてきた翔斗を陰ながら憎み、倍以上に勉強に励み、両親の期待に応えようとした。

だがそれも物心が付く頃には馬鹿らしくなり、自分は両親のブランドではないことを証明する為に自分なりの道を作り上げた。

『翔、どこへ行く気だ!? ここまで育ててやった恩を仇で返す気か!』

『そうよ！ 考え直しなさい!』

『悪いね、父さん母さん。僕はもう、あんたらの駒じゃない。そんなに翔斗が可愛いなら、一点だけに貢げばいい。それに育ててやった恩を仇で返す? はははっ! 誰があんたらの道具に成り下がると? ふざけるなよ!』

大学を卒業後、僕は両親と揉めて飛び出した。

数ヶ月後には家族との縁は切られ、狭苦しい我が家というクソツタレな鳥籠から解放。

でもね、父さん。

この身体に刻まれた虐待による傷々と共に、一つだけ感謝したいことがあるんだ。

それは世の中実績の上で成り立っているという教訓だよ。

それだけは間違いじゃなかった。

故に程良い立場で人を扱う、管理するマネージャーとしての道を作り、知識を蓄え、ライバルとも呼べないクズどもを捻じ伏せて成り上がる快感だけは忘れられない。

人は人を上手く扱い、社会に貢献する。

例えどんな手を使ってでも、僕は会社ではなく自分の実績として上を目指すことにした。



神代裕也、彼は面白く、そしてつまらない。

だがその反面、このミライバに勤めてからようやく〴〵張り合えるライバル〴〵と言える存在が出てきたと言っても過言じゃないだろう。

何故なら彼は僕の前でハッキリと言った。

企画を通した勝負で如月旋梨から手を引けど、もし負けたら妹を差し出すと。

如月旋梨と何の関係があるのかなんてのは知らないし、興味もない。

だがそこに妹を賭けに出す以上、本気で僕を潰しに来ているようだった。

僕はただ、〴〵正しい扱い方〴〵で如月旋梨の才能を引き出してあげたいという一心があった。

彼女の元マネージャーである女性も、結局はその才能の扱い方に気が付かず散った。

まあそんなこともどうでもいい。

今は神代裕也という新米がこの僕に大口を叩いて企画を持ち込んできたという点について。

〴〵どうやら彼は担当するVTuberを通して勝負するらしい。

僕が担当する神崎夏目を始めとした彼女たちは生粋のゲーマー。

実力はプロに等しく、明らかに有利。

向こうはせいぜい〴〵寄せ集め〴〵のチームを率いてくることだろう。

「あ、あの……。宮田マネージャー……」

「なんだい、神崎」

「その、私たちはVTuberを通してゲーマーズとして四姉妹を名

乗っています。実際は血の繋がりのないゲーム好きの同期です……」

「それがなに？」

「だから、その……。ゲームは楽しむものであって、決して人を蔑ろにする為を利用するものじゃないと思います……」

念には念をとパソコンで予定を立てていると神崎が僕に問いかけてきた。

つまり彼女が言いたいのは、楽しむ目的のゲームで大人気ないことをするなということだ。

「それを言うなら彼もそうじゃないの？ たかだが一人の為に妹を賭けに出して、それこそ利用しているのと同義じゃないか」

「でも、あの人は覚悟を持ってました……。自分の妹を賭けてまで、一人の為に動く。きつと彼の妹も承知していて、如月さんも信用しているからこそこの企画に賛同したのかと……」

「僕には到底理解できないね。結局のところ君は何が言いたいのか？」

「わ、私たちは貴方の駒じゃないってことを言いたいです……」

ここにきて初めての反論。

何かあったに違いないと思い、僕は沸々と湧き上がる怒りを抑えながら神崎を睨み付けた。

「一体どこで感化されたんだ？」

「ッ！」

「駒じゃないと言うなら一人でやってみろよ。誰のおかげでここまで名を上げ、問題も起きず、成長できたと思ってるの？ 全て僕が完璧なスケジュールと体制を保ってきたからでしょ？ それを今更、私たちは駒じゃないって……。商売道具が浸け上がってんじゃないぞ？」

人が人を上手く扱い何が悪い。

成績を収め、上に立つ為ならどんな事でも試行錯誤するのは当然のことだろう。

特にV Tuberなんてのは個人でやろうと思えば幾らでもできる。

ただその初期費用に伴い、知識が必要。その二つさえ補えば年齢関

係なく誰でも始められる。

だが知識があつて機材などを揃える費用が無い場合、ミライバやその子会社であるアスノテといったV T u b e r に特化した会社に応募し見事審査が通ればマネージャーが付き、支援される。

一概には言えないだろう。

だが大半はそうだ。彼女もまた知識はあるのかもしれないが、その後者に過ぎない。

「まあいいや。神代裕也、彼はどうやら僕が担当するV T u b e r 四人に合わせて『四本勝負』で挑んでくるらしい。きつと君たちの情報も八神さんがまとめて彼に行き渡ってるだろうね。でもその程度では寄せ集めのチームじゃなんともならない。だから入念に対策を取ってくるのは間違いない」

「企画書、届いたのですか……」

「うん、それもさつきね。内容見てみたらかなり面白いよ、幾ら周りのサポートがあるといつてもちゃんと企画として成り立っている。彼率いるチームはどうやら真つ向勝負をお望みらしい」

この企画に注目すべきポイントはなんとと言っても僕の担当V T u b e r が得意とするジャンルに合わせての勝負だった。

僕的には向こうの得意ジャンルに合わせて来ると思ってたんだけど、これだけは予想外。

この企画の行き先は僕と彼の勝負。だがマネージャーとしての実力を見せつける筋もある。

不審に思われないよう視聴者を楽しませ、最高のエンターテイメントを送る……。

とはいえ神崎たちもゲームに関しては本気。決して接待プレイはしないだろう。

嫌われていようと関係ない。

僕は僕の為、どんな手を尽くしても気に食わない奴は潰す。

それにこの勝負に勝てば如月旋梨だけじゃなく彼の妹である神代涼音も僕のモノになる。

商売道具が増え、その分の成績が積み重なり僕もまた大きく成長で

きる。

「ーアスノテで働く『愚弟』にも大きな差を付けられる。

「くくっ、ははははは……!!」

「宮田、マネージャー……?」

ダメだ、これからの予定を考えると楽しくなってしまう笑いが込み上げてくる。

神代裕也、君は実に愚かで無策の能無しだ。人は舐められたらそれで最期、その場所じゃ一生いびられ続ける。

後悔させてやる、僕に『喧嘩』を売ったことを。

そしてなにもかも奪ってやる。如月旋梨も、そして君の妹もー！。

#55 鷹と妖精の邂逅

辰己くんに促され、俺は自分が抱えている気持ちを吐き出した。

自分が強いなんて思ったことがない。それ故、情けなくも抱え込み過ぎていたのか、不安を吐き出す中で泣いてしまった。

だが俺は多くの仲間に恵まれていた。

誰一人それを笑うことや、責めるようなことはせず聞いてくれた。寧ろよく聞いてくれて、その中でこれからは一人で抱え込まないという条件を涼音に提案され、俺は頷いた。

それからは各自、企画に向けて練習に励んだ。

アクションのジャンルでスマ○ラで挑む翔太くんは祐樹くんと共に。

パズルのジャンルでぷ○ぷ○をする鳴海ちゃんは八神さんと一緒だ。なんでも、八神さんもまたパズルゲームは得意とのことで、対戦相手には打って付けだったようだ。

リズムゲーム、通称音ゲーを担当する旋梨ちゃんはより精度を高める為に楽屋で一人、ひたすらに練習。ただ一人だと寂しいかもしれない為、涼音を側に置いておくことに。

企画の内容をまとめた書類は既に瀬川さんへ渡しており、宮田に届けるようお願いをした。

一度内容の確認してもらった後に了承を得たので、恐らく大丈夫だろう。

翔太くん、旋梨ちゃん。そして鳴海ちゃんの三人が勤しむ中、ただ一人だけ自由になっていた。

「チョコミントって本当に邪道じゃのう。確かに舌触りはスースーして旨味あるのはわかるんじやが、せっかくのチョコが薄くなっちゃうわい。それならまだ抹茶チョコの方がいいと思うんじやが兄ちゃんはどう思う?。」

翔太くんと祐樹くんの様子を見に楽屋とは別の一室に向けて廊下を歩いてみると、その後ろで抹茶チョコのアイスを食べながら付いてくる辰己くんが居た。

「掛け合わせつてのは重要じゃけえ。その者にとっては最高でも、他の者からすりや最悪。ゲームでもそう、プロがアマに勝つのは当然と思われていても、100%はありえん。過去にアマの読めない動きでプロが負けた事例だってあるけえ」

「まさか、アドバイスなのか？」

「如月に鳴海、二人はまあ実力もあるから大丈夫じゃろ。ただ赤城の兄は正直微妙じゃあ。期日もそう無い中でアクションを得意とする神崎夏目を倒すなら、曇天返しの子測不可能な立ち回りを覚えなきゃならんのお」

ニヤニヤとする辰己くん。

俺はアドバイスとも取れる彼の発言を聞きながら一室のドアをノックした。

すると中から祐樹くんの声で許可が出る。

「調子はどうだ、翔太くんー。ツ!？」

ドアを開けて中に入ると、そこにはソファアーの上で涎を垂らしながら意気消沈している翔太くんの姿があった。

「なにがあつた!？」

「あはは……それがですね……」

テレビ画面にはでかかどと祐樹くんの使用したキャラが表示されていた。

なんでも既に数十戦したそうだが、全て撃墜も出来ずに連敗したそうだ。

口を開け魂が抜けている翔太くんを見て、俺は同情の余地することしかできなかった。

「見事なまでに叩きのめされちよる。かなり強いみたいじゃが、ボーダーはどれくらいなんじゃあ？」

「えつと、11, 095, 465ぐらい……ですかね」

「ブフォ!!!」

俺と辰己くんは同時に吹き出した。

なんなら辰己くんは口に含んでいた抹茶チョコを吐き出す勢いだった。

ガチガチのガチじゃん。

いや、ガチ過ぎて怖いよ俺は。

言葉も出ないくらいの動揺とは正にこのことなんじゃないかと思う。

ちなみにどれくらい凄いかというと、流行りのアニメ漫画に出てくるキャラだと始まりの呼吸の剣士ぐらい凄い。

わかんない奴はググレ、ハマるぞ。

「さ、さささすがにそれは嘘じゃろ」

「動揺で声が震えてるぞ、辰己くん」

「まあ信じられないですよね、発売日から唯一やり込んでるゲームの一つなので、あはは……」

「そんな腕前凄いなら知名度ありそうだが、配信とかじゃどうしてるんだ？」

「えっと、サブ垢でやってます。本垢は自宅にあるので、基本的に配信とかはアスノテで配信されてるゲーム機とデータでやってます」

「エッグ……ッ」

そりや翔太くんが相手になるわけない。

というか撃墜を一回でも出来たその日には焼肉を奢ってあげられる。

ちなみに補足として祐樹くんは諸事情により学校は不登校で、当時の心の拠り所はゲームと涼音の配信だということがわかってる。

とはいえ、化け物すぎる。

なんなら翔太くんだけじゃなく、辰己くんさえそんなに凄いととは思っていなかったのかペロペロとひたすら抹茶チョコを舐め回していた。

「辰己くん、申し訳ないが少し翔太くんのメンタルケアお願いしていいか？ ちよつと祐樹くんと話したいことあるから」

「ワシがメンタルケア？ 向いてないが、それでもいいんか？」

「今翔太くんに必要なのはゲームから離れて休むことのような。ちよつと頼む」

「仕方ないのう、任された」

本来なら俺の役割だが、祐樹くんと少し話したいことがあった。

俺は辰己くんに頼み、祐樹くんを呼び出して部屋から出た。

「どうしたんですか？」

「いや、特に重要なことじゃないんだが、翔太くんどんな感じかなって」

「ああ、なるほど。でも悪くないですよ、対戦してる時もキレたりしませんでしたし、どちらかというと自分が上手く立ち回れなくて悔しがったりするくらいです。一つ一つ悪いところは直そうとしてて上手くなれる人のやり方なんだと思います」

「そうか、まあすぐに上手くなれたら苦労しないから頑張つてとしか言えないよな。ほんとにありがとう、祐樹くん」

「いえいえ！俺は裕也さんや妹のヒスイちゃんにも助けられてばかりなので、こうやって役に立てるだけでも嬉しいです！」

「直接的じゃないけどな。はははっ」

俺は別に助けたりしてあげた覚えもないし、きつと涼音も自分の配信を通して誰かを助けたなんて微塵にも思わないだろう。

それでも本人が嫌がったりせず、純粹に手助けしてくれることは俺自身凄く助かっている。

「でも長くは居られないだろう？祐樹くんも一人のVTuber、配信もあるだろうし」

「そうですね、二泊三日とは先輩や宮田さんには伝えてあります。今日含めて明日と明後日の午前までですね」

「なにもしないよりは凄く助かるし嬉しいよ。海斗の無理あつての頼みとはいえ、本当にありがとう」

「そんな！全然大丈夫ですよ、暇人なので！」

優しい。本当に、優しすぎる。

祐樹くんと知り合い間もないが、少し調べるだけでも彼がVTuberとしてどのようなスタイルを持っているのかがすぐにわかった。

「……人に寄り添うV T u b e r」。

雑談配信はしつかりとコメントを拾い、拾いきれなかったコメントにもちゃんと対応する。

ゲーム配信だと基本的にコメントを流す者が多い中で、例えば場面が不利になると決してコメントを拾い、盛り上げる。

彼の分身となる「鷹飛ユウキ」はトウィッターで検索すると好評のコメントが多い。

アンチも少なからず居るが、それを埋め尽くすぐらいの評価だった。

一方で調べていくと、祐樹くんのアバターは涼音が手掛けたものであると同時に、その事実は既に知れ渡っているようで涼音のチャンネル登録が激増したのには繋がりが生まれる。

どちらにせよ祐樹くんと涼音、互いが互いの影響があつて成長していると思うと、どこか感極まりない部分があつた。

「勿体無いな」

「えっ?」

「憧れの対象である涼音と会わないなんて、勿体無いなど。一人前のV T u b e r になってから会いたと言っていたが、もう十分なくらい頑張ってるだろうし、それ含めて勿体無いと思う」

「あははっ、此処に来る以前から何度かメッセージのやり取りはしたことあるんです。それに、配信にも遊びに来てもらったりもして……。ただ会うにしても、緊張があつて……」

照れ臭そうに、そして不安そうに。

顔を合わせたことが無い分、リアルを見せて幻滅されたりしたらと考えてしまっているようだ。

そんなことない、それが俺の意見だった。

度の過ぎる憧れは危ないと言うが、彼の抱く憧れは純粹で真っ直ぐ、綺麗だ。

だからこそ安心ができる。

そして、信じることができる。

「涼音も企業勢としてV活動を始めて早くも数週間。祐樹くんはアス

ノテ、涼音はミライバ。今度いつ会えるかわからない、これは俺の勝手な意見だが、きつと会った方が清々しくなれると思うんだがどうだ？」

企画の決行日にはもう祐樹くんはこのミライバには居ない。

一人前になってからと言っても、V T u b e rは特に一人前という基準が定まっていない。

そんなものに囚われず、個々がどのように配信して楽しむか。

その時点できつと、一人前なのだろう。俺自身が祐樹くんの立場なら、会いたいと思う。

そして、伝える。

「ありがとう」、*「頑張る」*と。

憧れにそれを伝えるだけでもモチベに繋がるだろうし、頑張れる。

俺の言葉に祐樹くんは考える素振りを見せる。そして頬を掻きながら、言った。

「正直、会って話してみたいです。ただ自信がなくて、怖いんです。もしかしたらって悪いことを考える癖はどうしても抜けなくて……」

「涼音は見た目で人を選ぶような子じゃない。それに祐樹くんならきつと、大丈夫さ。受け入れてくれるし、ちゃんと話してくれる」

自信持って、*「友達」*になつてほしい。

そう言つて俺は握り拳を祐樹くんの胸に当て、笑った。

祐樹くんもまた笑い、ネットだけじゃなくリアルでも仲良くなれるよう頑張りたいと意気込んでくれたー。



一度部屋に戻り、辰己くんに宥められ少しは元気を取り戻した翔太くん。

俺も付き合ひ、四人で改善点を見出し練習を続けて数時間。

休憩を取ることにして、各自は自由行動。

辰巳くんはメッセージで担当のマネージャーがツノを生やして激怒していると溜息を吐きながら出ていき、対する翔太くんは恵果ちゃんと新曲についての打ち合わせがあると行って抜けることに。

俺と祐樹くんは楽屋で練習してる旋梨ちゃんと涼音の様子を見に一旦戻ることにした。

最初は大丈夫だった。しかし涼音が待機してる楽屋に近づくにつれて段々と祐樹くんは胃の部分を抑えながら“発作”を起こしていた。

「いや、えっ、大丈夫か？」

「す、すみません！ ちょっとキメます！」

「いや言い方!! それ危ない奴!!」

思わずツツコミを入れてしまう。

服のポケットから吸入器を取り出して思い切り吸い込み息を止める。

そしてぷはあ！と酸素を吐き出すと、キリツとした顔で言った。

「大丈夫です、行きましょう」

「ラスボスでも倒しに行くのかよ……」

楽屋の前まで着いた俺はカードキーを通し認証する。

そしてドアを開け、中に入る。

「調子はどうだ？ 涼音、旋梨ちゃん」

「あっ、兄さん……!」

「ゆうにい!」

入るなり二人は嬉しそうに駆け寄ってくる。

その一瞬、なぜか二人には尻尾が付いていて思い切り振ってるような感じがした。

だが俺の後ろに立っている祐樹くんの存在を目にすると二人は冷や汗を掻きながら目を丸くしていた。

「き、巨人がおるばい……!」

「おい、失礼だろ旋梨ちゃん」

「に、兄さん……この大きい人は……?」

「ああ、二人に紹介しとこうかなと思ってな。特に涼音に。ほら、入っ

ても大丈夫だぞ」

怯える二人を他所に、俺は振り向いて祐樹くんに入るよう言う。だがその当の本人もまたカチコチに身体を硬直させ、ぎごちなくなっていた。

「シ、シツレイシマス」

もはやカタコト、俺に続いてロボットのようについてくる。

とりあえず涼音と旋梨ちゃんには下がってもらい、ロボット状態の祐樹くんを隣に立たせた。

「危ない人じゃないから安心してくれ。とりあえず、自己紹介を」

「は、はじめまして！ お、俺は天道祐樹と言います！ ミライバの子会社であるアスノテに所属するV T u b e rをしており、鷹飛ユウキの名前で活動しています！」

「ツ!! ユ、ユウキ……さん……?」

「その、あの……リアルでは、初めて、ですね。ひ、ヒスイちゃん……」

祐樹くんが自己紹介した時、涼音は驚愕して目を見開いていた。

そんな二人のやりとりに旋梨ちゃんは両方の顔色を何度も見やりながらハテナマークを浮かべていた。

「涼音、祐樹くんから色々聞いた。だからこそネットだけじゃなく、リアルでも仲良くして欲しいと思って連れてきたんだ。休憩も兼ねて、交流してあげて欲しい」

「に、兄さん……」

「私、置いてけぼりばい……」

「旋梨ちゃんは俺と飲み物買いに行こう。二人の方が話しやすいこともあるかもしれないからな」

「ツ！ 行くばい！」

「えっ、その、裕也さん!?!」

「さてと、喉も渴いたし早めに行こうか。んじゃ涼音と祐樹くん、留守番頼んだぞ」

半ば無理やりだったかもしれない。

それでも俺たちが居る中では話し辛いこともあるだろう。

特に祐樹くんの場合、大人数よりも少人数の方が上手く動けるよう

な性格。

俺はそれでも微笑ましく思い、喜んで付いてくる旋梨ちゃんを連れて自販機まで向かうことにしたー。

カゲロウのコラボ相手が鷹飛ユウキだと分かった瞬間、コメント欄は大いに加速した。

それ程までに今回のコラボは意外性を付き、視聴者を驚かせるのに十分過ぎるものだった。

アスノテとミライバ、この二つがそれぞれ受け持つV T u b e r がコラボする事例など無かった。

憧れの存在、ヒスイ改め涼音とリアルで再会を果たした祐樹は裕也から詳しい企画の内容を話され、その中でこちら側が負けてしまうと涼音が奪われるという事実を知る。

その時、それだけは決して避けなければならぬと目を血走らせながら決意した。

何がなんでも翔太を僅かな期間の間で鍛え上げて、勝ちにもつていくと。

それからの行動はとても早く、ミライバのマネージャー代表である瀬川と、アスノテのマネージャー代表である宮田（弟）に土下座する勢いで両社のコラボを解禁してもらおうように頼んだ。

ただ意外にもその頼みは受け入れられる。

というのも難しい条件があるわけでもなく、ただキツカケが無かったのだと言われた。

ちなみに社長も今回の企画については目を通しており、会社の成長に繋がるのであればと承諾した。

その結果が今回のコラボに至る。

そして何気に二人がミライバとアスノテを繋ぐ架け橋、つまりはその先駆者となり、これからも両社がコラボするきっかけになればと寧ろ期待をされたのだ。

『という事でスペシャルゲスト、鷹飛ユウキと一緒にスマブ〇をしていくぞ!!』

『いやあ、楽しみですですね。でもその前に軽くなぜコラボすることになったのかという説明をした方がいいと思います』

『確かにそうだな。なぜ今回、ユウキとコラボすることになったかというと、お前ら公式の告知で近々あの墮天四姉妹、要するにゲーマー

ズとオレたちが勝負するってのは知ってるよな?』

：あー！ 知ってる知ってる！

：これもまた珍しい企画よなあ

：大規模な企画だと言ってたっけ

『それでだ、光栄なことにごのオレも墮天四姉妹に挑戦する権利を得たわけだ！ だが音楽に関してはまだやれるものの、ゲームとなればそうはいかない。だって知識ないからな……。だからこそ練習を重ねる必要がある、それをサポートしてくれる相棒が必要だった!』

：ほほう？

：つまり、その相棒というのがユウキだと？

：なるほどねえ

『コメントでもあるように察しがよくて助かる！ そう、今回の相棒はユウキ！ つまりこの時点でオレは最強となった!』

『まあミライブに顔出したら拉致されてこうなってるんですけどね』

『えっ、話違くない?』

：素になるなwww

：草www

：後輩を拉致したんかよwww

：マジかwww

『冗談ですよ冗談！ まあでもカゲロウ先輩が言うように、強くなる必要がありますよね。そこで俺がサポートするのと、視聴者の皆さんもからのアドバイスを糧に頑張って頂けたらいいなと思いいコラボすることとなりました!』

『後輩の冗談でオレの印象ガタ落ちしかけるのマジで怖いんだけど？ まあとりあえず、そういうことだ！ だからお前ら、色々教えてくれてよな!』

：りよ、任された

：ナーフ不可避と言われるぐらいに協力してやるよ！

：ユウキニキが居ると聞いて参上

：とりあえずは基礎からやな

コラボの理由、そして今回のテーマを述べた。

すると視聴者たちは活気に満ち溢れ、カゲロウの強化配信が始まった。

『というのも、この配信をする前にカゲロウ先輩とは既に何度か手合わせしたんですよね』

『結果、惨敗だったけどな』

『仕方ないですよ。ただやはり、どのゲームでもそうです。まずはキャラを絞りましょう。カゲロウ先輩はどういったキャラを使ったんですか？』

『オレといえば熱い魂!! だから“赤髪”のキャラがいいな!』

『なるほど、よくわかりませんが、ホ○ラとかどうですか？』

『えっ? オレの妹、スマ○ラに居るの!?!』

・違う違うw w w

・それは冗談じゃないでw w w

・実際におるんやで、ホ○ラ&ヒ○リ

・流れるにそうだろうと思ったよw w w

・じわじわ来るってw w w

『えつと、このキャラですな』

『なんだこのナイスバディ!? オレの妹にはないものがありすぎるだろ!?!』

・言いやがったなw w w

・確かにえちえち度は高い

・エチチチチチコンロ点火ツ!!

・なんでや! 妹のホムラたんも可愛いしえちえちなどこあるやろ!

・妖艶さが足りてねえ、圧倒的に

・そのキャラが嫌ならガオ○エンっていう赤いキャラはおるで

・ただしオス↑

単純に上手くなるだけに観点を置き、まずは使用するキャラを選ぶべきと言われ、カゲロウの特徴に見合ったキャラを勧められる。

ただ名前が妹のV T u b e r名と重なり、正反対な容姿にカゲロウは目が釘付けになる。

『少し癖のある特殊型で使い慣れるまで大変ですが、その恩恵として単発のダメージ量が高火力やんですよね。横スマも溜めは長いですが決まればそれなりに相手に圧をかけられますし、楽しいと思いますよ』

『ほえー！　なんかよくわからないけど、グツと魂に響いてきた気がするぜ！』

『自分は特にマ○オを使っています。このキャラはスタンダードで、非常に使いやすいですが攻撃範囲が狭いのと、ダメージを稼ぐのであればコンボを決めることは大前提。それでも自分はスタイルが合っているので使ってる感じですよ』

：博識すぎるやろwww

：ユウキニキはアスノテの企画で開催されたスマブラ大会で優勝してる強者やで

：レートに見合わない実力者。噂では本垢が別にあると言われてるもんな

：まあいきなりホムラは難易度高い気もするけど期間も短いしな。無難に経験積むなら、ありよりのあり

使用するキャラを決めた後、一通りの動きやコンボの繋げ方、そして基礎的な立ち回りを覚える為に二人は対戦することに。

『ともかく必要なのは経験ですね。なので対戦を積み重ねて技術として叩き込む他ありません』

『そうだな、もうやりきるしかない。とはいえ相手はゲームマーズ、墮天四姉妹だからあ。基礎を今から学んで、そこからまともにするまで大変そうだな』

『そんなに凄い人たちを相手にするんですか？』

『ミライバの中じゃダントツにゲーム配信が多い人たちなんだよ。しかも各々がプロ並みの腕前持つてるみたいだし、不安でしかない』
『えっ、マジですか』

『マジマジ』

：もはやゲーム専門と言っても過言じゃない

：大袈裟と言われがちだけど、確かに腕前はプロ並みだぜ。しかも

それぞれ得意分野持って、ほとんどがそのゲームで上位に食い込んでいる

：V T u b e rでプロ並みってなかなか居ないよな。それも女性で。(偏見ではない)

：確かにゲームのプロって男性のイメージあるから間違いいはない。ただ彼女たちも努力した結果で成り上がってるから、本物やで

：正直、ゲーム経験があまり無いカゲロウが勝つ確率は極めて低いんだよなあ

『確かにそうなるカゲロウ先輩が勝つ確率は低いかもしれませんがね』

『ぐぬう……。なんか、モチベが……』

『でも低いだけであって0%じゃないので、全然大丈夫ですよ。それにプロやそれに近い人って癖の一つで読みを警戒するので、意外と初心者の動きは読めず撃墜できるかもしれませんよ』

『えっ、そうなの?』

『これは励ましで言ってるわけじゃなくて、過去に初心者がプロに勝ったなんていう事例は少なからずあるんですよ。その理由として読み合いが上手くないというものだったんです』

：めっちゃいいこと言うやん

：そうだぞカゲロウ！ お前がモチベうんぬん言うなんてらしくもない！

：低いだけであって0%じゃない、このセリフ明らかに主人公やん

：心強すぎて草w w w

：頑張ろうぜカゲロウ！ 俺たちも全力で応援するしアドバイスするぜ！

対戦しながら不安を漏らす。

だがそれに対してユウキ含めた視聴者は諦めるのは早いと、励ましのコメントを送る。

カゲロウはそんなコメントをチラツと見て、活気づけられる。

『ネガティブなのはオレらしくねえよな！ 勝てる勝てないを考えるよりも、努力こそがオレ自身だぜ！ うおおおおおおおっ!!!』

『あつ、今の動きめっちゃいいですね!』

『だろ!? まだまだいくぜえ!!!』

視聴者数は既に二万を超えており、ポジティブに考えることにしたカゲロウは調子を戻す。

もちろん、それにはユウキも視聴者も同じ気持ちであり、勝つための努力を重ねて、最終的な結果に繋がられるよう一丸となったー。

#57V配信：尊いが重なると語彙力失う事案【ヒスイ×音神旋律】

祐樹と翔太の二人がペアとなって特訓を兼ねた配信を始めて十分後。

それに続いて涼音と旋梨の二人も配信を行う為、入念に機材のチェックを裕也は行った。

故障及びトラブルに繋がる支障は無いと判断し、裕也はもう一つの別室に移動し、二人の配信をチェックする為にノートパソコンを起動させる。

それから裕也はガラス越しに二人へOKのサインを出すと、二人もマイクのチェックを済ませてOKサインを返した。

そしてー。

『んっん……い！ おはこんにちは、皆！ 今日も張り切って配信頑張るけんね！ 既にカゲロウくんがスペシャルゲストと一緒に特訓しているという事で、私たちも特訓を重ねるばい！』

『ど、どうも……い！ ミライバのDream Life所属のヒスイです……い！ き、今日はよろしく願います……い！』

・うおおおおおっ!! K t k r!!!

・待ってましたア!! ?5000

・公式の告知から飛んできたけど、マジで今回Dream Life eは一段と気合い入ってるなw

・カゲロウとこっちの配信を二窓で見ているなう。旋律たそもツーペアでの配信ってことは、ヒスイちゃんがサポーター？

・どっちにしろ天使と天使が揃ってたんだ、文句なんてありやせんぜ!! ? 20000

『ふふっ、○○さんと○○さん、スパチャありがとうやけん！ コメント

トでもある通り、ヒスイちゃんは私のサポーターとして一緒に進行していくとね』

『な、なにもできませんけどね……あはは……』

『そんなことないとね？　というか、さつきから堅苦しいばい！』

もつと肩の力を抜こうやんね！』

『きやあつ?!　ちよ、旋律さん……!　んんっ、そこはダメ……!』

『ほらほら、もつと抜くばい!』

緊張で言葉が上手く出てこないヒスイに対して、旋律はくすぐり始める。

・抜く(意味深)

・ああ、たまんねえな?!?5000

・あー!　お客さんいけません、それ以上は!

・ふう……

・おかず提供あぎます?!10000

・「運営によりコメントが削除されました」

・「運営によりコメントが削除されました」

・おまいらwwwwww

二人のやり取りに興奮する視聴者によるコメント。

やはり女子二人による配信ということもあって、男性の率は八割超え。

つまりそれが何を意味するのかは明白であり、裏方をする裕也はただひたすらに過激の強いコメントを消し去るという作業があった。

『どう?　少しはほぐれたとね?』

『はあ……はあ……!　旋律さんの、ばか……』

『ばか?　もつとしてほしいってこと?』

『ち、ちが!　んんっ!!』

・なんやねんこれwwww

・はよ特訓せんかいwwww

・いや、これも立派な特訓だろ。そう、ヒスイちゃんのくすぐり耐性を付けるという名の!

・たまりませんねえ

：運営に負担を掛けるな、おまいらwww

味を占めたのか、ヒスイの反応にそそられた旋律はまたもやくすぐりを入れる。

その度に二人のアバターが事細かく動き、視聴者に更なる興奮を与えた。

裕也もまた二人の会話を聞いている一人。

しかも義妹であるヒスイの反応に何かしらヤバイ扉を開きそうになりつつも、センシティブなコメントの対処で気を逸らす。

『まあここらへんにしとくやんね。あまり進行に支障をきたすと、マネさんに怒られてしまうばい』

『はあ、はあ……！　そ、そうですね……！』

『改めて、今回は特訓配信！　既に公式やカゲロウくんから話は聞いていると思うけど、なんと大企画の内容としてSmile Road所属のゲームーズ、墮天四姉妹の方と対決するばい！』

：各ジャンルだから、旋律たそは音ゲー部門確定だな

：練習する意味ある？　旋律ちゃんなら多分相手が墮天四姉妹でも勝てるでしょw

：音ゲーってことは相手はヨルナっちだよな。なら油断はできないかも

：ヨルナも旋律ちゃんも、配信上で連続AP取ってるからなあ……。

(※AP＝オールパーフェクトの略)

コメント欄には旋律派とヨルナ派で分かれており、それでも若干旋律に分があるという結果が多かった。

とはいえ油断はできないとコメント欄でもあるように、旋律は視聴者に練習は欠かせないと返す。

その中で一つ、旋律の目にコメントが入る。

：勝敗によって何か罰ゲームとかある感じ？www
さりげなく目に入ったそのコメント。

例えばこの企画は視聴者からすると、ただ勝敗を決めて楽しむ純粹なイベント。

四本勝負のシステムで進行される今回のイベントは、実質負ければ

宮田の専属V T u b e rになつてしまう結果に繋がる。

その為にも練習して確実に近づかなければならないというプレッシャーが、そのコメントによってより強くのしかかってきた。

対するヒスイもそんな旋律の動揺を感じ取ったのか、表情を曇らせる。

その時だった。

コメント欄に運営の代わり、つまり裕也による固定コメントが流れる。

マネージャーY:この度はご閲覧頂き、誠にありがとうございます。
現状、今回参戦する各V T u b e rの配信に伴い、コメントでもありましたように罰ゲームなどの詳細は続報としてお伝え致しますので、お楽しみにお待ちください！

:うおおおおお、マネさん！www

:マネさんやんけ！ 珍しい!!

:頭文字DみたくYで草www

:大人しく待ちます、全裸待機で

普通はV T u b e rの配信に顔は出さないマネージャーの立場を覆し、あえて大きく出た。

思わぬマネージャーのフォローに、二人は慌てて後ろを振り向く。そこには窓ガラス越しに親指でグツとサインするマネージャーがおり、二人の内、特に旋律はそれに気持ちを落ち着かせられ、微笑んだ。

“ゆうにいの、ばか”

そんな思いを感じながら、旋律は小さく息を整えて続行する。

『まあ確かに罰ゲームが無かったら視聴者の皆からすると面白くないけんね。でも残念ながらそれはないとね』

『なんでですか?』

『だって私、負けんばい』

:この安心感よwww

:ヨルナの配信も見てるから上手さはわかるけど、俺は旋律ちゃんを応援するぜ!!

：確たる勝利の代金　？10000

：なら便乗して　？50000

：便乗と言つて五倍はエグいわww

『あはは！　スパチャありがとうやんね。けど無駄遣いはあかんとね。ちゃんとお財布にも気遣つてあげんとね』

：大丈夫、推しの為なら惜しまない主義だからな！

：なんなら働いて稼ぐ意味つて旋律ちゃんの為と言つても過言じゃない

：わかりみが深い。寧ろ金を使う先がここぐらいしかない

：じゃあ俺からも。これで配信終わったらヒスイちゃんランチデートしてきな　？610

：610円wwww

：そこは奮発しろやwwww

『で、でも610円もあつたら色々贅沢できるよね……！　その、お菓子とかスーパで買えば四つとか多く買えるし……！』

『そうやね。ふふつ、でも今回送つてくれたスパチャは大事に使わせてもらうばい！　じゃあ早速、やっていくやんね！』

視聴者との触れ合いに区切りを付けて、二人のAvatarは画面右下に縮小される。

そして器用に画面を変更して、今回の企画で対決する内容の音ゲーを表示する。

：おっ、これは！

：今流行りの音ゲーじゃん。ボ○口の公式音ゲーみたいなのだつけ

：そう。鬼畜難易度が多くある化け物だぜ

：消失不可避www

『ヒスイちゃんこれ知ってる？』

『聞いたことあるぐらいは……あまり、音ゲーとかやったことないの……』

『ならヒスイちゃんもやるしかないとね！』

『えっ!?　で、でもこれは旋律さんの特訓配信じゃ……！』

『見てるだけじゃつまらないやんね。だからヒスイちゃんも遊ぶん

よ』

・良い提案だw w w

・確かに見てるだけじゃなく、ヒスイちゃんのプレイも見てみたいぜ！

・でもやったことないって発言からするに、可愛らしいプレイになりそうだな

『まずは手始めに最低難易度のe a s yからやってみるやんね。曲は知ってるのあるとね？』

『んー……。あつ、この曲知ってます……。！』

『どリーみ〇チュチュ！ この曲、可愛いやんね！』

『そうなんですよね……。！ M M Dとかを用いたダンスも凄く可愛いですし、かなりお気に入りなんです……。！』

『私も好きばい！ 特にサビのちよこらつたつたつたつた♪がいいとね！』

『そうですよね……。！』

・あああああああつ！！ ンガワイイイイイイイ！！

・歌うのやめろ、興奮しちゃうだろ!?

・はあはあはあはあ!!!

・h s h s h s h s h s h s h s h s h s

・なにしても可愛いズルくない？

・音ゲー要素なんかいらねえ！ もうこの二人のやりとりを永遠に聴いてたいぜ!!

・おじさんもちよこらつたするぞおー！

・ちよこらつたすんなw w w w

もちろんこの後二人は音ゲーをプレイするのだが、こういったやり取りが多く視聴者一同はメロメロに。

しかも時折ヒスイと旋律は無意識に歌を口ずさむせいで、余計にコメント欄は荒れた。

だがその中からコメント削除される者は居なかった。

何故なら裏方を務める裕也自身、二人のやりとりの尊さに胸打たれ、悶えていたのだから。